

百合ゲー世界に転生したらなんかちょっと思ってたのと違った件について

アークファイア

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

百合ゲーの世界に転生したと思っていたら、なんか想像していたのと違う感じだった。

※8／28 完結。……したのですが、ちよつとだけおまけを投稿するので終わるまで完結外しています。

※8／31 おまけ含め完結。お付き合い頂きありがとうございます。ました。

目次

一章 名前を呼ぶまでは導入みたいなものな件

百合ゲー世界に転生したら告白を断られた件について ——— 1

百合ゲー世界に転生したら後輩ちゃんが暴走してた件について

10

百合ゲー世界に転生したらメインヒロインが全然デレない件につ

いて

20

百合ゲー世界に転生したら何故か文章を書くはめになった件につ

いて

31

百合ゲー世界に転生したらなんか色々迷走している件について

40

百合ゲー世界に転生したらへえ、デートかよ？な件について

49

百合ゲー世界に転生したらナンパ野郎も色々違う件について

57

百合ゲー世界に転生したら文芸部に迫っていた影の件について

67

百合ゲー世界に転生したらちよつと箸休めの件について ——— 76

百合ゲー世界に転生したら本格的に台本作成が始まった件につい

て

82

百合ゲー世界に転生したら生徒会長は一筋縄では行かない件につ

いて

90

百合ゲー世界に転生したら百合のゆの字も無くないかと気付いた

件について

98

百合ゲー世界に転生したら最後のヒロインが残念すぎる件につい

て
百合ゲー世界に転生したら貴方と私で演じる感じな件について
107

116
百合ゲー世界に転生したらケーキと役作りの件について
125

百合ゲー世界に転生したら演じるのは意外に難しい件について

133
百合ゲー世界に転生したら部活メンバーでGO!な件について

141
百合ゲー世界に転生したら衆人環視と再会のナンパ君の件について

て
百合ゲー世界に転生したら噂の彼女は癖が強い件について
150

百合ゲー世界に転生したので思い切り遊んでみた件について

166
百合ゲー世界に転生したら思っていた通りだった……?件について

て
百合ゲー世界に転生したら祭りの前の一騒動の件について
174

百合ゲー世界に転生したら祭りはもう目の前の件について

200
百合ゲー世界に転生したら祭りはみんな燃えていた件について

百合ゲー世界に転生したら魔王と勇者はおねシヨタだった件につ

いて
百合ゲー世界に転生したら仮説と現実と祭りの終わりの件について
208

二章 夏と海と島と謎とエトセトラ、の件
百合ゲー世界の主人公はだいぶお花畑な件について
232

百合ゲー世界の夏休み前の一騒ぎの件について | 241

百合ゲー世界で水着に悩む者達の件について | 249

百合ゲー世界の観測者?の件について | 258

百合ゲー世界で船の上、の件について | 266

百合ゲー世界でサバイバル開始の件について | 274

百合ゲー世界で昼食・虫取り・探りあいの件について | 282

百合ゲー世界でサバイバル一日目の夜を迎える件について | 291

百合ゲー世界で彼女が水着に着替えたなら、の件について | 299

百合ゲー世界で海の綺麗さと謎の情熱の件 | 308

百合ゲー世界でも洞窟は寒い件について | 316

百合ゲー世界で無人島から脱出する件について | 324

百合ゲー世界で水着リターンズな件について | 334

三章 文化祭は燃えているか

新学期で気分を入れ替える | 343

木を隠す森を伐採するが如く | 352

遊びの中にも見るべきモノは有り | 360

ともすれば日は登って新しきを見せ | 369

陥穽はあれど、気付かなければそれに意味はなく | 377

祭りは始まり、人は集う | 385

祭りは続き、人々は笑う | 393

祭りは終わり、灰が残る | 401

四章 決戦はクリスマス

春は遠く、願いを忘れ人は笑う | 409

思いは重く、その背に積もるように | 417

人は集い、過去に思いを馳せ | 425

不穩は足並みを揃え、その時を待ち	433
実を結び、すべてが露と消える前に	441
いつか来る ■■の前に、花束を	449
そして、彼は至った	458
いつか朱き華を願ったように	466
白を黒に、黒を白に	474
そうして黒は流される	482
流れる先に道はあり	490
聖夜を目指し、巡礼者は行進す	498
聖なる一時に、灯は巡る	506
星を落とす狩人のごとく	514
百合ゲー世界に転生したらなんかちよっと思ってたのと違った件 について	523
外伝	
百合ゲー世界の後輩ポジは気難しい件について	535
百合ゲー世界の後輩ポジは気難しいらしい件について	543
百合ゲー世界の後輩ポジは気難しかった件について	552

一章 名前を呼ぶまでは導入みたいなものな件
百合ゲー世界に転生したら告白を断られた件について

「ごめんなさい、貴方の告白は受けられないわ」

そう件の少女くだんから言葉お断りを返された私は、目の前が真っ暗になった！
……いやいやなんで!?!おかしくない?!

この世界、百合の花が咲き乱れる最高の楽園じゃなかったの?!
このパーフェクト&パーフェクトな私なら、百合ハーレムをさつくり築いてぐへへへじやなかったの?!

「いや、そりゃ好きでもないやつとは付き合わないだろうよ……」
「ばかな!?!この全世界が羨み憧れ頭を垂れる、完璧美少女私に好意を向けられて素気なく断るとか、うそにも程があるでしょ!?!」

「ああうん。自分で言うだけあって、容姿も勉強も運動も完璧だもん
な、お前。……性格以外」

一応、その告白癖さえなければ、性格だって悪い方ではないとは思
うんだが……と返されてちよつと照れる私。

……いややっぱ男に褒められても嬉しくねーわ。頬が緩んでる?
気のせいだぞ気のせい。

時刻はちょうど昼休み。

私と幼馴染みであるコイツは、互いの机をくつつけて弁当を食食ってべて
いる最中。

この幼馴染み、性別：男だけど料理作るの天才級めっちゃウマイだから、時々こう
してご相伴しよばんに預かるのだけれど。

料理の分野でも完璧を志す私が、口に入れた途端思わず唸うなってしま
うあたり、普通に家庭的男子としてモテすぎて困こまってそうなレベル
……なんだけど、そんな素振りが一切見えないんだよね、これが。

……は?!まさか一緒に居る私のせいなのか!?
なるほどなるほど。完璧美少女私と共に居るせいで、幼馴染みの春
が遠ざかっている……というわけだな、ふーん?

だが私は謝らぬし自重もせぬ。

寧ろそんな憐れな幼馴染みを嘲笑ってやるぜ、ひゃっはー!

「(ちや)ちや言っていないでいいからさっさと食べ。どうせまだあれ
これと忙しいんだろうが」

「へいへーい。……そういうところ(いじ)弄りがいがないよね、キミってば」
「ずっと同じことやられてりゃ、いい加減慣れもするっての」

幼馴染みからの抗議の視線を華麗にスルーして、私は弁当箱の中に
一つだけ残った唐揚げを頬張るのだった。……うーむウマシ。

☆ ☆ ☆

私が転生した世界は、前世にていわゆる『百合もの』に区分されて
いた、とあるシミュレーションゲームを元にしたものだった。

売れ行きはそこまで特筆するようなものではなかったけれど、一部
の愛好家からは熱狂的な支持を得ている……、みたいな感じの作品
だ。

当の私は熱狂側で、関連作やイベントやらを網羅し尽くしたもの
である。……当時は男性だったので、ちよつと邪な理由も無くはな
かったけどね。

——かわいい女の子達がゆりゆりしてたら、間に挟まりたくなるの
は男の性だよなあ?……最近は壁になって見守りたがるやつも多い
?けっ、草食系め。

……いやまあね?間に挟まりてえなあ、っていう部分もあったけど
さ?

この二人の関係性でえてえ……、みたいな見方もしてたりしたんだ
けどね、実際は。

だからまあ、別に草食系でも全然構わないと思う。……楽しみ方は人それぞれ、否定するの良くない……ってね。

とはいえ、それは前世で男だった時のお話。

今世では女性として産まれた私は、この世界がどういふものなのかを把握した瞬間、完璧な美少女になるべく行動を開始したのだ。

——全てはそう、百合ハーレムを築くため！

この世界ではもう随分と前に、同性間の婚姻が合法化されている。さらにはなんと、重婚だって可能！

もはやご都合主義としか言いようのない舞台設定に、前世ではちよつとツツコミを入れたりもしたものだが。

……当事者となったのなら遠慮はいらねえ。全力で活用して、理想の百合ハーレムを築き上げてやるんだ——と一人意気込んだものだ。

その結果として、現在の私は品行方正・容姿端麗・文武両道な大和撫子として君臨するに至っている。

……いやホント、大変だったけど百合ハーレムのために頑張ったのよ、私。

まあ、さつきその野望の一步となるはずのメインヒロインに、これ以上ないくらい綺麗に振られちゃったんですけどね!!……なんでや！

「……そもそもの話。幾ら美少女が相手とはいえ、容姿だけですぐさまオツケーされるわけがない——としか言えないわけだが」

「おつかしくない?!重婚・同性婚ありありのありなのに、なあんでその判断基準が緩くないわけえ?!」

キーツ!と頭を搔きむしる私に、呆れ顔を返してくる幼馴染み。

この幼馴染み、ゲームでは話しかけると好感度を伝えてくれる、よくある親友枠ポジションの人物だった男で。

いつのまにやら、私の野望を知る人物の一人となっていた男、でもある。

百合ゲー世界なのに男? って感じもするけど、そもそも原作では百

合ゲーの癖して何故か共学が舞台になっていたので、そこらへんの整合性のために配置されたんだろうな……というのが、前世でのファン達の共通認識だったりする。

そのせいなのかなんなのか。

ゲーム内での彼は、とことん無個性な男だった。

情報提供に関しても、基本的にメモを渡してくるだけ。言葉を発するような場面はほぼなし、なんなら出会える場所自体も校舎内に限られる……と言う、必要なだけ必要じゃないんだか、そもそも居る意味あるのかないのか、よくわからないポジションの人物だったりしたのである。

実際、彼に出会わずにゲームを進めることも可能だったし、野郎の顔なんざ見たかねえ！……なんて縛りプレイで攻略する者もいたりした。

……こんな扱いされるなら別に性別どっちでも良かったのでは？なんて言うのはタブーである。……わかってても言っつていいことと悪いことがあるんだよ！

そんな彼だが、現実になつてみるとこれがまた付き合いがいのあるいい男だった。

家庭的なスキルはほぼ網羅済み、こちらの行動に対しても偏見なしに付き合ってくれる——という幼馴染みの鑑。……性別違つたら一番最初に告白しとけ、ってなるような優良物件だったのだ。

……呆れを顔に浮かべつつも、こちらの発した百合ハーレム計画について「まあ、やってみれば？」と応援してくれた時には、いいやつ過ぎて悪い女に騙されたりしないか——なんて風に、ちよつと不安になつたりもしたものである。

「お前にこうやって付き合ってる時点で、そこらへんの心配はない気がするけどな」

「まあパーフェクト美少女たる私に付き従ってる時点で、人生の勝ち組なのは明らかだからな！……んん？まさか幼馴染み連れてたから、私の告白が断られたのでは……？」

「いんや、あれは単純にお前のコミュ不足」

「……あれー?」

幼馴染みに素気なく発言を切り捨てられて、思わず首を傾げる私。
おかしーなー?前世でのこの世界、もうちよつと頭わるーい感じ
だった気がするんだけどなー?

……誤解されそうなので一応注釈を入れておくと。

前世ではこの世界、付き合う過程はさらつと流されて、付き合つて
からのイチヤイチャやらやきもきやらに焦点を合わせた感じのゲー
ムだった。

……要するに糖分補給タイプと呼ばれる系統のゲームだったので、
なんとというか普通の恋愛シミュレーションっぽいのは、ちよつと外
れていたのだ。

なのでこう、ちゃんとシミュレーションしなさいとか言われると
……なんか頭がバグる!

「まあ、あれだ。最初は友達から、つてするのが良いんじゃないか?」
「むー、無難だけどそうするしかないかー」

幼馴染みの言葉に渋々と頷く。なるほど、現実とゲームは違うんや
な、つて。

……いやでも、百合ハーレムが合法だつていう部分は紛れもない事
実なので、そのあたりなんか現実感薄くない?……つて私の理性的な
部分が主張してくるので困る、とても困る。

そう伝えれば、幼馴染みもこっちの言葉に若干困ったような表情を
浮かべていた。

「そのあたりは結局、歴史の話になってくるからなあ……」

「えつと……、確か百年前^太くらいは同性愛に否定的な人が多かったけ
ど、正式にそのあたりが認められるようになってからは、市民の精神
改革が進められた……んだっけ?」

幼馴染みの言葉に、歴史の時間に習ったような気がする話を臆気に思い出す。

——微妙に前世の感覚が残る私としては、ちよつと驚きなのだけだ。

この世界では、同性愛に対する偏見が一切無い……らしい。同性同士で手を繋いでいても、周囲から別に変な眼で見られることもないし。

なんなら性転換して男になった元女性が、生粋の女性と恋愛しても特に話題にもならない。……それぞれの性別を逆にしても同じ。

——愛があればおかしくない、それがこの世界の大原則なのだそう。

ついでに言うと、科学が進んだ結果として男性でも女性でも妊娠できるし、出産だつてできるようになっている、らしい。……技術の進歩がヤバイ、ヤバくない？（真顔）

「愛、愛ねえ……？」

「同性婚も重婚も認められてるつてのは。結局のところ、その愛が真実であるのなら止める必要はない……つていう理由からだからな。——幸せにできるのが特定個人だけ、なんて人が複数居る可能性も、愛を語るなら見とかなきゃいけないパターンだろ？」

「ふーむ、ハーレムも純愛も等価値、ねえ？……代わりに、寝取られとか寝取りとかは蛇蝎だかつの如く嫌がられるんだっけ？」

「それを行うことに確かな愛があるつて言うなら、別にいいんだろっけどな。……大体そういうのは、愛のない下世話なことになるつてんで、下手すりゃ死刑になるくらいの重罪だよ」

「こっわー……」

愛ゆえに、略奪する以外の手段が見つからないとか。

寝取られる側の関係性が不健全だったり、片方に負担が偏つてると

かの場合なら、情状酌量の余地があるらしいけどな——と彼は話を締めめる。

……いやまあ、寝取られも寝取りも趣味じゃないから、別にいいんだけどさ？

ハーレムを目指すなら注意がいるなあ、とも思う。……安易に手出しして、取っ捕まったり刑務所に直行したりするのは、できれば勘弁願いたいなあ……と言うか。

「まあ、そのあたりは聞いてくれりゃあ調べとくよ。他に好きな人が居るのか、とかはな」

「うーむ、幼馴染みの鑑。……めかけ妾あたりでハーレム入りする気ある？」

「丁重にお断りします」

「うーむ即答。流石過ぎて好きになりそう」

「いつもの適当な褒め言葉ありがとう」

「えへへへー」

……うん、打てば響く関係っていいものだね！

☆ ☆ ☆

俺の幼馴染みは、女の子が好きだと昔から公言して憚らない。

見た目は完全に美少女——膝下あたりまで伸びた艶やかな黒髪や切れ長の瞳は、黙って立っている分には神秘的な雰囲気醸し出している——だが、中身に関してはどっちかと言えばおっさん臭いところがなくもない。

——まあ、一緒になって行動バカやってるしてる分には、普通に楽しいやつではないわけだが。

「——正直なところね？貴方達の間には挟まれるというのは、ちょっとこっち側の負担が大きすぎると思うのよ」

そう答えるのは、さつき彼女が告白していた転校生の少女。

金髪碧眼であること・横文字混じりの名前などから、日系ハーフであることが明白な彼女は、その美しい相貌を困ったように歪めていた。

「……そうか？」

「友情と愛情の境目については、昔からずっと議論されているけれど。貴方達の関係は、まさにその延長線上にあるもの。……下手に関わると色々縮みそうだわ」

寿命とかね？と彼女は笑って、屋上から去っていく。……ふむ。

「同性愛にも異性愛にも、偏見がないんだからそうもなる、か」

女同士だろうが男同士だろうが、はたまた異性が相手だろうが。

——「一緒に居たい」という気持ちに、勝るものはない。

……そう結論付けた誰かがいたからこそ、今の世界は成り立っている。

それゆえに、今の世界において性差を持ち出すことは、禁忌に等しいものがあつた。

それは、そいつが性別を理由にして、誰かを押し退けるつもりがある……と言っているようなものだからだ。

……産みの苦しみさえも自由にできるようになったこの世界において、女性だから・男性だから——などと宣うことは、愚かにも程がある妄言だと言える。

そんな世界だからこそ「好き」というものの意味も、時代にあわせて形を変えていったのだ。

互いの性別を問わない誰が誰に抱いてもいい——という、新しい形に。

現在のこの国での婚姻とは、他者婚と言い換える方が正しい。

自分ではない誰かを愛し、共に居たいと願う——その気持ちだけを問うもの、それゆえの同性と異性を区別しない婚姻。

…ある意味でそのあり方は、友情と近似しているとも言えるのかも知れなかった。

赤の他人と一緒に居る理由を、一体どこに求めるのか——それくらいの違いしかないのだから。

さて、そうなると思う。

——俺のこの気持ちは、果たして愛なのか友情なのか、一体どちらなのだろうか？

結論を急ぐつもりはないが、せいぜい幼馴染みらしく過ごそうじやないか、とも思う。

「ほっとけないしなあ」

見下ろしたグラウンドの先で、こちらに向かって手を振る幼馴染み。

それに対して小さく苦笑を返しながら、俺はそう結論付けるのだった。

百合ゲー世界に転生したら後輩ちゃんが暴走してた件について

「せーんーぱーいー!」

「ふあっ!? ききき来たあっ!」

「いや来たっってお前、その驚き方はどうなんだ……?」

部室の外からとある人物の声が聞こえてきた途端、慌てて机の下に隠れる私を見て、呆れたようにため息を吐く幼馴染み。

そうは言うがな、我が同胞よ!^{はらから}（同胞?と首を傾げる幼馴染みはスルー）

私は確かにユリーレム（百合ハーレムの略、なんか聖地っぽい響きが気に入ってる）を目指すものだが! なんかこう、向こうからガンガン来られるのは違うんだよ!

私が目指したいのはあれだ!

四季の花が咲き誇る美しい庭園で、いい感じの紅茶なんかを嗜みながら、あらあらうふふと笑いあう感じの、古典的で静的なやつのほう——なんだよ!

最近のきやつきやつ系の緩めの百合から摂れる成分も、確かにいいものだなーとは思うけども!

それはそれとして、私の主食はマリ〇てとかのほうなんだよ! 分かってくれよ幼馴染みマーン!

「む、幼馴染みさんでしたか、こんにちわ! それで、先輩はどちらに?」

「へいこんにちわ。……で、アイツはその机の下。いい加減隠れる場所の工夫が欲しいところだよな」

「お、幼馴染みマーンっ!」

机の上から聞こえてくる会話に絶望する。

……ダメだこいつ、いつもの世迷い言だと思ってなに一つ聞いちゃ

いねえ!?

そうして私は、とぼとぼと机の下から引きずり出されるのであった、トホホ……。

☆ ☆ ☆

「そういうわけで！先輩のかわいいかわいい後輩が、こうしてやって来ましたよ！褒めて下さい！」

「うんうんかわいいねー」

「やったー！」

「……雑ってツツコミを入れたほうがいいのかこれ？」

折角喜んでるんだから水差さないであげて。……と幼馴染みに小さく威嚇。

私より頭一つ分くらい小さな、後輩ちゃんの頭を優しく撫でてあげると。その後頭部で結んだポニーテールが、左右にぶんぶんと振れて、喜びを全力でアピールし始める。

……毎回思うんだけど、これどうなってるんだろうね？

いや犬みたいでかわいいけどもさ。でもすまん、私猫派なんだ。

「なるほど、私が攻めればいいんですね？」

「ちやう」

「ちやうちやう？」

「ちやうちやうちやう！」

「ストップ、それ終わらないやつだろ」

……はっ!?

いかんいかん。この子と話していると会話の流れを相手有利に引っ張られるから、歯止めが効かなくなつて危ないんだった。

止めてくれた幼馴染みに感謝しつつ、改めて後輩ちゃんと視線を合わせる。

——私も大概美少女なほうだと自負しているけれど、後輩ちゃんもそれに負けないくらいの美少女だな、と思う。

それもそのはず。原作ゲームでは、彼女も攻略対象ヒロインのうちの一人。

そつちでは、めっちゃツンツンしてる生意気系後輩……つて感じのキャラだった。

付き合い始めてからもしばらくの間ツンツンしてる……という真性のツンデレで、デレを見せてくれるのは二人っきりの個室の中だけという徹底ぶり。

——それ自体も、関係が深まってとてもリラックスしている時に、思わずぼろっと……というくらいなの、ツン9デレ1の、今時珍しいパーフェクトツンデレ少女だったのだ。

……まあ現在はご覧の通り。

元のキャラとは方向性真反対な、先輩好き好き系後輩ちゃんになっているわけなのですが。……いやなんでえ?!

「んもう、先輩つてば。それを私から語らせるとか、い・け・ず♪」

「幼馴染みいー?! 幼馴染みいー!? ぷりーず、へるぷりーず!!」

「……つたく、ほれ」

後輩ちゃんからの謎のいけず判定を受け、思わず助けを求めた幼馴染みから、一枚のメモが渡される。……流石我が同胞、気が効きすぎてて怖いくらいだぜ☆

はてさて、メモにはなにが書かれてるんじやろな、つと思いながら、折り畳まれたメモを開くとそこには。

『大体お前が悪い』

「——知ってたよおつ!!」

「なんと、メンコ大会ですか！幼馴染みさん、私にもなにかないんですか?!」

「んじやあ、これ」

「よっしやあーっ!!」

「ちげーよ!?!遊んでんじやないんだよ!!つーか普通のメンコ使うな負けるに決まってるんじやんああああああ」

地面に投げつけたメモ用紙が、後輩ちゃんのメンコによって吹っ飛ばされる。

……なんか知らんけど負けた気になってしまった私は、近くの椅子に腰掛けて真っ白に燃え尽きるのであった。

☆ ☆ ☆

「……私ら一体なんの話をしてたんだっけ？」

「私がかわいい、って話ではなかったでしょうか！」

「君の話だったのは確かだけど、それでは無^ねえ」

「えー」

後輩ちゃんの分かりやすい膨れっ面を横から人差し指で突いて萎ませつつ、改めて今までのあれこれを思い起こす。

……いや、やっぱり最初に出会った時は、ゲームと同じツンデレ系後輩だった気がする。

じゃあいつだ、いつ彼女はこんな感じに変わってしまったんだ？

……そうか、そうだった！

「幼馴染みいー!?!よく考えたら、お前さんと会ってからじゃんこれえ?!」

「仮にそうだとしても、大本の原因はお前だぞ」

「なんだとおー?!……それはすまぬ！」

「気にしてないから大丈夫」

「おお、恩に着るぜ!……って違あう！」

机をバンツと叩いて立ち上がる。——思い出した、思い出したのだ
私はっ！

確か後輩ちゃんは、最初に会った時は元のツンデレ系後輩のまま
だったけど！

私と幼馴染みと出会い一緒に会話をした、その次の週くらいから！
……今のデレデレ系後輩に、クラスチェンジしていたのだ！

す・な・わ・ち！この変化の鍵は、貴様だ幼馴染みーっ!!ってな
感じに指差しびっしっ！

……対する幼馴染みは、冷静かつ呆れたような視線をこっちに返し
てくる。

「つつてもな。別に変なこととはしてないぞ、変なことは」

「……うむう、確かに。幼馴染みが変わることとかするはずがないし
なあ」

「むむ？阿吽の呼吸と言うかなんとか。やきもちコロコロしとけ
ばいいですか私？」

「コロコロしてどうすんのさ？」

「焼ききな粉もちです！むせながらご賞味ください！」

「嫌がらせなのかどうか、微妙に迷うチョイスだな……」

うだうだ言ってた私達を横目に、後輩ちゃんが自身の鞆から取り出
したるは、パックにつまった焼ききな粉もち！

取り出すタイミングを見計らってたんやろか？……というツッコ
ミはとりあえず飲み込んで、三人しておやつタイムに興じる。

「ほい、熱いお茶」

「ほいどうも。……やっぱり和菓子には、あつーい緑茶だよねえ」

「むむむ？お茶請けを用意したのは私なのに、なんだか幼馴染みさん
の株のほうが上がっているような気がします！これは理不尽なので
はっ！」

「親友だからな、そのあたりは多めに見てくれ」

緑茶を啜りながら応える幼馴染みと、それに対してむむむと唸る後輩ちゃん。……その口に、不意をついてもちを突っ込む。

突っ込まれた側の後輩ちゃんは、突然口の中に飛んできたきなこの塊に思いつきりむせていた。

はははむせてるむせてる、良い子は真似しちやダメだぞ？

しばしむせていた後輩ちゃんは、自身の緑茶をぐいっと飲み干して人心地付けたあと、こちらに気炎を上げて詰め寄ってきた。

「いきなりなにをするんですか先輩?!」

「美味しいもの食べてる時に、茶々を入れるような話をするのが悪い!……と言わせてもらうぜ☆」

「まあ、こういう時にするのは、明るい話のほうがいいよな」

もむもむともちを食べながら頷く幼馴染みと、それを見てむうと小さく唸ったのち、観念したように大人しく座り直して、新しいもちに手を伸ばす後輩ちゃん。

……うむうむ。折角のお茶会なんだから、楽しい話のほうがいいよね……。

「——って、ちげえ?!そもそもお茶会はお茶会でも、緑茶をしばくのはなんというか……こう……とにかくちげえ!!!」

「うるさいです先輩」

「ぶへえ!」

叫ぶ私に対してさっきのお返し、とばかりに口内に飛んでくるきなこの塊。

その対処に追われて、思わずむせるはめになる私なのだった。

☆ ☆ ☆

「いや、なんというか。——平和ですねえ」

「……そうだな」

私はうふふな感じの、ふつーのお茶会がしたいんだよー！

……などと宣いながら、アイツが部室を飛び出してから大体一分ほど。

椅子に座って大人しくしていた後輩の少女が、湯呑みの緑茶を啜りながらぼつりとぼやいた。

対する俺はといえば、特にその発言に反論する気もなく、小さく肯定の言葉を返すだけだ。

そうして返した言葉のなにかが琴線に触れたのか、小さく笑みを溢す後輩。

それを訝しげに見ていれば、彼女はこちらに意味深な流し目を向けて来ていて。

「幼馴染みさんとしては、今のままが嬉しい感じなんですか？」

「……はて、どうだろうな。とりあえずはアイツが満足するまで付き合う気ではあるが」

「むむむ、それは気の長い。……いえ、先輩相手だと、それくらいの心構えでいたほうがいいのかもかもしれませんが」

ついで、小さくため息を吐きだした。

……ある意味、俺のアドバイスのせいでもあるのだろうか、彼女のため息の理由は。

「気持ちには素直に伝えるべき、でしたね。……ストレート過ぎるのもどうかと思いますけど、実際下手なカーブとか使っているほうが疲れる……というの、一種の真理めいてはいましたよ。——少なくとも、私にとっては」

「……それでカーブが丸つきり投げられなくなってる、っていうなら世話ない気もするんだがな」

抱え込めば抱え込むだけ、人は頑かたくになる。

それはまあ、生きている以上は仕方のないことでもあるのだろう。

——なにかもを曝け出して生きていくことはできない。秘さねばならないもの、と言うのも少なからずあるのだから。

なら、ちよつとの変化球というのは。

その人自身の心の安寧のためにも、幾つか残しておくべきだろうと俺は思う。

……だからまあ。

ちよつとしたアドバイスで、今まで使えたものを全部放り投げてしまったようにも見える後輩の様子に。

……少しの後ろめたさを感じてしまうというのも、ある意味仕方のないことなのだ。

そんなことをぼつりと呟けば、当の本人は「なに言ってるんですか」と笑っていた。

「お二人に憧れたからこそ、こうなったようなものなので。それは全部、私の自己責任ですよ。——第一、先輩に付き合うつもりでいる以上、変に常識に囚われているとそつちのほうに疲れちゃいますよ」「あー、うん。そのあたりはぐうの音もでないな」

微笑みながら返ってきた後輩の言葉に、確かにと苦笑を返す。

容姿やら成績やらを見れば、どこの超人だ、みたいなスペックを持つ我が幼馴染みではあるが。

近い位置に居る人間からしてみれば、隙も油断も多い迂闊な面がうが目立つし、そうでなくても突飛なことをしでかすのがあの天災バカである、やきもきしたりそれわしたりは日常茶飯事だ。

なので、アイツと上手くやっていこうと思うのなら。

……ある程度は常識を投げ捨てたほうが良い、というのも。ある意味正解ではあるのだ。

「まあ、その疲れこそを楽しんでそうなの、逞しい幼馴染みさんには負け
ますけどねぇ?」

「……そう見えるか?」

にこやかにはい、とはつきり返されて少し瞑目する。……楽しむ、
楽しむか。

「うん、まあわりと楽しんでるかもしれないな」

「……これってもしかして、惚気けられてます?」

半ば呆れたような後輩の言葉に、惚気かどうかはわからないが。と
返せば、彼女は小さく苦笑して「でしようね」と呟いた。

——それから、後輩は真面目な顔に戻って。

「やっぱり、先輩と幼馴染みさんはセットですね。……両方一緒じゃ
ないと、魅力半減です」

「……それ、やっぱり諦めてなかったのか?」

「当たり前です。幼馴染みさんが居ない時の先輩は、それはそれで素
敵ですけど……、やっぱり二人一緒じゃないと、なんだか欠けてる
なー、って気分になっちゃいますし」

原則ずっと一緒に居る感じなので、個人的にはあまり実感が湧かな
いのだが。

俺がいない時のアイツは、どこか生気が足りない感じがする……ら
しい。

見た目はしつかり美少女なので、それでもモテはするだろうが、
やっぱり二人一緒のほうがイキイキしているのだとか。

「そういうわけですので、お二人一緒に私に嫁いでくれると嬉しいで
す!」

「……多分アイツ、増やす気まんまんだぞ?」

「なら全部面倒見ますよ！目指せハーレム！」

「それ、アイツが聞いたら別の意味で泣くと思うんだよなあ」

それ私の夢え!?!と幼馴染みが鳴き声を上げる様子が如実に想像できて、思わず二人して笑い合う。

しばらくして戻ってきたアイツに「なんか知らんけど、後輩ちゃんと同僚が仲良くなってる!?!」と驚かれるまで、その笑いは続いたのだった。

百合ゲー世界に転生したらメインヒロインが全然ダメな件について

「転校生ちゃん！私とお友達になりませんか！」

「丁寧に断りするわね」

「what, s!?!」

「自分の胸に聞いてみたらいいんじゃないかしら？」

取り付く島もない転校生ちゃんからの拒絶の言葉を受け、思わず血迷って自身の胸に問い掛けてみる私。……哀れなほど薄っぺらな私の胸は、なにも答えてはくれない。

教えてくれ転校生ちゃんのお胸、ナイムネはなにも答えてくれない……。

いやまあ？お胸様に聞いて解決するなら、世の中今頃ハッピーままで万々歳だろうけども、そうは問屋が卸さないってやつ？

私は自分のナイムネに誇りがあつたりするんで、別に問題は無いわけだけどネ！

「あら意外ね。そういうの、気にするタイプかと思っていたのだけけれど」

「クールな見た目の、涼やかな美少女を目指しておりますので。——流線型のこのbodyには、結構自信があるのですよ？」

「……これ、微妙に喧嘩を売られていたりするのかしら？」

「売ってるつもりはないですよ？横に並ぶと貧と巨でバランス良さそうだなー、とは思いますが」

……それホントに喧嘩売ってないの？とジト目で見られたけど、そういうのはご褒美以外の何物でもありません。

☆ ☆ ☆

「まあ貧と巨云々は若干冗談が混じってますけど、実際横に並ぶとコントラストが良い感じになりそうだなー、とは思ってるわけですよ」

転校生ちゃんに購買横の自販機で売ってる、紙パックのジュースを渡しながら私は言う。

……転校生ちゃんには無難にイチゴオレを渡したが、私は購買・闇のおすすめスポットに陳列された『飲めるモンブラン』を選択した。私の中の好奇心が抑えきれなかったんだから、仕方ないね！などと宣いながらストローを突き刺して、そのまま中身を一口。

……うわ、ホントに飲めるモンブランだこれ?!

栗じゃなくてモンブランを飲んでるとしか言えないぞこれ?! 変に拘こたわってるなー?

そんな風に飲み物と格闘している私を、変なものを見る目で観察してくる転校生ちゃん。

やがてスルーを決め込んだらしく、私に話の続きを促してくる。

……んー、唯我独尊。

とはいえ、別に難しい話というわけでもない。

ブロンド金髪な彼女と、ジェットブラック黒髪な私。

ロブ短髪な彼女と、ロング長髪な私。

ブルー碧眼な彼女と、ダークブラック黒眼な私。

ボイン巨乳な彼女と、ペたん貧乳な私。

……うむ。こうして並べてみると、実に対称的な姿だね私達。

流石、前世のゲームパッケージでは二人並べて描かれてただけはあ
る——というか。

……おっと、視線はちゃんとお互いに向いてたから、前面に謎の三人目が居たりはしないぞ、どこぞの右手も安心だな!

「つまり、並んで立つと華がある……みたいな感じかしら?」

「あ、はい。そんな感じですよはい」

当然ながら転校生ちゃんには通じなかつたので、素直に頷いておく。

対称的な人物や物体を並べて、その差を強調するというのはよくある技法だ……というのも間違いではない。

……いやまあ、彼女がメインヒロインなので、隣に並びたいないし並べたい——って面も無くはないのだけれど。

その部分に関しては、ちよつと問題があつたりもする。

……まあ、あれだ。彼女、後輩ちゃんと同じなのである。

具体的には、ゲームでは片言ほわほわ系メインヒロインだったのが、こつちでの彼女はクール&ミステリアスな、ラノベヒロイン系転校生にクラスチェンジしているのである。……だからなんでえ?!

おつかしいなー? ゲームだと日本語苦手で、舌を噛むのなんてしよつちゆうな萌え……って感じの、守つてあげたい系ヒロインだった気がするんだけどなー?

そんなことを思いながらチラツと視線を向ければ、転校生ちゃんは足を組み、威風堂々とベンチに腰を掛けていて。——ともすれば、できるキャリアウーマン的な雰囲気すら醸し出していた。

その姿からは、ゲームでの小動物的な空気は、微塵も感じられない。

……や、これもこれで良いなと思うけど。

なにがどうなつてこんな女王様ー、とか呼んじやいそうなカリスマを獲得しちやつたんでしょうね、この人?

「……覚えてないのね」

「……? なにか言いました?」

「別に。仮になにかを喋つていたとしても、耳に届かなかつたのならそう重要なことでもないでしょう。——軽く流してくれればいいわ」
「あつはい」

……見詰めていたら、なんか機嫌が目に見えて悪くなったでござる。

うーむ、前世男性ゆえの性^{さが}から、ちらちら胸のあたりを見ていたの

がバレたのだろうか？

いやね？別に性欲云々ってよりは、海外の血が入ると大きくなりやすいのかなー、って思ってたところのが大きいんだけど。

たわわなモノをお持ちな人がいると、どうしても視線がそっちに行ってしまう……というの間違いじゃないというか。

それが嫌がられるのもわかるんだけど、持たない側からすると、やっぱり気になっちゃうんだよねー。

などと脳内で謎の理論防御を展開しつつ、彼女の胸をチラ見する私。

……あれ、男のチラ見は女のガン見って誰の格言だった？

いやでも今の私は女だし？いやしかし、男みたいな見方をしてるのならそれは男の視線とトレードオフなのは……？いやしかし……？

……うーむこんがらがってきた。

こうなったら一回思考をリセットだ、すなわち転校生ちゃんは胸がおつきい……。

——その時私に電流走る。

待つんだ私。よく考えたら、私以外のヒロイン勢みんな大きかったような……？

一つ学年が下の後輩ちゃんできえ、私よりも大きかった気がするし。

まだ出会ってないヒロインズにしても、小に区分されるような娘はほとんど居なかったような気がするぞ……？

「——なるほど、私は希少キャラだったというわけか」

「なにを言ってるのかさっぱりわからないけれど。貴方が変な理論の飛躍をした……というのは伝わったわ」

おっと、うっかり独り言が声に出ちゃってたんだぜ☆

呆れたような視線を向けてくる転校生ちゃんに、てへへと苦笑いを返して、ベンチから立ち上がる。

「お話は、もういいのかしらっ。」

「転校生ちゃんの貴重な時間を浪費しちゃうのも悪いので。んじやま、一考だけでもよろしく！」

そうして私は、転校生ちゃんに一枚の紙きれを渡して、その場を立ち去るのだった。

……ふっ、こういう時はクールに去る女だぜ私は……。

☆ ☆ ☆

「……………」

視線を向ける先で、彼女は威風堂々と先までのふざけた空気を微塵も滲ませずに、目的地へと前進して行った。

……それは、昔に憧れたあの人、そのままの姿で。

だから思わずため息が漏れてしまう。……漏らさずにはいられなかった。

「……居るんでしょう、幼馴染みさん」

「バレてたか」

自販機の影に声を投げてみれば。

案の定そこにいた彼女の幼馴染みである少年が、バツの悪そうな表情を浮かべながら、頭を掻きつつこちら側に進み出てくる。

……過保護と言いか付き合いが良いというか、とにかく彼は昔から変わっていない、らしい。

そこに少しの安堵と、ちよっぴりの嫉妬を感じて思わず頭かぶりを振る。

……そういうのは、良くない。

「なんというか、あれだな。俺も最近思い出した口だから偉そうなこ

とは言えないが……全然気付いてないな、アイツ」
「ええ、まあ……そこは喜ぶべきか悲しむべきか、私もちよつと気持ちの置きどころを迷っているのだけれど」

——昔とは違う
意識改革。

その成功が今の珍妙な関係を導き出したというのだから、私としてもちよつとどうしたらいいのかわからない部分がある……ということは否めない。

それでも。欠片も思い出してくれないのは、酷いのではないか……と思わなくもなかった。

「複雑な乙女心ってやつだな」

「乙女じゃなくても、複雑な思いはするんじゃないかしら？」

「……ごもつとも」

苦笑いと共に彼は肩を竦める。

……本当に彼は昔から変わっていないんだなと、また安堵と嫉妬の感情が押し寄せてきたのでぐっ、とそれを飲み込む。

……わかつている。彼が変わらなかつたのは、彼がそれを選んだからで。

私が変わつたのも、それを選んだからだということとは。

それでも、この感情を抑え込めないのはきつと、

「小さい頃に憧れていた人が、わりと無理してて、本性は結構緩かつた件について……っ！」

「あー、うん。幼馴染みとして、すまんと言わせて貰う」

その変化のもとになった人と一緒に居られなかつた……という後悔。ただそれだけの話なのだ——。

☆ ☆ ☆

「あがり症もどもりも、言葉を噛むのだから頑張って直して！常に余裕をもって、優雅になれるように努力を重ねて！いざ再び日本の地を踏んで見れば、憧れの人の憧れた姿は虚像に近く、どころか私も無理をさせていた側に入っていた、だなんて！……思わず、他人のフリをしてしまうのも、仕方がない話だと思わない?!」

「あー、うん。実際俺も最初はそっちに気付かなかったからな、仕方ない仕方ない」

「でしよう!?!」

思わず酒でも飲んでるのか、とちよつと疑ってしまうような転校生の剣幕に、些か押され気味の俺なわけだが。

無関係というわけでもないのです、話を途中で打ち切るわけにもいかず、現在ちよつと困っているところだったりする。

転校生である彼女。

名前を聞いた時には思い出せなかったが、それでもなにか引つかかるものを感じたので、自身の記憶を洗い出してみたところ。

——小学校の低学年の頃に、一年間だけ同級生になったハーフの女の子がいたことを思い出した俺は、いやまさかそんなと思いつつも、当時のアルバムを紐解いてみたわけなのだが。

これが大当たりも大当たり、大人しく気の弱そうな金髪碧眼の少女と、その右手と自身の手を繋いで街を歩く、我が幼馴染み（と、その後ろを付いていく俺）の写真が見つかったのである。

十年近い時間経過と、当時と現在の性格の違いから、両者が結びつかなかった俺は。

ちよつと困惑しつつも後日、それとなしに彼女に確認を取ってみたわけなのだが。

「……それを聞いてくるということは、やっぱり私の勘違いじゃなかったのね」

と遠い目をした彼女の姿に、思わず天を仰ぐはめにもなったのだ
た。

そんなこんなで、アイツの突撃を影から見守るように反対側に隠れ
ていた……というのが、今回の俺の事前状況なわけである。

まあ、案の定アイツは転校生の正体に一切気付かぬまま、話を終え
てしまったわけなのだが。

とはいえそれにも理由がある。

忘れてしまっているのは、別にアイツが薄情者だから……というわ
けではない。

「……黒歴史?」

「ああ、なんというか……、中学に入る前までのことを、アイツは意識
的に思い出さないようにしてるんだよ、『ぐああああー!?あの頃の私
浸りすぎーっ!』とかなんとかで」

「ええ……?」

どうにも小学生の時のあのクール気取りが、彼女にとっては
痛い過去黒歴史にあたるらしく、思い出すのはNGなのだそうだ。

……今も時々クールぶるだろうに、と言えば「あの時のと今は違
うのー!」と謎の主張を返されたりもしたわけだが。

とはいえ、それはあくまでも彼女の勝手な都合。

転校生が昔のような言動をすれば、一発で思い出してくれるだろ
う、というのは間違いないだろう。

……が、ことはそう簡単なものでもないらしい。

「今さら昔のように振る舞え、と言っても無理よ。何年私がこの性格
で過ごしたと思ってるの?向こうのスクールでの私の仇名、なんだと
思う?……『女帝』よ、『女帝』!……今こうして貴方と普通にお喋り
できてること自体が、半ば奇跡みたいなものなのよ……」

「そんななに」

嘘も積み重なれば本当になる。

ましてや、本当にしようとして努力して積み上げたものだ。そう安々と崩せるものでもない……ということらしい。

……と、なると、だ。

「新しく関係を構築する、って方向で動いたほうがいいな。幸い、アイツも転校生に対しては、好印象のほうが勝るみたいだし」

「……そう、かしら」

俺の提案に、不安げに瞳を揺らす転校生。

……まあ、無理もない。

その十年をどう過ごしてきたのか、俺には想像するほかないが。

辛いこと悲しいこと悲しいこと、全て目標のための糧にして、彼女は今の自分を築き上げてきたのだろう。

それを受け入れられるかどうか、というのは、想像以上の恐怖があるはずだ。

ましてやそれは、過去の幼馴染みを理想として磨き上げたものである。……不安が大きくなるのも仕方がない。

とはいえ、最早それは彼女自身の血肉であって、アイツの真似事ではないだろう。

それを視界に入れたからといって、アイツの精神に負担が行くようなことにはならないはずだ。

……というようにことを伝えてやれば、転校生はふっ、と微かな笑みを浮かべていた。

「よく見てるわね、本当に」

「幼馴染みだからな。寧ろ俺としては、そっちがアイツに愛想を尽かさなにかのほう心配だったりするがな。今のアイツは自由奔放つて言葉が、それこそ服を着て歩いているようなものだし」

「あら、そこは見識が足りてないわね」

む、突然に元気になったな？

訝しむ俺に、彼女は穏やかな笑みを浮かべたまま、言う。

「彼女とずっと共にいる貴方が、一切変わっていないんですもの。私が好きだった、あの人の一番素敵部分は変わってないんだ……ってことは、すぐにわかったわ」

「……なるほど、そういう見方もあるのか」

でしよう？と返す彼女は、昔の朗らかな面影を残した、とても可愛らしい笑みを見せていた。

☆ ☆ ☆

「……ん？いやちよつと待った。なんだか嫌な予感がするぞ」

「え？なにか引つかかることでもあったかしら？」

「……俺が変わってないのはいいことなのか？」

「……？ええ、いいことだと思っけれど？」

「いや違う、そうじゃなくてだな……」

微笑む彼女の雰囲気、思わず流されそうになってしまったが。

……よくよく考えればなにかがおかしい。なんだ、なにがおかしいんだ……？

「……まさかとは思うが、一つ聞くぞ？」

「ええ、なんでもどうぞ？」

「お前が欲しいのは、アイツだよな？」

「ええ、彼女も欲しいわね。……あ、間に挟まる気は無いわよ？この前も言ったけど」

「なんだろう、最近似たようなことをどこかで聞いた気がする……」

頭痛がしてきたので思わず額を押さえる俺。……具体的には部室

で聞いた気がするな？

部室？と聞き返してきた彼女に、ことのあらましを教えたところ。

彼女はすぐさま渡されていた紙入部届切れに必要事項を記入していた。

……変なことにならなきやいが、なんてどこか他人事のような気分
分で、全部放り投げる俺なのであった。

百合ゲー世界に転生したら何故か文章を書くはめになった件について

「ふんふんふんふん♪」

放課後になればお楽しみ部活タイム！

新たなヒロイン達とお近付きになるためにも必要な我が城、文芸部の部室に向かって鼻歌を奏でながら歩く、見る人全てが振り返らざるを得ない美貌を持った、可憐でクールな美少女は一体、誰でしょう？

そう、私です！

……鈍いな私だよ私、この世界の主人公たる私だよ！今明かされる衝撃の事実〜！

「いや、混じってる混じってる」

謎の脳内ナレーションに、適当なツツコミを叩き込みつつ、部室のある三階まで階段を登っていく私。

現在私が所属する文芸部——もとい文芸研究会の部室は、三階の隅っこのほうにある。

一応キッチンも付いてるし、冷暖房も完備しているこの部屋は、元々は学校に寝泊まりする教師のための仮眠室だった、らしい。……そりゃ冷蔵庫もあるよね、なんて思ったかは置いて。

部員数が定員に足りておらず、現状同好会扱いになっている文芸研究会が、なぜこんなわりと上等な部室を手に入れているのか……という。

特に捻りもなく、私の人徳によるものだったりする。

……おい、今鼻で笑ったやつ出てこい、私もそう思うから一緒に笑おうぜ☆

いやまあ笑うのは冗談だが、人徳というのは冗談ではない。

中身はこんな残念生物な私だが、それはあくまでも親しい人と一緒にいる時の姿。

私（がくせいのがた）は最初から自己紹介してた通り、容姿端麗・成績優秀・文武両道・大和撫子——を規範とする、パーフェクト美女である。

流星に生徒会長に関しては（諸々の理由から）パスしたものの、そういうモノを任せても問題ない人物だ、と思われる程度には真面目にやってるのです。

なので先生方にちよろつとお願いすれば、立地的に使いにくい代わりに設備はそれなり……な部室を準備することくらいは、お茶の子さいさいというわけなのですよ！

……みたいなことを後輩ちゃんに聞かせてみたところ、なぜかおはぎを渡された。

なに？後輩ちゃん和菓子キャラなの？え？違う？お茶の子はおはぎのことだから？……いや寧ろそっちが初耳だよ。

なんてよくわからないやりとりがあつたとかなかつたとか。

閑話休題

部室を用意できたのは良いのだが、代わりに先生方から一つ課題を出されてしまった。

それが、近く行われる演劇祭の劇用の台本を一つ完成させる……というものである。

それと、演劇祭終わりまで同好会としての活動を認める代わりに、終了後一ヶ月以内に部活の最低定員数である、五人以上の部員を集めるように……とも。

じゃなきや文芸研究会は解散、部室も他の部活に使わせる……というような話だった。

……今見るとすつごい譲歩されてる。

終了後一ヶ月以内とか、演劇祭成功させれば余裕すぎるだろうし、できなかつたとしても解散だけで、他のペナルティは一切なしとか、なんて優しい条件なのかとちよつと感動したものだ。

そんなわけで、演劇祭をおよそ二ヶ月後に控えた今日、本格的な台

本制作に取り掛かるため、私は部室へと向かっていたのだった。

「というわけではいおまたせ、っと……」

部室の扉を開け、中に入る。

僅かに下げた視線を上げれば、そこには二つの人の影。

部屋の中心で向かい合っているのは、茶色の髪をポニーテールにした、普段は犬みたいに人懐っこい後輩ちゃんと、綺麗なブロンドヘアを首元あたりでカットした、女帝のようなクールな印象を周囲に与える転校生ちゃんの二人。

その間に流れる空気はまさに一触即発、竜虎相打つといった緊張感あるもので（なんかその向こうに死んだ目で中空を眺める幼馴染みが見えるけどちよつとスルー）。

……え、なにこの状況。

私が啞然とすると共に、厳しい顔をした二人が、雷火のように迅速に動き始める。そして行われたのは！

両手を水平にしてタツチをする、というのを交互に行い。

互いの左手で握手を交わし

、空いた右腕を交差するように押し付け合い。

相手が握った左手の上に同じ様に握った左手を乗せあつて。

最後に両者肘を曲げて両手を相手と合わせた。

「……後輩ちゃん、貴方は確かに強敵だったわ」

「転校生さんも、噂に違わぬお人でした！」

「わからん、なんもわからん……どうなつとんこれ同胞……」

問い掛けた先の幼馴染みは、「俺にもわからん……」と死んだようなため息を吐いた。お、幼馴染みダイーン!!?

☆ ☆ ☆

「というわけで、新入部員よ。よろしくね」

「あ、はい。よろしくおねがいします……っ」

なんか普通に流されたんだけど。……いや、よそう。藪をつついて蛇を出す必要はないんだ、同胞も領いてる。

先日のお誘いはどうやら功を奏したらしく、こうして転校生ちゃんが新入部員として加わった……と言うことらしい。

「つまり部員歴的には、私が先輩になるのではないでしょうか！」

「そういうことになるみたいね。肩でも揉みましようか？」

「転校生さんにそういうこと頼むと、後が怖いので遠慮しておきます！」

「別に怖がらなくてもいいのに」

「……遠慮するな、とは言わないんだな」

あらやだ雰囲気は和やかなはずなのに、会話がなんだか不穩^{ふおん}。わたし、思わず笑顔がひきつっちゃうわね☆

……いやまあ、別に言うほど一触即発^{いちじつぱつ}ってわけではないみたいだけど。

なにがどうなっただけでこうなってるのかわからないこつちからすると、何処かに地雷でも埋まってるんじゃないか、とちよつと不安になるわけですわね？

「大丈夫ですよ先輩、私と転校生さんはオトモダチですので！ちよつと小競り合いがあってもお気になさらず、ですー！」

「そこは小競り合い、って単語を出さないで欲しかったなー？」

「あら、小競り合いくらいなら楽しんで見てるものかと思っただけれど」

「……ねえ転校生ちゃん、私のイメージどうなってるの？貴方の中の私は魔王かなんかなの？今の御時世魔王だつて無用な小競り合い楽しむ余裕ないからね？」

「そうかなあ……?」

おい梯子を外すな同胞、今の魔王軍はコンプライアンス大変なんだぞ。……いやなんの話だよ?

話がズレてきたので軌道修正。

部員が増えたので、これからの方針と役職について決めていこう、というのが今回のメイン議題なのだ。

「あ、俺雑用なんで」

「おいこら同胞あ、さくつと決めて逃げようとするんじゃないか」

「……バレたか」

バレラーザ! (?)

確かに幼馴染みは、喉乾いてきた時に飲み物用意したり、場合によっではおやつ作成に動いたり、で主に雑用係なわけだけど!

お前さんが副部长してくれないと、どう考えても後が怖いんだよお! どっち選んでも戦争でしょこれえっ!?

「なるほど、副部长と言う名前の雑用ということですね! 流石先輩、ナチュラルに仕事を増やしていく! よ、魔王!」

「魔王軍結成というわけね、参謀あたりに立候補してもいいかしら?」

「ノー! アイムノットデーモンキング!」

「なんだその適当英語……」

適当英語とは言うが、向こうの宗教観的に魔王の訳文って大体こんな感じだぞ同胞あ!

向こうの価値観的に微妙に魔王ってポジションが訳しにくいんだぞ同胞あ!

「ってちげえ! なして君らここの時に限ってボケるのさ?! それ私の役目え!」

「おちつけ、泥沼になってるぞ」
「うぐぬぬぬ……」

きやいきやいしてる二人の姿は割とてえてえなんだけど、それに付随するもの（※こつちへの被害）がてえてえを阻害するから、おちおちてえてえもできねえ……。

目の前のてえてえを楽しめないととはなんたる不幸……！

「おい、そうやって泣いてるフリしながら、密かに俺を副部長にしようとするな」

「ちっ、目ざといな幼馴染み。だがお前が副部長をやらないとどうなると思うっ？」

「……どうなるんだ？」

「大惨事スーパ―文芸部大戦ね」

「決着は銀河の彼方ですわね！」

「こうなる」

「うん、俺副部長でいいわ……」

ですよねー。

☆ ☆ ☆

「……いや、ホントに会議が紛糾するとは思わなかった」

決めなきやいけないこと、なんてそんなになかったはずなのに、なんでこんなに疲労困憊になってるんだ私達……？

実際役職なんて、部長私で副部长幼馴染みー、以外は最低限平部員でも良かったはずなのに、なんでこんなことに……。

いやまあ、みんなが役職欲しがったからなんだけどね？みんなやる気あって私嬉しいなあ！（ヤケクソ）

「そういうわけで、茶菓子係を拝命しました！先輩のリクエストに答えて洋菓子系も揃える予定です！」

「うん、費用はまあ私が見つんで、いい感じのお願いするね？」

お任せですよ！と元気な後輩ちゃん。

実際甘味の目利きが結構得意みたいなので、ピッタリの役職だと言える。……甘味係が文芸部に必要か、って疑問はスルーで。

「参謀もとい資料集め係、ということになったみたい。劇の方向性とかは見えているのかしら？」

「そのあたりも決める気だったんだけどねーなんでかなーあはははは」

それは私だけの責任じゃないわよ、と紅茶に口をつける転校生ちゃん。……追求はしまい、私も悪ノリしたし。そして、

「おい、こつち見ろお前。雑用兼任だからってわざわざこんなもんまで用意しやがってこの野郎」

「ふはははは」

「笑ってんじゃねえよ……」

わなわな震える幼馴染みに笑い返してやる。

ふはははバカめ、初手で雑用を希望するからこうなるのだ、恨むんなら自分の愚かな選択を恨むんだな！的なきことを言えば「魔王め……」と忌々しそうに言われてしまった。……だから魔王じゃないってば。

……さて、幼馴染みが現状どうなっているのか、と言うと。

なんのことはない、雑用係の常としてメイド服を着ている、というだけのことである。

元が百合ゲー世界なのもあって、この世界の人々の顔面偏差値は原則かなり高い。我が幼馴染みもその例に漏れず、普通に美形に区分される側の人間である。

……だつたらやるよなあ？ 似合いそうなら着せるよなあ？ 家庭的なスキル網羅してるんだから絶対似合うよなあ？……という私の中の女性的な部分が暴走した結果がこれである。

だが私は謝らぬ。似合うんだから着せればいいんだよ！ それ以外に理由はいらねえ！……流石にかわいそうなので、ロングスカートのオーソドックスメイド服だけだね。ミニスカフリフリメイド服とかは、流石に自重した。

ただまあ、今の御時世だと服の性別指定もなんかあやふやなところがあるらしい（制服でもスカート・ズボン共に自由選択だったりする）ので、彼が怒ってるのは女物の服を着せられたということではなく、無理やり制服脱がせてメイド服着せた……という行動そのものに対してのもの、みたいだけど。……なんか一部の人すつごい喜びそうだねここ？

まあ私としては、視界の華やかさが増したことのほうが重要なので、特にそのあたりは気にしないけど。

わーい、百合の花園だー！……そのせいで議論の時間が致命的に削れた、ってことについてはノーコメントで。

「欺瞞にもほどがあるだろうがよ……」

「いいんだよ欺瞞でも！ 私はゆりゆりしたいんだよ！ 幼馴染みも言つたじゃないか、やるだけやってみろって！」

「俺をそっちに巻き込んでいい、とは言ってないんだがな……」

ぶちぶちと文句を言う我が幼馴染み。

……むう、自分でやらせといてなんだけど、似合ってるなホントに。背もそんなに高くないし、体つきもそこまでがっちりしてるわけでもないから、女装させても可愛らしさのほうが目立つし。……黒髪ショートの口悪い系メイド、ありだな！

なのでとりあえず頼み倒しておく。

「そんなこと言わずに！ 私の命を救うと思って！」

「……………つたく、部活の時だけだぞ」

YES！我が幼馴染みスーパーちよろい！

ちよつと頼み込めば言うこと聞いてくれるんだからホントもう愛してる！……………え、愛してるなら嫌がることさせるな？知らなーい。

「転校生さん、これいつツッコみます？」

「ほっとけばいいんじゃない？そのうち戻ってくるでしょうし」

あとその二人。ダメだこいつらみたいな顔しても、さつきまで我が幼馴染みの女装のために、嬉々として協力してくれてたという事実は消えないからな？……………ということ伝えれば、二人して知りませーんと返してきた。

……………なんも知らねーなこの部員たち、やっぱりお前が頼りだぞ幼馴染。……………知らんがな？でしょうね。

なお、この日は同胞のメイド化のために時間を費やしてしまったので、これで解散になったのだった。

……………いや、これ間に合うよね演劇祭……………？

百合ゲー世界に転生したらなんか色々迷走している件について

出会いと別れは、誰しにも等しく訪れるもの。

例えばそれが、悲嘆の中後悔と涙に塗れるものであったとしても、出会いそのものに善悪の区別は存在しない。

「だからまあ、なんだ。……悔やむでない、勇者よ。吾とそなたは殺し合うために出会い、事実こうして干戈を交えた。……その先に、吾の滅びという結末があった……それだけのことなのだ」

「でもよお、でもよお……っ！」

互いの血で染まり尽くした鎧は、最早何かを守るといふ用途を果たせぬ程に粉々で。

腕の中の女性の吐息は薄く、その灯火の消える時が近いことを、如実に表しているようだ。

——それを為したのが己であるということが、男の心を今も苛み続けているのだった。

「……全く、今代の勇者は情緒豊かというか、余計なことを背負いすぎるといふか……。そこまで嘆くのなら、一つ約束をしよう」

「……約束？」

痛めなくてもよいはずの心を痛め続ける男に、彼女は安らかな笑みを浮かべながら声を返す。

——魔王とは、システム。

ならば、ここで滅びようとも、自身が再び蘇る時は来るだろう、と。

「……また、殺しに來い。何度でも吾は立ち塞がろう、立ち塞がり続けよう。その度に、こうして語ればよい」

「——そうするしか、ないのか」

……どこまでお人好しなのか、この男は。

魔王はまた笑みを深めながら、男の髪を撫でる。……この愚かしい男を、好ましく思いながら。

「誰よりも思いあうからこそその殺しあいだ、他の誰にも吾は殺されてはやらんぞ?……だから、また来い」

「……ああ、必ず」

それは、誰も知らない約束事。

民が知れば怒り狂うかもしれない秘め事。

勇者と魔王、たった二人の為だけの契約^{エンゲージ}だった。

☆ ☆ ☆

「は、はわわ!こここれ、続きはどうなるんですか!?!」

「んー、それはねー、どうしようかなーって思ってたねー」

プロトタイプ^{仮決め状態}の台本を渡したところ、後輩ちゃんからの反応は結構いいものと言えた。

……魔王と勇者の悲恋とか、わりと使い古された題材かと思ったのだけど、やっぱり王道は王道であるがゆえに、評判が良いものらしい。でもなー。これ話を締めに行くのに、大体どっちかがどっちかに合わせる形になっちゃうんだよなー。

……性差に縛られない今の時代で、立場に縛られる結末ってウケるのかなー?なんてところが気になって、ちよつとばかし筆が止まってるのが現状だったりする。

いやまあ、面白いものに貴賤なして言うし、話がよければ普通に受け入れられるのかも知れないけれど。

「……とりあえず、似たような話と、その評判について集めておきましようか?」

「あー、うん。お願い転校生ちゃん」
「ん、了解」

転校生ちゃんがパソコンに向けていた視線を外して、こちらにちらりと向けてくる。

確かに似たような作品の評判を見れば、どういう結末が好まれているのかわかるかもしれない。……そういう意味で、転校生ちゃんの申し出は渡りに船であった。

なので軽く了承を返せば、彼女はふつと笑って、視線をパソコンの画面に戻す。……うーん、できる女感凄いなあ。

しかしまあ、なんというか。

昨日はあれだけ騒いでいたというのに、今日は拍子抜けするくらい、真面目に作業を進められている気がする。

……私も含め、みんなちゃんとしてれば普通に優秀なのだから、この結果もさもありなん……と言ったところだろうか。

後輩ちゃんにしろ転校生ちゃんにしろ、はたまたまだ見ぬヒロイン達や我が幼馴染みにしろ、みんな成績も運動も見た目も、平均値より上に属するだろう人々である。

みんながちゃんと動いて協力すればすごいものが作れる、という気分になるのは決して間違いじゃないだろう。

実際ゲーム内では幼馴染みが含まれない代わりに、他のヒロインが含まれたメンバーで、演劇祭の台本を作り上げたりもしていたのだし。

……まあそつちだと現時点でちゃんとした部活として認められていたし、部室の場所もここじゃない全然違う場所だったんだけどね。そもそもみんなの性格が今の彼女達と違うから、できあがるものも普通に王子様とお姫様のラブロマンス（但し役者はどっちも女性）だったし。……百合成分を劇中劇で補っていくスタイル……?」

なお原作では演劇祭関連の話はさらっと流されてたんで、現状では

話の参考程度にしかならなかったりする。

そりゃそうだ、だってこつちで演劇祭が重要イベントみたいになってるの、演劇部が同好会扱いになってるからだもの。

仕方ないのでため息を投げて、椅子の背に体を預けて弛緩させる。

「煮詰まってるみたいだな、ほい紅茶」

「ん、ありがと同胞」

横合いから幼馴染みに渡された紅茶に口をつけ、ほっと一息。

……紅茶にはあんまり詳しくないんだけど、なんとなく落ち着く香りのするお茶だった。

聞けば彼特製のブレンドティーなのだとか。……流石家事スキルカンスト勢、やるのがすごい。

「……んー。とはいえ、一回止まっちゃうと、再起動までに時間がねー……」

そうして紅茶を口につけながら、一つ頭を搔く。

リラックスするのは構わないのだが、その結果として手が止まってしまうと、もう一度モノを書き始めるのに、それなりの労力が必要となくなってしまふ。……というのが、休むことをちよっと躊躇わせる理由だったりする。

まあ、無理に根を詰めても仕方ないだろう、って返されそうでもあるので、今は素直に休むことにしようかなあ。

「……それで、なんでこつちを見るんだ？」

「知らなかったのか、私メイド萌えなんだ。メイドニウム補給で私は元気になるんだ」

「なん……だと……？」

困惑する幼馴染みにニヤリと笑い返す。

似合いそうだから着せたと言ったが、別に性癖ではないとは言っていないぞ？

……ふふふ、いつかメンバー全員をメイド服にして、メイドハーレムを構築するというのも私の夢なのだ。

なお私は雑食なので、別になんちやってメイド服でも大丈夫だ！寧ろウエルカム！

「なるほど、文化祭で部活の出し物をする時に、その野望が果たされるというわけですね！」

「既に未来の展望が掴めていると。流石ね」

「……………」

「その手があつたか、みたいな顔をするんじゃない」

バレテラ。

でもまあ、今はまだ先の話だから考慮の段階でしかないけど、文化祭にメイド喫茶系の出店を目指すのは悪くないなあ、と思う私なのだった。

☆ ☆ ☆

「うぐぬぬぬ……ダメだあ！なんも思いつかーん!!」

「あれは紙遁しとん・原稿紙吹雪ぜんぶなげたの術!!」

「知っているの後輩ちゃん？」

「ベテランであろうとアマチュアであろうと、紙に物を書くのであれば誰もが使える初級忍術です！飛んでいく原稿用紙が一瞬のストレス発散と、あたりに散乱したそれをかき集める時の脱力感を確約するという自爆技ですよ！」

「やめて、追い打ちかけるのやめて！ただでさえ創造力を酷使してるのに追加で体力と精神力まで削るのやめて！……おい待てどこから出したその十面ダイス、おいバカやめろ判定すんなあああああファンブったあああああああ」

「ダイス振るまでもなく発狂してるじゃねーか」

うるせーメイド長！こちとら長時間文章考えてたもんだから、脳がオーバーヒート状態なんじゃない！

メイド長……？と微妙な顔で首を捻る幼馴染みはとりあえず置いといて、後輩ちゃんが選んできたフルーツケーキにフォークを入れ、口に運ぶ。

フルーツの酸味と、クリームの甘味のバランスが絶妙な一品だった。

とはいえ脳に送る糖分としては、一口ではとてもじゃないけど足りないので、味わいながらも一切れ分のケーキを美味しく・それでいて迅速に頂いていく。

……うむ、ごちそうさまでした。

「とはいえ、完全に煮詰まっちゃった、というのも確かな話でしょう？気分転換をして新しく考える……というのも、ちよつと時間的に無理があるみたいだし」

「ん？……うわホントだ、もう結構時間経ってる?!」

転校生ちゃんの言葉につられて、壁の時計に視線を向ければ、時刻は七時をちよつと過ぎたくらい。

……文芸部の居残りで、言うにはちよつと時間が経過しすぎている。

「えっと、一応みんな徒歩通学だっけ？」

「そうですね！私は五分ほどで家に帰れます！」

「私は十分ね」

「で、俺とお前は八分くらい、と」

……となると、一応もう少し作業に時間を費やすこともできなくなる、か。

まあ、さつきまで煮詰まっていたのに、これから数分程度でなにかいい案を考えつくとも思えないわけだけど。

「んー、仕方ないか。はい、今日は解散解散！骨組みくらいはできまし、続きは来週！」

「え？……あ、そつか。今日金曜日だったんですね」

「明日も集まる気でいたわね、思わず」

手を叩きながら部活の終わりを知らせれば、後輩ちゃんと転校生ちゃんが揃って顔を見合わせる。

……ここは熱心だね、って言うべきところかな？

「用事がないのなら明日もまた集まってもいいけど、どうする？」

「んー、そうですね……あ、すみません。明日は家の用事が入ってました！」

「……ん、私もちよつと用事を思い出したから、土日は付き合えないわね」

「ありやー」

「二人だけで集まっても特に捗りそうもないし、そういうことなら土日は休みだな」

みんなの発言を纏める限り、土日は集まって作業、というわけにはいかなさそうだ。

まあみんな自分の生活があるわけだし、仕方ないよね。

その後は、部室内を片付けてから、各自解散になったのだった。

☆ ☆ ☆

「はあ……なんというか、文章書くのって思ったたより精神使うねえ」「アマチュアだから本業に比べれば、まだまだなんじゃないか？」

「……そこ広げるのは多分変な火種になりそうだからやめとこつか

！」

幼馴染みと一緒に帰り道を歩きながら、あれこれと会話を交わしていく。

……部室を出ているので、幼馴染みの格好が普通の男子制服に戻っているのは、ちよつと残念な気がしないでもないけど。

こう、常に女装させるようにしたら、登下校メイド服な幼馴染みにクラスチェンジしたりしないかな……？

「なんか悪寒が走ったんだが、お前なにか考えたか……？」

「ナンニモカンガエテナイヨ」

ちつ、流石同胞勘の良い……。

やる気なら水面下でバレないようにやらないとダメだな、とりあえず幼馴染み女装計画は一旦凍結。

さしあたっての問題である、劇の台本のほうに話を戻すことにする。

「あえて、魔王と勇者から離れるっていうのは？」

「んー、脳内アイディアはそっちに偏っちゃってるからなあ。一回全部リセットは、ちよつとわりにあってないと言うか……」

「ん？どした？」

急に後ろを振り向いた私に、訝しげに視線を向けてくる幼馴染み。

……ふむ、これは多分……。

「……ん、別になんでもないよ
「?????」

頭上に疑問符を浮かべまくっている幼馴染みに、なんでもないと返して彼の背中を押してさっさと帰ろうと促す。

……そうして帰り道を急ぎながら、もう一度だけ背後に視線を流す。

暗がりの市街地、そこに並ぶ電信柱の影に隠れる誰かが見えた気がして、私は思わず顔を綻ばせるのだった。

百合ゲー世界に転生したらへえ、デートかよ？な件について

はてさて、昨日の云々はとりあえずおいといて。

今日は土曜日、健全な学生諸君はお休みの日である。

……え？サービス業とか観光業とかの人には休みはない？私は学生なので知らなーい。

「おはよーお母さん、今日はお昼いらないからー」

「んー？なにになにどっか行くの？お土産よろしくねー」

「はいはーい」

キッチンで朝食を用意する母に、昼間はいないことを伝えながら、トーストにバターを塗ってがぶり。

……うむ、いつもの落ち着く小麦の風味と、バターの濃厚さだ。

基本お米のほうが好きな私だけど、トーストした食パンは、それはそれでおいしいよね。

それとは別の皿に盛り付けられた、こんがり焼かれたベーコンと、しつかり固くなるまで熱せられた目玉焼き。……醤油を掛けるのもいいけど、私は調味料なしでも美味しく頂ける質なのでそのままパクリ。

うんうん、ご機嫌な朝御飯って感じた。

「……姉ちゃんって、なんでも美味しそうに食べるよな」

「子供舌だからねー。基本的に嫌いなものはないのさ」

前世からの縁で貝だけダメだけどね！

……小学校の給食で出る、クラムチャウダーのアサリでノックアウトされてから、貝類全部嫌いになったんだよね、へへへ。

八宝菜に入ってるエビも、時々貝っぽい味がする時があつて苦手だ

ねえ、エビフライとかは好きなんだけど。

……って、誰も喜ばないだろう私の味の好みは置いて。なんか目の前で呆れたような視線を向けてくるのは、うちの弟である。

まだ小学生なので、姉に対しても変に反抗期でもない、普通にかわいい弟である。……歳を取ると、邪険に扱われるのかねえ？

「んー、まあそれはそれでいいと思うけどねー」

「唐突になに言ってるのさ姉ちゃん……」

反抗期がないと逆に拗れたりするから、個人的にはちゃんと反抗期には入って欲しいものだけど。……まあ、今から弟の先行きを気にするのかもしれない？

なんてことは表に出さず、弟の頭をわしゃわしゃと撫でてやる。

やーめーろーよーと言っているが、言うほど嫌がっているわけでもなさそうなので暫く相手をしてあげた。

いい加減に怒りそうなタイミングを見計らって、撫でていた手を離してそのままごちそうさま。

自身の部屋にとんぼ返りして、身支度の準備。

……前世では男だった私は、女性の諸々のケアの大変さについては、ほとんど又聞きで——又聞きであったとしても色々大変だと知っていたので、こうして女性になって、わりと戦々恐々としていたのだけれど。

なんとまあ、この世界だとそのあたりも、かなり便利になっていた。その理由は今私が座った化粧台。

こやつはこの世界の科学の粋を結集して作成された超ハイテク化粧台で、なんと全自動かつ迅速に、スキンケアから日焼け止め・化粧の下地に、ファンデーションとフェイスパウダーのような基礎部分から、果ては眉毛や睫毛を整えたり描き足したりまで——をやってくれる優れものなのである。……最初にパーソナル登録が必要だから基本的に個人用なんだけどね。

内蔵された小型カメラによって、多角度から撮影された顔データを元に、複数のフェイスパターンを作成し、それに合わせるように各種化粧品を適切に使いわけること、朝の準備の時間を大幅に短縮する……という触れ込みで、大ヒットロングセラーになった、とある会社の売れ筋商品である。

いやね、実際五分と掛からずに全部終わるから、ほんと凄いなだよこれ。

前世でこれあったら絶対みんな買ってる、って確信できるくらい便利だし。体調悪い時は、低刺激の化粧品に自動で調整してくれるし。

……まあ、その代わりに百合的てえてえ展開のお約束である、気になる相手の化粧を手伝ってあげる……というのが、この時代ではほぼ発生しなくなってしまってるわけなんだけど。一部の人が血涙流してそう（こなみ）

ま、私にとっては朝の準備が楽だ、ってほうが重要なんだけども。……いや、ちよつと手動で朝の準備してみたら、なんとというかエグいことになったからさ、簡略化できるなら、そうするべきだよねって言うか……。

そんなことを思いながら、変に気取ってない程度の化粧をリクエストして、五分ほど化粧台の前で待機。

化粧が終わったらそこから離れて、自身のクローゼットから、今日のコーデインポートを選んでいく。

……ふーむ、変に気合い入ってもおかしいし、普通に動きやすいのでいいかなあ？ならシヨートパンツ？

……うーんパス。スカート系で膝丈くらいのがいいなあ、ならサーキュラー？ん、じゃあ下はこれにして。

靴はブーツでしょ、上はフリルのブラウスだな。……まだちよつと肌寒いしなにか羽織るかな？ならストールでも足しとこうか。

そのまま姿見の前で服合わせ。

……うむ、美少女だとなんでも似合うから、なんかなに選んでも正解な気がしてくるなこれ……。

「いや、己の姿に甘えず！ファッションは磨き続けてこそだ！」

頭を振ってむん、と気合いを入れる。

……まあ、今日はあと帽子を加えるか否かくらいで終わっとくけど。気合いが持続してないことについてはノーコメントで。

時間を見れば、まだ出発までは余裕がある。

……ふむ、小物選びくらいは、もう少し時間を掛けようかなあ……。

……さて、私が一体なにをしているのか、いい加減確認しておこう。

今日は、幼馴染みとちよつと出掛けることになっていた。

☆ ☆ ☆

へえ、デートかよ、的な声が聞こえた気がする。……ある意味そうかも？

確か元の意味的に同性でも異性でも、とにかく連れだって出掛けるのなら、デートと呼んでたような気がするし。

なおこのデートって言葉、由来はローマである。

……いやホントにローマって色んなものに繋がってるな？流石は、全ての道はローマに通じるだけはある、というか。

「ってわけで、おまたせー」

「どういうわけだ……？いや、待ってはなないけど」

玄関から外に飛び出すと、隣の家の入り口あたりで待っていた、幼馴染みの姿が目に入る。

軽い挨拶をしながら近付けば、彼もまた軽い挨拶を返してくるのだった。……その姿は女装なんだけどね！

いやいやこれには理由があるんだ！……主に私の気分が上向くという理由が！

そもそもこの世界、異性装に先入観とかないから、街中に出ても特に目立つものでもないし！

「だからって、自分の服を紙袋に詰めて突撃してくるやつがあるかよ……」

「折角連れだつて出掛けるんだから、気分くらいはゆりゆりしたいんじゃないー……いや、こういうのって、薔薇で作った百合の造花って言うのか……?」

「知らねーよ……」

小さくため息を吐く幼馴染みの今の格好は、いわゆるフェミニン系のちよつとゆつたりとしたもの。

……ゴスロリとかもありかなーと思っただけど、流石に今回は自重。やるなら、私もお揃いにするだろうから服が足りないしね。

ん? 持つてるのかつて?

……そりやあるでしょ、ちよつと着てみたくなるでしょゴスロリ。少なくとも私は着たぞ、姿見の前でおお……つてなつたぞ。

「いやほんと、好奇心の塊というか」

「デメリットないならとりあえず挑戦したい、やれることはやつときたいタイプの人間です」

経験は何物にも勝る宝とはよく言ったもの、特に自身の負担にならないならとにかくやってみるのが一番つてわけさー!

……あ、いらぬ苦勞は流石の私も欲しくないんでお断りします。

「……まあ、お前のそのあたりの情熱については、今更議論する気もねえよ。……ほら、バスとか乗るんだろ、早くいくぞ」

「おつとそうだった。よつしや今日はバリバリいくぜー」

「ヤメロオ!!」

む、バリバリはダメか、反省反省。

☆ ☆ ☆

ベッドタウンである、自身の住む街からバスに乗って暫く。中心街にたどり着いた私達は、目的の物を探してあちこちの店を巡っていた。

「ふーむ。改まってよく見てみると、ほんと色々な人がいるものだねえ」

「おかげで悪目立ちしなくて済む、つてのは有難いところだな」

スカートが捲れないようにベンチに腰を下ろす幼馴染みに、内心で慣れてるなあと呟きつつ、その隣に腰掛ける私。

……いやまあ、小学生の道徳の授業で、異性の気持ちを学ぶために異性装に着替えることがあったので、その時覚えた知識を有効活用してるだけなのかもしれないけど。……小学生？う、頭が……！

頭を振りながら視界を周囲に巡らせれば、街中を歩く多種多様な人々を認識することができる。

男性同士で恋人繋ぎしながら歩くのが見えたり、はたまた女性同士でイチヤイチャしながら、ウインドウショッピングしてるのが見えたり。

普通の男女のカップルや、よく見ると互いの性別と服装が逆っぽい男女ならぬ、女男カップルが居たり。

カップルに限定せずとも、下手な男性よりカッコいい感じの女の子や、そこらの女性よりかわいい感じの男の子なんかもあるみたいだ。無論、いわゆる普通の人も多いんだけど。

……え、どうやって判別してるのかって？

や、声とか仕草とかは元の性別のまんまだったりするんだよねこれが。

好きな格好をして好きに過ごしてるだけだからなんだろうけど、前世の感覚がまだ残ってる私としては、よくもまあこんな混沌とした状態で、上手く回ってるなこの世界、と困惑したりもしている。

「こういう風になったのも、わりと最近のことらしいから、地方に行くところまでおおらかかどうかはわからないけどな」

「へえー」

幼馴染みの解説に、改めて周囲を見渡しながら首肯を返す。

曲がりなりにも、政令指定都市を名乗ることだけはあつた、ということだろうか。

沈んだ顔をした人が見当たらないあたり、政府仕事してる！……つてことなんだろうか？

いやまあ、単に見てるだけなので、偉そうなことは言えないのだけれど。

そうしてしばらく二人で街を歩き交う人々を観察する。……一応、これも目的の一つだったり。

街の様子を劇の参考にしたらどうか、とは幼馴染みの言。ウケを気にするのなら、人間観察は普通に有効な手だろうと。

実際、改まって街を見ていると、意外な発見がよく起こる。

例えば、さっきの『服装に合わせた仕草をとる人は意外と少ない』なんてのは、わりと大きな発見だ。

我が幼馴染みだけ違うのかと思つてたんだけど、世間的には幼馴染みのほうが多数派である、というのは結構な驚きだった。

「……ん、とりあえず観察はこんなものでいいかな」

「お、もういいのか？」

近くのコーヒーストップで買ってきたブレンドコーヒを、ストローでずるずると飲んでいた幼馴染みが、こちらに視線を向けてくる。

私は彼に小さく頷きを返して、自身の鞆を手にベンチから立ち上がった。

……そろそろお昼時だし、一旦観察については切り上げよう、とい

う感じだ。

もう一つの用事に関しては午後からやるとして、とりあえずは昼食にしよう、ということを彼に伝える。

「ん、そっかもう昼か。……どこで食うよ？」

「遠出したのならジャンクに済ませるのが我がジャステイス」

「どんな正義だよそれは……」

なんてことを言いあいつつ、近くのハンバーガーショップに向かう私達なのだった。

百合ゲー世界に転生したらナンパ野郎も色々違う件について

「うーむ、あんまり面白い新メニューはなかったなあ」

「お前みたいに、突飛な新商品を望むやつばかりでもないんだよ……」

無難な季節限定のハンバーガーのセットを頼んだ私と、思春期の男子らしくがつつり二段バーガーのセットを選んだ幼馴染みは、二人で窓際の席に陣取り、あーでもないこーでもないと駄弁りながらポテトを口に運んでいた。

……うむ、ポテトはやつぱりマ○クだな。皮付きポテトとかだと他のところが候補に上がるけど、揚げたてならやつぱりここがいい、異論は認める。

「このチープな感じが堪らないんだよねー」

「おいバカやめろ喧嘩売るな、店員さんめっちゃ見てきてるじゃねえか」

「んー?」

幼馴染みの言葉に、ポテトに向けていた視線を僅かに上げる。

別に大きな声で話してるわけでもないのだけど、確かに周囲からの視線を感じないでもない。……あ、いや、これ違うわ。

「同胞同胞、これ睨まれてるんとちゃう」

「はあ?……あ」

私の言葉を聞いて理由に思い当たったらしい幼馴染みは、なんとも言えない渋面を作る。……元がいいのでそれも案外可愛く見える、なんて言うて怒られるんだろうなあ。

そしてこうやってじやれてると、周囲からの視線が更に増える、と。

うーむ擬似キマシタワー。

……や、実際傍目から見たら今の私達、お出かけしに来た美少女二人が、ポテト食べながら戯れてるようにしか見えないからね、仕方ないね。

そりや周囲からの視線も増えると言うものです。

……そして私はサービス精神旺盛な女。

衆目が期待しているのだからやらねばなるまい！

「ほい、あーん」

「……………あゝ？」

幼馴染みに向かって自身のポテトを差し出し、声を掛ける。

……困惑の視線が返ってくるけど美少女スマイルでガード。

ふふふ、君に取れる選択肢は、端から二つだけなのだよワトスン君。

私の手ずからのあーんを受け入れるか！はたまたそれを退けて照れを見せるか！

二つに一つだ！お前の運命は！

「……………ぐぬぬぬぬ」

珍しく唸り声をあげる幼馴染みに、大いに楽しませて貰いつつ、ポテトを目の前に差し出し続ける私。そうしてニヤニヤ笑っていると、

「んぬ？」

「ただでは死なねーぞ……………」

なんと我が幼馴染み、こちらにもポテトを突き出してあーんを行おうとしているではないか！

……いやなんだこのクロスカウンターめいた状況。楽しげにやってるならまだしも、不敵に笑って突き出してるから、なんか変な感じになってるし。

……ふっ、だが甘いな幼馴染みよ！そんなもので今さら私が怯むか！

「んむ」

「躊躇いなく食ったー!」

「……んぐんぐ……いやだつて、別に友達同士なら、相手が男でも別に照れるもんでもないし……いわ…沉んや同胞の出したのなら、照れる必要すらないし……」

仲の良い友達同士、かつ気安い関係ならわりと男同士でも食べさせあいは普通に起こるものです、基本的にはふざけてやる感じだけど。……だから世のお姉様方がガタツてするんですよね、ガタツと。

「だからほれ、変に照れずにサクツと行くのじゃ同胞。意識するほうが疲れるぞい」

「そういうもんなのか……？んじやまあ、あむ」

私の言葉に促されるように、ポテトにかぶつとかぶり付く同胞。……うむ、幼馴染みも中々いい食べっぷりである。

周囲もなんかほっこりしてるみたいだし、とりあえずこれで満足でしよみんな。……ほれほれ、美少女(?)達の戯れで目の保養をするなら今の内だぞー？

そのあとはハンバーガーを食べながら、一時間くらいあれこれ駄弁っていた私達なのであった。

……窓際だったので、店の売上にも結構貢献していたような気がしないでもないけど、それはまた別の話。

☆ ☆ ☆

ハンバーガーショップを退店し、街の散策を再開してからおおよそ三十分くらい。

私は今、ちよつとした感動を覚えていた。

「ね、いいじゃんちよつとだけ！話するだけだからさ！」
「いや、だからだな……」

見た目がチャライ金髪のにーちゃんが、私達の行く手を遮るように立っているのだ。

顔の前で手を合わせて懇願する姿はなんというか、改めて目前にしてしまうと「マジかあ」と、ちよつと笑みが浮かんできってしまう。

……いや、だつてさ？

まさかこんな典型的なナンパ男が、この世界にも実在するだなんて思わないじゃん？

しかも積極的に話しかけてるの同胞のほうなの！笑うでしょこんなもの！

なので今の私は、ちよつとだけ判断が緩くなっているのだった。

「ふ、ふふふ。まあいいんじゃない？話すだけなら、ね」

「……おいちよつと待て、お前なに考えてるんだ？」

「お、そっちはお堅い感じなのかと思つてたんだけど、結構話せるじゃーん」

「ええ、お話だけなら幾らでも。あ、一応先に言つておこうかなと思うのだけけれど」

「え、なにになに？」

視線を幼馴染みからこつちに向け直した彼に、にっこりと笑い返す。……見るからに表情が緩んだのを見て、ちよつと笑えるなあなんて思いつつ。

困惑する幼馴染みの手を取つて、伝えたいことを口にする。

「この子、男の子。で、私の彼氏、なんだけど。……そのあたり、大丈夫？」

瞬間、ナンパ男と我が幼馴染みが揃って硬直する。

幼馴染みは「なななな……っ?!」つとなななbotになって茹で蛸化してるし、目の前のナンパ男はあちゃー、と顔に手を当てて天を仰いでいた。

無論、彼氏扱いはナンパ撃退の常套手段以外の何物でもないのだけれど……。

ちよつと同胞の挙動が面白いので、これからも時々使ってみてもいいかもしれないね?なんて思う私。

「なるへそ、そりゃ俺はお邪魔虫だわー」

「物わかりがいい人は嫌いじゃないわ。……というか、見た目的に彼のほうが良かったりした?」

「いやー、彼女さんはちよつと性格キツそうに見えたからさー。……いやでも可愛さで見ると、彼氏さんのほうじゃね?」

「そうそう、私は綺麗系だからね。……見てよほら、真っ赤になっちゃってる彼、可愛くない?」

「可愛い可愛い」

「いえーい!」

「なにわけわかんない意気投合してんだよお前ら!」

ナンパ男とハイタッチしてウェイウェイしてたら、ようやく再起動した幼馴染みが声を荒げて荒ぶっていた。……顔真っ赤なままだから全然怖くないけどね!

でもお約束としてナンパ君と息を合わせておこう。チラッと視線を向けると、ナンパ君はニヤリと笑っていた。

なので大袈裟なりアクションを交えつつ、幼馴染みに声を返す。

「あらやだ奥様聞きました?最近の若い子は怖いですわねえ」

「そうですね奥様、話題のキレる若者なのかしら?くわばらくわばら」

「なんなんだよ!?!なんでそんな息あつてんだよお前ら?!あと別にキレてねえ!」

「きゃーこわーい♪」

「……ぐ、ぐぬぬぬ」

あー面白い、隣のナンパ君もノリがよくてとても楽しい。

……まあ、あんまりやり過ぎると同胞が拗ねるから、これくらいにしておこうかな。

ナンパ君の横から幼馴染みの隣に戻って、改めてナンパ君と視線を合わせる。

その顔には楽しかった、という感情しなくて、どうやらナンパとかはどうでもよくなったようにも見えた。……いや、ホントにノリいなこの人?

「いやー、俺ホント見る目ないわー。彼女さん見掛けによらず話せる人じゃん?」つーか話しているとめっちゃ楽しいじゃん」

「乙女にとって素顔を隠す仮面は付き物、でしてよ?……ナンパするなら、相手を考えたほうがいいんじゃない?なんてね」

「ぷっ、ははははっ!いや、ホント!マジそれ!」

「……なんだこの圧倒的アウエー感……」

そうして二人で楽しく話していたら、幼馴染みが渋面でぶつぶつ言っていた。

いやごめんで、まさかこんな愉快なことになるとは思わなかったんだって。

「んじやま、お邪魔虫な俺は退散しますよー。お二人ともデート楽しんでねー」

「あ、ちよつと待ちなさいナンパ君」

「はい?」

笑って離れようとするナンパ君に、声を掛けて引き止めた。
困惑した様子の彼に悪戯っぽく微笑み掛けながら、こっちの要件を伝える。

「どうせなら、ホントにお話ししない？」

「……はい？」

☆ ☆ ☆

「いやホント、ボディガード頼まれるとかまさかまさかでびつくりすよ」

「受けてくれたアンタにも、俺はびつくりだよ……」

見た目的に美少女二人が街をぶらついてるようにしか見えないので、遅かれ早かれナンパ野郎には絡まれていたような気がする。

なので、厄介なやつらを避けるためにも付いてきてくれないか……、というようなことを彼にお願いした私。

困惑した彼に、両手に花気分も味合わせてあげるわよ？と言ったら「彼女さんなんかスツゲーっすね……」と幼馴染みにひそひそと話し掛けていた。

対する幼馴染みは「いや、うん、もうなんか、うん」とか言っていたが。

……彼氏つてところを否定するとややこしくなるから否定できずにいるので、ちよつと処理がハングしてる感じかなこれ？

なお、確かに両手に花気分も味わえるだろうけど、周囲からの羨望と嫉妬の視線によって針の筵状態にもなっていたので、正直プラマイゼロのような気がしないでもない……ということについては知らん顔しておく。

「で、こうして本屋巡りしてるんですっけ？それも、できうる限り色々な店に行きたいー、とか」

「売れ筋ランキングが見れるところとか、個人でやってるようなところとか。……とにかく数を回りたいんだよねー」

ナンパ君が先導しながら、首だけこっちに向けて話し掛けてくるので、その通りだと軽く答える私。

現在の私は、ナンパ君相手なら優等生モードでなくても構わないかなー、って感じで言葉を崩しているのだが。

それを聞いたナンパ君は、最初「俺ホント見る目ねえー！」と頭を抱えて悶絶していた。……気安い感じの関係がいいから、ナンパ男やってるのかなこの人？

まあそれは置いといて。今日のもう一つの目的は、ズバリ本屋巡りである。

一応転校生ちゃんにも頼んではいるが、演劇祭は地元の人も招くお祭。……リサーチするなら近場をpushしておく必要もあるだろう、と思つてのことだ。

実際、それなりに店を回ること、最近の売れ筋が妖怪退治ものらしいということも知れた。

それに合わせて活劇系とかも考慮に入れようかなー、なんて道筋を立てられたので、リサーチとしては大成功の部類だろう。

……いやまあ、最初の勇者と魔王も中々捨てがたいなー、ってまだ迷つてはいるんだけどね。

そのあたりは次の部活で煮詰めるかなー、なんて思つていたところ。

「……あ、もう五時か」

「ありや、意外と時間経つてたんだね」

基本的に商店街のアーチの中を動き回っていたので、日の傾きとか全然気付かなかつただけね。……どうやら、思った以上に時間が過ぎてしまつていたらしい。

本屋の外にある時計が、ちょうど五時になったことを私達に知らせ

ていた。

「ふーむ、じゃあそろそろ解散かな？遅くなってもあれだし。……ナンパ君も、今日は一日ありがとねー」

「いやー、ははは。俺としてはお邪魔虫じゃなかったか、気が気じゃなかったんすけどね」

「いや、居てくれて助かった、ほんと助かった」

「はい？……いやなんで彼氏さん、そんなめっちゃ歳食ったみたいになつてんです？」

「聞かないでくれ……」

疲労困憊まさに折れかけ、みたいな幼馴染みの姿に困惑するナンパ君。……それは私のせいだが私は謝らない。

まあ、彼と一緒にいて楽しかった、ということだけは確かだろう。なので、最後にナンパ君に、ちよつとしたアドバイスを投げておくことにする。

「ナンパ君、頑張つてね？どこかに貴方だからこそ好きになつてくれる人、きつといるだろうからさ」

「ははは。そうつすねえ、見付かったらいいつすねえ」

腑抜けた笑顔を浮かべながら、頭を搔くナンパ君。

……今日一日一緒に歩いただけの私だけど、それでも彼が悪い人ではないのは分かる。だから、

「——見付かるよ。貴方がいい人なのは保証するよ。この私が、ね。……天下無敵のパーフェクト美少女からのお墨付きだぜ、ドンと胸を張りな兄ちゃん！」

「ぷつ、全く。彼女さんはスツゲーなあ」

ナンパ君は眉をへにやつと曲げながら笑みを浮かべ、手を振りなが

ら雑踏に消えて行った。

……ん、まああとは彼次第、かな。

まあでも、すぐにいい人見付けてそうな気もするけど。

「んじやま、私らも帰ろつか。……手とか組む？」

「くーまーなーいー！」

……そこまで拒否せんでも。いやー可愛い幼馴染みだなー。

そうして私は家に戻るまで、幼馴染みを適度にからかい続けるのだった。

百合ゲー世界に転生したら文芸部に迫っていた影の件について

「……………あの人が」

電信柱の影から彼女を窺う。

幼馴染みの青年と、仲睦まじげに帰路を急ぐ少女。

……………あんなに仲が良さそうなのに、別に付き合ってるわけではないという、不思議な二人組。

……………彼女の目的の為に、追い求めていた人物。

「やっと、見付けた」

闇夜の中で、ぽつりと呟く声が響いた。

☆ ☆ ☆

「むー」

「……………それで、なんで後輩ちゃんは拗ねているのかしら?」

「あー、土曜日に同胞とお出かけしてたことを話したら『ずーるーいーでーすー!』って拗ねちゃって……………」

「ずーるーいーわーよー!」

「こつちも拗ねたんだが」

「うーむ連鎖反応……………」

部活初めに休みの日になにをやっていたのか的な話になったので、幼馴染みとちよつとお出かけてたということを伝えたら、後輩ちゃんが拗ねっ子になってしまった。

なのでどうしようかなーと思案していたところ、後からやって来た転校生ちゃんが、後輩ちゃんの様子を見て疑問符を浮かべていたの

で、同じように説明したらこれである。……なんだこの拗ねっ子感染力。

うーむ、これは私と幼馴染みもずるい的なこと言ってくれば、四つ揃って消えたりするのでは……？などと言えば「誰が丸くて柔らかくて四つ揃うと消えそうな不思議生物ですかー！」と後輩ちゃんが憤慨していた。

仕方ないので、代わりにグミを与えて機嫌を取ってみる。

……四つ頬張った時点で機嫌がよくなったので、やつぱりなにかしら消えてるんじゃないかな、と思わないでもない。

なお、転校生ちゃんは五つ目で機嫌が直った。……いやなにその謎の張り合いは？

「私と後輩ちゃんは強敵とですもの、競争できるところでは競争しておかないとね」

「て、転校生さん……！」

「……え？なにこの空気？いい話なのこれ？」

「俺に振らないでくれ……」

いや、ホントによくわからないのだけれど、これはどういうあれなの？

……てえてえ？これはてえてえなの？てえてえと言ひ張っているものなの？

わからない、私にはなにもわからないのよ、知らないことばかりなのよ。……って感じに、意識を宇宙に飛ばす私。

幼馴染みが「しっかりしろお！」って揺すってくれるまで意識が飛んでた私は、さらに一度頭を振って気を取り直した。

「まあ、土曜日に色々見てきたから、それを元に話を考えて行こうか」

「あ、ちよっと待って下さい！」

「んん？後輩ちゃんどうしたの？」

そうして今日の部活の方針を説明しようとしたのだけれど、後輩ちゃんから待ったの声が上がった。

いきなりなんだろうと思っただけ私には、部室の外に人の気配があることに気付いてなるほど、と勝手に納得する。

……この前の金曜日、帰り道に感じた人の気配。そして、本来ならこの時期での文芸部は、すっかり部活として認められていたという事実。

——幼馴染みを除いた時に、足りてない二人の部員。……その内の一人のフラグが立ったのだと確信する。

……ふ、ふふふ。なるほどなるほど。

我がユリレム完成の時間がまた近付いたのだと！つまりはそういうことだな後輩ちゃん！

無論、そのあたりは一切口にも顔にも出さない。

文芸研究会部長の私は慌てない、傲らない、昂らない。……クールに待つのが、果報をね……。 (ドヤア)

「なんだか先輩が唐突にドヤってますが、とりあえず。……入ってきていいですよー！」

来た……来た……。

思わずざわざわしつつ、部室の入り口に視線を向ける。

……私の予想が確かであるのなら、ここで現れるのは、本来の時間軸で一番文芸部らしい存在であった少女、通称寡黙ちゃんだろう。

文芸部所属かつ眼鏡を掛けた大人しい女の子で、いわゆる綾波系の系譜にあたる少女。……いや、情報統合思念体の子のほうが近いかも？

物を書いたり読んだりするのが好きな子で、例の演劇祭もその実、彼女の紹介イベントの趣が強いものだった。

実際彼女のルートは、寡黙ちゃんが作った台本による劇は大成功に終わった——みたいなどころから始まるものであるし。

文芸部での主な役職はプロット作成などの基礎部分。

……原作での演劇祭の台本が、王子様とお姫様のラブストーリーであることからわかる通り、ロマンチックな恋愛に憧れる、恋に恋する乙女だったりもする。

なお、とある理由から夜になるとちよつと元気になる体質で、金曜日に暗がりから気配を感じた私が顔を綻ばせたのは、彼女がそこにいるということを半ば確信していたからだだったり。

と、言うわけで。

可愛い可愛い寡黙ちゃんを迎えるため、組んだ手の甲の上に顎を乗せて待ち構える私。背後に控えた幼馴染みはなんか微妙な顔をしていたが、わくわくが止まらない私は意図的にスルー！

さあ、さあさあ！おいでませ寡黙ちゃん！そして私とレッツツゆりゆりしようぜ！

そして、ついに扉が開き――、

「此^失処^礼か、祭^しの会^ま場^すは」

「……………んんん？」

……………ん？気のせいかな？とても可愛らしい声音で、なんか変な言葉が聞こえたようなの？

私が困惑から首を捻る間に、空いた扉の隙間から、室内に一人の少女が滑るように入ってくる。

……………トレードマークの眼鏡はそのままに、左目には何故か黒い眼帯を装着していて。

綺麗な黒髪をおさげにしているはずが、何故か銀髪のウェーブ掛かった長い髪を柵引かせていて。

気弱な視線を向けてくるはずが、キリツとした強い視線を向けてきていて。

そんな、寡黙ちゃんってなんだよ……………みたいなの、どう考えても寡黙とは真反対の姿の少女が、堂々と室内に仁王立ちをしていたのだった。

……………あれ？新キャラ？知らないよ私この子？

なんて困惑でいっぱい私の前で、件の彼女が静かに口を開く。

「はじめまして、こんにちは新たな夜明けを求め参上仕った。

「私も入部させて頂けないでしょうか？錨をあげよ、汝の為すべき事を違えるな」

「……………げふあつ!!?」

「先輩が血を吐いたっ!?」

「あー、うん。御愁傷様というか」

「言ってる場合じゃないでしょう、ちよつと寝かせてあげないと」

「あれ？なにかやっちゃいましたか私？……………む？千載一遇の好機を逃したか？」

わ、私の寡黙ちゃんが、大人しくて可愛い寡黙ちゃんが……………っ!!
ふ、中二不良になつちまつただ……………がくっ。

☆ ☆ ☆

「すごく落ち着いた」

「全然落ち着いてないわね、もう少し横になってなさいな」

「はい……………」

室内のソファーに寝かし付けられた私。

元気になったと主張したが、転校生ちゃんにまだ寝てろと言われたので、大人しく横になっておく。……………いやまあ、確かにまださっきのシヨックから、立ち直れていないわけなんだけども。

「彼女は私と同じクラスの子なんですよ!」

「私達とつても仲良しなんですよ我が親愛なる盟友に多大な感謝を。

「私も仲間に入れて欲しいなって気ままな風が吹き抜けたのでな」

「……………なるほど?」

「ぐふっ……………!」

「いいから、辛いなら寝てなさい」

色々話を聞いて盟友の奏でる説話に

机のほうでは、後輩ちゃんが寡黙ちゃんの紹介を幼馴染みにしていたのだが、寡黙ちゃんが口を開くたびに、私に精神的ダメージが飛んでくる。

……なんか副音声が聞こえるからまだマシなほうだけど、それでも濃厚な熊本弁中二ワードに脳が揺さぶられるのだ。

いや、なんで寡黙ちゃん中二病にクラスチェンジしてるんです……？

「あ、これはちよつと緊張してたり、張り切つてるとこうなるみたいで、普段は普通に会話できますよ？そっちはそっちで、ちよつと恥ずかしがり屋さんですが！」

「盟友、次余計な事を言ったら、その口を縫い合わせるぞ！」

「……うん、うん。……おい」

対応していた幼馴染みが、そつとこちらにヘルプの視線を送ってくるが、私は首を振って拒否する。……慣れるまでムリです。というか、熊本弁だけじゃなくて特殊部隊語も混じってないそれ？

「破壊を嫌いだ退ける者よ、

我がカルマ、

汝の先行きを約束するモノなれば」

「うん、とりあえず一つ短いお願いしてもいいかな！早急に！今すぐ！」

「む？了解した」

寡黙ちゃんがこちらに声を掛けてきたので、精神安定と確認の意味も兼ねて、一つ創作を頼む私。

……これできあがってきた文章までアレ中二だったら私部長辞めるからね!?ふりじゃないぞ！お願いだからお願いね!?

なんてよくわからない懇願をしつつ、待つこと大体一時間。

「結びを此処に。汝の望む華、その真価を今示そう」

「あ、はい。……これが……くり」

私の目の前にあるのは、四百字詰め原稿用紙七枚分くらいの短編小説だ。……一時間で三千文字くらい書いてるんですけどこの子（恐怖）

いや、執筆速度がよくても、内容によってはダメだったりするし、中を確かめなければ。

……確かめる、のか。この、寡黙から中二にクラスチェンジした彼女がしたためた、渾身の作品を？

……なんか手が震えて来たんですがそれは。

大丈夫？ ホントに大丈夫？ 中二ワールド全開の、読むだけで私の死が確定するブツだったりしない？

思わず視線を原稿から寡黙ちゃんに移してしまう。

……彼女はこてん、と小首を傾げて、読まないのか？ とでも言いたげに眉をひそめていた。……副音的に睨んでるんじゃないやなくて、不安になつてるのだと思われる。

ぬぐう、これは裏切れない。そんな顔されたら読むしかないじゃない……っ！

意を決して、原稿を手取る。

……タイトルは「片羽の契り」。幼い頃に疎遠になってしまった、二人の男女の物語だった。

「……………ふむ」

「……………（そわそわ）」

「んー……………」

「！」

「……………ふう」

「……………」

「……………うん」

「……………うん」
「いざ、裁定や如何にか？」

全てを読み終えた私は、自然と敬礼を取っていた。
目蓋の端からは、滔々と涙が流れていた。

——静かな畏敬がそこにはあった。感動があった。溢れる感謝があった。

僅か三千文字、されど三千文字。

集約された物語には、確かに人を引き込む熱があった。

……名作。陳腐だが、そう呼ぶほかない一品だった。

「ブラボー、おおブラボー……」

「やりました！恐悦至極」

「な、なんかよくわからんけど、上手くいったみたいだな」

「……ぐすつ、まさか、十年前の約束がこんな風に繋がるなんて。……名作だわ」

「あ、ずるいですよ転校生さん！私にも読ませてください！」

「はい、どうぞ。……それにしても、見掛けによらず繊細な物語を紡ぐのね、貴方」

「お恥ずか我が仮面、か無論偽りにて、昔から切その異様、ない我が一筆に抗うこと物語が好能わず」

できあがった物語は、中二的な要素のほとんどない、若い男女の恋物語だった。

三千文字では足りないだろうそれを、それでも上手く納め、素晴らしい物語として出力していた。

……疑いようもなく、彼女の腕は最高のものだった。

中二つぽく姿が変化したとしても彼女の芯は変わらなかった、ということらしい。

「よろしい、我が文芸研究会は紡ぎ手ちゃん、貴方の参加を認めます」

「……紡ぎ手？」

「あ、有難う御座います！その勅命、委細承知した」

「……同胞、いいところなんだから茶々入れないの。」

対する紡ぎ手ちゃんは、恭しく一礼をして私の言葉を受け入れた。

……副音声と肉体の行動が合っていない気がするんだけど、この副音声ホントに合ってる？どこか間違っていたりしない？

……なにはともあれ、こうして我が文芸研究会に新しい仲間、寡黙ちゃん改め紡ぎ手ちゃんが加わることになったのだった。

百合ゲー世界に転生したらちよつと箸休めの件について

○あるなんでもない一日のこと

「……あん？どうしたんだお前、微妙な顔して」

「いい感じのものができたと思ってたら、似たような作品が既にあった時の私の気持ちを答えよ」

「うつわマジか、ガチ凹みするわー」

「ええ……？そんな反応しないよ私……」

暑さで茹だる文芸部の部室で、だらだらしながらうだうだしてる私達。

……いい加減クーラー使えよとか言われそうだけど、いつから使用許可出すのかって結構悩むよねって言うか。

「王道おっと、コピー機のインク切れちゃいました阻まれり、代替は何処や？」

「買っておいた換えのインクなら、その戸棚の中よ」

「……昨日他の場所に移動しませんでしたっけそれ？」

「クーラー横の戸棚じゃないか？移動したような覚えがあるぞ」

うーん、暑さの所為かみんなちよつと反応が鈍いような。

炎天下の中、グラウンドで頑張ってる運動部の皆さんに比べれば、部屋組の私達はまだ楽なんだろうけど。

「軽快にヒットを飛ばしてる野球部部长とか見てると、運動部に暑さって効いてるのか、ちよつと疑問になるけどな」

「こういうのは結局慣れとも言うしねえ……」

「最初から暑いと思っていないのかも知れないわよ、彼ら」

「信憑性の薄い突飛な理由を持ち出さないで下さいよ転校生さん

「……」
「涼しくなる話にしましよ、どうせなら
涼風招く優しき呪言を切に求む……」

「おや、紡ぎ手ちゃんまで溶けている。」

「快晴は普段なら喜ばしいんだけど、真夏のそれはやっぱり嫌われるってことかなー？」

「選択肢は二つだね。アイス食べるか、怖い話でもするか」

「そこで真つ先にその二択になるあたりがアレだよな……」

「確かに、部長さんらしいですね
大君放つは違えぬ号令、と」

「ちよつとなに言ってるかわからないですね……」

「鶴の一声、って言いたいんじゃないかしら？」

「転校生さんもつむちゃんの考え方がわかってきたみたいですね！」

「唐突なつむちゃん is なに」

「なについて、紡ぎ手ちゃんだからつむちゃんですよ？」

「聞いてもよくわからないんですがそれは。」

「くそう、私もまだまだ後輩ちゃん理解力が足りないということか……。」

「結構長い付き合いだと思ってたんだけど、相互理解って意外と難しいねえ。」

「煮ても焼いても食べられないとはよく言われます！」

「ぬう、可食部はないのか後輩ちゃん……」

「……ねえ、なんでこの人は食べることに前提に話をしているのかしら？」

「のつぴきならなくなっただろ、なんにも考えずに脊髄反射で答えるから」

「はあー？失礼なこと言わないでくれますうー？私だってちゃんと考えてますうー！」

「否定するんなら、ちゃんと反論材料を用意してからにするんだな」

「ふ、ふん。今日のところは素直に引いてやるぜ」

「……下手な雑魚よりも雑魚っぽいよ、今の貴方」
ほ、本気にしちゃダメですよ部長さん?!
「葬るべきは哀切と苦闘、か」

「……ここまで言われるようなことしたかな私？」

「最悪言われるようなことをしていたとしても、今それをやる必要性
なくない!？」

「知らんぞこのやろー、私を怒らせたことを後悔させてやるぞー！

「まあまあ、落ち着きましよう先輩。カリカリするのは暑さのせいな
んですから、ね?」

「見たかきこの後輩ちゃんの優しさ！天使やでえ、後輩ちゃんはホン
マ天使やでえ……!」

「無理なく無駄なく、速攻で取り入りに行ったなあその後輩……」

「名人級のワザマエというやつね、流石我が強敵ともだわ」

もしかしなくても理解不能ってやつですわねこれ?
「盲目の賢者、賢しきを捨てそこに有れり」

「すつごい外野がうるさいけど無視だ無視。」

「せつかくのてえてえチャンスなんだから、目一杯てえてえするん
じやい！」

「……そういうのいいから?ええ……?私に求められてるのでえ
てえじやないんです……?」

「やだやだやだ!てえてえするんじやい!癒やしが欲しいんじやい
!」

「ゆっくり癒やしていつてね?」

「……よくわからんけど、そこにはゆっくりも癒やしもてえてえも無
いんじやないか……?」

「楽にはなれるんじやないかしら?」

「臨死体験でもしろとお言いなのですか転校生ちゃん……?」

「累卵の危うきを重ね続けるのならば、いつか望むべき場所にたどり

着けるかも知れないわよ?」

歴史は繰り返しませんかそれ……?
「冷徹なる時の歯車、今再び。後悔者の航海、大地の上には行かず」

「ロックに生きろってことよ、つまりは」

ただの自殺行為じゃないですかやだー!

「……わーい、できたー!」

「お、確かに。……大分無理やり感あるけど」

「んんん、そうやって水を差すの良くないぞ同胞!」

ちゃんと終わったんだからいいの!

……って言っても、こっちは完成しなかったんだけど。まあ箸休めだから仕方ないね!

○あるなんでもない一日その2

「ニヤニヤしてるけど、どうしたんだお前?」

「えへへへー、実はこの間応募してた懸賞が当たってさー」

ニヤニヤもするとうものさー!

最近話題のとあるアニメの懸賞に当たり、その景品がやっと送られてきたのだ。

ダサ可愛い感じのマスコットのぬいぐるみだ、正直とっても嬉しい。

「最近流行ってますよね、そのアニメー!」

「メインヒロインが可愛い、みたいな話は私も聞いたことがあるわね」
眠り姫と呼ばれる人です
「眠りの枷に囚われし姫君か、衆目は天覧せよ」

「……よく知ってるなお前ら」

いい歳してアニメとかあんまり見ないタイプの幼馴染みは、どうやらピンと来ていないみたい。

……いい作品なだけだなあ。

「ライ麦畑をよく描写するものだから、ライ麦の販促とか言われてるんだよねー」

『ねんがんの ライ麦畑に来たぞ！』なんて台詞が飛び出した時には、私も流石に笑っちゃいました！」

「大事な場面なんですよこれが！……なんて風に監督さんが熱弁していたらしいけれど、なにが彼をライ麦畑に駆り立てるのかしらね？」

念願、だなんて念を押しますし、パン作りとか描写したいのでは？
「念じる声は遠く近く、神の供物を誂えなければ」

「パンを？……いや、なんでまたパンの描写？」

あー、なんか雑誌のインタビューとかで聞いたことがあるような？
なんでも大昔にパンが主人公の物語を作ろうとしたら「それ大御所居るから」って断られたので、こうして無理やりねじ込んでるとかないとか。

……果敢に立ち向かう相手としては、ちよつと強力すぎやしませんかね……？

「やー、なんとというか。……個人でやれ？」

「冷静で沈着なもつともすぎるツツコミ……」

「みんな薄々思ってると思いますよ？多分ですけど」

「どうしたって目立つものね、あの謎の情熱は。笑えるからまだマシンなほうなんでしようけど」

どこまでやるつもりなのか、逆に気になります
「曇天に差す光を求め、旅人は大笑す」

……ねえ、ちよつといいかな、と幼馴染みの裾をちよんちよんと引く。

くるりと彼がこちらを向いたので、その耳元に顔を近付けてこそそこそ。

「すつごい今更なんだけど、紡ぎ手ちゃんちよつとズルくない？」

「……いや、副音声まで確りやってるし、ダメと言うにはちよつとアレじゃないか？」

「……そうだよねえ、どつちかだけならまだしも、どつちもちやんとやれてるならダメとはいえないよねえ……？」

ええんか、ええんだよと二人でひそひそ話すけど、……うーむ。

「考えてみれば労力二倍みたいなものだし、……まあ、いいかな」

「……？なにがいいんですか先輩？」

「いんや、こつちの話」

難しく考えすぎなのかもしれないなあ、なんて。

……点数とか競うものでもないし、とりあえずは紡ぎ手ちゃんにはおやつをアイスを一番に選ぶ権利をあげようかなー、と思う私なのだった。

……だからまあ、最後にネタバラししてもいいよね！

「しりとりって楽しいですねー！」

「ねー」

ねー、と後輩ちゃんと笑う私なのであった。

百合ゲー世界に転生したら本格的に台本作成が始まった件について

「よし、紡ぎ手ちゃんを加えたところで、台本作成やってくどー！」
「おー！」

紡ぎ手ちゃんが 加わった！（ファンファーレ）

……というわけで、いい加減に文芸部の本懐かつ目標である、演劇祭向けの台本製作に入っていこうと思う。

そういえば部員数が五人になったから、一応部活として認められる状態にはあるんだよね。

演劇祭自体もこなさなきゃいけないのは変わらないから、やることはあんまり変わらないんだけどね。

なお、紡ぎ手ちゃんは原作通りプロット担当になった。

……いや、私としては最後のまとめの部分をお願いしたかったのだけれど、「我が身は灯台ならず」流石に最後はお任せしますよとか言われてしまうと、流石に任せるのも気が引けたのである。

なので、最終的な執筆部分は私が行うことになったのだった。

「それで、具体的にはどんな話にするつもりなの？」

「さつき紡ぎ手ちゃんの作品を読ませてもらって決心が付いたよ。我が文芸研究会は勇者と魔王の恋物語で行く。今の流行りがなんぼのもんじゃないー！」

「おお、先輩が燃え上がってます！やりましたねつむちゃん！」
早速お役に立てたようでなによりです！
「私の活かし方を既に心得ていたか」

そして、悩んでいた題材部分も解決した。

……あんな濃厚なラブストーリーー見せられたら、自分も発奮するしかないじゃない！

なので、当初の予定通り勇者と魔王の恋物語で行くことにした。

……いや、あれだね。私は常々ゆりゆりしたいって言ってるけれど。男女の恋愛のやきもき感も好きだったなあと思いついたのだ。

……あ、見るほうね、見るほう。
そうして自分の中に溢れたパトスを形にしたいなという思いが、紡ぎ手ちゃんの創作を見ることによつて発露したわけだ。

「まあ、確かにアレを見てしまうとなあ」

「刺激された創作意欲の方向性が、ある程度補正されてしまう……と言うのもわからないでもない名作だったものね」

「お、お褒めに預かり恐縮です……歓喜に打ち震える我が心の在処……」

「あ、つむちゃんちよ、ちよつとが凄く照れてます！」

「め、ちよ、ちよつとめ、盟友!?!」

……男女の恋愛もいいなあつて言ってる人の前で女の子同士でてえてえするの止めない？決心が揺らぐんだけども。

珍しく副音声側に寄つた感じの照れを見せながら、後輩ちゃんから逃げる紡ぎ手ちゃんを見つつ、私は小さくぼやくのだった。

☆ ☆ ☆

「……ふむ、ここはこうした方がいい、かな」

「部長、こつちのプロット上がりました旋律は流れるように、開幕は今」

「あ、はい。そこに置いといてくれる？」

「はい承った」

カリカリと原稿用紙に文章を書き込む音が部室内に響く。

ふと視線を室内に巡らせれば、みんなが思い思いに作業を進める姿が見えた。

「……ロケーションの資料があれば便利、かしらね」

転校生ちゃんはパソコンに向き合ってなにやら検索をしている。
……呟かれた言葉から察するに、風景などを中心に画像類を集めてい
るようだ。

確かに、実際に背景設定があると、描写するときには楽になるよね。
逆にそれがないと構図を脳内で考えないといけなくなるから、調子
が悪いときにやるというの間にか人がテレポートしてたりして、後か
ら読み直して「あれ？」ってなることもあったり。

みんなも行きあたりばったりに書くのはやめようね！……いやみ
んなって誰さ？

「幼馴染みさん、今日はおやつどっちにしますか？」

「んー、今日は緑茶にするつもりなんだが……和菓子とかあるか？」

「それでしたら、栗羊羹がありますよ！」

「じゃああわせて茶でも点てるか」

「……?!幼馴染みさん、それ家庭的スキルの範疇なんですか!？」

「……え？違うのか？」

後輩ちゃんと幼馴染みは、今日のおやつの相談をしているらしい。

……なんか同胞の謎スキルがまた開示されてない？

いや、お茶を点てるのって一応そこまで難しいものではないらしい
けど。

……それでも、茶道部でもないのにお茶の点て方を覚えてるってい
うのは、なんとというか家庭的なスキルに対しての、同胞の謎のこだわ
りが見えるような……。

い、いや、難しく考えるのはやめよう。今日は栗羊羹だよったー！
……と喜びつつ観察に戻る。

「天・空転し、我・困惑するばかりなれば」

「あー、えっと。なんでもないよ、なんでも」

そうして視線を移した先にいる、机に戻ったばかりの紡ぎ手ちゃん

は、さっきの箇所とは違う場面のプロット作成に着手していたようだった。……のだが。

こちらに観察されていることに気付くと、顔をほんのり赤く染めながら、照れるようにこちらをチラチラ見返してくるのだった。

……中二キャラになってもそういう可愛さは変わらないんだね、とにつこり。正直見るとすっごい癒される。

だからいつまでも観察していたい気分なんだけど、そうするとなんにも進まないの、涙を飲んで執筆作業に戻る。……つもりだったのだけれど。

「せ、先輩大君よ、ちよっといいいですか?我が律動に耳を傾けよ」

「ん?どしたの紡ぎ手ちゃん?」

さっきまで観察していた紡ぎ手ちゃんのほうから声を掛けられて、ボールペンを持った右手をそのまま下ろした。

はて、なにか急を要する用なことでもあったのだろうか?例えば設定に破綻があったとか。

……行きあたりばったり……思いつき進行……う、頭が!?

「パソコンは使わないんですか大君は利なる文明を嫌うか?」

「はい……あー、わざわざ原稿用紙に書いてることが気になった、と?」
「はいうむ」

そうして聞かれたのは、何故原稿用紙を使うのかということについてだった。

確かに、私の机にもパソコンは置いてある。

使ったほうが便利なのに、文明の利器を使わない理由なんてあるのか?……という疑問が浮かぶのも、ある意味当然だと言える。

……まあ、別に大したことじゃないんだけど、と前置きして理由を説明する私。

「単純に、紙に物を書くのが好きなんだよね。カリカリ音をさせながら物を書いていると、なんとなく気分が上向くというか」

「なるほど どうせなら楽しいほうがいいですもんね理解せし、竜は空にて躍り、海をも望むか」

「そうそう、創作は基本的に気分が左右されるものだからね。辛い時になにかを作ろうとしても、同じように辛いものしか生まれないよ」

まあ、自分を追い込んだほうが良いものが作れるという人もいるから、これはあくまでも私がそう思う、っていう以上の意味はないんだけども。

楽しいときに辛いものを書ける人とか、苦しいときに楽しいものを書ける人とか、書き手によってベストコンディションが違う、なんてことも普通にあるだろうし。

——私にとつてのベストコンディションに、上手くあわせるための一工程。だから、大した理由じゃないんだけど前置きしたのだった。

……まあ、未だにパソコンの操作にいまいち慣れてない、っていうのも理由の一つにはあるんだけどね！多分キーボードで文字打つより、スマホでフリック入力するほうが早いよ私？

いやはや、初めて触った時は絶対テンキーのが楽だよ、とか思っていたものだけど、今じゃフリック入力より楽な入力とかあるの？つて感じだから慣れてって恐ろしい。

時代が進めば「フリック入力とか古い古い」みたいなことを言い出す日もくるのかも知れないけど、その時私は、加速し続ける世界についていけるだろうか……なんて、よくわからないアンニュイな気分浸っていたところ、紡ぎ手ちゃんから衝撃的な言葉が飛び出した。

「テンキーってパソコンにしかないですか十字架を持つは神事に仕う者では？」

「……ガラケー知らない世代だった」

紡ぎ手ちゃんの言葉に、思わず愕然とする私。

そう言えばそうか、今の時代の子だとテンキーなんてパソコンでし

か見たこと無いのか……。

というか場合によつては、テンキーがないパソコンしか使ったことがない、みたいな人がいる可能性もあるのか……。

流石に死語にはならないだろうけど、デジタルネイティブには色んなものが通じなくなるんやね……、と余計にアンニュイな気分になる私なのだった。

☆ ☆ ☆

「栗羊羹うまうま」

「おい、幸せそうに食うのはいいが、口元にあんこくつついてんぞ」

「うむ？ 同胞ー、拭いてー」

「ガキみたいなこというなよ……。ほれ」

待望のおやつタイム！

宣言通りに今日のおやつは栗羊羹とお抹茶だった。

……抹茶のほうも宣言通りに同胞が点ててただけど、メイド服のままやるものだから、なんというかミスマツチ感がすごかった。……いや、場所が茶の間じゃないだけマシかな……？

なお、抹茶そのものは結構なお点前でした。

……関係ないけど、ちゃんとしたお茶会だと「結構なお点前で」なんて言わないらしいね？ 茶の間の侘び寂びとかは詳しくないんで、又聞きでしかないんだけど。

なんて風におやつタイムを楽しんでいたところ、幼馴染みから口元にあんこが付いてると指摘が飛んできた。……試しに拭いてと頼んでみたら呆れられた、解せぬ。

まあ、そんなこと言いつつもしつかり拭いてくれるあたり、流石同胞だなんて感じだけだね！

……なんか周囲から生暖かい目で見られてるんですけど、なんなんですかこれ？

「いえ、別に？ねえ後輩ちゃん？」

「はい！特になにかがあるわけではありませんよ？」

「も、黙秘！黙秘します！我は語る口を持たず」

周囲の三人に聞いてみたところ、みんな黙秘を選択していく。……
紡ぎ手ちゃんだけ可愛いかな？

ん？黙秘が三人？……来るぞ同胞！

……なにが来るんだよと冷静に返されてしまった。んー、三人だから……色彩を束ねる者とか？

「禁止カードでジャツジキルだな。この羊羹は没収されます」

「なして?!使ったん私ちゃうやん、向こうやん!？」

「半端な気持ちで決闘の世界を持ち出したお前が悪い」

「……こんなんじや満足できひん……」

謎の冤罪により没収された羊羹を眺めつつ、甲子園のグラウンドで
完敗を喫した球児のような面持ちで悔しがる私。

そこに、一つの救いの手が差し伸べられる。あ、貴方は……!？」

「どうしたのよ、あの頃の貴方はもつと輝いていたわよ」

「転校生！お前だったのか！」

「私のことは謎の転校生エックスと呼びなさい」ホイラー

「みんなには内緒なんですか？秘密でエックスしちやいますか？」

「話題の飛び方がアクセラレーションしてますね……集いし話題は聖杯の彼方に飛翔するか」

唐突にみんな大好き転校生ちゃんにメタモルったけど、なんかそのまま自分以外の転校生を吹っ飛ばしそうな存在にさらにメタモルる転校生ちゃん。

……いや、周囲が勝手に変化させたような気がしないでもないけども。
それにしても、話題が飛び地と化しても拾ってくれるあたり、みんな

なノリがいいと言うかよく知ってるなあというか。

……いや、そういう話題を振ってる私が言うべきではないかもただけどネ？

「創作を奉ずるとき、他の作品を一切見ないという人もいますが大地を奉ずる者、他山の石を芥とみなすべからず。

他所からの刺激が必要だということも、よくあることですしね天の光は全て星、輝きはその目に焼き付けてこそ、と」

「……同胞！同胞！すごい真面目に返されちゃったんだけどどうすれば!？」

「俺に振るな、と」

文学少女らしい意見を返された私は、思わず自身の所作を正してしまっただった。

百合ゲー世界に転生したら生徒会長は一筋縄では行かない件について

はてさて、一夜明けて次の日の朝。

学校に登校し恙無く教室に着いた私は、一限目の予習でもしておこうかなー、なんて気分です席に座っていたのだけけれど。

「ちよつとよろしくて?」

「……ああ、生徒会長さん。何かご用事でも?」

机に広げた教科書に影が差したので、ふっと視線を上げればそこに立つのは一人の少女。

光の反射具合で微かに青み掛かって見える、綺麗な黒い髪をおさげにして結っているのは、全校生徒の模範たらんとするがゆえ。

神経質そうに細められたその黒い瞳は、己を律し、他者を嗜めるその精神性が溢れ出ているがゆえ。

私の前に立っているのは、彼女にとって私が競い合う好敵手であるがゆえ。

……目の前に立つ彼女は、この学校の生徒会長である。

そして、本来の歴史では文芸部に所属し、主人公を補佐する副部長になっているはずの人物でもある。

どうしてこうなった、とは言わない。……彼女に関しては、私の行動の結果こうなってしまったことが明白であるからだ。

☆ ☆ ☆

生徒会長さん……もとい副部長ちゃんは、原作では頼りない主人公を献身的に支える、甲斐甲斐しい系ヒロインだった。

そもその話として原作主人公は無個性型だった（一昔前の乙女ゲーにいた目元が影で隠れてるタイプ。区分がそこってだけで、本当

に目元が隠れてたわけじゃない)ので、選択肢で時々弾けるくらいしか特徴と呼べるものがない、ごくごく平凡な少女として描写されていた。

なので、主人公の見せ場にできそうな場面でも、そのルートヒロインが活躍することによって事態が動くことが多く、主人公の必要性について議論されることもしばしばだった。

主人公が女性なだけのギャルゲーでは?とはアンチスレでよく言われてた悪口であるが、安心して欲しい、ファンも大概そう思ってた。だってハーレムルート行くと、主人公そっちのけでゆりゆりしてたこともあったしネ!……そんなんだから一部の層にしかウケなかったんだぞ原作者あ!

まあ、個別ルートに入ったら流石に主人公もちよつと独占欲とか見せてたし、完全に無個性というわけでもなかったんだけど。

それに一応、パッケージに書かれてる主人公は普通に美少女だったしね。

……パッケージで確認できるくらいで、ゲーム中では自身の容姿を確認することほとんど無かったし、なんなら二人で並んで写ってるものだからヒロインの一人と勘違いされて、左の黒髪のかわいい子はいつ攻略できますか?なんて質問がちよくちよくあつたりもしたんだけど。

まっとうに黒髪なヒロインが紡ぎ手ちゃんもとい寡黙ちゃんしかいなかったせいで、寡黙ちゃんルートで眼鏡取って髪を解いたのがパケの子なんじゃ……、なんて頓珍漢な噂が流れることがあつたくらいに、主人公の容姿を活かせていなかった印象が強いのはなかなか酷いと思う。

………そもそもね、百合ゲーなのになんでスチルがヒロイン単体なんじやい、相手のキス顔だけじゃなくてちゃんと口づけを交わしてるところも描かんかい、百合ゲーなのにキマシタワー建てづらいつてどういうことじやい、そんなんだから制作段階では普通のギャルゲーだったけど、途中で路線変更して百合ゲーにしたんじゃないかと勘ぐられるんだぞ原作者あ!!

……失礼、厄介ファンの愚痴ほど聞き苦しいものもないと思うので聞き流して欲しい。

結局なにが言いたかったのかと言うと。

——原作の主人公と現在の私はほぼ別人、ということだ。

容姿こそ黒髪ロングのぺったん美少女で共通しているけれど、その実中身が全然違う。

原作での私は^{主人公}原則受け身で、自発的な行動はほぼなし。

対し今の主人公^私は基本攻め手で、自分磨きにも楽しいことにも全力投球するタイプ。

……うん、容姿以外全然似てない。双子とか言ったほうが信じられるレベルだねこれ。

なので、ほぼモブキャラであつた幼馴染みを除いて、一番近い位置にいた少女——副部長さんとの付き合い方も、原作のそれとは全く違うものになっていたのであった。

☆ ☆ ☆

彼女との出会いは小学生の時にまで遡る。

……思い出したいくないんじゃないかって？思い出さなきゃ話が進まないんだから思い出すよ、代わりに私の精神力ガタガタになるけど仕方ないネ！……なしてや！

当時の私はまあこまっしやくれた……あれ、こまっしやくれたって通じるよね？……まあいいや。

当時の私はそれはそれはなんとというか小生意気というか、変に捻くれていたというかなお子様で、謎に悟った感じで己磨きに邁進する……有り体に言えば可愛げのない子供だった。

まあ当時はゲームの世界に転生したとは気付いて無くて、単に生まれ変わっただけだと思ってたから、前世でのちよつとした失敗を引き摺り続けていたせいもあったんだけど。

まあ、重要なのは子供らしくない子供が、必要以上に頑張っていたということだけ。

——無理に無理を重ねて、破裂しそうに見えるバカな子供がいた……っていう、それだけの話だ。

……あ、過去回想とかには行かないよ？長くなるしなにより重いし。望まればやるかも知れないけれど、少なくとも今はいいや。

重要なのは、昔の私わりと全方位に喧嘩売るタイプのやつだったってこと。

副部长ちゃんにも同じように喧嘩を売って——結果仲が拗れたってことくらいだから。

……いやまあ、拗れたって言っても、

「ブークスキス、こんな問題も解けないとかwww」

「はあー？こんなの余裕でしてよお!!」

……みたいな煽りあいしてる内に、なんかライバルっぽい感じになったってだけなんだけど。

なお、煽りに煽って今の関係に落ち着いたあと、この世界が前世で百合ゲーだったことを思い出して「あの子ヒロインじゃん!」って思わず頭を抱えて転がり回るハメになったんだけどネ!

○すぞ小学生の私いっ!!?って発狂しそうになりましたが、奇跡的にどうにか持ちこたえましたので、こうして元気にやっているわけでございます。

……そういえばそうやって煽りあいしてるときに、あわあわしながら私達を止めようとする可愛い子が居たような気が?……今だと美人さんになってるんだろうなあ、あの子。

「……ちよつと?聞いていらして?」

「ええ、そう声を荒らげなくても聞こえているわ。……それで?」

おおつと上の空だったから聞き流してた。……美少女スマイルで受け流したけどこれ酷いやつだな?

思案のために下げている視線を上げれば、睨んでいるような、はたまた泣いているような微妙な表情をしている生徒会長さんの姿。……やだ、今更聞いてなかったとか聞けない雰囲気……。

そんな思考は一切表に出さずにそれで？と聞き返す私は多分ヤベーやつにしか見えないと思う。……違う、口が勝手に！……いやお前のせいじゃねーか。

「……私共生徒会も、そちらと同じく演劇祭に台本を提供することに相成りましたので、その報告に参った次第です。……これで満足？」

「なるほど。……相変わらずね、貴方も」

なーんだ、ただの宣戦布告じゃん。……宣戦布告じゃんこれっ!? やベーよやベーよ、正々堂々潰しあいしようぜってお誘いだよこれ……!?

私はただきやつきやつうふふしたいただけだと言うのに、何故に組の抗争みたいなことに発展してるんですかー?!

……そんな思考も美少女モードの私の表情筋には一切影響をもたらさない。いや、鉄面皮かよ私の表情。

っていうか売り言葉に買い言葉みたいになってるじゃん、余計に拗らせてどうすんのさ私いっ!!?

そんな私の内面を知ってか知らずか、生徒会長さんは一度なにかを言いたげに口を開いた後、バツが悪そうに視線を逸らして。

「……要件はそれだけです。お手数をお掛け致しましたわ」

という言葉を残し、自分のクラスへと戻っていった。

それと時を同じくして、教室に入る生徒の数が多くなり始める。

……うん、なんというか。

「お互い暇なのね、くらい言っておけばよかったかしらね？」

「……唐突になに言ってるのか知らんが、とりあえず忠告しとくぞ。

……止めとけ、余計拗れる」

「あら、来てたのね」

教室内なので美少女モード継続中の私に声を掛けてくるのは、朝起こしに行ったらちよっと用事があるとかで先に行けと促していた幼馴染み。

……朝っぱらからなんの用事かと思っていたのだが、こうして始業までに間に合っているあたり、そこまで大きな用事では無かったのだろう。

小さく右手を上げて挨拶すれば、彼はおう、と返して隣の席に腰を下ろすのだった。

☆ ☆ ☆

「……んで、朝っぱらからなんの用だ生徒会長？」

『その前に、彼女は近くにいないのですね？』

「あー、先に行けって言うておいたからいないと思うが……」

早朝にスマホが軽快に音を鳴らしたので何事かと思っ確認すれば、ディスプレイには生徒会長の名前。

朝っぱらからなんの用だ、と思いつながら応答しようとしたのだが、時同じくして玄関口に幼馴染みの姿。

……流石にアイツの前で電話に出るわけにもいかず、仕方無しに先に行けと促せば。

アイツは一度首を捻ったものの、特に疑いもせず先に学校に向かったようだった。

……それを確認した後に、相変わらず鳴り続けていた電話に出たら先の応答が行われた……というわけである。

「んで、結局なんの用だよ？」

『……貴方は変わりませんのね』

……変わっていないと言われたのは二度目だな、となんとも言えな

い気分にも襲われつつ、生徒会長に続きを促す。

電話の向こうの彼女は小さく息を吐いて——重苦しい空気のまま、声を発した。

『彼女は……まだ私を赦してはくれないのでしょうかね』

「あー……」

……なにを持って許したとするのか。

そこが噛み合わない以上、彼女の求める許しは決して与えられないのだろう。……とは言えず、なにを述べるべきかわからずに口ごもる。

『……演劇祭に生徒会名義で、一つ演目を提供することになりました』

「そりゃまた、急な話だな」

そうして逡巡しているうちに、生徒会長が本題を切り出した。

内容は演劇祭について。……まるでこちらに宣戦布告するかのようなその行動に僅かに眉を顰めるが、続く言葉に呆れのため息を返した。

『……彼女のお膳立てです』

「そのお節介を他所に回せよあの人……」

愉快犯めいているが一応は善意の結果である彼女の行動に、自分含め多数の人が振り回されてきた。

……あの人もあの人で罪悪感に苛まれているところがあるのが、さらにややこしい。

うちの幼馴染みはどうしてこうもまあ、だなんてため息を漏らしても仕方がないと思う。

変に拗らせていない分、後輩と転校生の方が遥かにマシだと思えるくらいだ。……いや、転校生もちよつと拗らせてるところはあるが。

素直に見てられるのは寡黙な後輩くらいのものである。……いや、あつちはあつちで寡黙と言うには少しばかり個性的ではあるけども。

「……ん、まあ、わかった。こつちも相応にやるように言っておく」
『いえ、伝達は私のほうから行います。貴方には、普段通りに振る舞って頂きたいのです』

「余計な心労を掛けないように、か？……気にしすぎ、って言っても聞かないんだろう？」

こちらの言葉に彼女は勿論です、と声を返してくる。

変に頑固な彼女のことである、こちらの忠言は暖簾に腕押しのようなものだろう。

……結局、彼女自身が納得しない限り、答えにはたどり着かないのだ。

『今度こそ、私は勝ちましょう。勝って、彼女に告げるのです。——もう、頑張る必要はないのだと』

——彼女が張り合うのは結局のところ、小学生の頃の幼馴染み——その幻影を追い続けているからだだった。

猫被りしている時の我が幼馴染みが、当時のそれに近似しているのもややこしさを助長している。

ついでに言うなら、件の彼女も幼馴染みの幻影を追い掛けている一人だ。……毒婦かなんかか、あの時の幼馴染み。

転校生はそのあたりを切り分けているからどうにかなったが、ある意味で渦中にいた二人は、未だその幻影を見続けている。

……外から論じたところで、止まらないだろう。

言うだけ言って通話を切った生徒会長になんとも言えない気分を覚えながら、俺は長いため息を吐くのだった。

百合ゲー世界に転生したら百合のゆの字も無くないかと気付いた件について

「……由々しき事態だ」

「ゆゆ式時代だ？」

「違う！……いや無関係とも言い辛いけど違うの！」

後輩ちゃんが投げた言葉に否と返しつつ、机をバンツと叩いて立ち上がる私。

室内に居た部員たちはなんだなんだという感じでこちらを見ていたのだが、そもそもその反応が返ってくる時点で色々おかしい。

「百合を、私は百合を求めていたはずだと言うのに……！これじゃあよくて普通の学園モノだよ、下手すりゃ単なる喋り場だよ……!!」
「……言うにこと欠いて現状への不満を投げ出したぞコイツ」

幼馴染みが呆れたような声を上げるが、私は止まらない。

……だつてさあ、だつてさあ!?

生徒会長からはなんか仁義なき抗争仕掛けられるし、最近やったことと言えば同胞と遊びに出かけたとか、紡ぎ手ちゃんに癒やされたとかだし!!

……擬似キマシタワーはあっても、百合のゆの字にも掠ってないじゃん最近の私!

百合の看板背負ってるくせになにやってんだコイツとか思われても仕方ないじゃん!?

どうしてこうなった!

「どうもこうも、貴方の理想が高すぎるだけでしょ？」

「どこがさ?!私は普通にゆりゆりでできれば満足なんだよ!？」

「……希望する形式は？」

「マ〇みて」

「現実見なさい、以上」

「Nooooooooooooo!!!」
だあああああ

熱い思いの内を語ったら、素気なく切り捨てられたでござる。どうしてそういうこと言うの転校生ちゃん!?

……いやまあ、ここでいきなり襟を正して、

「転校生さん、タイが曲がっていらしてよ」

「あらあらうふふ」

……とかやり始めても、周囲からはついに狂ったか、としか思われなさそうだけどき!!

それでも、曲がりなりにもユリーレムを指すものとしては、妥協しちやダメなときだつてあるんだいっ!!

「……今原稿どこまで進んでるんだ?」

「煮詰まってる暗雲は晴れず、見事に灯火は遠く」

「なるほど、スランプなのね」

「冷静に分析するの止めようっ!?!」

これだから察しのいい人達はさあ!?

裏の理由をさっくり見破られた私は、小さく呻くしか無いのでした、まる。

☆ ☆ ☆

「と・に・か・く!!今日は百合分補給にあてます!以上!」

高らかに宣言したところ、みんななんとも言えない表情。

……イヤというわけではなさそうだけど、じゃあなにするの?とでも言いたげな表情だった。

そりや勿論、思う存分ゆりゆりしてだな……。

「……てえてえって、なんだ?」

「なんかいきなり幼馴染みのアイデンティティが崩壊した件」

「い、いや、違うんだ同胞。わかってる、わかってるんだ。女の子同士の絡み、エモいという感情を想起するもの。きゃつきやつうふふの極致。頭では、わかってるんだけど……」

「だけど?」

「……私はみんなとどう接すれば、エモみとかてえてえを発生させられるのですか……?」

「ええ……?」

同胞がなに言っただコイツ、みたいな視線を向けてくるが、私としては至極真面目な話だった。

中身がおっさんみたいなのは、所詮は見た目でしかてえてえを……ひいては百合を発生させられないのでは?

それは真のてえてえなのか? キマシタワーと呼んでいいものなのか?

……い、いや! チューバーとかはおっさんみたいな性格の人でも、じゃんじやかてえてえを発生させている、はずだ。じゃなきやあんなにスパチャが飛び交うわけがない!

「……なんか色んなところに喧嘩売ってないか?」

「ちちち違うよ喧嘩なんて売ってないよ! 羨ましくはあるけど!」

てえてえしてお金まで貰えるとかとつても憧れるよ!

……そっちも喧嘩売ってないか? と言われたけどとりあえずスルー。

とはいえ、問題は振り出しに戻ってしまう。

……気安くてえてえと口に出していたが、そもそもてえてえとは一体なんなのか。

雰囲気だけを見て、本質を掴みきれていなかったてえてえという感

覚。

……今一度、てえてえについて真面目に考える必要があるのではな
かろうか？

「深刻そうに話してるのに、その内容がてえてえについてだからなん
にも頭に入らねえ」

「幼馴染みさんの目が据わってます！怖い！」

「まあ、幼馴染みさんの気持ちもわからないでもないわね。……今さ
らなにをうだうだ言っているのだから、って」

「転校生さんもご立腹というかなんというか逆巻く炎は散り果てるも絶えず……」

なんか外野が騒がしいですね……。

いや、まあ確かにわけわからんこと言ってるなー、とは自分でも思
うのだけれど。それでも、一度気になり出すともうダメというか
……。

と、言うようなことを説明したところ。転校生ちゃんが、小さく息
を吐いて笑みを浮かべた。

……いや、ただの笑みではない。

悪いことを思い付いたときのような、引き込まれるけどできれば見
続けたくない類いの笑みだ。

えっと、転校生さん？一体なにを思い付きになられたのでございま
しょうか？（震え声）

「そう。つまりは、ドキドキしたいのね？」

「……へい転校生ちゃん、多分なんか勘違いしてる！絶対勘違いして
る!!しちやダメな類の勘違いしてるよユー!?!」

ドキドキの意味が違うモノが飛んで来る予感しかしなんでしょうけ
ど！具体的には寿命が縮む類いのやつ！

というかゆつくりと近寄ってくる転校生ちゃんの笑みが、どんどん
ヤバい感じに深まっていくものだから、すでに悪い意味でドキドキし

てるんですけど私!!?

「さあ、観念なさいな」

「う、うわあああああつ!!?」

や、止めてくれえー!!?

そんな懇願は届かず、私は転校生ちゃんの魔の手に落ちるのだった。

☆ ☆ ☆

「ストレートばかり、と言うのも勿体ないと常々思っていたのよ」

そんな転校生ちゃんの言葉と共に、私は彼女のオモチャになっていた。……うん、ぶっちゃけると髪をあれこれ弄られている。

後輩ちゃんとお揃いのポニーテールから始まり、後ろで三つ編みにしておさげを作ってみたり、はたまた両サイドで括ってツインテールにしてみたり。

私は髪が短いから、あれこれアレンジできるのは羨ましいわね——
—などと言われながら、彼女にされるがままに髪型を変えられていく。

……うん、驚くほど普通だった。

さっきの悪魔の笑みから想定されるような恐ろしいことは一切なく、ただただ髪を弄られる時間が続いていく。

……単に髪を弄られてるだけなのに、なんか小恥ずかく感じるのなんなんだろうね？

「そうそう、可愛いわね、流石よ」

「ほら、じっとして」

「そう、身を委ねて」

——それにしても。

転校生ちゃんの声色がいつもより優しいからか、はたまた髪を触る手付きが穏やかだからか知らないけれど。

……こうして座って髪を弄られていると、なんだか意識がボーッとしてくるような。

「寝てもいいわよ、ほら、肩から力を抜いて」

「なんにも考えなくていいの、今はただ、私の手にだけ集中して」

「ねえ、気持ちいいでしょう?」

「ほら、ゆっくり息を吐いて」

……………あー、……………これ寝落ちする、やつ……………。

「……………そう。夢の中なんだから、もっとリラックスして」

「私の言葉に、ずーっと従って居たくなるけれど。それは仕方のないことなのよ……………」

「さあ、もっと素直になりましょうね……………」

……………、……………。

「なにやってんだお前」

「……………あ痛あつ!?ちよ、幼馴染みさんっ!?今本気でチョップしたわねっ?!」

「壊れてるやつには四十五度チョップ、これ常識」

「あ、ちよっ、止めっ、いたたたたっ!!」

「……………ふえっ!!」

……………お、おお?

転校生ちゃんのあげた大声に、飛んでいた意識が戻ってきて、思わず周囲を見回してしまう私。

……………な、なんか今、ヤバいことになっていたような……………?!

寝ぼけ眼のまま後ろを振り返れば、幼馴染みが転校生ちゃんに対し、不気味なくらいに凜いだ表情のまま、びしびしとチョップを叩き込んでいるのが見えた。

え、なにこの状況。私がポケットとしてる間に一体なにが!?

「……完全に催眠音声でしたね、さっきの!」

私は時々転校生さんが怖いです
「油断大敵、大胆不敵……」

後輩ちゃんと紡ぎ手ちゃんが、仲睦まじそうに何事か話している。それを横目に、私は部室内を鬼ごっこしている二人を、慌てて止めに入るのだった。

☆ ☆ ☆

「……酷い目にあつたわ」

「酷い目にあわなきや覚えないだろうが」

『私は部長を洗脳しようと思いました』、という言葉が書かれたスケッチブックを持った転校生ちゃんを前に、私は幼馴染みに視線を向ける。……まるで般若のような形相だった。幼馴染みちゃん顔こわつ!?

一体私が気を飛ばしている間に何があつたんだ……? つていうか洗脳つてなに(恐怖)

そう思うも微妙に切り出せず、代わりにおほん、と咳を一つ。

「えっと、反逆者? 転校生ちゃんは何か弁解はありますか?」

「百合がしたいと注文されたので、可能な限り希望にそつただけ。だから私は悪くない……そうよね?」

ダメです
「ギルティ」

「あ、アンタほどの副部長幼馴染みが言うなら……」

「ちよつと!?!これどう考えても出来レースじゃないのよ!?!」

裁決を下す幼馴染みの、あまりの剣幕に押されて思わず納得してしまおう私と、こんな無効よーっ!!と叫ぶ転校生ちゃん。……いや、なんだこの状況。

……わ、私が百合を求めたというだけで、二人がこうまで壊れてしまったというのか……?おのれ、許さんぞ通りすがりの人おーっ!!

「流石にここで通りすがりの人に罪を擦り付けるのはどうかと思いませんー!」

「あ、はい。ごもつともでございます」

後輩ちゃんにビシツと叱られてしまった。

……うん、なんでも他人のせいにするのは良くないよね……。

「なのでえーつと、罪状がはっきりしてるので、転校生ちゃんは有罪でございます。一週間おやつ抜きになりますのでそのつもりで」

「……いえ、部活なのだから大した罰は飛んで来ないとは思っていたけれど。……思いの外軽い罰ね、それは」

「その間出されるおやつが、全て幼馴染みで作ったものだとしてもかね?」

「……!?!?」

「おいちよつと待て」

罰が与えられるということに対して戦々恐々としていた転校生ちゃんだったが、告げられた罰を聞いてちよつと拍子抜けしたような顔をしていた。

……その後で詳しく説明をしようとしたら、何故か幼馴染みまで一緒に驚愕していた件について。……いや、なんで転校生ちゃんだけ罰があると思ってるん?

「必要だったとはいえ、いたいけな女の子を追いかけて回してチョップ

をしてたんだから、罰の一つくらいあってもおかしくないと思ひます」

「……マジで？」

「マジです。……よくわかんないけど、私のためだったみたいだし、おやつ作成だけで許すけど」

「マジかー……」

「いやちよつと待ちなさい！裁判長！減刑！減刑を要求します！もしくは証人尋問！」

「そんなものはない」

「あああああああ」

「転校生さんが『あ』だけを生み出す機械になっちゃいました！」

「想像以上に効いてますねこれは墮天の苦しみ、永劫にして刹那……」

喧嘩両成敗、つてわけじゃないけれど。

こうして、唐突に始まった文芸部裁判は幕を閉じたのだった。

……いや、どうしてこうなった？

百合ゲー世界に転生したら最後のヒロインが残念すぎる件について

「えっと、なんの話してたんだっけ……？」

唐突に始まった部活裁判で、転校生ちゃんがおやつ抜きを執行される……という、なに言ってるのかよくわからない案件にぶつかってしまったがために、その前になにを話していたのかすっかり忘れてしまった私。

……なんだけど、それを聞いた周囲は、なんとも言えない表情を私に返してくるのです。

えっと、これは「マジかお前」的なやつ？……ではない？じゃあ「今さらそれ聞く？」的な？……これも違う？

じゃあなんなのかと問いかけようとしたとき、急に部室の扉が開いた！

そしてその向こうには、一つの人影が……！

「それは……私が解説しましょう……」

声を聞いた私は人影が誰なのかを認識して即扉を閉めてバーン！鍵ガチャー！！

……はい、私はなにも見なかった。見なかったからなんにもいませんでした！いいですね?!

「……言い難いんだが」

「ん？どしたの同胞、微妙な顔をして。悪は去ったぞ喜びな！」

「もう中にいるぞ」

「what, s!？」

同胞の指差した先には、椅子に座って今日のおやつシュークリー

ムを一つ頬張りつつ、こちらに小さく手を振る女性の姿。

……なんで中にいるのこの人!? 閉めたよね、私今扉閉めたよね?!
そんなこっちの混乱は知らぬとばかりに、目の前の女性——この学校の教師の一人である女性は、大きなクマのある目を細めつつ、にこやかに答えを告げるのだった。

「ふふふ……他の先生に……手伝ってもらったのよ……」

「うえっ!?……あ、ホントだ、外にいるの現国の先生だっ!」

またなにか弱みでも握って協力させたなこの人!?

閉じた扉を開いて外を確認してみれば、部室の壁に背を預け、視線を中空に彷徨わせながら黄昏れる現国教師の姿が。……わざわざウィツグまでつけてシルエットを近付けているあたり、なにか薄ら寒いものを感じなくもない。

こちらの視線に気付いた彼女は、全てを諦めたような笑みでこちらに会釈を返した後、トボトボと歩き去っていった。

……なにを掴まれたんだあの人、そしてなにやってるんだこの人。若干の戦慄と呆れを浮かべながら室内に戻れば、件の女教師……もとい、私の父方の親戚の姉ちゃんである彼女は、ニコニコと笑みを浮かべて私が戻ってくるのを待っていた。

「……それで、一体なんの用でしょうか先生?」

「もう……教室の中でもないのだから……もつと気安くても……いいのよ……っ」

「部室は教室ですよ先生」

「……ふふふ……ああ言えば……こう言う子……」

ぴしやりと言い返せど、彼女のペースは揺るがない。

……うう、昔からホント変わらないなこの人……。

なにがとは言わないが、私はこの人が苦手である。

見た目は一人でもできない陰キヤ系なのに、実際はさつきみた

いに人の弱みを握っていいように使うし、普通に仕事もテキパキこなすし。

かと思えば私に対しての接し方は見ての通りあまあまのあまだしで、ギャップが強すぎてちよつと対応の仕方がわからないのである。

あと年上なのも地味に対応に苦慮するポイントだったりする。

……忘れてるかも知れないけど、私こう見えても転生者なので、前世と合わせれば普通に彼女より年上なのです。

ついでに言えば前世では長男だったので、兄なり姉なりがいる、という感覚もよくわからない。

結果として、距離感の近い親戚の女性、というものにどう対応していいやら判別に困っているのだった。

……百合ゲー世界なんだから普通に甘えればいいだろうって？

違うんじゃないバブみ方向に流れるのは違うんじゃない……。私は精神的に対等なお付き合いがしたいんじゃない……。

それが高望みだって？仰るとおりですが私は自分を曲げないよ！

……いやなにと戦ってるんだ私は？

「ほら……お隣どうぞ……？」

「向かい側に座りますねー」

「な、なんというか初めて見る部長さんです霊峰の先に未開の秘境を見たか……」

「……ちよつと冷たい感じの先輩もありありのありですね！」

「若干ツンツンしてるわね、見てる分には良いと思うわ」

「おい、戻ってこいそこのバカ二人」

……外野が相変わらず和気あいあいとしてるなあ!!

できれば対応するの変わってくれない?!……みんなして目を逸らすんじゃないよおっ!!

誰も変わってくれないので、仕方なく先生の向かい側の席に座る私。……と。

「……………ふふふ……捕まえた……………」

「……………はぎやーっ!!?」

意識の隙間を突かれ、机越しに胸元に抱き寄せられてしまう私。
……………普通なら喜ぶんだけど、この人相手だと喜んでらんないんだつてば!!?

無理やり拘束を抜けて、そのまま席を離れて同胞の背中に隠れる。

「ふしやーっ!!!」

「……………いやどんだけ苦手なんだよ」

「ふしやーっ!!!」

「ひ、人の言葉を忘れている……………」

「ええ、どういうことなんですかこれ?」

「……………ふふふ……………いつも……………通りね……………」

「ふしやーっ!!!」

「最早猫です!!九の命持つ神獣、これか」

ふしやーっ!!!
!!!!!!

「……………かわいいかわいい……………従妹の姿を……………いつまでも……………見ていた
いけれど……………用件を……………言うわね……………?」

「さっさと行ってさっさと帰れふしやーっ!!!」

「ええい、背中から威嚇するなっ」

やかましい、盾くらいなってくれ同胞!

この人相手だと迂闊に目も逸らせないんだよ、わかってマジで!

そんな私達のやり取りを見ながら、クスクス笑っている先生。……………
くそう、楽しそうに笑いやがってえ……………。

そうして笑いながら、彼女はとんでもない爆弾を投下したのだつた。

「……………演劇祭。……………貴方達は……………作った台本で……………参加しなさい

「……」

「は？」

「え、そもそもそのつもりだったのでは？」

「違うぞ後輩ちゃん！この人が言ってるのそういう意味じゃない！」

また無茶苦茶言い始めたよこの人！口に出したってことはもう諸々の根回しは済んでるんだろうね絶対！！

私が若干錯乱ぎみなることを疑問に思わずにいるのは、目の前で私の盾になって先生の前に立っている、我が幼馴染みくらいのものである。

……いや、驚愕の表情を浮かべているあたり、紡ぎ手ちゃんもわかってるっぽい？

そのわかってる側とおぼしき紡ぎ手ちゃんが、おずおずと口を開く。

「それは、もしかして 劇の役者もやれ、ということですか師よ、汝が言葉は、舞台上にて踊り狂え、と告げるか？」

「……え？え？」

「……私、部長さんの気持ちがよくわかったわ」

なに言ってるのつむちゃん、と言いたげな後輩ちゃんと。

先生から視線を外して天を仰ぐ転校生ちゃん。

そんな私達を見ながら、先生は。

「……正解……♪」

紡ぎ手ちゃんの言葉を、微笑みながら肯定するのだった。

☆ ☆ ☆

まさしく嵐が過ぎ去ったような室内で、私達は沈黙を保っている。先生は言うだけ言って、さっさと出ていってしまった。

……そのためだけにここに来たのだろうから、伝え終われば去ると
いうのはわかる。……わかるけど、納得できるものではない。

というか今気付いたけど、生徒会長を焚き付けたのも先生でしょこ
れ。……ホントなんというか、トラブルしか持つてこないなあの人
……。

原作でのあの人、トラブルメイカーと呼ぶしかないような人だっ
た。

——文芸部の顧問であり、善意でトラブルを呼び込む問題児。

かつ、原作においてヒロインに数えられる最後の一人。

……ラストはまさかの教師と生徒の百合であった。歳の離れた従
姉の教師との百合とか色々ニツチすぎない？

まあ、原作ではわざとトラブルを起こしてるわけじゃなかったり、
目元にあんな大きなクマとかなかったりで、明らかに現在の彼女とは
違ったんだけど。

……いや、一応持つてくるトラブルの規模も違ったけどさ？

因みに原作のほうがヤバいトラブルを持つてきていたので、選んで
持つてくるこつちと、わざとじゃない向こうでは傍迷惑さは多分同じ
か、下手するところこつちのがマシかも知れなかったりする。……それマ
ジで言ってる？

「……まあ、できるギリギリを見極めてるみたいだからなあ」

——乗り越えられないトラブルは、決して持つてこない。

それが彼女の信条なのか、はたまた微笑みながら選んでるだけなの
かはわからないけど。

今回のこれも、乗り越えられるギリギリを見極めた結果だ……とい
うことは確かだろう。ただまあ……。

「だったらもっと早く言って欲しかった……」

私が頭を抱える一番の理由はそれに尽きる。

……男と女の恋愛もの、という風に想定していたのを、今さら変えられる筈もなく。

ついでに言うなら、舞台としてちゃんと成立させるつもりなら、役者と性別を合わせる必要だってあるだろう。

……つまりは、だ。

「……俺ほぼ確定じゃん」

「え？あ、そっか男性役……」

「今の時代、男役を女性がやってもいいとは思うけれど。……そうじゃないんでしょう？」

目蓋の上に手を当てどうしてこうなったと唸る幼馴染みと、その言葉聞いて唾然とする後輩ちゃん。

それを横目に声を投げ掛けてくる転校生ちゃんに、頭を抱えながら頷き返す。

別に私が勇者で、魔王役を他の誰かにやって貰う、という形でもいいかもしれない。

……けれど、それはちよつと違うのだ。

同性間の恋愛と、異性間の恋愛は、同じものではない。

男の娘と女の子の恋愛を百合として出されても、それは百合か？と首を捻るか、それは百合じゃねえ！と怒り出すか、それも百合かも？と納得するか……みたいに、皆の反応は別れるはずだ。

それは、愛があれば許されるとまで言われるこの世界でも変わらない。

……そのあたり、結構感覚的ところが強いので言語化が難しいのだけれど。

少なくとも、私が勇者で誰かに魔王をやってもらう場合には、さっきの百合云々みたいな葛藤を経る必要があるのは確かだ。

性別上は女性である私（中身男）が、男性を演じて女性との恋愛を描く場合。それは百合なのか、はたまた普通の異性間の恋愛なのか？……どっちなんこれ？ts少女を男装させてしまうのは、ちよつと

男性成分強すぎるといふか、それも普通に男で良かったのでは、ってならない……？」

「わからん……なんもわからん……」

「えっと、先輩はどうしてここまで苦悩しているんでしょう？」

「異性間の恋愛として書いたものに、後から百合をぶち込むのは違うのだ、みたいなこと言ってたからなあ……」

上等な料理にハチミツを塗りたくるかのごとき思想！

……みたいな話があるけれど、料理によつてはハチミツがあうものもあるんでそこら辺ピンキリだね、って感じではあるんで全部が全部ダメだとは言わないけど。

でもまあ、異性間の恋愛が売りの作品を、二次創作で百合にしちゃうのは、よっぽど上手い人じゃないと基本駄作になるんじゃないかなーというか……。

うーん、なんだろうこのなんとも言えない葛藤……。

まあ、そのあたりの微妙なところを抜きにしても、問題はまだ残っているのだけど。……いやね？

「同胞を勇者役にして魔王役を誰かにやらせるって、それは最早寝取られを通り越して寝取らせなのでは……？」

「唐突になに言ってるんだこいつ」

残念なモノを見るような視線が幼馴染みからバシバシ飛んでくるけど、仕方ないんだよ！

魔王を誰にやらせても！見てるこつちからしたら！自分から妻を送り出した、顔の描かれてない夫の気分になるんだよ！

寝取られ・間男殴つ血KILL派の私は、その場合同胞を殴り倒さねばならなくなってしまう……！

そんな流血沙汰でバッドエンドじゃないですかやだー！

「……ふむ。つまり、勇者役は幼馴染みさんで決定しているけれど、魔王役が決めきれないってことね？」

「え？あーうん。そうなるねえ」

「なるほど、じゃあ答えは一つね」

「はい？」

そうして七転八倒している私に、転校生ちゃんが笑顔で告げる。

「貴方が、魔王役。——図らずも、いつかの言葉通りになったわけね」

「……………はい？」

……………なんですと？

百合ゲー世界に転生したら貴方と私で演じる感じな件について

文芸研究会もとい文芸部部长の私と仲間達は、突然に現れた混沌を呼ぶ者——もとい、スーパートラブルメイカー従姉の先生の襲来により、演劇祭に台本を提供するだけのはずが、そもそもの劇部分までも、文芸部でこなさなければいけなくなってしまった。

見た目だけ百合だったのが見た目すら百合じゃなくなったら、それは最早百合なのか？

いやそれ結局のところ百合では？……なんだあテメエ？的な脳内会議によつて苦しむ私に、転校生ちゃんの一言が光明を差す？

転生したなら可愛く凛々しく綺麗に素敵！迷走無しの完璧美少女！

その名は、名部長私！

☆ ☆ ☆

「ちよつと？聞いてる部長さん？」

「ほわっ!？」

軽く肩を揺さぶられて意識が戻ってくる。……今脳内に謎のオーブニングコメント的なものが流れてたような……。

というか迷走無しとか言ってたけど、絶賛迷走中だよ私。だって今の現実逃避でしょ多分。だってさ……？

「いや、確かにね？確かに、他の人が選出できないなら消去法的に私だけどね？」

思わず浮かんでくるのは、軽く引きつった笑み。

……表面的には女の子だけど、中身おっさんだからね私？

いやまあ、さつきの要素算的に考えると、勇者な私と魔王な私における女性成分の比率は、体だけの1と、体と役の2になるから、魔王をやったほうが女性分強いけどさ？

いやでもそれホモでは？……とも言い出せず。

そこを説明するのに時間が掛かるし、何より周囲からの反応がどうなるかわからんし。

というか仮に中身おっさんとして認められても、この世界だと幼馴染みと恋人役演じてても何か問題が？って流されるだけなんじゃないか。

……なんだこれ詰んでるぞ!?

「あー、うん、うん……？うん、うん……」

「再起動を繰り返してるパソコンみたいになってますね!」

「オーバーヒート中ということかしら?」

そこの二人うるさい。

……いやでも、いまいち思考が纏まらないのも事実。ここは一つ、幼馴染みに判断を投げてみるか……?」

「なんか勝手に話が進んでるけど、同胞はそれでいいの?」

「……?いや、劇だろ?そもそもそこまで真剣に悩んでるお前がちよつとわからんのだが」

「……あー」

そうして問い掛けた結果が、この素っ気ない返答をする同胞の姿である。

……うーむ、幼馴染みとの温度差に思わず小さく唸ってしまう。なるほどその認識の差か、このなんとも言えない微妙なズレは……。

演じるんだから、ちゃんとやるべきだろうと思う私と。

演じるのだから、ただ役をこなすという幼馴染み。

……うむ。なんかこう、一人で勝手にあれこれ考えてるのバカらし

くなってきたな？

「……まあ、うん。あくまでも劇、と言うのもわからんでもないし。……うん、まあ、いいか……」

どうにも、うまく誘導された気がしないでもないけど。

特に代案もないし、私が魔王で同胞が勇者で……という形で進めることにしよう。

ただその場合、ちよつと考えなければいけないことがある。

「ごめん紡ぎ手ちゃん、台本のほう任せられる？……流石に役作りと平行して物語まで、というのはちよつと無理がありそうだからさ」
「じゃあそのあたりの詳しい部分を続く日々を確かめ歌う、詰めたほうがいいですね其を謳歌と呼ぶ」

最初に、執筆の交代。

まだ時間はある……とはいうものの、役のための練習をしながら物を書く、というのはちよつと負担が大きすぎるだろう。

なので必然的に、執筆周りは紡ぎ手ちゃんにお任せする形になってしまおう。

……ごめんねー、なにか埋め合わせ考えとくからねー?!

そう手をあわせて謝罪をすれば、紡ぎ手ちゃんにははにかみながら、小さく頷いてくれたのだった。……なしてこの子はこんなにか愛いんだらうね？

「じゃあ私は、劇中で使う曲を探しておきましょうか、それと道具の貸出の手続きも」

「うん、そのあたりお願いします」

ついで、劇で使用する曲と、大道具などの手配。

これについては、資料と平行して集めておくと転校生ちゃんが立候補してくれた。

実際、著作権フリーの楽曲を利用することを考えると、パソコン係みたいなところのある転校生ちゃんにお任せするのが、一番安心だと言えた。

なので、裏方ばかり任せてごめんね、と謝罪と感謝を投げておく。……減刑？いや諦めてなかったの転校生ちゃん……？

仕方ないので一週間から三日に刑期を短縮してあげることにした。……いや、それでいいの君？

「それじゃあ衣装とか、その他の小物とかは私が！」

「後輩ちゃん、裁縫とかできるの？」

「既存服のアレンジくらいならなんとか！小物類は、最悪うちにあるものを借りてきます！」

「あ、あー。小物に関してはお手柔らかにね……？」

最後に衣装や装飾品などの小物類について。

こちらにもズバツと後輩ちゃんが立候補してくれたので、さつくり埋まったのだけれど——、いやその、後輩ちゃんってわりと良いところのお嬢様だったような？

……まかり間違つて変に高いモノとか持つてきませんよーに、とだけ祈る私。

もしも持つてこられてしまった時は、戦々恐々としながら傷付けないように使おう……。

その他、細かい作業やら道具作成やらは全員で分担することに決め、その日の部活はお開きになるのだった。

☆ ☆ ☆

「しかしまあ、なんというか……急な話だよねえ」

学校からの帰り道を、幼馴染みと肩を並べて歩く。

……うちの迷惑なトラブルメイカーのおかげで、急に忙しくなっ

てしまった感じだ。

まあ、部員達がみんな優秀だから、ある程度形にはなりそうだっていうのは救い、かな？

「……で、俺らは明日からせつせと役作りか」

「そーだね、明日から大変だー。……それにしても魔王、魔王かあ。……私は魔王じゃないよ、って言ってただけどなあ」

同胞の言葉に相槌を打ちながら、ふうとため息を吐く。

嘘から出た実というか、瓢箪から出た駒というか。……冗談で言っていた魔王呼ばわりが現実になるとか、一体どういう巡り合わせなんだろうね？

そう小さく嘆けば、幼馴染みからも同じようにため息が返ってくる。

「それを言ったら、俺なんか勇者だぞ、勇者」

「そっか、同胞が勇者かあ。……んー、どうだろ？似合ってるのかどうか、わかんないね」

別に、幼馴染みは正義の人、という感じではないだろう。

寧ろ目的のために手段は選ばないほうだと思うので、どっちかと言うと魔王……はちよつと違うか。序盤の幹部役とか？のほうが似合っているような気がする。

なので、物語の『勇者』を演じられるだろうか……と問われると、ちよつと微妙に思えてしまう。役不足ならぬ役者不足、みたいなの？

「……そこまで言われるとすっかり勇者してやる、って気分になるな」
「なんと、同胞の役者魂に火が着いたとな？」

私の軽口を聞いて、同胞がにいと笑う。……珍しくやる気、って感じだ。

普段はそこまでやる気を見せるタイプでもないから、ちよつと新鮮に思える。

なので、私のほうもちよつとやる気が出てくる。張り合いがある、というか。

「……ふふふ。じゃあ私も、恐ろしい魔王として精一杯頑張っちゃおうかな？」

「おう。そんなもつて最終決戦して——」

……そこまで口にして。

最終決戦の話まで行くと、死に別れた恋人達みたいになるんだよな、ということに気付いて。

お互い、口ごもる。

……最終的には紡ぎ手ちゃんがどうするか、つてところもあるけど。

少なくとも、別離の展開を演じることになるのは、間違いないだろう。

……実際、半分くらい流された感じがあるけど。

その場面が来たとき、私達はこういう演技をすればいいんだろう？ 演劇部もかくや、みたいな感じの迫真の演技をすればいいの？

はたまた、あくまでも学生の劇だとはどほどに流すのがいいの？

……そして真面目にやる場合、私はどういうノリでいればいいんだ？

いやまあ、さつきはホモじゃん、みたいなことを言ってたけど。

幼馴染みって顔は可愛い系だから、言うほどそういう感じでもないんだよなあ。……付いてるからお得、とか言う人もいそうというか。

いつぞやのハンバーガー店で擬似キマシタワーとか宣ってた通り、相手が幼馴染みならそこまで嫌悪感もない。

まあ、だからこそ同胞が勇者で私が魔王、なんて配役を受け入れられたわけでもあるし。

寧ろ私が気になるのは、幼馴染み側がどう思ってるのか、だったり。

「や、もっかい聞くけど、幼馴染みはいいん？私はこう、同胞相手だと同性もかくやって感じの対応だけ」

「……まあ、お前が気にしないんなら特には。この間の食わせあいの延長線上みたいなものだろ、実際」

「……まあ、だよねえ」

自分の過去が私を追い詰める……？

いやそこまで重い話じゃないけど、実際すでに食べさせあいくらいはやってるので、あんまり照れる意味がないんだよなあ、というのも確かな話だろう。

ただこれ劇なんだよなあ。……学校みんなに見せる、劇。

……いや、完全に知らない人達の前でやるのと、学校の生徒達の前でやるのは、ちよつと違うような……？

「んー……。いやまあ今さらなに言ってるの、とか言われそうだけども。……クラスメイトの前でやるのは流石に恥ずくない？」

「……あ」

「いや『あ』ておい」

そこ気付いてなかったんかい？!

幼馴染みの「今気付いた」みたいな表情に呆れる私。……というかなんか噛み合わなかったの、そこに気付いてなかったせいもあるよねこれ？

というかね、周囲からどう思われているのか知らんけども。……演劇祭で恋人役とかやったら、ほぼほぼそういう仲だと思われるんじゃないんですかね？

「……そういうものなのか？」

「……お前さん、私相手だからいいけど、他の女の子相手に同じこと言ったら、その場で殴られても文句は言えんぞ……」

……男相手でも殴られるかも知れないのかこの世界だと？いやまあ、その深掘りをする気はないけど。

なににせよ、それは流石に鈍感にぶちん男呼ばわりもやむを得ないぞ同胞あ！

「あー、お前相手だと、そんなこと気にしたことなかったからなあ」「てめーこんな美少女相手に言うにこと欠いてアウトオブガンチューだとお?!」

「……う？なんだそのアウトなんちゃらって」

おおつと通じない！これ死語だったわ！

仕方ないので「興味の対象外的な意味」と教えると、へえーと頷いていた。……自分がおっさんであることを突き付けられていくう！

まあ、気安い関係である、というのは悪いことじゃないだろう。

……一応横に（中身は別として）美少女がいるというのに、なんか淡泊過ぎやしないか？……と、同胞の将来を気にする部分もないわけではないけども。大丈夫？君ちゃんと結婚できる？

「……はっ?!まさか私の距離感が近過ぎて、同胞の恋愛観が捻れ曲がり始めている……?!」

「自意識過剰乙」

「なんだとー!?!」

逃げる同胞を追い掛けながら、家までの道を駆け抜けていく。

……意外に足の早い同胞に追い付けないまま、家にたどり着いた私。

リビングにいた家族にただいまの挨拶を投げて、自身の部屋へと駆けける。

部屋の戸を後ろ手に閉めて、ベッドの上に身を投げて。

……制服皺になるよな、と思いつつも、ちよつと動く気になれなく

て。

「……うーむむむむ」

同胞にはああ言ったけど。

……自身が作った台本の初期構想を思うと、ちよつと頭を抱えてしまふ。

そうするしかなかったから、紡ぎ手ちゃんに任せただけ。……いや、うん。

「……変えて、くれるかなあ?」

いや、変えないだろうなあ、紡ぎ手ちゃんの作風を見ると。……そもそも私があれば行こうってなったの、紡ぎ手ちゃんの見えたらだしなあ。

「うあー!!」

思わずベッドの上をゴロゴロ転がる私。

……結局、母親が出てこない私を気にして呼びに来るまで、私はベッドの上を左右に転がっていたのだった。

百合ゲー世界に転生したらケーキと役作りの件について

次の日の朝。

あれこれ悩んでたせいで微妙に寝不足なのだけけど、朝食を抜くのは個人的な主義に反するのでちゃんと起きてキッチンに向かう私。

若干の寝ぼけ眼を擦りつつ、椅子に座って皿の上のトーストを手取る。

「……はい……バター」

「んん……ありがとうございます、ますか？」

横合いからバターの入れ物が差し出されたので、受け取ってバターナイフをバターに突き刺した。……とここで、聞こえてきた声に意識が急速に覚醒する。

この、声は！

「なあんて先生がうちにいるんですかねえ……?!」

「もう……ちよつと寄つてみただけ……そんなに警戒しなくても……大丈夫よ……?」

「じゃあその両手を下げろい、わたしやアンタのぬいぐるみとちやうんやぞ、おおん?」

「……もう……いけず……」

「姉ちゃん、朝ごはん冷めるぞー」

両手を顔のあたりまで上げて、こつちを捕まえるためにホールドスタンバイ……なんてしてる時点で、なんの説得力もないんですよ先生？

なので離れて威嚇してたら、弟からの朝ごはん冷めるよの忠告。……素直にはーいと返して、テーブルから退避していた私は席に座り

直した。

……この人一応親戚だから、たまーにお母さんがうちに招き入れちやうんだよなあ、そのあたりどうにかならないかなあ？

なんて百面相してたら、くすくすと従妹が笑っていた。……その姿に辟易しつつ、私はトーストを一口齧る。

「……今回の演劇祭……一般公開することになったから……宜しくね……？」

「げふっ!？」

そして思わず吹きそうになった。……本当に、この人は本当にもう……!

演劇祭は原則校内で完結するイベントである。……イベントだった。今のこの人の言葉で、前提から崩されたからねっ! (ヤケクソ) 一般公開することは他所から見に来る人が加算されるってことだから、余計のこと下手な演技はできなくなってしまった。

……いや、完璧美少女を自認する以上、手を抜く気は最初からなかったけど! それとこれとは! 話が違うよねっというか!

「それと……生徒会も……劇兼任だから……頑張つてね……♪」
「だと思つたよチキショー!!」

生徒会長さんはあの時、台本提供するとしか言つてなかったけど! この人に限つてそのあたりに抜かりがあるわけないって知つてたよおっ!! (ヤケクソの二乗)

そして、昨日と同じように、言いたいことだけ言つて去っていく従姉。

……いやほんと、ほんとやめて。朝っぱらから気紛れに体力全損させていくのやめて下さいまし……。

「ん、おはよう……いや待てどうしたお前!？」

「ダイジョブダイジョブ、ワタシツヨイカラダイジョーブ」
「何一つとして大丈夫じゃねえ!？」

その後、完全に瀕死の状態で準備して玄関から出たら、待っていた幼馴染みに滅茶苦茶心配された。……その優しさが身に沁みるぜ……。

☆ ☆ ☆

「わりと真面目に、この世からご退場願ったほうがいいんじゃないかしらあの人」

「転校生さんが、最近過激力をぎゅんぎゅんさせてる気がします!」

まあ、こども引つ掻き回されるとね……
「嵐に挑む無謀を、我は笑えぬ」

時間は経過して放課後。

部室に集ったみんなに朝起きたことを説明したところ、転校生ちやんだけがやたらと辛辣だった。

……他の二人がそこまでヒートアップしているように見えないあたり、ちよつと不思議に思わないでもないような?。

「それが善意だろうがなんだろうが、トラブルメイカーは一度痛い目を見たほうがいいのよ……!」

「なんか知らんが実感こもってるな……」

「うむ、ちよつとこの話題は封印しとこうか」

うん、帰国子女だから向こうでなにかあったんだろうね、トラブル引っ張ってくる人がいたとか?

まあ変に神経を逆撫でする必要もないし、触れずにそつとしておこう。……そう決めた後、同胞が作ったチーズケーキに舌鼓を打つ。

それにしても……このチーズケーキはうまい。

文化祭の出店でも十分イケるレベルだ。プロの店で出すに

は何か足りない感じだけど、家で出されたら普通に子供も大人も大喜びだと思う。

……なので、こうしてチーズケーキを切り分けて食べる度に、転校生ちゃんから立ち上るオーラが強くなっている気がするのは、決して間違いなんかじゃないのでは？なんて思ってしまう。

……いや、どんだけ悔しがってるのさ？ってなるけどね、それが本当なら。

「あと二日あと二日あと二日あと二日あと二日あと二日あと二日あと二日あと二日あと二日……」

「……同胞！まじ怖いめっちゃ怖い！転校生ちゃんから立ち上る負のオーラが怖い!!」

「律儀に日数を連呼してるあたり、守る気ではあるんだな」
「気にするところそこおっ!!」

めっさ気にしてるじゃん?!どんだけ食べたかったの転校生ちゃんっ!?

最早これキャラ崩壊なのでは?いつもののできるOLムーブどこに捨ててきたの?もう捨ててきなさいとか言わないから拾ってきなさい!?

それと同胞!なんか最近君天然キャラっぽくなってない!?

「うぐぐぐ……」

「……いや、ホントにどうしたんだ今回?お前さん、別に食いしん坊つてわけでもなかったらうに」

「冷静に考えて頂戴幼馴染みさんの手料理なんて普段は部長さんしか食べられないでしょうそれは即ちあくまでも外野ポジションに収まっている私達にとっては決して手に入れることのできない甘露でありそれを手にする機会をふいにすることは即ち私一人だけ仲間外れみたいなものでああ私はポッチじゃないのちよつと話下手なだけなのでもそんなあまりにも気安い対応なんてできないの無

理だから変に個別グループにするのはやめてお願いだからあああああ
ああ」

「長い長い長い」

……なんか変なトラウマ踏んでたらしい。同胞の言葉で呪詛を吐
き出す機械と化した転校生ちゃんを見て、思わずうわあ、となる私。
そうして恐慌というか乱心というかしてる転校生ちゃんを見た同
胞は「ああ、女帝……」と呟いていた。……女帝って何さ？

「……落ち着いたわ」

「すぐわかる嘘をつくくんじゃないよ転校生ちゃん」

「落ち着いたのよ、落ち着いてるわ」

「凄まじいゴリ押しですね!」

しばらくすると、ピタッと呪詛を止めてスツと無表情に戻って
いた。

どう見ても無理して平静を装ってるようにしか見えなかったけど、
本人的には落ち着いたらしい。……うーむ強情。

まあ、罰に関しては彼女がすっかり履行する気である以上、こちら
からできることはないわけだし。……気にしすぎるのもアレと言え
ばアレ、かねえ？

「じゃあ、転校生については一回棚上げして、今日の部活についてだ
が」

「とりあえず、設定はできてますので文言は民に行き渡りて、お二人にお渡ししておきますね天を別つ火を揺らす」

「流石の速筆、ですね!」

なので転校生ちゃんについてはとりあえず横において、話し始める
のは今日の部活の内容について。

「役作りをするに当たり、キャラクター設定までしっかり練り込んで
くれたらしい紡ぎ手ちゃんから、冊子として綴じられた資料を受け取

る。……おお、わりとふんわりとしか作ってなかった魔王のキャラ設定が、隅々まで作成されている……。

幼馴染みのほうに視線を向ければ、同じように勇者の設定を受け取り、中身をふんふんと読みふけていた。

「脚本部分はまだ調整中なので、あくまで動きの想定に留めて下さいね舞台の幕は未だ上がらず、あ舞踏曲もまた開幕を告げず」

紡ぎ手ちゃんが言うには、自分たちで演じることになったので、結構台本を書き換えている最中らしい。

大筋は変わらないだろうけど、自分たちだけでやるために、登場人物を削ったり場面を統廃合したりすることに、意外と時間が掛かっているようだった。

……言われてみると、最初は演劇部が演じるんだろうと思ってたら、端役とかもぎくぎく入れてた気がする。

それを部員五人の文芸部で回す、というのは無理があるので、役者の数を減らして台本もそれに合わせたものにする——軽い気持ちで紡ぎ手ちゃんに任せちゃったけど、これかなり負担がすごいな？

「あー、ごめんね紡ぎ手ちゃん。必ず埋め合わせはするからね？」

「ふふふ、期待せずにまっすぐね果報を待つか如し面持ちよ？」

思わずまた謝罪を重ねてしまいが、紡ぎ手ちゃんはいつものようにはにかみを返してくる。……いや、天使でしょこれ。

「むう、仕方がないこととはいえ、つむちゃんがガシガシ先輩ポイントを稼いでるような気がします！」

「なんだその胡乱ポイント」

「貯めると先輩から色々してもらえるお得ポイントです！」

「ちよつと待って、商品提供者私なのに初耳なだけ?!」

「今作りました！ただいまポイント設立記念でボーナスポイントサービス中です！」

「作るわ、身分証とかいる？」

「転校生ちゃんが復活した!？」

そうして紡ぎ手ちゃんの頭を撫でていたら、後輩ちゃんが拗ねてしまった。……と思ったら謎のポイントサービスが開始していた。

いやなんだその謎ポイント、私になにかをするって感じの特典がくつついてくる、つてもよくわかんないし。あとなんでそこで復活したの転校生ちゃん？

「……ポイントカードって無駄に作りたくなるところないかしら？」

「んー、所詮は学生程度の散財だと、最近のポイントカードは有効期限のせいで使い辛いから、私はあんまり作らないかなー」

「そこを真面目に返されるとは思ってたわ……」

最近のポイントカードって、そもそも付与率低い上に有効期限が延長なしの一年になつてるものもあつたりして、意外と使う機会がないんだよなあ。……なんてことを言ったら、転校生ちゃんはなんとも言えない表情で呻いていた。

「ところでこう、役のセリフを試しに言ってみる、とかはないのかしら？」

「露骨な話題逸らしに乗ってやるよ。……つつても、貰ったのは設定集だからなあ」

優しいね同胞。……転校生ちゃんの提案を受けて、試しに自分の手元の資料に視線を落としてみる。

……んー、仮にやるなら自己紹介文、かな？

なのでちよつと動きをつけて、魔王としての発言をしてみる。

「あー、あー、うん。——『我は魔王、世界を滅ぼすシステムなり。惑う者共よ、せめて安らかに闇の帳に沈め』」

「うわ、凄まじく厨二」

「うーるーさーいーですー!」

「……もしかして変に飛び火した感じかしら?」

なんで単に魔王ロールしただけで厨二扱いされなければならないんですか!……いや厨二だよこれ!

みんなからやいのやいの言われながら、今度は同胞がやれよと促す。

幼馴染みはんー、と一度唸ったのち。

『俺は勇者!世界に光を取り戻すため、闇の軍勢と戦う者だ!』

「うわあ……」

「おいこらなんだその反応」

幼馴染みが勇者としての名乗りを上げたのを聞いて、私達は顔を見合わせる。

……いや、なんというか。

「全然似合わなくてビビる」

「……否定はしない」

私の言葉に視線を逸らす同胞。

……今さらなんだけど、これ結構な苦行になるのでは……?

なんとも言えない沈黙に包まれながら、私達はこれからの行末に不安を抱くのだった。

百合ゲー世界に転生したら演じるのは意外に難しい件について

「——せいっ!!」

「なんのっ!」

竹刀を持つ幼馴染みに対して、こちらは長い棒を振り回して隙を狙う。……狙いすぎると目的にあわないので、あくまでもほどほどに。

上段から振り下ろした棒は、狙い違わず同胞の頭上に向かい、これまた狙い通りに同胞が横に構えた竹刀によって防がれ、拮抗状態に移行する。

ある程度押し合いをしたのち、互いに後方に飛び退いて体勢を整え——、どちらからともなく互いの得物を下ろした。

「……なんっ—か、意外と難しいな殺陣たてって」

「舞台の上だともうちよつと大変になると思うから、ある程度は慣らしとかなないといけないんだけど。……力加減とか難しいね」

手を抜きすぎると迫力が失せるし、かといって本気でやり過ぎたら怪我しそうだし。……丁度いい動き、というのは何回も練習して覚えるしかないさそうだ。

「重さとかはどう?振ってるうちに疲れるようなら、もう少し軽くするけど」

「俺はこんなもんでいいかな、軽くしすぎると迫力に欠けるし」

「私はもうちよつと軽いほうがいいかな、長いから動きが振り回されちやうや」

傍らに控える転校生ちゃんは、私達の注文を聞いて手元のメモになにやら書き記している。

それと、その後方で木陰に座った紡ぎ手ちゃんが、私達と自身の手元の用紙に視線を交互させながら、原稿を書き進めていた。

後輩ちゃんは、その横で彼女に飲み物を渡したりしている。……徐々に暑くなってきたら、さもありなんってところだろうか？

はてさて、私達がグラウンドの一角を借りてなにをしているのか、といえば。

なんのことはない、役作りの一貫としての『動き』の練習だった。

☆ ☆ ☆

「現実には魔法とかないから、結果的に魔王が杖で直接殴ってくる件について」

「所詮は学生がやる舞台だからなあ」

「……プロなら魔法が使える、みたいな言い草だねそれ」

木陰で休憩を取りながら、幼馴染みと会話をしている。

……魔法使いらしい大きな杖を自在に操り、相手を撲殺しようとしてくる魔王——という字面だけ見ると、なんとも言えない気分になる。

なので、せめて迫力ある演技にしようという面が、この動きの練習にはあったりする。……それも可能な限りスタイリッシュに、だ。闇雲に杖を振り回して殴り倒そうとする魔王様とか、可愛いとは思われなくても恐ろしいとは思われないだろう。……やり方による？この場合恐ろしくなってもホラー方面だと思っただよなあ……。

それと、舞台上では単純な体の動きに加えて、声や身振りでの演技も必要になる。

……喋りと動きを、演じるキャラクターにあわせてしつかりこなしていくとなると、途端に難易度が上がる気がしないでもない。

なので、何度も練習して、できる限り失敗や動揺を無くしていきたい——という面も少なくない。

当然、練習にも熱が入る。……のだけど。

「戦闘風味に棒振り回すのが、こんなに大変だとは思わなかった」
「あー……」

遠い目をした私に、主な被害者である同胞がなんともいえない呻き声を返してくる。

棒を振り回すだけなのに難しいとは？と思われるかも知れないが、これが結構大変なのだ。

一番最初に躓くのが、「振り回すのが単純な棒じゃない」というところ。

……見てもらえればわかると思うんだけど、魔王の持つてる杖って典型的なトツプ上の方が重いタイプヘビーなのである。老齢の魔法使いが持つてる長い杖を思い浮かべてもらうといいと思う。

これを振り回すとどうなるのか。……バトンみたいにくるくる回してるうちはいいのだけど、いざ相手に向けて振るとなると、勢いが付き過ぎるわ手の中からすっぽ抜けそうになるわけで、正直「誰だこんなの使わせようと思ったやつう!!」ってなったのだ。……主犯は私なので誰も責められねえ……。

わかりにくければ、長い柄のついたハンマーを振り回すようなものだと思ってもらえばいい。

要するに、人に向けて振ると得物の重さで体を引っ張られるので、うまいこと加減ができないのである。

実際、この練習中にも何度か幼馴染みがたんこぶを作りそうになったり、勢いよく私の手から飛び出した棒から紡ぎ手ちゃんたちが慌てて逃げたりなど、幾つかのヒヤリハットが発生していた。

……そりゃ小学校とかでむやみにトンカチとか振り回すなんて言われるわ、これ結構筋肉ついてないと寸止めとかムリのつづてでしょ？

完璧美少女なんだからなんとかしろって？流石に薙刀術とかは習ってないんで、流用できそうな経験がないです。

そう、そこがもう一つの難点。

……長時間物を持って振る、というのは。そういった武術を習っているとか、はたまた農家で鍬を振ってるとかでもない限り、意外と経験がないものである。

そして、仮に経験があつたとしても、それを他人に向けて振るというのは——想定していかないか、想定して怪我のないようにした得物を振る、という対策が施されている。

では、改めて私が振ってたものを見よう。

木の棒です。先の方に本番で持つ杖と同じ比重になるように重りを括り付けた、木の棒です。

……人に向けて木刀振るなって教わらなかったのかよテーマっ!? ……いや問題はそこじゃなくて。

こんなはずつと振り回せとか私を殺す気か!ということが問題なのである。

木刀の素振りとかをやったことがある人ならわかると思うのだが、始めたての時には五十回もいかないうちに腕が上がりなくなる。

それを何度もこなしていくことで、次第に百回を超える素振りも行えるような筋肉が付いていくわけだ。……そこまでやって、やつと得物の重さに振り回されないようになるわけである。

つまり。

今の私は、慣れない得物を、慣れない動きで振り回しながら、相手に怪我をさせないように注意しつつ、できうる限り勢いを落とさないように心がける……というようなことを要求されているわけである。

……なんだこれは? 私に求められる操棒技術が、最早プロに投げろよみたいなことになっている……?!

「私は華奢な美少女なんですよ……肉体労働は専門外なんですよ……」

「形にできてるあたりは流石だなんて言っておくよ」

「嬉しくなあーい……」

完璧美少女ハイスペックボデーのポテンシャルでごまかしてるけ

ど、正直今日はもう棒を振れる気がしない。

手の中から棒がすつぽ抜けたのだから、棒の振り過ぎで握力が弱くなってきているからだし。

そもそもそんなに疲れたこと自体、この棒が振り回しにくいせい、動きを抑えるのに余計な力を使つてたからだし。

……ただまあ、武器同士での押し合いを考えるとあんまり軽い得物にもしづらいんだよなあ、打ち合ったときに壊れそうで。

「実際の舞台ではプラスチック製の武器になるでしょうけど、強度的に考えると重さは然程変わらないわね」

「だよねえ……」

転校生ちゃんの言葉に、がつくりと肩を落とす私。

発泡スチロール製とかにすれば軽くなるだろうけど、押し合いとか打ち付けるとかは基本論外になるだろう。だったらプラスチック製になるわけだが、こつちもこつちで強度の面からすると重さは木製のものと同程度変わらなくなる。……怪我をし難くなることだけは救い、かな？

「まあ、諦めて素振りだな」

「おのれ同胞、自分は軽い得物だからっていい気になりおつて……」

「お前の危なっかしい棒捌きの前に放り出されてるんで、これくらいは許してもらわないと困る」

「どつちもどつちで大変というわけね、起因は部長さんだけだ」

「なしてや！なしてワイが悪いみたいになつとんのや!!」

どうせならカッコいい魔王やるー！って言い出したの私の方だから仕方ないけどき！

二人からの弄りを左右に捌きつつ、嘆く私なのであった。

☆ ☆ ☆

「うおおお！杖で突つく！杖で突つく！杖で突つけば強つえー！！」

「おいバカ落ち着つけ!? 疲つかれてるから知らんがキャラがおかしくなつてるぞ!!?」

「ふははははー!! 憑つかれてるようなもんだから是非もないね!!」

「やつべえこれ止められる気がしねえ!!?」

そうして練習を続けていたところ、唐突にテンションがマックスになつた先輩が、謎のハイテンションで幼馴染みさんに襲い掛かり始めたのです。

見ている分にはとても楽しそうなのですが、渦中の幼馴染みさんからしてみれば堪たつたものではないでしょう。なので止めるべきかな、と思おもっていたのですが。

「限界まで動けば止まるでしょう、下手に割り込むほうが危あないわよ」
「……それも確かに!」

転校生さんがやんわりとこちらに忠告を下くださつたので、私は思い留とどまることができました。

まあ、横のつむちやんはずつとあわわと慌あわてていたのですが。見た目に反して結構小動物染みてますよね!

そうして慌あわてているつむちやんを落ち着つかせるように、転校生さんが彼女の手元の原稿用紙を見詰めながら問い掛かけます。

「ところで。紡紡ぎ手紡さんは原稿、どこまでできあがったのかしら?」

「仔細えつとか、
相見あひまえる聖邪せいじゃの天命てんめいは変かわり得えるか、
今いまは殺陣ころもになるところは減へらそうかな

思おもい耽たるは些事せうじばかりよ」

「……確かに、二人がどこまで仕上がるかわからないけど、負担は減へらすべきだものね」

つむちやんが語るところによれば、先輩や幼馴染みさんの負担を考

慮して、当初予定していた二人の戦いの部分を大幅に削るつもりなのだそう。

……ただ、登場人物は基本的に二人きり。あとは出番も少ししかない王様などの端役ばかりであるため、冗長になりやすい二人の会話部分をどうするか、で悩んでいるみたいでした。

「スマホゲームの文章がぶつ切りになると似たような感じね、こっちはわざと戦闘を挟んで物語の緩急を付けようとしてるから、実際の用途は逆だけれど」

転校生さんがなにやら頷いています。

……長い話というのは、単純に聞いていると緊張や集中が切れやすいものなので、間に動きを挟んで適度に緊張感を取り戻させる必要がある……ということでしょうか？……とここで。

「おや、転校生さんはスマホでゲームをされるんですか？」

「……ちよつとだけね、付き合いで誘われたものとか、色々よ」

私の問い掛けに、転校生さんがふいと視線を逸らします。

……付き合いとかではなく、自分から進んでやっていますねこれは。

「なるほどなるほど！転校生さんは他の生徒さん達からの人望も厚そうですしね！」

「……わかつてて言ってるわね貴方？」

はてさてなんのことやら？

先輩が力尽きて倒れるまで、私達の楽しいお話は続くのでした。

「……私を間に挟むのは止めてよう
何故我を境界に留めるのだ」

百合ゲー世界に転生したら部活メンバーでGO！な件について

「聞いてくれ、実は俺……女の子だったんだ」

「な、なんだってー!? 幼馴染みが、女の子……!?!」

突然の幼馴染みからのカミングアウトに、動揺が抑えきれない私。だってさみんな！私のためにメイド服着てくれちゃうような同胞が！家事スキル網羅してる、嫁力マックスな同胞が！ちよつとツン入ってるところがなくもない同胞が！

もしも、もしもだぞー！女の子だった、なんてことがあったならさー！

「うちの幼馴染みが、女の子なわけがないこれが女の子だったら、世の中破綻するわーい！」

わーい、なーい、わーい……（セルフエコー）

……視線を周囲に向ければ、さつきまでそこにいたはずの、萌え萌え（死語）メイド服な女の子だった幼馴染みの姿はなく。

というかここ私の寝室だな？……ふむ。

「……いや夢オチかーい」

自分の部屋の中に、虚しいツツコミの声が響き渡るのだった。

☆ ☆ ☆

なんやかんやとドタバタやってるうちに、また土曜日が来てしまった。

なので今日は部活は休み。……のはずなんだけど。

「せーんーぱーい、おはようびーびーいまーすー」

「はいおはよう後輩ちゃん。他の人達は？」

「今は近くのコンビニに、朝ごはんを買いに行ってます！」

玄関前でこちらを待っていたのは、いつもの制服姿ではない、可愛らしい私服姿で手を振る後輩ちゃんだった。

……お嬢様って感じのその服装は、ハイテンションな彼女とはミスマツチに見えるけど、本来の彼女は普通に良いところのお嬢様である。ちゃんと大人しくしてれば深層の令嬢感溢れる美少女なので、そのあたりは彼女のテンションの問題なんだろうなあ、というか。

……いや、別に大人しくしてたほうがいい、とも思わないけどね？ 後輩ちゃんがやりたいようにやればいいと思います。

「むむ、先輩からの熱視線を感じます！私の胸に飛び込んできてもいいですよ！」

「先輩と後輩の関係でお願いします」
「相変わらずつれない態度ですね！」

今の距離感もわりと居心地いいからね。……とは言わず、後輩ちゃんの頭を撫でながら、待つことしばし。

道の向こうから、三人がこつちに歩いてくるのが見えた。

その両手にはビニール袋。……それなりに詰まってるように見えるけど、朝から結構食べる派の人がいたりするのかな？

なんて思っているうちに、三人は私達の前まで歩み寄ってきていた。

「うつつ、筋肉痛とかは大丈夫か？」

「そんなに歳取ってもないのに、流石に次の日までは響かないよ。そつちこそどうなの？」

「こう見えても学生ですので」

「謎の若きアピールが入ったわね……」

「みんな年齢気にするような歳でもないような過ぎ去る月日を省みるにはまだ早い……」

紡ぎ手ちゃんの言葉に思わず苦笑を浮かべる私。

……肉体的には若いんだけど、中身の人的にはちよつと若いとは言いづらい私としては、どうにも引つかかる部分だというか。

「……？そもそも筋肉痛って、年齢云々で発生のタイミングに変化はないはずですよ？」

「なん……だと……?!」

なんて思ってたら、傍らの後輩ちゃんからの爆弾発言が。……いやちよつと待って筋肉痛が遅れるといえ加齢の代名詞なんじゃないの!?

「弱い運動——長距離の水泳とかウォーキングとかのような、動きとして激しくなく、負荷もそれほどないような運動であれば遅く。強い運動——昨日の先輩達のように、激しく動き回ったり、負荷の強い動きをしたりするのであれば、早く筋肉痛が起きる……というのが、最近の常識だそうですよ」

「ああ、なるほど。歳を取ると激しく動けなくなるから、結果として筋肉痛も遅れてくるというわけね」

「そういうことですね……ところで、先輩は何故この世の終わりのような表情で、膝と手を付いて項垂れているんですか？」

「……い、今さらになつて筋肉痛になっただけだよ、うん」

今まで歳のせいにしてきた、過去の自分という筋肉痛^傷が、今さら疼いているだけだから大丈夫だよ、うん。

……立ち上がって話を進める。筋肉痛に関しては放置だ放置。

「で、どうする？歩きながら食べるのも行儀が悪いし、お母さんに言つてキッチン使わせてもらつてもいいけど」

「……そうね、電車の中で食べるつもりでいたけど、そのほうがいいか

しら」

「のりこめー」

「わーい、ですー!」

「っておい待て同胞、なんでお前が率先して突進してんの!? 君止める側だよね!?!」

買ってきた朝ごはんを何処で食べるのか、という疑問。

袋の中身を見せてもらったところ、サンドイッチやおにぎりなどの軽食が多かった。

……座席に座って食べる分には、確かに迷惑にならないかも知れない。

でも車内で食べ物の匂いがあること自体がダメだって人もいるし、別に急ぎでもないのだから、落ち着いて座れる場所などで飲食をしたほうがいいだろう。

そう思って提案をしたのだが、実際に確認する前に同胞と後輩ちゃんがうちの玄関に突進していった。……いや、なんでストッパーが全速前進してるのさ!?

そう私が言うのを見越していたのか、彼は手元でスマホを振って。

「許可ならもう取ってあるぞー」

「……なんと?」

「そういうえば、コンビニから帰る前にスマホを操作してたわね、彼」

遠いのであんまり良く見えなかったが、幼馴染みのスマホ画面に「了承」と書かれたスタンプがあるのはわかった。……流石同胞、手慣れてやがる……。

私と転校生ちゃんは互いに顔を見合わせたあと、どちらからともなく表情を崩して苦笑を交わし。

「まったく、朝から元気だねえ。……紡ぎ手ちゃんは大丈夫?」

「一緒のクラスなので慣れましたよ盟友は常に照りつける太陽の如く……」

「もしかしてあの子、ずっとあのテンションなの……?」

一人取り残されていた紡ぎ手ちゃんを伴って、自身の家の中に戻った。

☆ ☆ ☆

「新作のチーズ鮭&枝豆、意外と美味しいです!」

「私にはゲテモノに見えたのだけど……でも、リゾットとかにはチーズを使うわけだから、そこまで変でもない……のかしら?」

後輩ちゃんの手の内にあるおにぎり。それに入っている具についてむむむ、と唸っている転校生ちゃん。

あーでも、転校生ちゃんの気持ちもわからないでもない、かな?

サイコロ状にカットされたチーズがご飯の中に入ってるのって、最初見たときちよつとギョツとしちやつたんだよね、なんか異物感があるというか。実際食べてみると案外イケたんだけど。

「普通の、鮭が一番……」

「……え、もしかして今のお前か?」

「……?そうです、よ?」

その横では、突然に普通の喋り方になった紡ぎ手ちゃんに、同胞が戦慄の表情を向けていた。……なんか最近、幼馴染みがオーバリアクション化してきてない?

なお当の紡ぎ手ちゃんはあるにせよ、幸せそうなほにやつとした笑みを浮かべ、鮭おにぎりを一口一口味わいながら食べ進めていた。……うん。

「がわい、い、い、な、あ、つ、む、ち、ゃ、ん」
「先輩大君は目が怖い」

「おおっと」

おっといけない、あまりに可愛いものだから怖がらせてしまった。
失敗失敗☆

……紡ぎ手ちゃんが自然体になるのは、確かリラックスしてるとき
だっけ？

じゃあ私は壁になろう、推しを見守る壁になろう。

推しの尊い笑みを、世界の邪悪から守る壁になる。——こんなに
光栄なことは他にあるだろうか？いやない。故に——。

「私は、新世界の壁になる」

「一文字違いで大惨事の件。……いや第三次か？」

「壁の押し売りみたいなものだから？……ってやかましいわっ」

幼馴染みの横合いからのツツコミに正気を取り戻しつつ、改めて紡
ぎ手ちゃんのほうに視線を向ける。……マイペースに鮭おにぎりを
もぐもぐしていたので、多分彼女は大物なんだと思う。

「あらあら、貴方の友達はみんな個性的なのねえ」

「友達というか部活仲間というか。まあ仲はいいと思うよ、今日も遊
びに出かける予定だし」

テーブルに集まってやいのやいのとしている私達を見て、お母さん
がうふふと笑っていた。

……そう、こうして彼らが朝っぱらから私の家に集合している理
由。

それは演劇練習に対しての気分転換と、先週の同胞とのお出かけを
羨ましがった転校生&後輩コンビをなだめるため、だったりするの
だ。

いやね、この間二人してずるいずるいの大合唱、横の紡ぎ手ちゃん
が珍しく唾然としてたくらいの大輪唱をかましてくれたのよこの二

人。

……そうなるともう、お出かけするしかないじゃない？

それを受けて幼馴染みが、二人と私で出掛けてくればいいじゃないか、って提案したんだけど……。

「なにを言っているの、幼馴染みさんも一緒に決まっているでしょう？」

「そうなればつむちやんも行くしかありませんね！……ね!？」

「なんとつ、ふえっ!我にも祝祭の鐘は鳴り響くか」

「……あれー?」

え、なにこの展開。

ヤキモチ的なものじゃなくて、ホントに二人だけで出掛けたことに憤ったのこの二人？

だからみんなで出掛けるなんて話になるの?……はえー……(思考放棄)

……と、言うようなやり取りの結果、朝一で私の家に集まって、そこから隣町に遊びに行こう……という話になったのである。

「ゆーー」

「……ゆーー?」

そういうことになった。……ってやらすんじゃないよ。

唐突に謎のネタ振りをしてきた後輩ちゃんを、罰ゲーム代わりにわしゃわしゃ撫でつつ、そういえば弟はどうしてるんだろう、と視線を巡らせる。

「ふうん、部長さんの弟さん、ねえ?……ちよつと着てみて欲しいものがあるのだけど」

「……?なに着ればいいんだー?」

「おい待てそこの転校生い、二次元じゃないんだぞうちの弟に変な性

癖埋め込もうとしてんじゃねえ」

「……ちっ、バレたわ」

「おいイ？」

なんかいつの間にか転校生ちゃんに絡まれてた。しかも着せかえ人形にされかかっている。

……オイコラ、軽率にシヨタに変な性癖埋め込もうとすんな！そう言って詰め寄ると、彼女は視線を明後日の方向に向けつつ、

「別に今の時代異性装なんて珍しくもないでしょう？ 貴方の弟だし、似合うかなってちよっと思っただけよ」

「ねえ転校生ちゃん？ それで通ると思ってるんなら、ちゃんと目を見て話そう？ …… 貴様が最近ハマっているゲームについては調べが上がってるんだ、吐けーっ！」

「……フリフリのアイドル衣装を「ギルダメですテイっ！」あ痛あつ!？」

悪びれもせずに宣うので、制裁の四十五度チョップ。

……ソシャゲのシヨタに着せられてる服なんてなあ、基本的なんだよお！にも関わらずその上に女装だとおく!? んなもん、お天道様が許しても、この私が許さねえく!!

こうして、悪は滅びた。だが光ある限り闇もまた濃くなるもの。

闘え私、負けるな私、いつかユリーレムにたどり着くその日まで、私の戦いは続くのだから——。

「……不純さで言えば部長さんも同じくらいだと思っただけど、この扱いの差はなんなのかしら……」

「転校生がはっちやけだしたの最近だからなあ、弄られボーナス期間ってやつじゃないか？」

「なんなのその嬉しくないボーナスタイム……」

「先輩はもうどうしようもないので！ 転校生さんはまだ引き返せるとみんなに思われてるんですよー！」

「……ねえ後輩ちゃん、髪グシヤグシヤにしたのは謝るから、こっちに飛び火させるの止めない？」

私の言葉に「やー、ですよっ」と笑みを返してくる後輩ちゃん。可愛いなあと思うと同時に、どうにも敵わねえやとも思わされる私なのだっただった。

……なお紡ぎ手ちゃんは、未だマイペースにおにぎりをもぐもぐしていた。……食事中だけ無敵すぎるこの子……。

百合ゲー世界に転生したら衆人環視と再会のナンパ君の件について

「それにしても……」

「なんだよ？」

家を出て、駅までの道を五人で歩いている私達。

ふと視線を幼馴染みのほうに向けると、彼は怪訝そうな顔でこちらを見返してきた。

その格好は、普通に男性が着るようなもので。

「今日は、この前みたいに女装してくれないんだね」

「……いや、男女比率考えろよ。また絡まれるぞ？」

私の残念がる言葉に、同胞からはもつともな言葉が返ってくる。

……うん、いやまあ、確かにそうんだけどね？

折角美少女を侍らせてるといふのに、同胞だけ男性の格好だとなんかこう、ちよつともやもやするといふか……。

言い方がアレだぞ、とツッコまれつつ、なんとも言えない気分でむうと唸る私。

……いや、わかる。わかるんだ、同胞の言いたいことは。

そもそもこの世界、同性でも異性でも付き合うことに支障がないし、なんだつたら重婚ありなので、複数人と付き合っていたとしても別に咎められることはない。

……いやすまん嘘言った。

無理やりっぽい要素が欠片でも見受けられたのなら、周囲から凄まじい侮蔑系の視線に晒されるうえ、最悪の場合は通報されかねない。……なので、実質的にハーレム展開っていうのはある程度覚悟している人達にしかできません。……覚悟してたらやれるわけだけど。

ともあれ、私達の集団に関しても誰を主体にしたものなのか——と

いうのは、外からでは判断できないわけで。

結果として、周囲からは単なる友達集団として見られている可能性が一番高い——ということにはわかっているのだ。

だからこそ、この間みたいになンパとかされるかも知れないぞ……という予想により、先んじて同胞が『男性がいる』と主張することで、周囲に蔓延^{はびこ}るナンパ者達に牽制をしてるんだ、ということも。

そこに下心とか一切ないんだってことも、全部わかっているのだ。

……だけどねえ、だけどねえ！

「これじゃうちの同胞が、女の子をたくさん侍らせてる、稀代のハーレム王にしか見えないじゃないですかやだー！」

「なんだこの凄まじいまでの風評被害」

こんなん、パツと見たら同胞ハーレムにしか見えへんやんけ！違うの主体は私なの！部長たる私が天に立ってないのはおかしいの！

そんな感じのことを述べると、同胞は風評被害にもほどがある、と渋い顔。

「でも、ナンパ避けとして活用するつもりなら。……幼馴染みさんが中心だ、って思われたほうが好都合なんじゃない？」

「……………」

そこに、横から転校生ちゃんの援護射撃が飛んでくる。ナイスアシスト、流石帰国子女！（？）

ゆえに、この場で畳み掛ける……………！

横の後輩ちゃんに目配せをすれば、彼女は一瞬不敵な笑みを浮かべていた。……これなら、イケる！

「そーなんですよ転校生ちゃん!!なしてまた寝取られ気分味合わせねばならんのですか私!?!」

「その場合は寝取られた側の先輩も、一緒にハーレムに取り込まれ

ちやつてるんじゃないでしょうか!」

「いやなに言ってるんだお前ら?!」

「なんとお?!いつの間にか私まで同胞に手籠めにされていたのか……!?なんて卑劣な男なの!変態!悪魔!鬼!緑の事務員!」

困惑する幼馴染みに口撃を重ねていけば……。

……決まったあー!!百合の間に挟まったんじゃないやなくて、百合を二本とも手折って持ってたヤベーやつ completion だあー!!

……うつ、持病の寝取られ・間男殴つ血KILL病が……!いや抑えろ今回はそっちが主題ちゃうねん。

そんな私の内心の葛藤には気付かなかつたらしい幼馴染みは、周囲に落ち着くように言ってる聞かせながら、小さく頭を振った。

「おーけいおーけい、わかつたわかつた。……なにが欲しいんだ?」

「いえー!みんな同胞がアイス奢ってくれてるってー!」

「はいはいわかつたわかつた。……たく、最初からそう言えよな……」

——勝ち申した。

三位一体の同胞追い詰めの陣は決定的な成功を収め、同胞に氷菓子アイスの下賜を約束させることに成功し候そうろう。

これより我らは氷菓子の選定に移る……、いやなんだこのキャラ? いやまあ、同胞に恋バナとか早い早いなので。なんの心配もしてないので。全部茶番でしたので!めでたしめでたし!

「本当にめでたしめでたし、かしらね?」

「……転校生ちゃん、なにか言いたいことでも?」

そうして何々大笑していたら、転校生ちゃんにぼそつと囁かれてしまった。

……いや、なにもないってば。なんで笑うのさ転校生ちゃん。……なんだこの試合に勝って勝負に負けた感っ!?

なんだかよくわからない敗北感を胸に刻まれながら、私達は近くのアイス屋に向かうのでした。

☆ ☆ ☆

「電車の中での視線が凄かったわね」

「まあ、この集団美少女ばかりだからねえ。……なんか幼馴染みにも熱視線が飛んでた気がしたけど」

「……いや、なんというか。……俺今日女装してないよな？」

自身の服を見て困惑してる幼馴染みに、間違ってるよと声を掛ける。……なんというか、電車の中では周囲からよく見られていたように思う。

見た目は完全に美少女集団なのでさもありなん、中身のほうまで美少女かどうかは保証できんがな！

……幼馴染みにも視線が——嫉妬ではなく興味の視線が——向いていたのは、ちよつと予想外だったけど。

でもまあよくよく考えてみると、幼馴染みも大概可愛い系美少年なので、視線が飛んでくる可能性は普通にあっただな……と気付く。そもそもこの世界同性愛に寛容なんだから、性別がどっちだなんてのは見られるか否かに関係ないじゃん。

そりや見られるわ、だって今の照れて私の後ろに隠れてる同胞、わりと可愛いし。

……むう。

「……ええい散れえい者共!!見世物じゃないわとつとと散れえいっ

!!」

「!？」

……なんというかこう、とても面白くない。ついでに周囲に人が集まりだしているので動きにくい。

なので大きな声を上げ、周囲に退いてくれと主張する。
突然の大声に驚いた野次馬たちは、そのままサーツと散つていった。

……あんまり褒められたやり方じゃない、というのはわかっているの
で内心反省しつつ。

とりあえずこのままここにいたら、また囲まれかねないので目的地
に向かうために動き出そうとして。

「——あれ？なんか勇ましい声が聞こえるな、と思つたら先週の彼女
さんじゃないっすか？」

「貴方は、この間のナンパ君？」

波のように引いていった人垣の中から現れたのは、先週私たちの案内
に付き合わせた男性——見た目がチャライ青年、ナンパ君その人
だった。

☆ ☆ ☆

「いやまあなんとというか、災難だったつすねえ？」

「美少女が集うと特殊なロードが開くとは聞いていたけど、まさか私
たちにも起きるなんて……つて感じよ、もう」

こちらの愚痴にはははと苦笑いを返しながら先導してくれるナン
パ君。私達はそれについていく形だ。

……すっかり仲良くなつたもんだよね、ホントに。

いやね？彼はナンパ野郎だけど、別に警戒しなくてもいいナンパ野
郎だから、一緒にいるのが楽なんだよね。

……ナンパ野郎なんて全部同じじゃないかって？ノンノン、そりや
偏見がすぎるっつものだ。

彼が安全な理由とは、彼が下心を一切隠していない、ということに
ある。

下心見え見えだなんて、一番警戒すべきタイプではないのか？

……と思われるかも知れないが、それはそもその話として、ナンパなんてものは下心なしにやるもんじゃない——という視点が抜けていると主張したい。

……下心が見えないままに異性に近付いてくるチャラ男とかモブ男とかって、どう考えても危険人物でしょう？

百合に挟まる男絶対ぶっ飛ばすマンな人達ならば、この気持はよくわかるはずだ。

というかね、下心一切なしの男性、なんてものは幻想の中にしかない生き物なわけですよ。

紳士然とした人だって、紳士である自分をよく見せたい、なんて気持ちが大なり小なり持つてるのが普通だし、年頃の男性なら可愛い・ないし綺麗な女性と付き合いたい、と思うのは自然なこと。

……いや、正確に言うなら「認められたい」という欲を抱くのが普通、と言うべきかな。

女性にだってそういう承認欲求はあるけれど、男性の場合は「^{好き}思う人に認められたい」という要素が強いように思う。

それがモテたいという感情になったり、強くなりたいたいという感情になったり、凄いと思われたいという感情になったりするわけだ。

なので、あるはずのその「認められたい」という欲を隠したまま、異性に近付いてくる奴というのは——原則信用ならない狼だ、というわけである。……そうやって隠すことで、自身の欲を達成しようとしている、とも取れるからね。

まあこれが草食系男子とかなら、また話は違ってくるんだろうけど。……ここで対象にしているのは、あくまでもナンパ男について。

ナンパって欲を見せてるのに下心ない、とかなに言ってるんだコイツ、ってなるでしょう？

だから、ちゃんと恋人が欲しいと主張していた彼は、恋人にはなれませんよーと最初に主張しておけば、こっちが隙を見せない限りは安心していい、オトモダチになれる人物だ……というわけだ。

……隙を見せた場合？そこまで信用できるんならやってみたらいい

いんじゃない？私は流石にそこまで信用していないけど。距離感保てるなら友達だよ、ってだけだし。

え？同胞？下心とかないない、だって幻想みたいなもの、女装イケるんだから大丈夫大丈夫（慢心）

え？私？……中身が中身なんで欲まみれですね……（悲しみ）

……なんか盛大にダブスタじゃねーか、って突っ込まれた気がするけど、あくまで私の考え方なんで別に真理とかじゃないよ、って言うっておこう。

高度な柔軟性を維持しつつ、臨機応変に対応するのが私のやり方なんだ（キリッ）

「それにしても……ナンパ君は今日もナンパ？」

「あ、いえ。実は最近恋人ができました、今日はその人と遊ぶためにこっちに来てたんっすよ」

「なんと!?おめでどうナンパ君！君はやるやつだと思ってたよ私！」

「あいたたたっ、背中っ、背中を叩かないで下さいっす!?!」

なんて思考は表に出さず、ナンパ君がなにをしていたのか聞いてみたのだけど。

……いやまさかまさか。ナンパ君ならいい人見付けられるだろうな、とは思っていたけど、こんなに早く見付けられるとは思ってなかったよ私！めでたいじゃないですかやだー！

なんだか自分のことのように嬉しくなって、思わず彼の背中をバシバシと叩いてしまう。

「もう、そういうことは最初に言いなさいよこのっ、このっ！よっ、幸せ者！」

「あいててて、彼女さんにそんなに祝福してもらえとは思ってなかったんすよいててて」

祝福ってのは痛いもんだぞありがたく受け取っておけいっ！とバ

シバシナンパ君の背中を平手打ちする私。

いやー、なんかさっきのイライラも何処かに飛んでいってしまった。

なのでニッコニコで後ろに付いてきているはずの、みんなのほうに振り返ったのだけれど。

「……なんでみんなそんなに疲労困憊なの？」

「お前のテンションが高すぎるんだよっ!!」

「……ふ、ふふふ、まさか部長さんがこんな上位カーस्टだったとは、ね……かふっ」

「転校生さんっ!!しっかりして下さい転校生さん!傷は深いですよ
がっかりしましょう!?!」

「なんでトドメさしてるの……
「我は時々盟友も怖い?」

「なんだこれ」

……いや、ほんとになんだこれ?

真っ白に燃え尽きて倒れている転校生ちゃんど、その周囲であれこれ騒ぐみんな。

……という、あまりにもよくわからない状況に陥っているのを見て、私は思わず意識を遠い宇宙まで飛ばしてしまうのだった――。

百合ゲー世界に転生したら噂の彼女は癖が強い件について

「このゲームセンターに来るのも、なんだか久しぶりな気がしますね！」

「う、後輩ちゃんにボコボコに負けたときの古傷が……」

「初心者に大負け喫した幼馴染みに悲しい過去……って、いつまで引きずってんだそれ」

行き付けのゲーセン（行き付けと言いつつあんまり行かない）の前で、昔（と言ってもひと月そこら）を思い出しながらあれこれと話す私・同胞・後輩ちゃんの三人。

他の三人（転校生ちゃん・紡ぎ手ちゃん・ナンパ君）は、なんのこっちゃと蚊帳の外である。

「馴れ初め……は違うか？まあ、後輩ちゃんと初めて遊んだのが、ここだったってこと。……その後なにかあったのやら、ツンツンしていた後輩ちゃんは消え、今現在のポジションを確立してしまっていたのです……」

「魔のゲーセンじゃないのこ……」

「魔おの恐巣ろ窟しだすというまのか……」

「……唐突な風評被害警報が発令されてそうだな」

ほろり、と懐かしむように思い出を語れば、転校生ちゃんと紡ぎ手ちゃんが互いに体を寄せ合って恐怖に震えていた。同胞の微妙な顔も納得の状況である。

……それと、後ろでニコニコしてるのにどう考えても笑ってない後輩ちゃんに関しては、私は見なかったことにするぞー。私知らないのでアバーツ!?

なお、これもまたナンパ君が蚊帳の外……と、言うわけでもなく。

「あ、いたいた。おーい、こっちつすよー!」

「……やれやれ、君はいつも騒がしいね?僕としては嬉しい限りだけどね。身も蓋もない言い方をすれば、それは君が僕に夢中である、という証拠なんだろうからさ」

「そっちもいつも通りつすね……」

彼が手を振る先には、こちらに近寄ってくる一人の人物の姿。

その人物はニヤリと笑みを浮かべると、彼の隣に立つてなにやら悦に浸っている。

ナンパ君はそんな相手に若干の辟易が見えるものの、基本的には嬉しそうにしていた。……わりとぞつこんだなこれ?

それにしても……ふーむ。

ナンパ君のお相手のこの人、男女だんじょどっちの人なんだろう?

床に付きそうなほど長い黒髪を、後頭部のかなり低い位置で二つ結び……カントリースタイルっていうんだっけ?にしているし、その服装も落ち着いた感じの服装かつロングスカートだしで、パツと見は女性かなー、とも思うのだけれど。

話す声はハスキーボイスなので判別がつかないし、顔の作りのほうも中性的な造形なので、カッコいい男性にも綺麗な女性にも見える。

異性装が普通に普及しているこの世界の常識的に考えると、一見しただけでは正確に判別できる気がしないタイプの人物だった。

……まあ見た目そのものとは別に、前回のときのナンパ君が、女装した同胞のほうに猛アピールしてた……ってところがちよつと引っ掛かってねー。なんかこう余計にわからないというか……。

私が口調戻したら悔しがってた?……うん、それもあってねー、両方イケる人なのかもなー、みたいなのところもあるというか。……場合によっては風評被害だなこれ?

そんなことを思いながら二人を見ていたら、何事かをナンパ君と話していた件の人物が、こちらに視線を向けて来ていた。……改めて観察すると、なんか全体的に瞳の中の光が少ないな、この人。

なんていうのかな、ハイライトがない……みたいな感じ？
生気がないとまではいけないけど、ちよつと心配になる感じの、そんな瞳の輝いてなさ加減だった。

「身も蓋もない感想ありがとう」

「……うえ!!あばば、口に出てましたか?!すみませんすみません!!」

そんなことを思っていたら、件の人物から苦笑を返されてしまった。……あかん口に出てるう!?

思わず必死に件の人物へ謝り倒す私。

周りの部活仲間達は、なんだなんだと私達のやり取りを見ているのだった。

☆ ☆ ☆

「いや、本当にすみませんでした……」

「いいよいよ、正直者は好きだからね。身も蓋もない言動というのは、僕の大好物なのさ」

あのあと必死に謝りたおしたのだが、この人は全然気にしてないと言っていた。

その上、本音を隠さない言動は寧ろ好ましいとまで言われてしまった。

……ああうん、なんでこの人がナンパ君と付き合ってるのかわかった気がする。嘘とか言わなさそうだもんねあの人……。

「そうそう、可愛いものだろう?彼は」

「いやまあわかりやすいなあ、とは思いましたけど……」

相手から同意の言葉を求められて、思わず口ごもる私。……人の彼

氏を可愛い、とか言うのってどうなんだろう？失礼になったりしない？

誰かそのあたり教えて……あ、ダメだ。よく考えたら周囲のメンバー、みんな私を中心にして集まった人達だから参考にならないわこれ。恋愛経験ゼロじゃんみんな。

つまり私は恋愛雑魚なお山の大将！……言ってる悲しくなってきたんだけど、どうすればいいかなこれ？

「ふふっ。いや、君はなかなか難儀な場所に身を置いているようだね？」

「楽しい仲間なんで、辛いとか苦しいとかはないですけどね」

不思議さんの言葉に、小さく頭を掻きながら相槌を打つ。

時々喧嘩めいたこともするけど、別にそれで離れ離れになるわけでもない。

……うむ、なんとというかアレだね。出会ってからそんなに長いわけでもないけど、気分的には竹馬の友……というか、そんな感じだろうか？

「なるほど。……取り越し苦労かは微妙なところ、か」

「……う？なにか言いました？」

「いや、こっちの話。僕達の描く軌跡は偶然と必然を糾あざなえた、その最果てにこそ見えるもの。……勝手な言葉や杞憂は、それこそ身も蓋もない——というだけさ」

「は、はあ……う？」

そんな風に伝えたら、小さい声で何かを言われた気がしたので聞き返したのだけれど。……えっと、なんて？

というかこの人、話してて思ったけど本当に『不思議さん』としか言いようがないな……。ちよっと過去からの魔の手が伸びてくる感覚があるぞう？

「先^{先輩}、飲み物持ってきました……よ
大君よ、乾きを潤すべき……むむ？」

「……………ふむ？」

そうして微妙に頭を痛めていた私の前に、さらなる問題が滑り寄ってきた。

……おい同胞あ、なんでよりによって紡ぎ手ちゃんに持つてこさせたんだ貴様あっ!?

私が内心冷や汗をかいている前で、紡ぎ手ちゃんと不思議さんが見つめ合って……睨み合って？いる。

いや、これどうなるの？

方向性が違うけど、どっちも多分アレでしょう？……マジで予想が付かんのですがそれは。

「――はじめまして^{突然ですが}、貴方が好きな作品は

「……そうだね、ここは期待に込めて、この曲を送るとしよう」

高らかに告げられた（謎の決めポーズ付きの）紡ぎ手ちゃんの問題に、対する不思議さんは、突然口笛を吹くことで答えとした。……いや、なんで口笛？

……！あ、まさか!?

私は大本の曲を聞いたことないけど！

『好きな作品は？』と問われて、それに『口笛を返す』ことで答えになるもの、なんてそう多くはない！

……いやなんで知ってるのさ？結構古い作品だよねアレ!?!と思わず困惑する私。

不思議さんが示しているものが私の思っている通りなら、アニメも原作も今の子には伝わらない古さのはずのものだ。

「おや、知らないのかい？ちよつと前にリメイクされてたんだよ、あれ。リメイクの常として、評判は賛否がわかるものになってしまっ

「たみたいだけどね」

「……ホントだ、再アニメ化してる……」

不思議さんの言葉を受けて、スマホでサクッと検索する私。

……ホントだ。こつちに転生してからはあんまりアニメとか見てなかったから知らなかったけど、すっかり再アニメ化してるよあの作品……。

いやまあ、それはいいんだ。そつちより、紡ぎ手ちゃんの反応を気にすべきだろう。

不思議さんの口笛を聞いた彼女は、しばし目蓋を閉じ。なにかを噛み締めるように黙し立ち尽くしたあと、緩やかに目蓋を開いて破顔した。

「我等は共に杯を交わせし朋友であつたか……！」

「……ええ……？」

いや、その、ええ……？彼女の発した言葉に思わず困惑する私。

……結婚を前提に、みたいな言い方で友達になろうとしてるんだけどこの子、どういうことなの……？

横の不思議さんはツボに入ったのか、顔を伏せてめつちや肩震わせてるし……。そもそも副音声と発した言葉（の方向性）が微妙に違う！私にどうしろっていうんだこの状況っ!?

「いやはやなんとも。身も蓋もないというかその逆というか……、面白い子だね、君の友達は」

「ええ、はあ、まあ……」

「なんだから部長さんに変な子扱いされてる大君、何故そこで目を逸らす……？」

不思議さんの言葉に思わず目を逸らす私と、珍しくこちらにジトツとした視線を向けてくる紡ぎ手ちゃん。……いや、それはその……ね？

ぶんすか!とこちらに説明というか訂正というかを求めてくる紡ぎ手ちゃんを宥め^{なだ}賺^{すか}しつつ、カウンターの横の自販機前あたりにいるはずの、幼馴染み達のほうに視線をちらりと向ける。

……よし、そろそろ返ってくる!いい加減このなんとも言えない緊張を打ち破ってくれ同胞!

「あ、すまんちよつと花を摘みに行ってくる」

「……そこは雉撃ちじゃないのかしら?」

「いやどつちでもいいだろ別に……」

(仲がいいのは構わないっすけど、これ部外者の俺はどういう反応すればいいんっすか!?)

ど、同胞おーっ!?アヤツ反転してお手洗いに行きおった!?

横のナンパ君を見るよ、一人だけ女性陣の中に放り込まれてめっちゃ困ってるじゃん!?見知らぬ女子高生に囲まれて若干テンパってんじゃない?!

……いや、よく考えたらなんでテンパってんのナンパ君?

君、先週は私ら二人にウェイウェイしながら話しかけてきたじゃん。今さら転校生ちゃんと後輩ちゃんとに囲まれたところで別に困る要素ないじゃん。じゃんじゃん話しかけてきたじゃんじゃん?

「ふむ?その先週ナンパしてたって話、詳しく聞かせて貰えないかな。できれば身も蓋もなく赤裸々に」

そんな感じのことをひそひそと不思議さんに話してみたら、彼女はとても楽しそうに笑いながら、仔細について話すことを催促してきた。……隣の紡ぎ手ちゃんのジト目ターゲットも、挙動不審なナンパ君に移ったので、これ幸いとヘイトを逸らさせて貰うことにする。

「ちよ、やめて下さいっす彼女さんっ!!?その人超愉快犯なんっすよおーっ!?!」

「ははは、諦めるんだね君。僕にもナンパしてきたんだから、今さら武勇伝の一つや二つくらい上乘せされたって構わないだろう？」

「わーっ!？」

「おお、ナンパ成功してたんだナンパ君」

「逆に口説き返してあげたけどね。身も蓋もないことに、そっちのほうが嬉しそうだったと言うか……」

「うわーっ!?!うわーっ!?!うわーっ!!!」

「……隠れネコだったのねこの人」

「つまり主人とペットの関係だったんですね！」

「……………げふっ」

周囲からの猛攻に、ついにダウンするナンパ君。

花の女子高生達に言葉責めされるとかご褒美じゃんやったね。

……いやすまん流石に同情する、性癖を衆目に晒されるとかかわいすぎる……。

同胞が返ってくるまで針の筵だったナンパ君。

返ってきた同胞に何故疲労困憊なのか、と問われるその姿は、先週のそれとは逆になっていて、思わず苦笑してしまう私なのだった。

百合ゲー世界に転生したので思い切り遊んでみた件について

「酷い……目に……あつたつす……」

「地味に自業自得なのが、なんとも言えないところだね」

「ああ……先週の」

ソファアーの上で灰になっているナンパ君に苦笑を返せば、その反対側の同胞が遠い目をしていた。……わりと困ってたもんね、あのとき
の同胞。

まあ仔細を口に出すと、またナンパ君がひどい目に合うので流石に
言わないけど。……私の目にも涙、である。

「それでは僭越ながら一番槍、吶喊しまーす!」

「盟友、その覇張を張示張せ!」

「了解でーす、よっ!」

そんな私達を尻目に、後輩ちゃんが一番手を引き受けてボウリング
玉を投げる。綺麗な投球により、滑るようにピンに向かったボール
は、これまた綺麗に全てのピンを薙ぎ倒していた。

……前に一緒に遊んだときも、初めてのわりに結構さまになってた
けれど、今の後輩ちゃんの投球は明らかに素人には見えなかった。
……この子普通にハイスペア組だからなー、うーん恐ろしい。

「おや、凄いなえ。僕は肉体労働は専門外だからなあ、つと」

その横のレーンでは、不思議さんが覚束ない足取りで投球を行って
いた。……綺麗にガーターに行ったね、うん。

「うーん、やっぱりダメ、か」

「なんの、二回目で全部倒せば実質パーフェクトつすよ!」
「ナンパ君ボウリングのルールわかって言ってるそれ?」

ボウリングでのパーフェクトって、全部ストライクだったときの呼び方なんですけどそれは。

……いやまあ、大層楽しそうに応援してる相手に、こういうこと言うのは野暮かも知れないけども。

応援を受けた不思議さんは小さく苦笑を返して、二回目の投球に移る。

投げられたボールはレーンの右側のほうに転がっていき、結果として三本ほどのピンを倒していた。

「ま、こんなものだろうさ、身も蓋もない話だけれど」

「うおおっ!!こうなりや仇討ちつすよー!!」

「いやいや、仇討ちって僕死んでないからね?身も蓋もないことに生きてるよ、生き恥晒してるよー」

「ボウリングのピンめ!うちの恋人をよくもやってくれたつすねー!!」

「全然聞いてませんね……」

「……全く、身も蓋もないことにホントバカだな彼は」

凡退に終わった不思議さんを思ってなのかなんなのか、異様に張り切るナンパ君。

恋人である不思議さんの言い分も、一切否定できない猪突猛進っぷりである。……というか、なにを仇討ちする気なんだろうねこの人?

まあ、そんな彼も凡退するんだけども。……倒せたの合計二本とか逆に凄いのでは?

「面目ないつす……これじゃあ落武者にもなれないつす……」

「はいはい。次頑張りなよ、まだ終わりじゃないんだからさ」

とほとほと戻ってくるナンパ君に軽く声を掛ける不思議さん。
声を掛けられた側のナンパ君は「うう、優しさが痛いっす……」と
ソファアに腰を下ろしてメソメソしていた。……意外と豆腐メンタ
ルだね？

「ボウリング……向こうでは触ったことはなかったけれど——こう、
よね？」

後輩ちゃんが下がったレーンでは、転校生ちゃんが周囲の動きを見
よう見まねでトレースして投球を行っていた。

……初めて遊んだはずなのにストライクを取っていた、いつかの後
輩ちゃんほどではないものの、転校生ちゃんも一投目で四本・二投目
で三本の、計七本を倒していた。……ビギナーとしては、普通に凄い
のではないだろうか？

「じゃ、行ってくるわ」

「はい行ってらっしゃい。ストライク以外取ったら罰ゲームねー」

「気軽に罰追加してんじゃねーよ……それっ」

こつちのレーンは幼馴染みの番。

……綺麗にストライク取りおった。なかなかやるなあ同胞、これは
私も負けてられないぞう。

「玉の扱いは分からぬ……？」

向こうでは紡ぎ手ちゃんが、ぎこちない動きでボールを投げしてい
た。……一度目はガーター、二度目は四本。何気にナンパ君より倒せ
てるね？

「俺は……ダメな男っす……」

「そうだね、身も蓋もない言い方をすれば、女の子に負けてしまうよう

なよわよわボウリングプレイヤーだね」

「げふっ!？」

「……血反吐吐くような呻きのわりに、なんか楽しそうだなこの人……」

「……うん、ナンパ君に関してはそつとしておいてあげよう。元男として、最低限の礼儀というやつだ(?)」

変なものを見る目でナンパ君を見ている幼馴染みは置いといて、ボールを手にとつてレーンの前に進み出る私。

ふっ、同胞よ、前は無様な敗北を喫したが、今回の私は一味違う！見るがいい、これが私の全力じゃーい！

放たれたボールは唸りをあげ、並ぶ白いピン達へと向かう。そうしてボールがピンを巻き込んで――、

「……おつ、ストライクか」

「ふっ、私に掛かればこんなものよ……」

最後の一つが倒れ、モニターに表示されるストライクのマーク。……ふっ、口ではこういつてるけど、正直ミスったかと思つた……。

た、倒れてくれて良かった……！いやほんとに、変にぐらぐらして期待と不安を煽らなくていいから……。

……一周した結果、初めてっぽい組の紡ぎ手ちゃんと転校生ちゃん、および単なるイチヤイチャカップルと化してるナンパ君&不思議さん組を置いて、私と後輩ちゃん、および同胞がスコア的に並んでいた。……うーむ、泥沼の予感。

「……で？何を賭ける？」

「この同胞端から勝つ気である、なんだこの野郎、私だつて負けねーからなー!」

「お二人が燃えますよ！でも私も負けませんよ!」

「……元気ねこの三人は」

「でも、なんだか楽しいですね 闘の声を上げよ、進軍は今！」

「そうね。楽しいことは確か、ね」

そんな感じに、わいわいとボウリングを楽しむ私達なのでした。

☆ ☆ ☆

「あー、遊んだ遊んだ！」

ゲーセンの外に出て、大きく背伸びをする。

……途中でミスった私を置いて、同胞と後輩ちゃんの一騎討ちになったボウリング対決。

結果に関しては……まあ、後ろでニコニコしてる後輩ちゃんと、ぶすっ、としてる同胞を見ればわかる、よね？

ボウリングが終わったあとは、そのまま併設されたゲームコーナーであれこれ遊んで回った私達。

ナンパ君がレースゲームが得意だったのはちよつと驚きだったけど、いつか不思議さんを連れてドライブ行きたいとか行つたので、まあそのあたりのやる気のなせる技……だったりするのかも知れない。

対する不思議さんは、クレイゲームが異様に強かった。……いや、強いつていうかおかしレベルだったけど。なして全部一発で取ってるのこの人……？

本人にそこまでやる気がなさそうだったからよかったものの、仮にやる気があったなら、店の景品根こそぎ持つていってしまいうような凄みがあった。

こっち側の組では、転校生ちゃんが音系のアーケードが得意だったことが判明したりした。

ノリノリでやってる彼女の後ろ、そこに集ったギャラリーの数が凄いことになってたから、みんなで追い払うのに苦労したり。

紡ぎ手ちゃんはシューティングをやりたいだったので、私がそれ

に付き合っただけだ。

流石に前の人達とは違って、普通に初心者で普通の腕前だった紡ぎ手ちゃんも、銃を構えるだけでわりとご満悦。

すぐにやられたりもしたけど終始楽しそうだったので、別に上手くなくてもいいんだろな、という結論に至った。

……私は負けると悔しい側なので、紡ぎ手ちゃんがやられても意地で攻略してやったけどね！

後輩ちゃんと同胞は——、対戦できるゲームをずっとはしごしてたような？

格闘ゲームに始まり、パズル・クイズ・リズム・レースなどなど。ひたすらに対戦して、わりといい勝負をしていたように思う。

こつちもこつちでギャラリーが集まってたけど、転校生ちゃんの時のような不埒な者共ではなく、突然現れた猛者共を、なんだなんだと見物にきた魔窟ヤバい奴らの民らって感じだったので触れないでおいた。……いや、あれは別方向に触れないよ、色んな意味で。

まあ、そんな感じに思い思いに遊んで、気付けばわりといい時間になっていたので外に出てきた……というのが今の状況である。

「思えば、僕達も同伴して良かったのかな？身も蓋もないことを言えよ、部外者だろう僕達？」

「男手が一つ増えることのほうがこういう場所ではありがたい、ってことがよく身に染みなので、結果としてはトントンくらいじゃないですかね？……少なくとも、私達だけでゲーセン行くのはそろそろ止めといたほうがいいな、とは思いましたよ……」

不思議さんの言葉に、私は思わず遠い目になる。

……転校生ちゃんに絡もうとしていた見知らぬキャラ男よ、お前は絶版だ（丁寧にお断りしながら）

初手のナンパ男君があんなのだったから、ちよつと感覚狂ってたけど。まあどこにでもいるよね、ああいう人。

……女の人もいたのはビックリしたけど。

百合の間に挟まる女、とか対処に困るんでやめて貰えます？可愛ければいいって言っても限度があるんやぞ?!

……まあ、前世でのそういう人達と比べると引き際がいいからまだ助かったけど。

全部私のじやいつ！って言ったなら「なんと剛毅な」って下がって行ったの。……変な勘違いされてないかなこれ？

「まあ、どこかで聞いたかも知れないけど、基本純愛主義だからね、今の世界は」

「いや、それにしたって引き際がよすぎたような……」

「おや、どうしてそうなったのか聞きたいのかい？」

「やめて下さい絶対血で血を洗うヤベー歴史の予感しかしませんのでっ!!」

聞きとうない！

綺麗な百合の咲く地面の下に、実は誰かの亡骸があるんだよ……みたいなホラーは聞きとうない！

両手で耳を押さえて嫌ですアピールをすれば、不思議さんはこちらを見てクスクスと笑っていた。……結局どっちなのかわからなかったな、この人。

「顔の無い誰かが、世界を次に進めようとして生まれたのが今だ、ということは間違いないだろうさ。……新たな神を生もうとしたのかまでは定かではないけど、それに近い物が望まれた——というのは確かだろう」

「……えっと、はい？」

とか思ってたらまた何か語りだしたんですけど。

……そういうアレなのか、はたまた本当にそういう何かを見ているのか。その輝きのない瞳からは、なにも窺えない。

ただ、煙に巻くような微笑みだけが、薄暗くなり始めた世界の中に

浮かんでいる。

「一つ、僕から忠告だ。——『ちゃんと見ることに必要なことだろうさ』」

「——」

言いたいことだけを言って、ナンパ君を伴って去っていく不思議さん。

ナンパ君はしばらく手を振っていたから、それに手を小さく振り返して。

「ん、帰ろっか」

「そうだな。……とところで、さつきあの人となに話してたんだ？」

「んー？ 貴方はどっちなのか、って聞きそびれた感じ？」

「なにを聞こうとしてるんだお前は……」

幼馴染みに声を返して、みんなでその場を後にする。

——わかってるさ、それくらい。

声にならない言葉は、宙に溶けて消えた。

百合ゲー世界に転生したら思っていた通りだった
……?件について

——微睡みの中で、脳裏に響く音がある。

優しい音色、暖かな音色。

此方に対しての思い遣りに富んだ、天使の様な声。

——ふと、眠りに落ちた目が覚めた。

「——さん、起きて下さいまし——さん。午睡に微睡むまじろにしても、机の上で行うのははしたないですわよ」

「ん……ああ、——さん。おはようごございます……?」

自分を揺すっていたのは、副部長——さんだったようだ。

ふと視線を周囲に向ければ、そこはいつもの部室の中。

……あー、うん。どうやら自分は、部活中に眠ってしまったていたらしい。

私一人がみんなの足を引っ張ってしまったているから、気を張って頑張っていたのだけれど。……どうにも、緊張の糸が切れて、机に伏せてしまっていたようだ。

勝手に空回ってしまったているのでは世話がない。今度から気をつけるようにしないと……。

そういう焦りというか、驕りというか表情に出ってしまったのか、傍らの副部長副部長さんが、苦笑を浮かべながら此方の頭を撫でてくる。

「貴方はいつも無理をしているのだから、別に疲れてしまっていることを咎めたりはしませんよ。……それよりも。しっかり休んで、また部長として後ろで笑っていて下さいな」

「あ、はい……」

副部長さんにこうして頭を撫でられていると、どうにも逆らう気が起きなくなってしまう。

……こういうの、手綱を握られているって言うんだらうか？

悪い気はしないけれど、もうちよつと頼って貰えたらなあとも思う。……具体的にどうすれば良いのか？……これまで以上に頑張る、とか？

まあ、副部長さんにこれを言うともまた怒られちゃうから、あくまでも思うだけにしているんだけど。

「……また不純同性交遊ですか先輩。不潔ですな軽蔑します」

「ぴえっ!?……い、いつから見てたの——後輩ちゃん……?」

そうして副部長さんを見詰めていたら、横合いから声を掛けられて驚いてしまう私。

視線を声のした方に向ければ、見るからに不機嫌な様子の後輩ちゃん、私と副部長さんを睨むように見ているのだった。

……若干、副部長さんへの視線がキツイ、かな？

「最初からです。部室は爛れた行為に耽る場所ではありません、先輩はもっと部長らしくして下さい」

「は、ははは………。……面目ないです……」

後輩ちゃんの憤りももつともだ。……うん、やっぱり頑張らないと。

「あ、ああああの!!ぶ、部長さんは、その、頑張つてると思えますっ!」

転校生「——さんは黙っていて下さい。そもそも、貴方にだってしっかりして貰わなければならぬんだってこと、わかってますか?」

「ぴいっ!!?!!、(ぎょぎょ)めんなさい後輩ちゃんっ!」

そんな風に私が密かに志を新たにしていると、部活仲間の一人の
転校生
ちゃんが、私を庇うように声をあげてくれた。……すぐに
撃沈してただけど。

うん……。気にしてくれるのは嬉しいんだけど、転校生ちゃんは自
分のことを優先して貰えると、もつと嬉しいかなー、というか。

私よりドジなのは、ちよつとフオローしきれないかなって。……可
愛いから手助けしちゃうんだけどね。

「……部長さん、とりあえず、これ」

「えっ、あ、——寡黙ちゃん、もうできたの次の原稿？」

転校生ちゃんの一連の動きを、微笑ましげに見ていたら、自身の袖
を引かれる感覚がしたので視線をそちらに移す。

昔ながらの文学少女、といった風情の後輩の一人、——寡黙ちゃんが
此方に原稿の束を差し出してきている。……速筆なのは知ってたけ
れど、昨日の今日でもう終わっちゃったの……？

いや、こんなに将来有望な子、うちみたいな弱小部活に抱え込んで
ていいのかな……？でもそういうことを言うと、悲しそうな顔をさせ
ちゃうんだよな……。

寡黙ちゃんが望むのなら、それが一番良いこと……なんだろうか？
副部長さんとも何度かその辺りを話してみたけれど、未だに答えは出
ていない。

……ただ、目の前で不安そうにしている寡黙ちゃんに関しては、す
ぐにどうにかしなくちゃいけないだろう。

「……うん、凄いな寡黙ちゃんは。ありがとう、いつも助かってるよ」
「……ん……♪」

なので、彼女の頭をよしよし……と撫でてあげる。

寡黙ちゃんは気持ち良さそうに目蓋を閉じて、私の手を受け入れて
いた。

……うちには妹は居ないけれど、居たらこんな感じなのかなあ？でもその場合だと頼り無い姉と凄い妹、みたいになっちゃうか。……変にコンプレックスになったりするの、やだなあ。

「だ・か・ら！そういうことをやめて下さいって言ってるじゃないですか先輩！」

「ひゃあっ!? だからって間から飛び出す必要はないよね後輩ちゃん?!」

そうして少しの間意識を逸らしたのが悪かったのか、私と寡黙ちゃんの間から飛び出してくる後輩ちゃんに、気付くのが遅れてしまった。……私の手が離れてしまったことで、寡黙ちゃんの表情が少し曇ってしまう。

それから、後輩ちゃんの方に向き直った寡黙ちゃんは、彼女に対して抗議を始めてしまった。

「嫉妬は、よくない」

「誰も嫉妬なんてしていません。単に事実を述べているだけです。……ですよ、副部长？」

「ノーコメント、とさせて頂きますわね」

むう、と唸る寡黙ちゃんと、ふんっ、と唸る後輩ちゃん。

間の副部长さんは素知らぬ顔で、行き場のない苛立ちを抱えた二人が、一斉に此方を向く。……ひえっ、怖いよ二人とも……。

「……部長、後輩の罷免を要求する」

「此方は寡黙さんの退部を要求します」

「え、ええ……っ?! 仲良くしようよ二人とも……」

「転校生さんは黙っててください」

「ぴえっ?!」

そうして私がちよつと怯んでいたら、止めようとした転校生ちゃんが巻き込まれて撃沈していた。

……ああもう、私にもうちよつと部長としての威厳があれば、この二人の言い争いも止められるのに……。

現実には、私は二人の応酬にあわわと慌てているだけ。……こんなじゃダメなのに……。

「みなさーん、お茶が入りましたよー。……つてあ」

「……あ?」

その時、飲み物の準備をしていた顧問の先生が、お茶を乗せたお盆を、部屋の中の段差に足を引つ搔けた弾みに宙へ放り出してしまい。

あ、あれ、これ私に直撃コース……!?

「きゃんっ!?!」

「……ぶ、部長ーっ!?!」

綺麗に飛んできた湯飲みがぶつかつた衝撃で、私の視界は白く染まっっていくのでした。

★ ★ ★

「んっ……」

「目が覚めましたか、先輩」

鈍い痛みを感じながら目蓋を開ければ、此方を覗き込むのは後輩ちゃん。……さつきまでとは違う穏やかな表情の彼女は、小さく眉尻を下げながら微笑みを返してくる。

「すみません、私がもう少し注意をしていれば、止められたかも知れないのに……」

「気にしないで。先生のドジにはもう慣れてるから」

被害を被るのは、基本私だし。

みんなが怪我をしないで済むなら、甘んじて受けるのもありと言え
ばありだと思う。……できれば、あんまり酷いミスはしないで欲しい
けど。

「……はあ。先輩は、もう少し他の人に負担を流すべきですよ」

「負担って……。こんなの負担のうちには入らないよ、ちよつと驚い
ただけだし……」

「そういうのが、良くないって言ってるんです」

後輩ちゃんがベッドの端に腰を下ろして、此方の頬に手を添えてく
る。

……睨むような、慈しむようなその眼差しは、彼女が此方を慮り、
労ってくれていることを如実に示している。だからこそ、ちよつと後
ろめたくなるのだ。

——私なんかが、彼女に心配される価値があるのだろうか、と。

「また、変なことを考えてるでしょう?」

「変なことって、私にとっては、重要な——」

唇の上に彼女の人差し指が置かれて、言葉を中断させられる。……
見詰める彼女は、ただ哀しげな笑みだけを浮かべていて。

「私は、認めます。貴方が■■■■■のだと、私は認めています。

……だからどうか、そんな哀しい顔をしないで下さい」

「……ごめん、ありがとね、後輩ちゃん」

……彼女に哀しい顔をして欲しい訳じゃない。

だから、私は自分の思いを押し殺す。……自分の願いをひた隠す。

そのまま笑みを取り繕って、二人で保健室を出る。
外に出ると、彼女はすっかりいつもの様子に戻ってしまった。……
猫被りというか、そのまま猫のようだというか。
私に色々言ってくれる彼女だけど。その猫をどこかにやれたのなら、そっちの方が素敵だろうに……と思わず苦笑を溢して。

「……………」

視界の端に、一人の男の子が写り込む。
あれは確か、お隣の——、

「……………」

「……………先輩？どうしましたか？」

後輩ちゃんの言葉が、どこか遠くに聞こえる。
此方を見ているのはお隣の、いや、ちよつと話すだけの人幼馴染みで、違う、彼は私の、
いや、いいや！

「ぐ、うううっ!!」

「ちよつ、先輩?!先輩——!?!」

割れるような頭の痛みに、思わず踞る。

——わからない、私は何を思い出そうとしている？誰を思い出そう
としている？わからない、わからない！

「……………」

痛みに呻きながら、それでも上げた視線の先。
件の彼が、何かを言ったような気がして。

——そうして、微睡みから抜けた意識が落ちた。

★ ★ ☆

「……なんで原作が悪夢染みた終わりかたしてるんですかねえ」

目が覚めたのは、自室のベッドの上。

魘されていたのか、寝汗が凄く、喉もカラカラだ。

……いや、途中までわりと普通の夢だった気がしたんだけど。

原作のままのみんなと心温まる触れ合いをして、なんだかい感じになつてたじゃん。

……そのままいい感じに終わればよかったじゃん。なんで若干ホラー風味になったし。

『——ちゃんと見ること』

「——あー、うん。……ですよねー……」

まあ、思い付く理由なんて一つしかない。

……思い付いたからといって、すすすぐ解決できるものでもないのもわかってる。

あーもう、なんというか……。

「最悪の寝覚め、って言うにはちよつとあれかなー？」

カーテンを開ければ、外は快晴。……こつちの気分なぞ知ったこつちやないと言わんばかりの超いい天気である。

……さて、この気分をどう誤魔化すべきか。

御天道様に愚痴つても、話は聞いちゃくれないだろうし。

そんなことをぼやきながら、朝の支度を進める私。

——みんなで遊んだあの日から、時間はあっという間に過ぎ去つて。

演劇祭まで、残り一週間ほどとなっていた。

百合ゲー世界に転生したら祭りの前の一騒動の件について

「——せいっ!!」

「なんとっ!!」

速く、それでいて繊細に振るわれた錫杖（プラスチック製）は、彼の持つ聖剣（模擬刀）とかち合い、そして弾かれる。

少し速く振りすぎたかも、そう思いながらちよつと威力を調整。

……いや、向こうも調整してたからこっちが強めに弾かれた。

ええい、噛み合わない今日の私ら!

「……ふむ、実際に劇中で振る得物となると、また勝手が変わってくる……ということかしら?」

「かもしんない!ってか同胞、ちよいと加減してくんない?!基本そっちのが強いんだけどおっ!」

「んなこと言いながら速くしてんの知ってんだぞお前え!!」

「なんだとおっ!」

売り言葉に買い言葉、得物をぶつけ合う私達。……なんというか互いにエスカレートしてきている感じで、こっちもあっちも遠慮がなくなってきたような?

いやまあ、向こうがやる気なら、こっちもやる気ってなだけなんだけどね!

「やる気の『やる』、の部分の当て字が変わってないかしら貴方達……? あーもうはいはい、一旦休憩しなさい、休憩」

「だってさ同胞! さつと腕引つ込めると良いんじゃないかな?」

「おうお前がそれ下げるんなら止めるぞこっちもなあ!」

「なんで今日のお二人はこんなに喧嘩腰なんですかね?」

「理解できぬ……」

んぎぎぎぎ……！

さつと引いてくれればこつちも引き下がるつてのに、なんだつて今日の幼馴染みは、こんなにあたりが強いかなあ?!

錫杖と聖剣で罅迫り合いをしながら、お互いに笑睨み合い合う私と同胞。
……つて、あ。

「折れたあつ?!」

「ああもう、だから素直に止めなさいつて言ったでしょうに！」

「言ってる場合じゃないですよ、弁償ですよこれ……」

「——ぐぬぬ、同胞あ！お前さんが悪いんだからねえ!？」

「一切引く気が無かったのはお前もだろうが！」

「なんだとおつ!？」

「なにをおつ!？」

「——止めなさいつて言ってるでしょうが!!」

折れた得物を持って罵りあっていた私達を見て、転校生ちゃんが叫ぶ。

途端、皆が騒ぐのを止め、辺りは静寂に包まれた。

……ヒートアップしてた思考が冷めて、次第に状況が呑み込めてくる。……ああもう、なにやっつてんだか私は。

「あー、うん。ごめん、ちよつと頭冷やしてくるね……」

「あ、先輩?!」

「後輩ちゃんは幼馴染みさんのほうお願い。私は部長さんのほう、相手してくるから」

「え、ちよ、転校生さんまでえ?!」

「波乱の展開、なのかなあ?」
「状況が舞い踊るかの様だ」

——近くの手洗い場で、ちよつと水でも被つてこよう。

そんなことを思いながら、私はみんなの輪から離れるのだった。

★ ☆ ☆

「……ああもう、なんなんでしょうこれ。先輩、何をイラついてるんですかね?」

「わからん、この間からずっとああなんだよ。……こっちもどうしていいやら、って感じに参ってるんだ」

後輩の困惑の言葉に、苦虫を噛み潰したような心持ちで答える。

……この間、部活仲間で遊びに行った次の日あたりから、徐々に調子を崩していった感じのアイツ。

今日がそのピークだった、と言われても納得できるほどに、なにかにイラついている様子の幼馴染み。俺も何度か声を掛けていたのだが……その悉くを、なんでもないと躲されてしまっていた。

その結果がこれである。

体を動かせばなんとかなるかと思っていたのだが、どうやら見通しが甘かったらしい。……周囲に余計な負担を掛けてしまっているあたり、褒められた状況ではないだろう。

「んー、なるほどなるほど。……先輩が起因、となると……うーん。こっちでできることは無さそう、ですかねえ?」

「いつもの能天気がどこかに行ってるもんだから、こっちも調子が崩れてる感じ……なんだよな」

「あー……先輩と幼馴染みさん、基本的には一緒にいますもんねえ」

セット運用が基本なので仕方がないんでしょうけど、なんて後輩の軽口に小さく苦笑を返す。

……なんやかんやでアイツとは小学生時代からの付き合いである。

そんなにも長く一緒にいるものだから、相手の変化がこっちに影響してくる……というのも、間違いではないのだろう。

実際、片方が調子を崩すともう片方も調子を崩す、というのは俺達にもよくあることだった。

「……いや、前も聞きましたけど、実は惚気てたりしませんよねそれ？」

「いや、至極普通のこと言ってるだけだろ？」

「……普通？普通ってなんなんでしょうか……？」

とか言ったら、後輩の表情が胡乱げなものに変わっていた。

……いや、なんというか。幼馴染みって大体こんなもんじやないのか……？

「幼馴染みさんのことは置いておいて月は未だ昇る時に非ず。先輩達遅いですねゆえに、戻らぬ日を思う」

「……まあ、確かに。遅いなアイツら」

そんなことを思っていたら、横合いからもう一人のほうの後輩の声。

……なんだかさまじく雑に流された気がしたが、こっちの後輩にそういうアレはないだろう、多分。なので、俺は二人が去っていったほうに視線を向ける。

……確か、手洗い場が向こうにあっただはず。

運動部が暑い日に、思い切り頭から水を被るのに使えるくらいなの、結構な広さの洗い場だ。……頭を冷やしてくると言っていたから、恐らくはそっちに向かったのだろう。

とはいえ、徒歩で何分も掛かるほど離れた場所……ということもない。帰ってくるのが遅いというのは確かな話だった。

……二人で口論でもしているのだろうか？普段ならそんなことあり得ないのだが、今の幼馴染みのイラつきようからすると、あながちあり得ないとも言い切れない。

行って確かめてみるべきだろうか？そう思った俺が、腰を浮かせようとして。

「……ただいま」

「ん、ああ、おかえり」

何故か反対方向から戻ってきた二人に背中側から声を掛けられて、思わず普通に声を返してしまう。……いやなんというか、さっきまでの状況からするとその、普通に声を返すのは……なあ？

だが、当のアイツはこちらに視線を向けていない。……端的に言うてそっぽを向いていた。

まだイラついてるのかこいつ……？

そう思いながらしばらく見詰めていたのだが、こいつは次第にふるぶると震えだして、なんだなんだとこつちが困惑し始めたくらいに夕イミングで、盛大に爆発した。

「うがーっ!!! あーもーっ!!!」

「うおっ!?!」

!!!

突然の大声、突然の髪掻き筆り、突然のしやがみこみ、突然の撃沈。

……突拍子がなさすぎてわけがわからない。

説明を求めて転校生のほうに視線を向ければ、彼女は眉根を寄せながら、くすくすと小さく微笑んでいた。……いや、ホントにどういう状況だこれ？

「詳しくは聞かないであげて。どうせ逃げられないんだから、そのうち話すと思うわ」

「は、はあ……？」

淡い苦笑と共に述べられたのは、今は聞かないであげてという軽い懇願。……向こうで何事か話した結果が、今の幼馴染みの状況……ということなのだろうか？

……いや、なにがあつたらこんな「うぐぐぐ……」とか、「うつそ

「だあ……」みたいな呻き声をあげる機械状態になるんだ……？」

「そう思いながら視線を返すも、見詰める先の転校生は、意味深な苦笑を崩さない。……うーむ。」

「具体的に、どれくらい待てばいい？」

「そうね……演劇祭が終わるまで、かしら。一応、劇そのものは真面目にやるように言っておいたから、ぶり返すにしてもその前後くらいのタイミング……に、なるでしょうね」

「なので、待てとはどれくらいの期間なのか、ということ聞いてみた。」

「答えは演劇祭の終了後、だそうで。……なんか幼馴染みが「そんなこと言ってなかったよさつき?!」みたいな目で転校生を見てたんだが、それに関しては彼女はスルーを決め込んでいた。……いいのこれ？」

「まあ、こうでもしないと、いつまでもうじうじしてるでしょうから。……そもそも今この場でしっかり説明しろ、と言わないだけ有情だと思わない？……ねえ、部長さん？」

「返す言葉もございませーん……」

「転校生の言葉に再度撃沈する幼馴染み。……いやまあ、待てと言われれば待つけども。」

「……いや、なんでこつちを見るんだお前、しかも滅茶苦茶ジト目で。そう言えば、彼女は小さくため息を吐くと、こちらに視線を合わせないままに口を開いた。」

「……ああ、うん。なんでもない、こつちの話」

「なんでも感じるの言い方なんだが……」

「いいから！ややくしくなるから！今はスルーしてお願いだから！」

「ええ……？」

……いやまあ、流したほうがいいなら流すけども。
なんとなく納得のいかない部分の残ったまま、稽古に戻る俺達なの
だった。

☆ ☆ ☆

気を取り直して、部室に戻って台詞合わせである。

得物に関しては、当日までに代わりを用意することで落ち着いた。
そもそも元の得物自体が結構傷んでいたらしく、買い替えるいい機
会だと演劇部の人達は笑っていたんだけど、壊したことも確かなの
で、購入費用を折半することで手打ちとなった。

……ただまあ、これが結構高くてびっくりしたんだけど。

一応お得意様割引とか効いてはいたんだけど、錫杖なんかはあんま
り使われることがないからなのか、元値が高いのなんの。

いや、本格的な舞台用の真鍮製になるともつと高かったんだけどさ
？それにしたって折半しなければ万が飛ぶのか、とちよつと遠い目に
なったんだけど。

……そもそも壊れにくい真鍮製とか鉄製のを借りれば良かったん
じゃないかって？死人が出るわそんなん、付け焼き刃のド素人の演劇
にそんなモノ求めないで下さい、としか言えぬ。

というかプラスチック製のでさえ、ようやく重さに慣れてきた感じ
なのに、金属製の得物なんて、余計に振り回されるだけだつてば。

……まあ、そんなわけなので、本番でも使うのはプラスチック製の
得物になるだろう。今回ののでよく身に沁みただので、打ち合うにして
も慎重にやろう、という反省もセットである。

そもそも論を言うなら、打ち合いの場面なんて入れなきや良かった
だろうって？ごもつともすぎるけど、会話だけで間を持たせられる気
もしないので、正直苦肉の策です……。

「……おい、そつちの番だぞ」

「あ、ごめんごめん。……えっと、『よくぞここまで』からだっけ？」
「まだそこじゃないな、もうちよつと前だ」
「ん、了解」

そうやって考えごとをしていたら、どうにも台詞の順番を忘れていたらしい。

同胞から咎める声が飛んできたので、ここからだっけと聞き返せば、まだそこじゃないと返された。……うーん、上の空だねこれは。

「先輩、まだ調子が悪いんですか？」
「大君、己の在り処を掴めぬか？」

「あー、そういうわけじゃないんですけどさ……」

心配そうにこちらを窺ってくる紡ぎ手ちゃんに苦笑を返す。

……別に、調子が悪いわけではない。ただ、なんというか。……なんといえはいんだらうかこれ？

「……ん、ごめん。こっちの事情はちよつと後回しにするから、気にせず次行こう」

「それでちゃんとできるってんなら、こっちに咎める理由はないけどよ……」

纏めきれていないので後回しにすることを伝えれば、同胞からも心配そうな声が返ってくる。

「別に、体調悪いわけじゃないから。……いや、その……今は良すぎて困ってると言うか……」

「……なにか言ったか？」

「なんでも！ない！……いいから、台詞あわせするんでしょっ」

「??????」

私の様子に、困惑したように疑問符を浮かべる幼馴染み。……ごま

かすように声をあげて、台詞合わせに戻る私達。

転校生ちゃんだけが訳知り顔で微笑んでいたの、あとでなにか罰ゲームでもぶつけてやろうか……とちよつと理不尽なことを考えつつ、部活の時間は過ぎていくのだった。

百合ゲー世界に転生したら祭りはもう目の前の件について

「……はい、ここまで。なかなかいい感じにできたんじゃないかしら？」

「はあー、ようやく完成、かあ」

転校生ちゃんの終了の言葉に、みんなが緊張を解いて相好を崩した。

今は通しの演技の確認も終わって、残すはもはや本番のみ……と
いった感じになっている。

「細かい調整はありますが、細やかなる変異の兆しあれど、一先ずはこれで完成ですね目指す頂はこれにて終い、か」
「結局ギリギリになっちゃいましたね！」

台本担当の紡ぎ手ちゃんがふうと息を吐いて、そんな彼女の隣で後輩ちゃんが愉しげに笑う。

その向こうでは、転校生ちゃんが小道具の再チェックをしながら、それを見ながら、私と同胞は二人して背中合わせに座り込んでいたのだった。

……いや、ほんと、すっごい疲れたわけでした……。

「……いや、間に合って良かったというか、本番前なのにこんなに疲れてるのどうなんだ、っていうか……」

「本番は一回きりだし、全力出すだけだからまだ気は楽かも……いやごめん、正直見に来る人数多過ぎてビビる」

「思い出させんよ……」

正直な気持ちを吐露すれば、幼馴染みはげんなりとした様子で空を仰いでいた。

トランプルメイカー
……某先生の謀略により、公開範囲が校内から校外にまで広がった演劇祭。

学校の宣伝にもなるということなのかはわからないが、前年度までの地味なそれとは一線を画する、大々的な宣伝が行われた結果、結構な人数の観覧希望者が集まったのだ。……少なくとも、前年度まで一般に公開していなかった、素人の演劇を見るために集まるとは到底思えないくらいの人数が、だ。

なんだろう。この学校は、演劇祭を文化祭クラスのメジャーな催し物にでもしたいのだろうか……？

とは言え、たまったものじゃないのは参加する生徒達だ。

全校生徒が参加する義務がある、小学校などで行われる学芸会とは違い、演劇祭は希望した生徒が自主的に参加を決める、自由参加型の催し物である。

その参加の仕方についても、シナリオ提供だけをして演劇自体には関わらない——という形から、仲間を募って実際に舞台上で演技を試みたり、はたまた劇で使われる音楽を演奏するためだけに参加してみたりなど、その形式は結構多岐に渡っている。無論、あくまで観客側にいる——というのも、一種の参加手段であったりする。

まあ、前年度まではしよせん内輪向けのものであったので、文化祭のように参加者全員が気を張ってやり遂げようとする……と言うほどのものでもない、わりと緩い催し物でもあったわけなのだが。

ところがどっこい、今年の演劇祭は文字通り『祭り』である。

外から見に来る人がいる以上、前年度までの緩いノリは期待できない……とも言えるだろう。

……いやまあ？個人的には別に、今回もゆるーくやってもいいんじゃないか……とは思うんだけど。

その場合、衆人環視の中で下手な演技をして、結果として大恥を掻くはめになる……というリスクを背負う必要性があるかも知れないわけで。……まともな人ならそういう無用なリスクは取らずに、普通に演技するんじゃないかなーと言うか……。

そういうわけなので、去年までのさざ波レベルから突然大波レベル

の大騒乱にぶち込まれることになってしまった、哀れな一般参加者生徒達は。体制が変わってからの数週間を、てんやわんやの大騒ぎをしながら過ごすはめになっていたのでしたとき。

……原因がどう考えても某先生（と、それによって参加が決まった生徒会と文芸部）のせいなので、ご愁傷さまとしか言えねえ……。

まあ、私達文芸部も巻き込まれたようなもので、不満とかわりとありまくりなんだけどネ！……あの教師絶対いつか寝首を掻いてやるぞ……。

「まあ、やれることはやったわけだし。あとは野となれ山となれだー」「やけっぱち過ぎるだろ……、いや今の疲労具合じゃそうもなるってのはわかるが……」

「はははは、気を詰めるだけ損だぜ同胞あー」

「お前は気を抜きすぎなんだっての、ったく……」

うだうだと語り合いながら、空を仰ぐ。

—— 天気は変わらず快晴。

屋内だから直接は関係ないにしても、劇当日はいい日になりそうだな、と思う私なのだった。

☆ ☆ ☆

「そーいうわけで、壮行会じゃーい！」

「おぉー！」

とりあえずの下準備を全て終え、近くのカラオケ店に繰り出し、演劇祭に向けて英気を養うことにした文芸部。

個室の中に入った私達は、すでに思い思いのままに好き勝手行動開始していたのでした。

……こういうバカ騒ぎって若い内にしかできないから、やりたいのならじゃんじゃんやるべきだよね、っていう感じかな？

「なんだかノリが大学生染みてる気がしないでもないねえ?……実際、大学生とかになったらどうなるんだろね、私達」

「そりやまあ……酒でも入るようになるんじゃないか?」

「今の時点で、わりと酒入ってるような気がしないでもないテンションなわけだが?」

「……否定はしない」

将来どうなっているんだろう?みたいな軽い私の言葉を受けて、適当に答える幼馴染み。

……直後にこっちが返した言葉で、スツと視線を逸らしていたのだけれど。まあ、基本的にはハイテンションだよ、私達。

その向こう側では、後輩ちゃんが流行りの曲を熱唱している姿が見える。……さつくりといい点取ってるあたり、やっぱりハイスぺ組だねというか……。

「さあつむちゃん! なにか歌いましょうよ!」

「うえっ、私も!え、えっと……それじゃあこれを
「私も参列せよと?え、えっならば我が声、聞き届けるが良い」

「……古くて渋い……?!」

その横で後輩ちゃんに絡まれていた紡ぎ手ちゃんが、若干遠慮がちに選んだのは……わ、古い曲だ! 最近の若い子は絶対知らないぞ、つて感じの渋い曲だ! うーむ、紡ぎ手ちゃんはい趣味してますなあ。

こりや負けてられないぞ、次に歌う曲を決めなくては! つてな感じに機械に手をのばす私。……あ、でもその前に喉を潤しておこつと……。

「……すっかり元気だな、お前」

「ぶふうっ!? げほっ、うへっ、いや、いきなりなにつ!」

「お、おう。……いやまさか、そんなにびっくりするとは思わなくてだな……?」

そうして飲み物に口をつけたタイミングで、同胞が話を蒸し返して
くるものだから、思わず飲み物が気管に入ってむせてしまった。
幸い口につけたばかりだったので被害は大きくなかったものの、
ともすれば窒息してたぞ同胞あつ?!?…と睨んであげたら、流石にタ
イミングを図り損ねた、と認めて小さく謝罪をしてくる幼馴染み。
…んもう、仕方ないんだから幼馴染み君は、みたいな感じで無礼
を許して選曲に戻る私。

「いや待て」

「……………つち!!」

……………を、逃すことなく再度追求してくる同胞。

つち、都合よく騙されてくれてればいいものを……………!

仕方がないので、ちゃんと幼馴染みと視線を合わせる私。

妙に気恥ずかしいので、あんまり視線合わせたくないんだけど……
視線を外すと余計に勘ぐられるので、ここは我慢だ我慢。

「いやまあ?心配事は後に投げたから?今さらうだうだしてても仕方
ないっていうか?」

「…………別に悩み事が解消された、ってわけじゃないんだな」

「…………いや、まあ、そうだけでも……………」

凶星を突かれて言葉に詰まる私。

…………と言うかだね、幼馴染みが至極真面目な顔でこちらを見詰めて
くるものだから、ちよつと視線を外したくなってしまうんだけどどう
すればいいのかなこれ?

…………いや、その、別に心配されるようなことじゃないと言うか、個
人的な問題だと言いますか、ね?

そう伝えると、眉根を寄せて、悲しげに彼は視線を逸らすのだ。

「そっか、俺じゃあお前の問題を、解決してやることはできないんだな……」

「ああいやそうじゃなくってああああああもおおおお！これ絶対転校生ちゃんの入知恵でしょおおおおおっ!!?」

どう考えても同胞らしくない、持って回った言い回しに、元凶だろうと思われるさつきから潜伏ハイドして存在感を消している転校生ちゃんのを探す。

……居たぞ転校生魔女だ！こいつ端っこで存在感消してやがった!!

「落ち着きなさい部長さん。争いは悲しみしか産まないのよ?」

「おおうねーちゃん、儂の目え見て話さんかいワレエ?争いとうないんなら火の粉ばら撒くん止めえ、ていつも言うてるやないけおおん?」

「落ち着け、マジ落ち着けお前」

転校生ちゃんに詰め寄って責め立てていると、後ろから肩に置かれるのは同胞の手。……ええい離せ同胞！こいつは、こいつだけはここで処断しなければいけないんだあー!!!

……ソウダゾウルシチャイケナインダゾー。ゴマカシテナイヨー?
?

(……うまくごまかしたものね)

(こいつ……さては見抜いていやがるな……?)

(ちくわください)

(誰だ今の)

(私ですよ!)

(!?)

落ち着けと繰り返す同胞を尻目に、転校生ちゃんと目で語り合う私——と、割り込んでくる後輩ちゃん。

……いや、別に無理して入ってこなくていいからね後輩ちゃん？
……というか寧ろどうやって入ってきたんだ今の？
まあいいや。

なんとか幼馴染みをごまかすことに成功したので、喜び勇んだ私は
マイクを手に立ち上がる。

選曲するのはとにかく激しいやつ！なんというかこう、全部吹っ飛
ばしたくて仕方がないんだ今の私は！

「わあ、吹き荒れる颯風、大海を行くか……」

「色々ともってそうな歌声ですね！」

「うるさいぞそこおっ！そして私の歌を聞きやがれええっ!!」

「ごちゃごちゃ言ってる後輩ズにシャラップと返し、ガガツと歌いき
る私。……点数はさほど出なかったけど、気分転換にはなったと思
う。」

……喉が乾いたので再び飲み物に口をつけると、今度は同胞がマイ
クを握って立ち上がるのが見えた。

「ぶふうっ!!」

「先輩がまたむせた!」

……そうして飛んできたのが、魔女っ子系の歌だったのでまたむせ
る私。……なんだってのさもおーっ!?

☆ ☆ ☆

「ああもう酷い目にあつた……」

「お、お疲れさまです
「大君も厄日よな……」

お手洗いで顔と手を綺麗にする私と、付き添いで付いてきてくれた
紡ぎ手ちゃん。

……そういえば二人きり、か。いい機会なので、アレについてお願いしておこう——そう思いながら彼女に声を掛ける私。

「紡ぎ手ちゃん、ちよつといい？」

「む。如何様か、大君？」

そうしてとあることについてお願いをすると、彼女は快く引き受けてくれた。

「大君よ、……なんでも……なにを求め急いでいる？」

「んー……確かめたいことがあるから、かなあ？」

紡ぎ手ちゃんの疑問に苦笑を返す。

……実際はもうほとんど解決しているようなものだけど。最後の一押しが欲しい……と言った感じだろうか？

よくわからないと首を捻る紡ぎ手ちゃんに微笑み返し、連れ立ってみんなのいる個室に戻る。

それからは特に大きな騒動もなく、私達はカラオケを堪能するのだった——。

百合ゲー世界に転生したら祭りはみんな燃えていた件について

「来たぞーっ！演・劇・祭っ!!」

朝の教室、登校して直後のこと。

黒板の前・教卓の後ろで、うちのクラスのお調子者の男子生徒がわはー！と騒いでいた。

その周囲では男女入り混じった生徒たちが、彼ほどではないものの興奮したように会話を続けていた。……クラス単位での参加はしていないので、今回の彼等は基本観覧者側である。

だからなのか、基本的には祭りが楽しみで仕方がない、といった感じのお気楽そうなムードであった。……参加者側であるこつちからしてみれば、いい気なもんだなお前ら？感がすごいけどね！

「そういえば、うちのクラスは二組ほど参加者側なのがいるんだっけ？」

「あーそうそう、文芸部と野球部じゃなかったっけ？」

「文芸部はなんかファンタジー的なやつで、野球部は……そうそう、バラエティ的なのをやるとかなんとか言ってたよ？」

「……いや待て、野球部のほうは大丈夫なやつなのかそれは？」

主にエグいのかヤバいのか『し あ わ せ』とか飛んでこないだろうな、的な意味で。

……思わず脳内でクラスメイトのツツコミに頷いてしまった。

野球とバラエティの組み合わせるのは、なーんかこう不穏な感じしかないんだよなあ……？うっ、メロンパン入れ……！

まあ、まだ見ぬライバル達については放っておいて。

昨日のうちに配られた演劇祭のしおりをパラパラとめくり、タイムスケジュールの確認をする。

……文芸部の出番は、最後から四番目。
全部で二十の劇が行われる予定なので、頭から数えると十七番目の
出番……ということになる。

「……おいおい?」

「なんか違う十七が混じってないか……?」

おっと独り言を幼馴染みに聞かれてた。

……いや、パツと思いついた十七関連がそれだったものだからつ
い、ね?

小さく苦笑を返しつつ、ぎつとしおりを眺めてみる。

……ふむ、一つ目が『寄せ集めブラザーズ』の『寄せ集めでもハッ
ピー!』。……コメディドラマ的なやつ、なのかな?

二つ目が『吹奏楽部』で『響けハーモニカ』。……青春ドラマなの?
あと吹奏楽部なのにハーモニカ以外なしなの?!

三つ目『サッカー部』で『格言』……まさかの落語だと……?!

四つ目『水泳部』で『泳げたこ焼きくん』……怒られないこれ?

五つ目『教師48』で『教卓から下ろさないで』……なんか色々
混じってる、っていうかせんせえーっ!?

六つ目は『野球部』で『実践野球劇』。……危険な匂いしかしません
ねこれは?

……みたいな感じで、みんな個性的な——っていうか個性的すぎる
演目で勝負を仕掛けてきている感じだった。……うちめっちゃ真面
目なやつなだけでこれ大丈夫かな……?!

と、言うのも。今回の演劇祭、折角校外からの観覧者を募るのだけ
らってことで、どの演目が一番面白かったか、投票して貰うようにな
っているのである。

……いやまあ、別に一位にならなきゃダメだ、なんてことはないん
だけど、折角参加するんだったら頂点目指したいじゃない?

実際に取れるかどうかは別として、それくらいの心構えで本番に望
むのがいいんじゃないかなって。とはいえ、

「多分本命は生徒会長さん達のやつ、だよねえ……」
「気合いの入りが異次元だったからな」

演目の一番最後、トリを飾るのは『生徒会』。

——演目『円卓の興亡』。……現役の劇団員からの指導まで受けたというそれが、今回の大本命なのでした。

☆ ☆ ☆

「えー、本日は当高校主催の演劇祭にお集まり頂き、本当に——」

「……校長先生の挨拶って、なーんでこんなに眠くなるんだろうね？」
「……静かにしとけ、怒られるぞ」

演劇祭の始まりを告げる校長の挨拶を聞く私達。

なお、この段階で一応一般公開は始まっているのだけど、外部観覧者は数える程度しかない。……物好きなのか、はたまた真面目なのか。

視聴者的には開会宣言なんて一番つまらないもの、だったりしないのかな？

少なくとも私は選手宣誓とかは飛ばしちゃうほうだけど。……いや、選手側でもないのにスポーツへの熱い思いとか共感し辛いとか……。

まあ、私の話は置いて。

校長先生の話が終わると、いよいよ本番の開始である。

舞台上上がらない生徒達は、こうして席にいるのが基本になる。

無論、お手洗いのために席を立つとかは許されてるけど、特に用事もなければ座ったままであることを求められる。

……劇が嫌い、とかでもなければそう苦になることもないと思うけど、今の御時世的にこの指示は意外と強気だなー、と思わなくもなかったり。

行動を縛ると反発する人、つてどこにでもいるじゃん？よく反対の声とかあがらなかつたなーと言うか……。

まあ舞台上がる側が、強制じゃなくて自主的な参加なので、最初からある程度面白くしようという熱がある……というのも理由なのかも知れないけれど。見てて面白いのなら時間も忘れる、というか？

「おっと、分析してる場合じゃないや。それでは見せて貰おうか『寄せ集めブラザーズ』、君達の演技というものを……」

「いや、どういうポジションなんだよお前……」

ふふふ、私を楽しませることができかな諸君。

因みに私は箸が転がるさまでも、時と場合によつては普通に笑うぞー！……笑いの沸点が低すぎる？ノンノン、笑いというものに寛容なんだと言つて欲しいね私は。

そうやって同胞とぐだぐだしながら、劇の始まりを待つことしばし。

「——これより、上演開始となります」

「おお、本格的」

「いやだから静かにだな……」

館内の照明が落とされ真っ暗闇になると同時に、アナウンスで劇が始まる事が告げられる。

暗闇の中、一筋のスポットライトが壇上を照らし、舞台を隠していた緞帳が上へ上へと引っ張られていく。

——幕の向こう、舞台の上に立つのは三人。

彼等は一様に右手になにかを掲げ、円陣を組むように集まり、共に天を見上げていた。

幕が上がりきるまで微動だにしなかった彼等は、紐を巻き取る鈍い機械音が消えると同時に、大きく声を張り上げる！

「我ら、生まれし時も土地も違えども！」

「同じ志のもと、ここに集いし兵つわものであるなれば！」

「願わくば、同じ戦の場にて、共に終わりを迎えんことを！」

「乾杯っ！」

掛け声と共に鳴り響く、小気味良い金属音。

……ありやタンブラーか？中身はジュース？いやいやそれよりも
だな？

(ブラザーズって、桃園のほうかいっ?)

まさかの三国志ネタであった。……なんだ、ここから大演義でも始
まるのかい？

そんな観覧者の思いを知ってか知らずか、舞台上に立つ三人のうち
の一人が、突然に顔を強張らせて苦しみだした。……え、なにこれど
ういうこと？

「掛かったなアホめが！だあーれがお前なんかと同じ戦場で死にたい
と思うかっ！」

「ぐ、まさかお前、お前のカミさんに『最近アイツ、部下の綺麗系の武
官と仲いいんですよー』ってバラしたのを根に持って……!？」

「違うわっ!?!っーかお前かよアレバラしやがったの!?!俺はあくまで愛
でていただけだつてのに、滅茶苦茶いい笑顔で『ガンバ♪』って言わ
れたんだぞ!?!わかるかあのときの俺の気持ちがつ!!！」

「うーわっ、まさかの拳兵前から後宮普及の大紛糾すか？急に羽振り
よくなったからどうしたのかと思ってたら、そんなふしだらな人だつ
たとは俺驚愕っすよ」

「ちーがーうーわーっ!!！」

お、おおう。まさかの仲間割れ……。

桃園って言えば、切っても切れないくらいの固い結束の象徴だつて

のに、こんな風に改変するとは流石高校生、恐るべし……。

唾然とする私達の前で、『寄せ集めブラザーズ』達の演義は続きました。

☆ ☆ ☆

「……楽しかったんだけど、なんかこう……すっごい疲れたね……」
「裏切ったと思ってたら、そのときの裏切りが後々必要な行動だった……とかいろいろあったが、正直劇で見るにはちと濃厚すぎたな……」

お昼の時間なので教室に戻ってきた私達。

教室内を見渡せば、みんな似たような感じで机に突っ伏したり、もそもそと昼食を摂ったりしていた。

……コメデイだと思ってたら巨悪と戦う冒険ものだった『寄せ集めでもハッピー!』に始まり、ハーモニカ多重奏で人々を「なんだこれは……?」の渦に叩き込んだ『響けハーモニカ』。

ほぼほぼ有名なあの落語番組の構成で、ひたすらサッカーの格言やら面白話を、矢継ぎ早に叩き込んでくる『格言言』。

元ネタの鯛焼きみたいに店のおじさんと喧嘩して海に飛び込んだら、似たような境遇のイカ焼ちゃんやら、海の中でゆらゆら揺れてたカツブシくんやらを巻き込んで、海の芸能界でトップスターを目指すという、脚本家の狂気が垣間見える『泳げたこ焼きくん』。

教育の闇に切り込み、そこで戦う教師達^{戦士}が戦いを終え、そのスーツを脱ぐまでを描いたスペクタクル巨編『教卓から下ろさないで』。

そしてお昼前のトリを飾ったのが、戦車に乗りながら野球・バスケットしながら野球・インド張り^{バリ}に踊りながら野球・終いには神と世界の行く末を賭けての野球……と、生きてる内にこんなに野球派生を見ることなんてないだろう……ってレベルでありとあらゆる全てが野球に関連付けられる、どう考えてもバラエティじゃなくてホビー系どころかこれって感じの『実践野球劇』であった。

結論から言わせて貰うと、全部胸焼けがするレベルで濃ゆかったです。

……好みが激しく分かれる感じのものばかりだったので、多分投票上位にはならないだろうけど。

なんとというかこう……パッケージ化したらちよくちよく売れそうな勢いと熱さはあったと思う。

「うー、なんかご飯の味がしないよう……」

「感情が飲み込めてない、つてやつだな。……いろいろぶち込まれて情緒をシェイクされたようなもんだから、まあ仕方ないが」

幼馴染みからお茶を受け取って一息つくと、ようやつと精神が落ちて着いてきたような気がする。

……とはいえ、このノリを繰り返した後に自分たちの番というのは、わりとキツそうな気がしてならないんですがそれは。

「そういえば……いつもの猫かぶりじゃないんだな？」

「……それ今聞くんだった……いや、転校生ちゃんと被るし、そろそろ止めようかなーとは思ってたんだよ？」

そうしてむむむと唸っていたら、幼馴染みから口調への指摘が飛んでくる。

……まあ、今までは教室内だとちよつと気を張ってたけど。……いろいろ考えた結果、もういいかなーというか？みたいなことを伝えれば、同胞は微妙に心配そうな顔になった。……いや、別に悪いことがあったとかじゃなくてね？

「それも演劇祭のあと、か？」

「あははは……そういうことにしといて」

ため息を付いて追求を止めてくれた幼馴染みに、心の中で手を合わ

せながら、弁当の処理に戻る私なのだった。

百合ゲー世界に転生したら魔王と勇者はおねシヨタ
だった件について

「うーむ、午後からも濃ゆいなホント……」

「素直に見てるだけじゃなくて、こっからは自分達の準備に時間を割り振れるから、ある程度はマシだろうけどな」

午後からのタイムスケジュールを見て「うわ……午後からも濃すぎ……？」つてなってる私に、幼馴染みが気にするなど声を掛けてくる。
……うん、まあ分かってるんだけどね？

「本番が近付いてきて、今さら緊張がががが」

「まさかの本番に弱いタイプかお前」

わざとらしく緊張したように震えれば、同胞が苦笑を返してくる。
文芸部までの道のりを、そんな感じに会話をしつつ進む。

——ああ、そろそろなんだな、なんて。

いい加減覚悟決めなきやなあ、そんな思いを秘めながら。
決戦は、もうすぐだ。

☆ ☆ ☆

「——続きまして、『文芸部』の『聖魔の秘した祈り』の上演を行います」

「……つ、ついに本番ですよ！」

「落ち着いて肩を揺らさないでー!!
盟友落ち着け、凄く落ち着け」

「まあ、緊張するよりはマシだけれど……全く。二人はどう？服が重
いとか得物が重いか今さらになって震えてきたとかない？」

「気分的にはもうどうにでもなーれって感じなんで大丈夫」

「それ本当に大丈夫なのか……？」

後輩ちゃん作成のお手製魔王&勇者衣装を纏った私達。

ナレーションを後輩ちゃんが、王様役と背景転換の総指揮役を転校生ちゃんが。

最後に、舞台袖から劇全体の進行を確認する紡ぎ手ちゃん。

……一応荷物運びなどは演劇部から人員を借りてるので、私達だけで全てが進行できるわけじゃないけど。

それでもまあ、やるべきことは決まってる。

「はいみんな、あれやるよあれ!」

「あれっていうと……」

「あれですね!」

「出番前の気合入れと言うわけね」

「我等の心い、今さらながら緊張してきましたを一つに纏めるか」

みんなで肩を組み、円陣を組む。……少年漫画かな? ってツツコミは横に投げ、声を上げる。

「行くぞおっお前らあっ!!」

「!!「おーっ!!」!!」

さて、始まりだ。行ってこい同胞、しばらくお前さんのソロターンだぜ!

その背を押すように叩けば、彼は一瞬だけこっちに笑みを返し、舞台の上に駆けていった。

☆ ☆ ☆

「——ここではない場所、ここではない世界。人々と、魔物。決して混ざりあうことのない二つの種族が、終わらぬ闘争を続けている大地。——彼の者は、その世界の小さな村に生まれ落ちた」

簡単に世界観の説明をしている後輩ちゃんの声をBGMに、簡単にこの物語の解説をしていこうと思う。

物語の舞台である世界は、わりとよくある感じのファンタジーワールドだ。

他と違うことがあるとすれば、どっちの種族もやけに殺意が高いということだろうか？

敵種族の子供を捕まえて人質にするなんてのは朝飯前、どこぞの小鬼みたいな肉盾アタックから、果ては勝利のために自軍ごと巻き込んだ魔法爆撃も必要であれば普通に飛び交う修羅の国。

それが、物語の舞台となる世界である。

……なお、詳細な描写はどう考えても年齢指定が入るので大幅カットである。

口頭で「この世界エグいでー」くらいの軽さにスケールダウンしてあるので、小さなお子様にも安心だ！……安心か？

まあ、そんな感じに屍山血河が死屍累々の血湧き肉踊るどつたんばつたん大騒ぎなこの世界、上層部は意外と腐ってなくて、流石に今のままだとヤバくね？となったわけである。

そこで産み出されたのが「魔王システム」と「勇者システム」の存在。

雑に言えば「魔物側は魔王が全部悪いので、勇者に倒して貰って手打ちにしようぜイエーイ」である。……本当に上層部腐ってないのかこの世界？

なお、この場合の上層部とは神様のことである。……作者じゃねえか、つまり私じゃねえか。……てへ♪

なお紡ぎ手ちゃんに関しては、私の原案を広げてくれただけなので無罪です。

寧ろめっちゃマイルドに直してくれたので、こちらには感謝しかありません。……添え物だったはずの魔王と勇者のラブロマンスが、かなり前面に押し出されるはめになったがな！

まあ、そんなわけで。

勇者として選ばれた子供が、村や国、神様達から色々と教わり成長していく中で。

ある日、彼は森の中に佇む一人の女性と出会う。
切り株に腰を駆け、空を仰いで歌を紡ぐ、美しい女と。

『貴女は、誰ですか』

少年が声を掛けると、彼女はそこで初めて他人の存在に気付いたように驚いた顔を浮かべて、少年のほうに悪戯がバレた子供のように苦笑しながら振り向いたのだ。

『おつとすまない。驚かせてしまったかな？』

なんて風に惚けながら。

……いやまあ魔王様なんですけどねこの人。

なんでここにいたのかって言うのは、もちろん勇者を視察しに来たから。

幾度も自身を打ち破った勇者、その生まれ変わりを、戦いとは関係なく見てみたかったからやって来たわけである。

この時点の勇者は知り得ないことだけれど、実はこの魔王と勇者の戦いというのは結構な回数がすでにこなされていて。

人の魂を輪廻させている関係上、記憶に関してはほぼ引き継がない勇者側に対し、魂の強度的に問題のない魔王側は全部覚えてまますい生を迎えていたのです。

……なお、その辺りは神様は知らない。こいつ私じゃないじゃん
(突然の豹変)

そんなわけで、魔王様からすると顔見知りなんだけど、勇者からすると謎の綺麗なお姉さんである二人の交流が、しばらく続くわけです。

剣技・魔法・体術といった戦闘技能。

炊事・洗濯・家事といった日常技能。

勉強やら遊びやら、あらゆる学びの全てを、勇者は魔王からも学んでいくのである。……なんや唐突なおねシヨタやね？

そうして立派になった勇者君。

いよいよ城の王様に呼び出されて、魔王討伐の旅が始まるのです。そしてなんと、綺麗なお姉さんも彼の旅に同行するとのこと。

なんでも「流石に一人だと危なっかしいからね」という理由なのだから。

そんなわけで、勇者と魔法使い(?)の二人旅が始まりました。

魔王の居城は遠く、途中で様々な問題を解決しながら二人は旅を続けます。

太陽を隠してしまった悪戯好きな悪魔を懲らしめたり。

魔物の子供を売り捌いていた悪徳商人を叩きのめしたり。

魔物なんて排斥してもええやろと騒ぐ町民をぶん殴って説教したり。

それに乗じて攻め込んできた四天王の一人をぼっこぼこにしたり。

まあ、そんな感じに二人は旅を続けるのです。

そんな旅の途中、森の中で野宿のために火の番をする勇者に対して、魔法使いは問い掛けます。

『これまで人も魔物も平等にぶん殴ってきたけど。魔王の城に着いたらどうするつもりなんだい?』

『できれば話し合いたい。話し合いでどうにもならないんなら、流石に戦うけども』

どっち付かずのような、はたまたどっちも手に入れようともがいているような。

そんな勇者の若干の苦悩が見える返答に、魔法使いは小さく笑みを浮かべて言うのです。

『儘ならないものはあるだろう。それでも、選ぶしかないんだよ』

『わかってるさ、そのときはちゃんと選ぶよ』

世間の厳しさを語るような彼女の言葉に、小さく不貞腐れたような返事を溢して。

それからまた、二人は旅を再開します。

歩いて、走って、飛んで、眠って、落つこちて、這い上がって、また歩いて。

そんな風に進みに進んで、ようやくとたどり着いた魔王の城。

——けれど、周囲に魔物の姿はなく。

勇者は不審に思いながら、城の中を進みます。

進んで、進んで。

魔王の部屋は、もぬけの殻。

なにもなく、誰もおらず、音も聞こえず。

困惑する勇者が、あたりを見回すと。

魔法使いが、こちらを見詰めていた。とても、哀しげな瞳で、見詰めていた。

『さあ、最後の戦いを始めよう』

☆ ☆ ☆

『魔王だなんだと祭り上げられているが！その実、吾は人身供物に他ならん！』

突然本性を現した魔法使い——魔王が語るのは、「魔王システム」の要。

要はこれ、世界全ての魔物達から魔力を集めることにより、魔王という存在を絶対的な存在にしているわけなのですが。

逆に言うと、魔王というのは世界中の魔物達から魔力を奪っているのでもあるわけでした。

……即ち、力を持ちすぎている者達を平均して弱体化させることで、上位者達の驕りや増長を強制的に挫くためのモノなのです、これ。

流石に上下関係全てを地ならしするようなレベルではないのですが、強制的に全体のレベルを四分の一にして、削れた分のレベルを魔王に加算する……みたいなものはあるわけで。

そこまですること、ようやく「話を聞いてくれる」くらいにまで、魔物達の態度を軟化させることに成功したのです。

とはいえ、レベルというのはカンストしてなければどこかで上がるもの。

ゆえに、また闘争心が高まる頃——即ち世界に闇が訪れしとき、魔王は復活せざるを得ない状況に陥るのです。

で、勇者のほうも似たようなもの。

肥大化した人の欲——よりよくありたい、もっと幸せに生きたいといった思いを、「打倒魔王」として聖剣を核に集めて、魔王の持つ「徴収した莫大な魔力」とぶつけて対消滅させる——、それが勇者の役割。なので一応聖剣があれば、勇者がいなくともどうにもならないわけではないのですが、流石に剣しかない信仰も集め辛い……ゆえに担い手としての勇者が求められるわけでして。

簡単に纏めますと。

世界の平和のために、余分な欲と力を捨てる儀式のための供物。

それが、この世界における魔王と勇者の役目なのです。

世界を救うため。

確かに、勇者が歩んできたのは——これから歩むのは、世界を救うための道。

けれどそれは——ずっと共にいた、大切な人を必ず殺さなければならぬ道。

何故なら、そうしなければ魔王が集めた魔力は、いつかその身に留めておけなくなつて逆流し。

強大な敵を見た人類は、恐れや惑いから必ず「相手を滅ぼしたい」という欲を抱き。

そうして、世界は滅ぶのでしよう。

勇者は苦悩の末、激闘の末。

魔王に致命傷を与えます。

相殺された闇と光は天に登り、世界に恵みをもたらす雨となるでしょう。

もつとも。勇者は今、雨に打たれているようですが。

『悔やむでない、勇者よ。吾とそなたは殺し合うために出会い……その出会いの先に、吾の滅びという結末があった……それだけのことなのだ』

『でもよお、でもよお……っ！』

互いの血で染まり尽くした防具は、最早その用途を果たせぬほどに粉々で。

腕の中に抱いた愛しき人の吐息は薄く、その灯火は今にも消えそう

で。——それが己の業であるということが、彼の心を苛み続けている。

『……全く、今代の勇者は余計なことを背負いすぎるといえるか……では、一つ約束をしよう』

『……約束？』

雨に濡れたままの愛しき男に、彼女は微笑みを浮かべながら言う。

——魔王とは、システム。

ならばここで滅びようとも、自身は再び蘇るだろう、と。

『……また、殺しに來い。何度でも吾は立ち塞がろう、立ち塞がり続けよう。その度に、こうして語ればよい』

『——そうするしか、ないのか』

……どこまでお人好しなのか、この男は。

彼女はまた笑みを深めながら、男の髪を撫でる。

『他の誰にも吾は殺されてはやらんぞっ。』

『……ああ』

そして、私は。最後の言葉を、彼に問う。

「……私が人になっても。獣や、鳥や。男と女、はたまたどちらでもないようなものや。貴方より年老いていたり、貴方よりも若く未熟であったり。もはや、なにかしらの形を保てなくなっていたとしても。……貴方は、私を殺^愛してくれませんか？」

「――」

これは、台本に無い問い掛け。

ゆえに、彼は一瞬だけ思考を止めて。

「――必ず。お前がどんな姿になっても。お前がお前であるのなら、必ず会いに行こう」

「――そう、ですか」

「会いに行つて、」

「え？」

「――いつか、また旅をしよう」

――。

あーいや、あれだ。……ホント、バカだな私は。

込み上げてくる笑いを抑えきれず、大声を上げる。

「ははははっ!!ではさらばだ、我が愛しき勇者よ!我が運命よ!」

「ま、魔王……っ!?!」

そしてそのまま首をがくり。

目蓋を閉じて、力を抜く。……いや、一応まだ演技中なんでね?

そんな雰囲気を感じた同胞が、空気を読んで顔を伏せ。

舞台袖で紡ぎ手ちゃんが呆然としていた様子から復帰して、慌てて

みんなに指示を出しているのを薄目で確認。

上から緞帳が降りてきて、私達の姿が隠れきってしまうのを確認して。……ようやくと、一息つく。

一息ついて、こちらを抱き抱えたままの同胞と目があった。

「さっきのは……」

「あと、終わったあとで……っかい加減離して貰えるっ?」

「おうっ!? すまん」

いや、なんというか。……ちよつと心臓に悪い。

そんな感想を嘔み潰しつつ、立ち上がって舞台袖に下がる私達。

劇のほうは、いい感じに後輩ちゃんが締めてくれたようだった。

百合ゲー世界に転生したら仮説と現実と祭の終わりの件について

シミュレーション仮説、というものを知っている？

雑に説明すると、人が生きている世界は全て作り物シミュレーションである、とする仮説。

シミュレーテッド・リアリティという呼び方で知った人というのも多いかもしれない。

……そうそう。その『親しみを込めて呼ばれそうな人』から知った、って人が多いんじゃないかな。

——自分の生きる世界は作り物、だから自分も作り物なんじゃ、みたいな自己否定の論理。

もしくは、作り物の世界で生きているのだから、他人は全て作り物、そこに意識なんて存在しない——みたいな論理。

……まあ、基本的には錯覚で片付けられるような、とある時期の子供が好きそうなやつ。それが、シミュレーション仮説というものだ。

なんでそんなもののお話をしたのか、と言えば。無論、私がそれを罹患していたからだったりする。

……いやいや？どっかの人みたいに、全能感とかからそうなったってわけじゃなくて。っていうか、そもそも正確に言うなら私が罹患していたわけじゃなくて。

あー、うん。前世のね、俺が罹患してたのよ、これ。

……なんでそんなことになったのか、つてのは聞かないでね？別に対した理由じゃないし。寧ろ阿呆かって前の私俺を蹴っ飛ばしたくて仕方なくなるからアレだし。

まあ、前世の私俺がそれを信じてた、というのは事実。で、こっちに転生してからしばらくの間の俺私も信じてたつてのも事実なわけよ。この世界は作り物なんだー、つて。

……いやまあ？勝手に斜に構えてたってだけで、別に他の人を蔑ろにー、みたいなことは考えてなかったし、やりもしなかったけどさ。

代わりに——ある意味、自分を蔑ろにしてたのかな。

別に死んだ時に、神様とかに出会ったりはしなかったけれど。

だからこそ、前世で悟ったつもりのまま死んだ私を、アイツらは馬鹿にしてるんだろう——って感じたから。

……もう一度、この気持ちのまま終わってやろう……みたいなの？

いや、正直あの頃の気持ちを思い出せと言われても、よく思い出せないっていうか、思い出したくないというか……。

まあ、うん。

だからあの時期の私は、基本的にトゲがあっただよね。

本来ないはずの二週目に突然放り込まれて、イライラしてたのかも。……それで生徒会長さんを、あんな風に思い詰めさせてたっていうんだから救えないよね、私ってば。

——えっと、脱線してるから話を戻すと。

小学校卒業前くらいまで、私は痛い子だったってこと。

それがあるきっかけで治った——というのが、重要な話なわけだ。

☆ ☆ ☆

「あるきっかけ？」

「あー、その、うん。……なんというか、えっと……」

いつも饒舌な——というかさつきまで饒舌に過ぎるくらいだった幼馴染みが、何事かを言い淀んでいる。

言いたくない——というよりは、言うのが恥ずかしい——というよ
うな感じで、そのまま眉根を寄せてあー、とかうー、とか唸っている
幼馴染み。

……なにをそんなに迷っているのだろう？そう俺が不思議に思っ
ていると、

「その……同胞が、きっかけ」

「俺が？」

幼馴染みは、俺を右手で指差して、左手で顔を隠しながらそう告げた。

……左手の隙間から覗く幼馴染みの顔は、ほんのり赤い。どうやら、よくわからないが照れているらしい。……いや、照れていることに対して、憤っているようにも見える。

「作り物だと思っていた世界で、自分達は作り物なんかじゃないんだって、最初に示したのは——あー、同胞だったってワケ」

「はあ、……よく覚えてないけど、そうか」

「覚えてなくて良いっていうか思い出さなくていいからっ、こっ恥ずかしいっ」

「は、はあ?」

「いいからっ」

なんだかよくわからんが怒鳴られてしまった。……いやまあ、怒っているというよりは、単なる照れ隠しなんだろうが。

彼女は真つ赤な顔のまま、話を続けていく。

「……まあ、シミュレーション仮説に関してはそれで終わり。——とは言えなかったって言うのが次の話」

「……と、言うって?」

こちらの問いに、幼馴染みは小さく息を吐いて、天井を仰いだ。……その姿は呆れ——自分の間抜けな行動に対しての呆れを示すかのよう。

「……ここが前世で見た、とあるゲームに近い世界だって気付いた私は——軽い二重人格みたいなことになってたのよ、こっちはつい最近までね」

「二重人格？」

「そ。……とは言っても、別に実際に人格が切り替わるわけじゃなくて、判断基準をちよつと誘導する感じの、別の基準ができてた——つて感じなんだけど」

「はあ……？」

飛び出したのは、彼女が自身を二重人格だと思っていた、という告白だった。

……美少女モードのことではないらしい。聞いてみたら「違うわっ」と怒られてしまった。

「私は——この世界がゲームの世界に近いものだど知って、その主人公が実際に現実にいたのなら、こういうことを考えてただろうなということを投影するための、想像上の私だった」

彼女が語るのは、ある意味転生者であるからこそその悩みのようなもの。

——憑依ではなく赤ん坊として、ちゃんとこの世界に生まれたからこそその、本来そこにいた誰か主人公の話だった。

ある種の俯瞰視点である俺と、実際にそこに立っているけれど本質的には今をゲーム視点で見ているわけではない私。

どちらも世界をまともに見ていなかったうちは良かったのだが、片方が普通の視点を俺得たために、視界のずれが起こったのだと。

——なまじ私の視点が通常俯瞰のものに近なかったことも、問題をややこしくする原因になっていた。

「……みんなのこと、幼馴染みとか転校生ちゃんとか後輩ちゃんとか呼んでたのは、ある意味私のせい。……作り物のはずの世界と、作り物じゃなくてちゃんと生きている貴方達の差異を、無意識に否定していたから」

今思えばなんて不義理なことをしてたんだか、なんて彼女は言いながら、目元に手を当てて唸る。……唸っていても仕方ないと言わんばかりに、表情はすぐ元に戻っていたが。

「とはいえ、基礎的な判断は俺側だったものだから、基本的に私には気付いていなかった……というよりは、気付いていないフリをしていたって感じかな？」

「視界のバツテインググを起こしていた判断基準の上に覆い被さるように追加されたものであったため、気付くのに遅れた……ということらしい。

夢の中で名前が聞き取れないという異常を知って、そこから自分の言動を見詰め直した時に、そういえば一度も名前を言ってないし、聞いてもいないぞ？と震えたのだという。

——脳内で勝手に聞こいたまりにされていたのだと知って、恐ろしくなったのだとか。

「それを、あの不思議さんに指摘されたってわけ。……あの時、『どっちの性別なのか』って聞きそびれたって言って、同胞は呆れてたじゃない？……あれ、『そんな失礼なことを聞くな』じゃなくて、『なんでそんなこともわからないんだ』ってほうの呆れだったんでしょ？」

彼女に問い掛けられて、俺は記憶を探る。……ああ、そんなことを聞かれたこともあったか。

確かに、なにを変なことを聞いているのか？と疑問に思ったものだ。

そんな俺の様子にふ、と苦笑いして、彼女は続きを語る。

「精神の基礎構造は男性な俺だけど、その出力は女性な私は、あの人に自分と同じものを無意識に見出していた。……だからどちらなのかわからなかった。……今改めて思い出してみれば、普通に女の人だったよあの人」

「ああ、勘違いするなんてありえないってくらい、普通に女性だったよあの人」

俺の肯定に、だよね、と返す幼馴染み。

「……ある意味、私は俺の秘めた願望でもあった。無個性だった私に、無意味な自分は愛されるはずがないという、現実を押し付けるための身代わりだった」

そんな、都合のいい私^俺だったから。

手放せないまま、ずるずると過ごしていたのだと。

彼女は、困ったように笑うのだった。

☆ ☆ ☆

「ま、まさか……貴女が性別不合だったなんて、私気付きませんでしたわ……なんなる、なんたる不覚！」

「いやあの生徒会長さん？ 話聞いてた？ もしもーし？ ……あダメだこれ、全然聞いてないや」

不覚不覚不覚と言いながら超凹んでる生徒会長さんに、思わず呆れ顔を返しつつ、周囲のみんなに視線を向けてみる。

反応は様々。……まあ、事前に予想してた「お前は私達を作り物だと思っていたのか」みたいな憤りはなかったのだけけれど。

「はー、なんとというか。色々納得できちゃいました」

「そうよね、詳しい説明は私も今聞いたけど。……色々な疑問が解消されちゃったわね」

「え、なんでそこで納得の領き？」

代わりに転校生ちゃんと後輩ちゃんが、何事かに説明が付いた、と

ばかりにうんうんと頷いていた。……え、なに、なんなの一体？

「先輩が色々抱えていたのはわかった。でも……なんで今？」

「お、おう紡ぎ手ちゃん、何故にリラックスモードのですか……？」
「警戒する必要がなくなった。もう癖になってるからあれだけど」

次いで近付いてきて来たのは、普通の喋り方の紡ぎ手ちゃん。

……ええ……？わりと一世一代の告白の気分だったんだけど、なにゆえみんなこんなに緩いん……？

「色々と嘯みあってないのは……みんなわかってたもの……だから……驚いたのは……前世があるってことくらいよ……」

「えええ、そんなにわかりやすかったの私……？」

先生の言葉に愕然とする。

……いや、そもそもこれを告白しようと思ったきっかけ自体が、転校生ちゃんからの指摘によるものだけどきあ?!そんなに私わかりやすかったかあ!?

「ああ、結構な」

「マジかよ……」

同胞の発した肯定の言葉に、思わず項垂れる。

……いや、まあ、私が勝手に凹む分にはいいんだ、うん。

「で？先輩も言ってたけど、なんで今なんだ？」

「……不思議さんに言われたからってのが一つ。夢で見てしまったのが一つ。……一番重要なのが、それら全部単なるきっかけだって気付いたこと」

「ふむっ」

同胞に続きを促されて、言葉に詰まる。

ああもう、言いたくない。

言わなきゃいけないけど、言いたくない！

……でも言わなきゃダメなんでしょこの空気。

だから仕方なく。息を吐いて、吸って、一息に告げる。

「……そもそもの話！同胞と食べさせ合ってた時のアレが、思いっきり言い訳だったって、あとから気付いたのが原因なんです悪いがちくしょーっ!!」

「は、はあ?」

最初から攻略されてたことに気付いちやったからとか、そんなん馬鹿でしかねえじゃないですか……!!

私の絞り出すような叫びに困惑する同胞と、すっごいニヤニヤしてる転校生ちゃんを半ば睨むように見ながら、言葉を叩きつける私。

「食べさせ合いだあ?!男同士でやるとかフツーにないわ!仲良すぎるっての!その気がなくてもあるよね!って思われるレベルでないわ!!言い訳下手かっ!!」

「お、おう?」

「指摘も食らったんだよ!『私達に対しては基本一通りの呼び方なのに、彼に対してだけは三種類もあるのね』ってねえ!!そうだよ同胞どうほうと同胞おさななしみと幼馴染みはちからって、アンタにだけ呼びわけめっちゃしてるじゃん!外から見たらバレバレ、とか言われた私わたしやぐああああ!!?って叫びたくなつたわけよわかるっ?!

「お、ちよ、待て待て」

「待たんわ聞けえっ!!同胞がメイド服着た時の感想が可愛いだあつ?!——男に!!可愛いとか!!もうごまかしようのないくらいアレじゃんっ!!そもそも妾にならないかー、とか言ってたな私っ?!なんやそれ初っぱなから告白しとるやんけ!!百合の花園目指しとると言うてるのに!!初っぱなから!!同胞男を加えること考えとるこのアホ!!バカだ

な私！きてはバカなんだな!!？」

「いや待て、ホント待て！」

「さっきの私云々の話だって、一番重要なのはそこらへんから都合よく目を逸らすためのモノでしかない!!みんな作り物なんやでって言い聞かせて!どっか遠くに自分を置いて!!できればこっちは気にせずにいって欲しいなー、みたいなわがまま放題!!あーもうバカ!!バカのバカ!!」

「いやホント、落ち着け、真面目落ち着け、な?」

……中身はもういい歳だつてのに。

感情に任せて大声で叫ぶとか、ほんと単なるバカでしかない。

「……なにに変わっても愛してくれるか、とか聞いちやつて。一緒に旅をしようとか返されて。あーダメだこれ、つてなっちやつて。……もうダメじゃん、素直に認めるしかないじゃん……」

「その、なにを認めるんだ?」

同胞の返しに、一瞬息が止まる。

呼吸ができない、言葉が出ない。……出したくない。

でも、私から言わなきゃアカンのよね、これ。

あー、恋人いない歴年齢とイコールなやつにはキツいい……。頭を抱えて、転げ回って、なかつたことにしたい。全部忘れて寝てしまいたい。

——でも、言わなきゃ、進めない。

「私は、君が、好きなんだなつて」

——顔があつつい。感情が制御できない。

あまりにも馬鹿馬鹿しくて泣きたくなってくる。

……初恋ってこんななんだ、つて変な感想が湧いてくる。

あーもう気持ち悪い。

こんな気持ちでいることが、こんな感情でいっぱいなのが。
——幸せなことが、気持ち悪い。

「だから。その、付きあつて貰えたら、嬉しいなっていうか」

ろくに顔も見れないまま、自分勝手な願望を口にする。

……叶わないだろうな、でももしかして、なんて思いは、

「え、イヤだけど」

——すぐに、霧散した。

☆ ☆ ☆

「……え、ちよ、えっ!？」

転校生がマジかよ、みたいな声を漏らしている。

対面の幼馴染みは——、目から光が消えていた。

顔の赤みもさつと引いて、ここではないどこかを見詰めている。

……壊れたような笑みを、浮かべている。

「……あ、あはは。そっか。だよねー、気持ち悪いもんねー、私みたいなのは。……あは、あははは」

空笑いを浮かべながら、視線をさ迷わせる彼女。

それから、近くに並べられたフオークを手にとって、

「ちよ、おやめなさい!なにを考えているの貴女っ!？」

「ああああ離せえっ離してくれえっ!!こんな無様晒したのに生きてられるかあああああ!!」

なにをしようとしたのかを察した生徒会長が、彼女を後ろから羽交い締めにする。

そのまま、じたばたと暴れる彼女。

泣き喚いて、みつともない姿を晒し続けている彼女。

——そんな彼女に近付いて、その顔をひつ掴まえて、こつちに強引に視線を向けさせる。

突然のことに、思わず暴れるのを止める幼馴染み。

——俺は、端的に言つてとてもイラついていた。

「イヤに決まってるだろう。……こつちを名前でちゃんと呼ばないやつと、付き合うのなんて」

「……………はへ？」

全然なにもわかってない幼馴染みに、俺は憤っていたのだ。

——自分のわがままだけを通そうとする、このバカな幼馴染みに。

「付き合いたいってんなら、ちゃんと名前で呼べ。……今までみたいに、あだ名めいた呼びかたをする必要も、もうないんだろう？ だったらそれからだろう、なにをするにしても」

「え？ ……あ、いや、その」

「呼べ」

「ひえっ、顔、顔近い……」

「好きな相手の顔が近くてなにか問題が？」

「ひいつ、なんでそんな唐突に押せ押せに……」

「呼ぶのか、呼ばないのか」

「ひゃいつ!? 呼びますっ、呼びますから堪忍して下さい……」

視線を逸らさず、逸らさせず、幼馴染みに口撃を繰り返す。

幼馴染みを羽交い締めに行っている生徒会長が、「自分はなにを見せられているのだろう」みたいな感じで遠い目をしていたが、とりあえず無視。……逃げられないようになってること自体はありがたい

が。

視線をしつかりあわせ、彼女の言葉を待つ。
彼女は再び真っ赤になって、何度も口を開きかけて、躊躇して止めるのを繰り返す。

こちらの視線に、涙目になりながら。
か細い声で、こちらを呼んだ。

「ほ、堀ノ内、くん？」

「下の名前で呼べ」

「ひいっ?!……あ、うつ、……あ、晃、くん？」

「なんだ、桐依」

やっとこちらを呼んだ幼馴染みに、同じように名前を呼び返してやれば。……彼女はさつきよりも真っ赤に顔を染めて。

「……しよ、」

「しよ？」

「……少女漫画……っ」

謎の言葉をあげて、そのままがくりと項垂れた。……処理限界を越えて気絶したらしい。

……まあ、今回はこれくらいで勘弁してやるか。

近付けていた顔を離し、小さく嘆息する。

……ふと、周囲を見ると。「なんだ今の一連の流れは……」みたいな表情の部活仲間達でいっぱいだった。

……いや、そもその話。

今現在は演劇祭が終わったの後夜祭なので、結構な数の生徒達に聞かれていたわけだが。

「いやまあ、周りが意識して聞いていたのは、あくまで部長さんの告白以降の部分でしょうけど。……随分と思いきったことをしたわね、貴

方」

「今まで振り回されてきたツケってやつだ。せいぜい、意識が戻った時に盛大に転げ回ればいいさ」

「……………うわぁ……………」

後輩がスゴいものを見た、みたいな視線を向けてくるが知ったことではない。

……………百合の園を作りたいといいつつ、あんまり積極的に動いてなかったこととか。

こつちに対して距離感が近過ぎた理由が、自身と同性扱いだっただ部分が少なからずあるとか。

名前を呼ばないままにしておこうとしてる理由の一部に、単に名前を呼ぶのが恥ずかしい……………とかいう子供みtainなものがあるとか。

言いたいことは山ほどあるが。

あれだけで済ませてやったのだから、文句を言われる筋合いはないのだ。

「……………この人を怒らせてはいけない」

「流石正妻ポジション……………強さが桁違いですねぇ……………」

「……………お前らだって、名前で呼んで貰えるならそつちのほうが嬉しいだろう？」

俺の言葉に、みんなが顔を見合わせる。……………あれ？

「いやまあ、そこら辺は追々どうにか……………みたいに思ってたから、ね？」

「全力ストレートで全部ぶつちぎった堀ノ内先輩が色々おかしいというか……………」

「……………あれ？」

なんで俺、微妙にアウエーみたいになってるんだ？

……それと後輩、早速お前はこっちの名字を呼ぶんだな？なんて言えば、彼女は「そもそもその辺り東山先輩にみんなあわせてたところがありますので……」と苦笑していた。

……まあ、うちの幼馴染みが意識してか否かはわからずとも、基本的に名前を呼ばないのはみんながわかっていた。

ゆえになにか理由があるんだろうなと気を使ってあわせていた……というのは事実である。主体が幼馴染みなので、アイツが止めればそこに拘る必要もない……というのも道理だった。

「まあ、とりあえず。……長かった演劇祭も、これで終わりですねえ」
「……そうだな、色々長かった」

後輩の言葉に視線を上げれば、舞台の上に垂れ下がる『優勝・生徒会』の文字。

……僅差ではあったが、勝利の栄冠を掴んだのは生徒会だった。
さつき生徒会長や先生が混ざっていたのもそのせい。

……仲直り、というと変な話だが、まあわけのわからない意地の張りあいも、今回で終わり——というわけだ。

「とりあえず、次にすべきことと言えば夏休みの計画……かしらね？」

「あ、うちの伝で無人島とかどうですか？」

「事件の予感、新しい作品の糧にできそう……」

三人娘はかしましく、次の予定を立てている。

そんな様子を眺めながら、俺は飲み物を一口。

長い長いプロローグ^{演劇祭}は、こうして終わりを告げたのだった。

二章 夏と海と島と謎とエトセトラ、の件 百合ゲー世界の主人公はだいぶお花畑な件について

「……なんださっきの私は……っ」

保健室で目を覚ました私は、思わず頭を抱えていた。

……後先考えず全部ぶっちゃけたから、発言滅茶苦茶だわなんか変なこと言ってた気がするわで、今さらながら死にたくなってくる。

……いやなんだよあのムーブ、バカかよバカだったわ。

「あああああもおおおお……」

布団の中でじたばたじたばた。

語彙力は死んだ、羞恥心も死んだ。……死んでねーの私だけじゃねーか。

死にたい……。死ぬほど恥ずい……。

「なんだよもおー、名前呼びあつて赤面するとか少女漫画かよおー……」

布団を被って丸まって、ぐちぐち愚痴をぶちぶちり。

前世ではあんまり好き嫌いせずにいろいろ読んでた人なので、さっきのやりとりが少女漫画めいた、だいぶこっ恥ずかしいものだというのも理解できて。……余計に顔が真っ赤になる。

っっていうかなんだこいつ、さっきからずっと顔真っ赤じゃねえか、りんごかよ。私はバカ野郎、んごー。

「……うー」

外見に中身が引つ張られてる、ということなのか。

……あれ科学的にはそうはならんやろ、つて言われてた気もするんだけどどうだったか。

いやそもそも今まで女の子らしく生きてきたんだから、引つ張られるものもないんじゃない？

……あーもー頭が全うに働いてない。

油断すると顔がにやける。ヤバイ。幸せ気分がヤバイ。

キモい、私たぶん今すっごいキモい。

「……………にへへ……………」

……はっ!? あかんあかん! このままだとバカになる!!

ああでも多幸感で脳内麻薬がどばどばどーぱみんしてる……………!!!

「おーい、起きたかー?」

「ふぎやあああああつ!!!」

「うおっ!」

そうしてベッドの上で悶えていたら、突然カーテンを開いて幼馴染みが現れたものだからさあ大変。

——いやね、ほぼ逝きかけたよね。

心臓バクバク言わせながら、保健室の壁まで後ずさってさ。

涙目になって思わず逃げ道探してさ。

……位置的にどう考えても途中で幼馴染みに捕まるから、逃げらねえってなつてさらに涙目になってさ。

いやもうどうしようもないから笑うしかないよねあつはつはつ

はっ! (ヤケクソスマイル)

「は、はひゃ、ひゃひゃっ」

「……………落ち着け、別になんもしないから」

「そもそも私もいるわよ」

「ててててて転校生ちゃん! ありがたや、ほんとありがたや!」

「……ふーん」

「つてあれ？」

救いの女神あらわる！

よかった！こんな閉鎖環境で二人きりとかマジ死ぬかと思った！

そう思つて転校生ちゃんに声を掛けたのだけけど。

……んんん？何故にそんなご機嫌斜めなのですか？

めっちゃそっぽ向かれたんですけど。……バツジ足りてない？

そんな私のほうにチラリと流し目をよこしつつ、彼女は『私、不機嫌です』オーラを迸らせるのです。

「ええ、恋人同士。そこが重要なのはわかるわ、わかるけど。……私の名前、呼んでくれないのね？」

「……あ」

彼女の言葉に、間抜けな返事をする私。

せやった。もう転校生ちゃんとか呼ぶのは、私の癖以外の理由ないんだった。……そりゃ拗ねるわ、確かに。

いやでも、んー……。

首を捻りながら、彼女に問い掛ける。

「そのー……私が呼んでもいいもの、なの？」

「なにを遠慮してるのかは知らないけれど。……呼ばなかったら酷いわよ」

「あああごめん、ごめんってば！……えっと、ときとおや刻遠野さん？」

「ふーん……？」

「ええええええ」

仕方なく名字を呼んでみたのだけれど、彼女はまた知らん顔。えええ、ダメなの？上の名前じゃダメなの？

……えー、でもさあ……？

「中身おっさんが、女の子の名前呼ぶのってなんかよくないっていうか……」

「言い訳でしょう、それ。……いいから、呼んで」

「……あー、うん」

中身いい歳のおじさんが美少女の名前呼ぶのって、なんか犯罪臭しない？って思ってたんだけど、当の彼女は不機嫌顔。

……言い訳じゃん、って言われると確かになってなるし、けれども、うーん……。

……しゃーない、あとでイヤだとか言われても知らないぞ私。

そんな思いを抱きつつ、意を決して私は彼女の名前を口にする。

「じゃあ……朱紅奈さん？」

「……はい、なにかしら桐依？」

私が呼び掛けると、彼女は仏頂面をサクツと崩していつもの笑みに戻り、そのままこちらの名前を呼んできた。……普通に名前を呼びあっただけなのに、なんか恥ずかしいな？

っていうかそっちは呼び捨てなんだね、私も呼び捨てのほうがいいんだろうか？……まあ、そのあたりは追々考えていこうかな。

そんなわけで、彼女は転校生ちゃん改め『刻遠野・A・朱紅奈』。ロシア系のハーフな転校生である。

すべな、というのは実際は当て字に近く、ロシア語で「光」を意味するスヴェート^cを日本人っぽく・かつ可愛らしい響きにしたものなんだとか。

なので、彼女の名前を向こう風にいうと『スヴェーナ・アレクセーヴナ・トキトーヤ』みたいな感じになる。

……ロシア系なのに何故かアメリカのほうのハイスクールに通ってたとか、そのせいでロシア語はからつきしだとか、色々変なところもあるのだけれど。

そのあたりは原作でも詳しく語られたことがないので、よくわかりません。

……こっちの朱紅奈さんもそのへんはあんまり言いたくなさそうな感じだったから、たぶん聞くことはないんじゃないかなー。

「……名前を呼んだら落ち着いたから、特になんにもないね」
「ぶっ、なにそれ」

名前を呼んだのでなにかあるのか？という問いを朱紅奈さんから貰ったけど、正直呼んだだけなので特になにかがあるわけでもない。……さっきまでバクバク言ってた心臓が平常時に戻り、幼馴染みの顔も普通に見えられるようになったので、全く意味がないわけでもないんだけど。

……うん。見に来てくれてありがと、くらいは言っておこうかな？
なんて思っていたら。

「ずーるーいーでーすー！」

「ふあぎやあっ!!？」

「あら」

口を開こうとした途端、保健室に雪崩込んでくる部活仲間達。

その筆頭の後輩ちゃんがこっちに突っ込んできたので、思わずビビってしまう。

「追々って言ってたじゃないですか刻遠野さん!!ずるいずるいずるい
です東山先輩私も名前前で名前で呼んで下さい!!」

「わわわわ落ち着いてお願いだから落ち着いて頭を前後に揺らさない
で酔うからやーめーてー!!」

「うわあ」

「うわあじゃなくてとーめーてー!!!」

そんな感じで、幼馴染みと朱紅奈さんが止めるまで振り回されてた私なのであった。

☆ ☆ ☆

「……で、満足した？ 鈴莉ちゃん？」

「満・足・です！」

「そっかー」

結局みんなの名前を呼ぶことを強要された私。

……なんだろうね、この改めましてのはじめましてみたいなのアレ。

……長くなりそうだしサクッと紹介しよう、うん。

犬系後輩の栗花落 鈴莉ちゃん。

中二系後輩の在原 結花ちゃん。

生徒会長の西内 美玲さん。

そして、先生である篠浦 都乃葉さん。

とりあえずこの場で紹介する必要があるのはこの四人、だろうか。

「……精神面は、もう大丈夫なのですか？」

「ああはい、おかげさまで。……えっと、ごめんね西内さん。なんだか今まで色々と心配というか面倒というかを掛けちゃったみたいで……」

こちらを慮る声音で話し掛けてきた生徒会長さん……改め西内さんに、こちらでも謝罪を重ね頭を下げる。

そうして視線を戻したら、彼女は複雑そうな表情をこちらに向けてきていた。……え、私なにかやつちやつた？

「……まあ、完全に他人行儀な『生徒会長』呼びに比べれば、ですわね。……ですが、いつか必ず。貴方の友として、恥じぬ女になって見せますわよ……！」

「…………え、ええ?」

み、名字で呼んだせいでなんか変な使命感に目覚めてる…………?
イヤでもこれ、たぶん今からちゃんとの名前呼んでもダメなやつ
だね?ダメなやつでしょこれ。彼女は話を聞かないんだ。…………とり
あえず放置でいいかな?

「いいんじゃないか。時間が解決することもあるだろうし」

「だよー。同胞もそう思うよ…………あの、なぜこちらを睨んでおられ
るのでしょうか?」

そうして若干呆れていると、幼馴染みがこちらに近付いてきてい
た。

なので(極力いつも通り)話し掛けたのだけれど。

…………その、最後まで言う前に滅茶苦茶睨まれたんですがそれは。
え、なにかした!?なにかしたの私?!

「なあ、桐依。さっき俺は言ったよな、名前で呼べって」

「へっ!?え、いや、まさかの常に!?常になのあれ!」

まさかの常時名前呼び要求だった!?

いや、だってその、別に普通にしてる時は今まで通りでも…………!!

なんて私の内心を読んだのか、こちらを睨んだまま近付いてくる幼
馴染み。

…………は、はわわわっ!!

に、逃げ…………あダメだよく考えたらさつきから移動してないから背
中が壁だこれ!?向こうが正面から来てるから逃げ道がねえ!?

「…………呼ぶよな?」

「ひいっ!!か、かかか勘弁してください!!死ぬからっ!!恥ずかしさ
で私死ぬからっ!!ちよちよちよ他の人も!見てないで!!助けて!」

「いいですよーもつといちやいちやオーラを高めるのですよー」
「ちよつとおつ!!?」

ダメだこいつら完全に観戦する気だ！他人事だからって気楽すぎるぞぐぬぬ……つ!!

「……話してるのは俺なんだが?」

「ふぎやあああああつ!!!ちちちち近付くのやめてつ!!耳元で囁くのやめてつ!!?あああ晃、くん?!すとつぷ!!すとつぷぷりーずつ!!!」

「くん、はいらないな」

「あああああもおおおおつ!!!」

だ・か・ら!!

なんで!!この幼馴染みは!!いきなり少女漫画の相手役みたいなことになってるの!!!?

私が悪いっ?!絶対違うよ!!弄んでるんだよこの人達つ!!!

あああでもこれなにかしら結論出さないと終わらないやつ!!名前呼んだのに終わんなかったもん私悪くないよ!!!でも終わらないと私もオーバーヒートして死ぬやつ!!!

流星にこんな意味のわからん死にかたはイヤだ!!!イヤだけどどうすりやいいんだ!!?考えろ、考えろつ!!

——いや無理だつてばあつ!!?)

ずっと見られてるの!!至近距離で!!ずっと!!めっちゃ綺麗な顔の!!幼馴染みが!!私を!!視界に!!ずっと!!逸らさないの!!!

うううう、うううううーつ!!!

マジでなんも思いつかない!!ああもう、自棄だ自棄だ破れかぶれじゃあつ!!!

「せ、」

「せ？」

「せめて、二人きりのときとかで、お願いしますう……」

言いきつて、思わず脳が冷えた。

……いや、今私なんて言った？

混乱の余りなんか凄いきつこと言わなかったか？!

いや、みんな見てるところで名前を、くんも付けずに呼ぶとか無理だつても確かなんだけど。

……今、二人きりなら、とか、言った、な？私、大分アレなことを、言った、な？

顔から血の気が引いた私を見て、幼馴染みは破顔めっちゃいい笑み一笑。

「……じゃあそれで」

「あああああなしなしなししやっぱりなしいつ!!!」

問題の先送り 朝三暮四どころか全部爆死徹頭徹尾死亡フラグじゃねえですかこれえっ!!? イヤじゃー

！死にとうない!!

必死に懇願するけれど、同胞は「もう了承したので。言い出したのそっちだし」と取りつく島もない。

……いや言ったけど！言ったけどさ！言葉の綾！言葉の綾なんだつてばあ!!!

「……桐依、貴女ちよつとバカになつてない？」

「うあああああそうだよバカだよおおおお……」

こちらの言葉に聞く耳もたずに、そのまま保健室から出ていった幼馴染みに届かぬ手を伸ばす私と、なんとも言いがたい声音の嘆息を漏らす朱紅奈さん。

——なんなんだろうこれ、みたいな空気を孕んだまま、その日は解散になったのだった。

……帰ったら不貞寝しよう……。

百合ゲー世界の夏休み前の一騒ぎの件について

「お、おはよう同胞……」

「ひとーっ」

「なにそのカウント?!なにを数えてるの!!?不穩でしかないんだけど!?!」

「ははははは」

「笑ってごまかすなあーっ!!?」

次の日の朝。

家の前でこちらを待っていた幼馴染みに挨拶をしたら、謎のカウン
トダウンを始められてしまった。

……いや、まさかとは思うけど、名前呼ばなかった回数とか数えて
ないよねこの人……?」

だとしたら怖いんだけど。どんだけ名前呼ばせたいのこの人。ど
こかで慣れないと死ぬぞ私、恥ずか死するぞこれ。……慣れるのかな
これ?」

「ほれ、とりあえず行くんだろ?」

「……むむむ……はぐらかされてる気がする……」

幼馴染みの言葉に唸り返す私。

なんとというかごまかされてる感が凄い。……いやまあ、ここで唸っ
ても仕方がない、ってことも確かなんだけどさ。

釈然としない気分を抱きつつ、連れだって学校に歩き始める私達。
いろいろあった演劇祭も終わって、今日は学期末の終業式の日。

ありがたい校長先生の話とかが終われば、生徒達は夏休みとい
う一種の解放状態に移行することになる。

……登校する生徒達に妙にそわそわしてる人が多いのは、間近に
迫った夏休みになにをしようか……と早速計画を立てている者が多
いからなのだろうか?

まあ私達も夏になにをしようか、みたいな話はしていたわけなんだけど。

……鈴莉ちゃんの提案を呑んでちよつとキャンプでも、というのが第一候補だろうか？

というかその場合は合宿扱いでいいんだろうか？……うーん、申請とかいるんだろうか？

「その場合は篠浦先生が引率になるのか？」

「……なんか急に超不安になったんだけど」

「奇遇だな、俺もだ」

部活として無事承認された文芸部、この度顧問を迎えることになったのだけれど。……うん、原作通り篠浦先生が顧問になったんだよね。

……イヤな予感しかしないんだけど！どんな無理難題が飛んでくるんですかねこれ!!

逆に西内さんは文芸部には未参加である。

生徒会が忙しいので、他の部活の手伝いには基本手を貸せない——と言われてしまった。……まあ、仮に合宿するなら参加したい、とも言っていたけれど。

その辺は外部協力者扱いでお願いしたいとも言っていたので、ちよくちよく飛び入り参加みたいな感じになるのではないだろうか。

……ん、そうなると結局あんまり変わんないのかもしれないね、文芸部周りは。

あと気になることは——、結花ちゃんがリラックスモードから元に戻った、とかかな。

あのかきは普通に喋っていた彼女だけど、結局最初に出会ったときのようにデュアルボイス副音に戻っていた。

……そつちで喋っているほうが長くなっていたのもあって、どっちもある意味リラックスモードみたいなものだから……というのが戻った理由らしい。

それとあの喋りかたをしていると微妙に練習になる——みたいなことも言っていたような?……いや、なんの練習?

「そういえば、式が終わったら部室に集合か?」

「え?……あー、そだね。夏にどうするか決めなきやだし、一回集合かな」

そうして考えごとをしていたからか、幼馴染みの発言に反応するのが少し遅れてしまう。

……んー、流石に慣れてはきたけど、意識の外から話し掛けられるとちよつと身構えちゃうなあ。……早く慣れなきやなあ。

そんな感じに一人で百面相していたら、幼馴染みが小さく苦笑を向けてくる。……人の顔見て笑うの、良くないと思うんだけど?

「悪い悪い。慣れたつもりでもちよつと距離があるのが、なんか猫みたいで可愛いなって思ってたな」

「……ねえ君、実はなんか変なもの食べたとかない? 幾らなんでもキャラ違くない?」

返ってきた幼馴染みの言葉に、思わずジト目を返してしまう私。

……なんかこう私が告白したせいなのか、幼馴染みの雰囲気は別物に変わっちゃったような感じがある……ような気がするんだけど……?

そう伝えると、彼からはこんな返答。

「……いや、こっちのほうが嬉しいだろ、お前」

「は? いやいやなに言ってる、の……お?」

——なんでこの人、人の頬に右手を添えてるんでしょ?

突然の幼馴染みの行動に機能停止していると、彼は笑ってこう続けたのです。

「どつちかというと、振り回されたい側だろお前」
「……………幼馴染みが人のこと理解しすぎて怖い」

微かな笑みと共に返ってきた言葉に、思わず半目になる。

そして、そんな素振り欠片も見せた覚えないんだけど、と問い返せば。見てりやわかるよ、と返ってきて言葉に詰まる。

……………基本振り回す側に回ってたから、気付かれてないだろうと思っ
てただけどなあ、こりや負けるわけですわ……………。

照れより先に呆れが来て、思わず笑ってしまう。……………イヤだなあ、
もう。

「……………朝からお熱いわね、お二方」

「どわっはあっ!!?すすす朱紅奈さんいつからいたの?!」

「彼が貴女の頬に手を添えたあたり。……………因みに栗花落さんもいるわ
よ」

「先輩がラブを発するとき、私はいつでも傍にいるのですよ!」

「……………後輩に謎の能力が追加されてる件について」

そんなことをしていたら、後ろから声を掛けられて思わず跳び退く
私。

振り返った先にはいつもの部活仲間達。

……………すごい鈴莉ちゃんがニコニコしてて、なんとも言えない気分
になる。いや、なんでそんな上機嫌なのこの子……………?

あと結花ちゃん、なんでおにぎりもぐもぐしながら付いてきてるの
?

「朝餉ちよつと寝坊しちやいましてを、摂り損ねたのだ……………」

「……………おお、なんか久しぶりな気のする副音声……………」

尋ねてみると、バツが悪いのか視線を逸らす結花ちゃん。……………視線

を逸らされたことそのものよりも、久しぶりに副音声聞いたような気がするものがちよつと驚きだったり。

……日差しは朝から強く。

本格的に夏になったんだなあ、なんてちよつと間抜けな感想を抱きながら。

みんな揃って、学校までの道のりを歩く。

「……まあ、こういうのもありかな」

ぼそりと呟き、空を仰ぐ。

……でもやっぱり熱いのはやめて欲しいかな！冬生まれなので私熱いのはダメなんだよね！

色々台無しにする感想は外には出さず、そのまま校門前で解散して各々の教室に向かう私達なのでした。

☆ ☆ ☆

「そういうわけで……夏休み中の……活動内容について……決めて行きましょう……」

「わーいすつごい先行き不安だー」

校長先生の長話を耐えきった先で、トラブルメイカーとの直接対決が待っているとちよつと笑えないなあ！

……的なことを言っても遠回しじゃ聞き流されるし、直接言っても弾かれるし……で散々な、篠浦先生との直接夏会対決議の時間である。

場所はいつもの文芸部部室！

顧問もしっかり配属されて、正式に部活として承認された私達に敵はない！……この場合の敵って誰だろね？

「敵……文芸部の……敵？」

「落ち着け、そもそも戦う部活じゃないだろ文芸部」

小さく首を捻っていると、同胞から軽いツツコミが。

……ししし知ってたし！文芸部は自分との戦いくらいしかないと知って……いや、なんかしらの賞とか目指すんなら、やっぱり他人との戦いなのでは……？

「賞を目指すのは……早くても二学期からね……今は……考慮外よ……」

「とりあえず夏の間は考えるな、ということですね！」

こんがらがって来た私に、二学期まで保留と伝えてくる篠浦先生と、ザクツと纏める鈴莉ちゃん。

……まあ、賞に向けてって言っても、なんの賞を目指すのかとか色々あるし、そうそう決められるものでもない……か。

じゃあまあそのあたりは棚上げで、さつくりと夏休みの計画について語っていいこうじゃないの。

……というわけで、会議は始まったのです。

「はいーうち無人島持ってますので、二泊三日くらいサバイバルとかどうでしょうー！」

「初手からちよつと処理が追い付かないものぶち込むの止めない鈴莉ちゃん？」

まー始まってすぐに止まったんだけどね。

……んー、いきなり島持ってますよーとか言われても、反応に困るんだよねーははは。更にそこでサバイバル、サバイバルと来たかーははは。

……処理が！追い付かんわ!!?

あまりに気軽、あまりに唐突！

イヤ確かにね、色々経験することで書けるものの幅が広がったりするだろうから、いい案だとは思うよー思うけどさ？

「なしてサバイバル想定!?普通に旅行に行きましたーでもいいんじゃないかな?!かな?!」

「普通はいらなないので!もつと刺激的に生きましようよ先輩!!」

「なにもない毎日が一番、つて名言を知らないんですかあ!?!」

「その歌はわからないやつのほうが多いんじゃないかなあ……」

「しかもそれ、最終的に君がいない日々にかけて逃げてなかったかしら?」

「……ん?なぜ古文書が外部に漏れている……?」

「ちよつと待ってちよつと待って……貴方達いつもこうなの……?」

わいのわいのと騒いでいたら、珍しくちよつと焦った様子の篠浦先生に中断させられる。……え?いつもこんな感じですがなにか?

そう返すと、彼女は小さくため息を吐いていた。

……振り回す側のはずの先生が、なんだか知らんが振り回されている、だと……?」

「……真面目な話を……しているときは……さすがに私も……自重するけど……貴方達……真面目に話を逸らしたわね……?」

「若い内は無鉄砲なくらいが丁度いいと習いました!先輩に!!」

「清々しいまでの責任転嫁っ!!」

「いや、実際に似たようなことは言ってたぞお前……」

「う、うっそだあ……?」

かわいそうなものを見る目で見てくる篠浦先生と、なぜだか自信満々な鈴莉ちゃん。

……無鉄砲にぶつかつていけと私に教わった、みたいなこと言われたんだけど私知らないよ?!つて主張したら原因私やぞつて同胞に釘を刺されてしまった。……そ、そうだったかなあ……?」

「……まあ……いいわ……無人島二泊三日……それでいいのね……」

「？」

「いいと思います！」

「いいんじゃないかしら」

「いいと思うぞ」

「我は特えに反あ対成意見しはないま」

「……いやまあ、みんながいいんならいいけども」

そうしてみんな次々と賛成に表を入れていくものだから、最終的に賛成せざるをえなくなってしまう。……いやいいけども。

しかしまあ、まさかの初手からサバイバルキャンプとは。……夏満喫する気満々ですねこれ？

このまま肝試しとかも連鎖していくあれですね？

「そういうわけなので先輩!!」

「はい？なんででしょう鈴莉ちゃん？」

それにしても無人島でサバイバルか……なにを用意すればいいんだろうか？

なんて感じに、決まっちゃったのだからもう張り切って楽しもう！とあれこれ考え始めた私へと、元気に声を掛けてくる鈴莉ちゃん。……なんだかイヤな予感がするけど、なんだろうねこれ？

「みんなで、水着見に行きましょう！水着！」

「……なん……だと……？」

無邪気に宣言する後輩に、私は目の前が真っ暗になるような恐怖を覚えるのだった——。

百合ゲー世界で水着に悩む者達の件について

「なんでこの世の終わり、みたいな顔をしていたのかと思えば、貴方泳げなかったのね」

「末代まで隠していたかった……」

完璧美少女を自称してるのに、泳げないとか恥以外のなにものでもないじゃん……、とぼやく桐依を取り巻くようにして歩く俺達。

因みに篠浦先生は仕事があるとかで学校に残ったので、ここにはいない。……良かったかどうかは実際謎である。

会議をなし崩し的に終え、そのまま栗花落のぐり押しで隣街まで出掛けているのは、彼女が終わり際に言い放った「水着を見に行こう」という提案を果たすためである。

……なんで俺まで巻き込まれているんだろうな？女性陣だけで選べばいいんじゃないのか？

「男性視線でいい感じのを見繕って貰うのもありかな、と！」

「……実際の本音は？」

「先輩の水着を選んであげて下さい！」

「ちよつとおっ!!？」

「了解、一番いいのを選ぼう」

「同胞も乗るんじゃないっ!!」

栗花落からの要請に、サムズアップで答える。

そういうことなら吝かでもない、誠心誠意真心込めて、桐依に似合う水着を選んでみせよう。

……こつちをばかぽか殴ってくる幼馴染みはスルーしつつ、しばし歩いてたどり着いたのはわりと大きめの百貨店。

学生程度の小遣いでもいろいろ買ってしまう、わりとリーズナブルなテナントが並ぶ優良店である。

「あああ生き返るうー……」

「外あつついもんな……」

店内に入れば、太陽照り付ける外とは大違いの、よく冷えた空気が俺達を出迎える。

熱いのはダメと公言する桐依が、冷房を浴びてたちどころに復活するのを見て、なんとなく苦笑を浮かべ。そのまま、皆で二階に向かう。そうして夏物がズラリと並ぶ服屋に入り、各々が好きに見て回る形へ移行。……一応、俺と栗花落と桐依が纏まって動いてはいるが。

他二人は先に普通の夏服を見て回るらしいので、あぶれ組は先に水着の物色を——というわけだ。

「文芸部初期メンバー集結ですね！」

「集結もなにも、いっつも一緒じゃん私達」

「あえて言葉にすることに意味があるんですよ！」

「……なるほど？」

などとうだうだ喋っているうちに、水着コーナーの前に到着である。

今年のトレンドはシンプルイズベストと言うことなのか、無地モノの陳列数がやけに多い。……色の種類自体は結構数があるようだが。

「……緑色だと、なんか葉っぱみたいじゃない？」

「流石にその感想はちよつと……」

「なんだと貴様あ!？」

適当に一つ手に取ってみた水着を、こちらに見せながら控えめに笑う桐依。

緑色だから葉っぱ、みたいな安直な考え方に冷笑を返せば、途端に怒り出す桐依。……に、店内で騒ぐなよとさらに言葉を返し、しゅん……となつて落ち込む桐依を見て、後輩と静かにハイタッチ。

……からかわれていたのだと気付いて、顔を真っ赤にしてぷるぷる震える彼女を見るまでが、ほぼ既定路線である。

こういうときは初期メンバーとしての連携力の高さを感じざるを得ないな(?)

「ええい、堰を切ったように調子に乗りおつてからに！こうなったら同胞！貴様もこれを着ろおつ!!」

「……………これは……………」

叫ばないように叫んだ(?)器用な桐依が、ハンガーラックから引っぱり出した一着の水着。

その造形に、俺と栗花落が驚愕する。何故ならば、

「上下フリル付きとは言え、ビキニをチョイスするとは……………」

「先輩、堀ノ内先輩の女装好きすぎでは？」

「ええいなんとも言えいっ!!こつちばかり恥ずかしがるのは不公平だろつてんでい!」

いわゆるフレアビキニと呼ばれるタイプの水着を引つ張り出してきて、どうだ!と笑う桐依。

……笑うというか引き攣つてるといふかな微妙な笑みだが、発言そのものは本気のようなのである。……………ふむ。

「どうだ、栗花落。似合うかこれ？」

「むむむ、先輩のイメージ的には青とかの寒色系のほうがいいのでは……………あ、ちよつと柄入りのもいいかも知れませんか？」

「……………つ?!え、ちよ、マジで着る気なの!?!」

隣の後輩に感想を聞いてみる。

……………ふむ、青色、青色か。同じタイプで色違いのものは置いてあるだろうか？

なんて感じに水着を物色し始める俺達と、自分で選んだ癖に困惑している桐依。……なんでこんなにびっくりしてるのだろうか、こいつは？

「マジもなにも、着てほしいから選んだんじゃないのか？」

「え、えええ？あれ？私おかしいこと言って……あゝ」

こちらの返答を受け、唐突なダミ声と共に静止する桐依。

さつきからどうしたのだろうかこの幼馴染みは？と首を捻る俺の前で、当の幼馴染みはひたすら唸り続けているのだった――。

☆ ☆ ☆

せやったこの世界、異性装に対して緩いんやった（通算幾度目かの気付き）。

……水着コーナーの裏手に回ってみれば、大事なところを隠したり目立たなくしたり、はたまた全部寸胴なら同じや！……したりできるようにと、あれこれそのあたり色々隠す用の関連グッズが所狭しと並べられている。

水着コーナーの上にある案内板が単に『水着コーナー』になっていることに最初から気付いとけば、変に恥を搔く必要はなかったかも知れない……。

「……いややっぱりおかしい、羞恥心とかどうなってんだ一体」

「唐突にどうしたお前」

……いややっぱりおかしいよ！見えなきやいいにしてもなんかあんでしょ普通は！

こちらをジト目で見てくる幼馴染みにそう問えば、呆れながらも彼は答えを返してくれる。

「まあ、猥褻物にあたる部分を見せるのは、普通に捕まるからな。……逆に言うと、そこらへんしつかりしてれば意外と問題にはならないみたいだぞ」

「みなさん、着たい物を好きに選んでますからね！」

「ぐぬぬぬ、最早一般的になってるからこそか……！」

同性での付き合いが認められていることの延長線上で、俗に言う女役・男役の扱いが性別から離れてしまっているからこそその服装の自由……と考えるべきかね？

性別区分が単純な肉体の性に限らず、精神的な性まで混じってるから……というか。

女性用の男性服・男性用の女性服みたいなものもあるし、最早これは深く考えるだけ無駄なのかも知れない……。

いやでもほぼ下着にニアリイnearlyなのでも気にしないのって、それはそれでアレなのではなからうか……？

「いや、俺も人がいるとこなら気にするよ。……でもこれ着るの無人島だろ？ならまあ、桐依がどうしてもって言うなら選択肢に入れないでもない……ってだけだよ」

「んぐっ」

そんな私の惑いは、次の同胞の言葉で中断される。……わ、私が望むなら、かあ……。

……ちよつと冷静になって考えてみる。

見た目が見た目なので、別に女性用の水着を着せてもまあ似合うだろう。……視界内の花が増すのは、実際とても喜ばしい。

……いやでも同胞には普通の男性用の水着を着て欲しいような……いやしかし……。

「なにを悩むんですか先輩……！」

「お、お前は悪後輩ちゃんの心！」

私が勝手に無限牢獄煩悩迷宮に閉じ込められながら悩んでいると、背後から響く甘い誘惑の声。

我が悪楽しそうな後輩の心は「誰が悪の心ですかっ」と言いながらも、その口を閉じることはない。

「どっちも着せてしまえばいいんですよ、傍若無人ないつもの先輩はどうしたんですか……!」

「な、なんだと……!?!」

人をなんだと思っっているのか、といういつものツツコミは抑えつつ、彼女の提案に驚愕する。

——それはつまり、同胞ファクションション無人島を開催しろってことですかーツ!?!

そんな私からの問いに、「ふ、料金は私持ちですよ……面白そうなので!」と答える鈴莉ちゃんはまさしく悪（ノリ）のカリスマである。……いや、とても魅力的な提案だと思うよ実際。だけどね？

「……へ？なぜ後ずさりするのですか先輩?」

「鈴莉ちゃん、後ろ後ろ」

ゆっくり後ろに逃げていく私と、首を傾げる鈴莉ちゃん。

……うん、流石にちよつと悪ノリしたからね。逃げないと巻き込まれるからね、仕方ないね？

困惑する彼女の背後には、得物手刀を振りかぶる同胞鬼の姿があつて。

「ひゃぎやつ!?!痛つ!?!つてせせせ先輩つ!?!」

「——お楽しみは、これまでだ!」

「わーっ!?!ごめんなさいごめんなさい!流石に調子に乗りましたあ痛たたたつ!?!」

「あ、あれは、『四十五度チョップ真拳』!」

「知っているの桐依？」

「うむ、四十五度の角度からチョップをすれば電化製品が治る——、昔の人々のそうだった信仰が形を得て昇華されたもの、それが『四十五度チョップ真拳』！相手の言動や行動が条理より外れているとき、それを正すために振るわれるとされる慈悲の御業よ……」

「……すごく痛そうなのだけれど」

「慈悲の心とは仏の心。仏の慈悲は痛いものと相場は決まっている……痛くなければ覚えませぬ、というやつだな」

「仏まで体罰教育に汚染されている……?!」

同胞のチョップ連打で追いかけて回されている鈴莉ちゃんを、いつの間にか合流していた朱紅奈さんと眺める私。

結局、その追いかけてこは店員さんの無言の圧力によって、みんなが店の外に出るまで続くのであった。

☆ ☆ ☆

「皆さん夏目前からってはしやぎ過ぎでは
「汝らは己が所業に弁明を持つか？」

「返す言葉もありませぬ」

「右に」

「同じに候」

店内のフードコートで、結花ちゃんにお叱りを受ける私達。

朱紅奈さんまで巻き込まれているのは、一連の騒動を見てるだけで止めなかったから……だろうか？

「まあ、仕方ないわね。 実際止める気がなかったわけだし」

「水着自体は一応選り終わったのが救いかなあ……」

「実際泳ぐような暇があるかはわからないわけだがな」

騒ぐまではいかずとも、静観はしていたのだから……と朱紅奈さん

はすまし顔。

それにあーだこーだと話をしながら、頼んだポテトをぱくり。……うむ、可もなく不可もなく。普通のフライドポテトですねこれは。

おやつにバーガーってどうなんだろう感あるけど、健全な学生なら学校帰りに買い食いとか普通だよね！

「むー、絶対楽しいことになってたと思うんですが！」

「主に楽しいのはお前だったろ、却下だ却下」

「えー!?というか東山先輩途中まで乗り気だったじゃないですか！なんで急に手のひら返したんですか!?!」

「うえ?」

そんな感じに飲み物飲みつつポテトポリポリしてたら、鈴莉ちゃんから飛んでくる疑問の声。

……ふむ、いきなり梯子を外した理由、ね……………。

「いや、その…………どうせならそーいうのは私だけが見たいかなーと言うか…………」

「…………許しました!ごちそうさまでした!」

「こつちも手のひら返しがエグい件」

「独り占めは寧ろ美味しい、というわけね」

「…………大君も大概お熱いですね頭花畑と言えばいいんですであつたか?」

「う、うるさいなあもう!」

正直に答えたらなんか満足されてしまったでござる。

……なんだよう、別にいいじゃんかよう…………。

いやまあ、結花ちゃんの言う通り、だいぶお花畑気分になつてると自分でも思うけどさ…………。

「——ふむ、騒がしい風が吹くな、と思っていたら。こんにちは諸君、息災そうで何よりだよ」

「む、その声は——不思議さん？」

若干拗ねながら飲み物をぶくぶくさせていたら、聞き馴染みのある声が届いてきたので視線を後ろに向ける。

そこには一般人にしてはやけに濃い人——そんなに濃いものにも関わらず、原作では一切見たことがない謎の人物である——仮称不思議さんが、こちらに軽く手を上げて挨拶をしてくる姿があったのだった。

百合ゲー世界観の観測者？の件について

——不思議さん。

ナンパ君に連れられ現れた彼女であり、意味深な言葉を吐くことで私に「今」を認識させた謎の人物。

何故、私が彼女を警戒しているのか。……そんなもの単純である。彼女は僕っ娘かつ中二系という、かなり特徴的なキャラクターをしているにも関わらず、原作である「百合ゲー」には影も形もない人なのである。

無論、私はこの世界が偽物であるなどとは思っていない。

百合ゲー世界そのものだとも、もう思っていない。——けれど、根本的な部分が外れているとも思っていない。

……いやまあ、百合を通り越して同性愛全般が認められてるあたり、完全に外れているように見えるというのもわかるけど——それと同時に登場人物に関しては大きく外れているわけでもない。

原作である「百合ゲー」において役割を持っていた人は全て、この世界に実在している。……そもそもそんなに登場人物いなかった、というのは禁句。

ナンパ君に関してもちよつと除外。……酷い言い種になるけど彼、そこまで特徴的ってわけでもないし。

——そんな中明らかに、なにかしら普通ではない空気を漂わせている唯一の人物。

私が、唯一警戒しなければならぬ人物。

……いや、正確には彼女を警戒しなければならないわけではないのだ。そう、私が警戒すべきなのは——、

(彼女が、たまたま濃い人なのか、それともなにかしらの原作を持つ誰かなのか、だ！)

——変な横槍が飛んでこないか、のほうなのだ。

☆ ☆ ☆

「……なんで僕はこんなに警戒されているのだろうか?」

「あ、気にしないでやってください。たぶんまた変なことを考えてるだけだと思っんで」

「変なこととはご挨拶だな同胞!私はいつだって真面目だいつ!!」

「……ふたーっ」

「え、ちよ!?なんで今カウントしたの?!」

「なんのカウントですか!?私もやります!ひとーっ!ふたーっ!

みーっつ!」

「おお、それはまさしく我が心の故郷……」

「副音声と実際の内心がかなりズレてないかしらそれ……?」

……おかしいなちよっとシリアスな話だった気がするんだけどなあ?!

苦笑を浮かべ私達のテーブルの隣りに座った不思議さん。

そんな彼女に視線を飛ばしていたら、警戒していることが即バレしたあげく、同胞に当て擦られたうえにカウントが進むという災難にあつてしまう私。……カウントが進む理由がわからないので空恐ろしいのですがそれは。

そんなこととしてたら楽しいものセンサー全開な鈴莉ちゃんが悪ノリし、飛び出した言語に結花ちゃんが目を……輝かせ?淀ませ?て、最後に朱紅奈さんがツツコミを入れてめる。……いつものやつですねこれ?

あとどうでもいいけど「くもつとばってんメ」って漢字なんだね、和製漢字。

「クマミたいなの々」と同じで記号なのかと思つてたよ私。

……話が永遠にズレていきそうなので軌道修正。閑話休題
変な横槍と言うのは、すなわち他の世界と混じってないだろうな?という懸念である。

わりと軽々しくいろんなところで便利設定として使われている転生だけど、一口に転生と言つても結構違いがあったりする。

『成長して帰ってくる系』
『行きて帰りし物語』や『貴種流離譚』も見方を変えれば転移や転生の枠に入ると言うのだから、余人が思うより転生というものの間口は広いのだ、ということが窺えるだろう。……宗教系の転生とかまで考え始めると、頭が痛くなること請け合いだ。

ただまあ、そのあたりの仔細は今は無関係なくて。——現状では間口が広いと言うことが一番重要だったり。

間口が広い。それは即ち、視点を広げればさほど珍しい現象ではないかも知れないのだ、ということ。——自分という転生者の存在を肯定したとき、その世界に他の転生者がいない可能性とは如何ほどかということを問うもの。

悪魔の証明は端から問題定義しなければ起こり得ないものである。

——逆に言えば、一つでも実例があれば疑うこと自体は——それが実際に起こるかどうかは別として——幾らでもできる、ということでもある。

知識とは不可逆だ。知ってしまったことを意図的に忘れることはできない。

知ってしまった以上、深淵は常にこちらを見返している。 経験による疑いは常に付いて回る。

自身を根拠不思議なモノとして示すことができる以上、自分以外の不思議なモノの存在確率は、常に零を越えてしまうのだ。

……まあつまり、なにが言いたいのかというところ。

なんか突然にバトル展開になったり、本格的に人死が出て近くに名探偵がいたり、実は盛大な純愛モノからの寝取られ物語だったりしないだろうか——という懸念でいっぱいだぞ今の私、ということである。

いやね、よく考えてみて貰いたいわけですよ。

確かに、確かに！よく似た人であって別人なんだなって認識しましたよ私！みんなしてゲームとは違う挙動してるんだから作り物と違うわこれって確信はしましたよ!!

けどねえ？美人で个性的、さらにはこっちに重要な助言めいたことまでしてくる謎の人物、なんてものを見せられたらね。……疑うでしょこんなの！

なんにもないたまたまちよつと周囲から浮いてるだけの人ですよ、と言われて「そっかー、キミはちよつと目立つだけの一般人なんだねー」って納得する転生者がいたら、私はそいつの頬を引つ叩いて「目を覚ませお前の世界が侵^{クロスオーバー}略されてるぞ!」って怒鳴りますよ、危機管理能力どっかに置いてきたのか貴様っ! ってなりますよマジで。

……いやね、現状目の前にいないものを疑って備えてる、とかだつたら私もそんなの杞憂杞憂って笑うかも知れないけど。

いるじゃん、現状変な立ち位置ポジションにいる、変な異邦人要注意人物!

……怪しい、具体的になにが怪しいのかと聞かれると現状「怪しいから怪しい」としか言えないけど、とにかく怪しい。……怪しすぎて綾あやになつてないかこれ?

「ふむ、どうやら彼女は僕の存在がお気に召さないようだ。身も蓋もなく嫌われているようだし、さっさと御暇させて——」

「わーっ!? そそそそそそういえば自己紹介がまだでしたのことはわね私東山桐依でゴザイマスのことよ! そちらのお名前はっ!？」

「お、おおっ?。」

そんな感じで怪しみすぎたのが悪かったのか、スツと帰ろうとする不思議さん。

……危ねえっ!? 正体探ろうとしてるのにさっくり帰られたら、こつちも堪ったもんじゃねーですよ!？」

慎重に慎重に、オーケー落ちビー着クールけだ落ちビー着クール。……なんだ同胞その「こいつまた訳わかんねえこと考えてんだろうな」みたいな微妙な笑みは?

……はっ?! いかんいかん落ち着いて焦らずにだ、東山桐依は慌てない、いつもクールに素敵に無敵に勇気だ! ……なんだっけこのフレーズ?

「いい加減戻ってこい」

「あ痛あつ!?!」

四十五度っ!?

……幼馴染みからのチョップを受けて、ようやく混乱状態から戻ってきた私。

気を取り直して不思議さんのほうに向き直れば、彼女は小さく苦笑を浮かべ、

「なるほど、余計な気を使った甲斐はあつた、と見るべきかなこれは？」

「――、その節は、どうも」

返ってきた言葉に、少なくともこちらの内情に対して、あの時点ではにかしらの確信があつたのだろう……ということを知る。意味深、ではなく実際に意味のある言葉だつた、と。

「ご丁寧な挨拶も頂いたことだし、こちらも自己紹介を。僕の名前は柳瀬やなせ 栞しおり。見ての通り、極々普通のただの大学生さ。――身も蓋もないことに、ね?」

こちらに微笑を向けながら告げる不思議さん――もとい柳瀬さん。自身を普通と言い張る彼女に、私の警戒心は自然と高まっていくのだつた――。

☆ ☆ ☆

「あ、聞いたことあります! 近くの大学に探偵さんがいて、その人の名前が柳瀬、だつて言うお話!」

そして高まっていた警戒心は鈴莉ちゃんの言葉で明後日の方にかつ飛んでいった。

……今探偵って言いましたこの子っ!? よよよ選りにも選って探偵だっっていいましたかこの子?!

「おや、知っている人がいたとは。……まあ、正確には学部のみんなの相談事を（面白がつて）受けていたら、いつの間にか探偵みたいって噂されるようになっていたと、いうだけの話なんだけどね?」

よくあるだろう、物静かなボーイッシュ少女はなにかしら不思議な面がある、つていう風刺。カリカチユア

と柳瀬さんは言うのだが……、えー、本当にござるかあ? 実はホントに不思議能力とか不思議経歴とか持つてて、日夜迷宮入りしそうな事件を解決しているとかあるのではござらんかあー?

……みたいなものが籠もった視線を向けていれば、柳瀬さんはまた意味深に微笑んで。

「ないない。僕としてはそういうのも見てみたいところだけど、身も蓋もないことに受ける相談は大概が授業か恋愛か失せ物か……つて感じでね。君との会話が一番刺激的だったくらい、そういうモノとは縁遠い大学生活なのさ」

「ふむむなるほど。……んん?」

……なんか違和感があるような、ないような?

柳瀬さんの台詞になにか見逃してはいけないものがあつたような気がしたのだけれど、それについて考える前に、鈴莉ちゃんが元気よく柳瀬さんに話しかけたことで思考がそっちに引っ張られる。

「と、いうことは事件をズバツと解決!……みたいなことはしていないんですか?」

「できたら面白いんだけどね。最近はもっぱら秋則君あきのりをからかうことが楽しみになっているよ」

「……ああ、あのときの彼ね」

「そうそう」

話題はナンパ君についてのものに移行する。……聞く限り、順調に交際を続けているらしい。

それにしても、今日は彼の姿が見えないけれども……？

「補習に捕まってるよ、彼なら。身も蓋もない言い方になるけど、彼あんまり要領のいい方ではないからさ」

「ああ……」

そんな疑問は柳瀬さんの補足で霧散する。……なるほど学期末
夏休み前
……。

折角できた彼女と夏に遊べないなんて嫌だ、みたいに必死になって補習に臨んでいるのだろう。お労しやナンパ君……。

「真面目に授業を受けていなかったツケが回ってきているだけだから、同情の余地はないけどね？まあ三日もすれば補習も終わるだろうし、そこからは自由に動けるだろうさ」

「なるほど。……ふむ」

うーむ、探偵、探偵かあ……。

彼女の肩書を知り、どうしたものかと唸る私。……正体を探るのにいい方法……あるけど乗ってくるかなあ……？

そうして悩む私……の内心を知ってか知らずか、鈴莉ちゃんがとある提案を投げかける。

「そういうえば、柳瀬さんは失せ物探しの相談を受けてるんですよね？」
「ん？ああ、そうだね。身も蓋もない自慢になるけど、意外と発見率は高い方だと自負しているよ」

「じゃあ、ちよっとお願いがああるんです！」

「？お願い？」

私達がこれから遊びに行こうとしている無人島。

——実はそこには財宝伝説が存在しているので、それを探す手伝いをしたいんです、と。

……ん？まさかの宝探しものなの今回？

百合ゲー世界で船の上、の件について

意味深な笑みでこちらを煙に巻く謎の人物、柳瀬 栞を無人島ツアーに誘うことに成功した私達。

その肩書き——探偵という言葉に些かの不安を抱きつつ、それでも島に上陸した私達が見たものは、驚愕・仰天・狂乱・凶報の連続であった！

果たして、私達の二泊三日の無人島サバイバルは、どうなってしまうのか？

そして謎の人物、柳瀬 栞の正体とは!?

☆ ☆ ☆

「……という夢を見たんだ」

「またなんか胡乱なものを見たんだなお前……」

「止めろー！存在そのものが胡乱、みたいな目で私を見るのは止めろー！」

鈴莉ちゃんの実家から貸し出された個人所有のクルーザーに乗って向かうのは、とある場所にポツリと浮かぶ無人島。

より正確に言うと、昔は人が住んでいたけれど過疎化の果てに人がいなくなった、いわゆる廃村的な無人島なのだそう。

鈴莉ちゃんの実家は、それを色んな経緯から買い上げることになったのだとか。

無人島って所有していても固定資産税が安いらしいので、税金対策にもおすすめらしい……なんて話があるけれど、そういうことなのかね？……うーむ、そのあたりは鈴莉ちゃんのお家の規模がわからないでなんとも。

まあ、今回はそんな無人島の一つをお借りして、ちよつとしたサバイバルを行おう！といった感じの話になっているのだった。

ついでにいうと、その島にはどこぞのお殿様の隠し財宝があるとか

ないとか……みたいな噂があるとのこと、そこに探偵（原義的な意味で）と呼ばれている柳瀬さんを招いて、ちよつとした余興にしよう——みたいなことも合わせて決まったのだそうだ。……なんか、いつの間にかだいたいぶ大事になつてない？

「大人一人に子供五人だけ、それで無人島に二泊三日……とか認められるわけないだろ？その点、柳瀬が同行するってことなら話は別、僕もちよつとは安心できるつてもものさ」

「ははは、なんだか随分と買つて貰つているようで何よりだよ。……あ、でも付き合うとかは間に合つてるよ、身も蓋もない話だけど」

「はっ、誰がお前なんかと。精々秋則と、心ゆくまでイチヤイチャしてればいいんじゃない？ここにはいないけどさ」

「あ、もうお兄様！喧嘩腰はよくないと何度も注意させていただいているじゃないですか！」

「……ちっ」

「ああもう……あ、すみません先輩。お兄様はちよつと口が悪いですが、別に悪人というわけではないので、どうかお目溢しを頂ければ、と！」

「うるさいぞ鈴莉！……つたく、なんで僕が送迎なんか……」

柳瀬さんを無人島に誘つた最大の理由は、鈴莉ちゃんのお兄さんが柳瀬さんと同じ大学に通う同級生だったから、その評判を知っていた——ということかららしいのだけけれど。

……なんかフラグが！変なフラグが！積み重なって行つてないこれ?!ヤベーフラグじゃないよなこれ!?!つていうか聞いたことがある、つてお兄さん経由だったんだね?!

クルーザーを運転しながらぶつぶつと文句を呟いているお兄さんと、そんな彼をニコニコと見詰めている鈴莉ちゃんと。

時折柳瀬さんがお兄さんに何事かを話しかけて、それに対してお兄さんがなにかしら反論だとか嫌味？だとかを返している。

それを鈴莉ちゃんが苦笑しつつも微笑ましげに見ている……つて

これ、私完全に部外者だね？

そんな和気あいあいとしている運転席から離れて、船の後ろのほう——いわゆるアフトデッキと呼ばれるところに向かう。

「ふ……ふふふ……まさか船酔い………するなんてね………」

「大丈夫朱紅奈さん？沈黙が多くなってるせいで、喋りかたなんか先生みたいたいになってるけど………」

「ふ、ふふふ……大丈夫、ちよつと気持ち悪いだけだから……大丈夫大丈夫………」

「まったく大丈夫に見えねえんですがそれは」

そこには、手すりに倒れ込むように全体重を預けながら、遠くのほうに意識を飛ばして虚ろに笑う朱紅奈さんの姿があつた。……流石に吐くほどではないみたいだけど、明らかにその顔は青く、体調不良であることが窺える。

船酔い……もとい乗り物酔いには、外気に当たって遠くを見るのが一番効くらしいけど。……効いてるのかなこれ？今滅茶苦茶外の空気に当たっているわけだけど、楽になっているようには見えないんだけど……。

心配しつつその背を優しく撫でてあげると「ふ、ふふふ……優しさが沁みるわね………」と、彼女は空笑いを浮かべていた。……乗り物酔いに水って効くんだったっけ？

「はい……お水……辛かったら……横になったほうがいいわよ………」

「あ、先生」

なんて悩んでいたら、先生がコップに入つた水を持って、クルーザー内部のキャビンから上がってきた。……私が心配せずとも、すでに対応して貰っていたらしい。

彼女の言葉で素直に横になった朱紅奈さんと、私が見ておくわ、と手を振る先生に小さく手を振り返して、今度は船首側のデッキのほう

へ。

「ほう、ほう！血路を開き未踏の地に臨むか！」

「あんまり乗り出すと落ちるぞ」

「む、ご忠告痛み入る。しかし、蒼き空気も悪くない」

「結花ちゃんがテンション高めだ?!」

前方の柵バウレールから身を乗り出して、楽しげに声を上げる銀髪少女幼がそこにいた。……いやまあ、普通に結花ちゃんのことなんだけども。

あんまり見たことのないはしやぎように、ちよつと面食らった感があるのは間違いないと思う。……なんだかんだ落ち着いてるほうだからね、結花ちゃん。

それを後方彼氏面……いや後方保護者面？で見守っているのが同胞である。

こっちはこつちで、船体に背を預けてリラックスしてる風だけど、その実彼女が落っこちそうになったら即座に飛び出すつもりなのか、ちよつと肩に力が入っているのが窺える。

……まさに保護者面、というべきか。

いやまあ、気持ちはわかるけどね？だって結花ちゃんすつごいはしやいでるんだもの、気分は幼稚園児を見守る保育士さんだ。

楽しそうな結花ちゃんの様子に小さく息を吐いて、同胞の隣に腰を下ろす。

……軽快に海に行くクルーザーの上、吹き抜ける海風は、現在の天気のようにカラツとしていて爽やかで。

照りつける太陽も、今ばかりは気分を盛り上げる一要素でしかなく。……思わず、口元に笑みが浮かんでくる。

「あつついのはイヤだけど、潮風を浴びて突き進むのは楽しいねえ」
「そうだな。……にしてもクルーザーに無人島か。いいトコのお嬢様なのは知っていたが、こうして目の当たりにするとちよつと気後れるな」

視線だけ右上に投げれば、同胞がしみじみと眩きを返してくる。

……ふむ、島とクルーザー、ね？

「ところで同胞、このクルーザーって結構おつきいし、内装もしつかりしてるよね？」

「ん？ああ、そうだな。寝室あり・化粧室あり・船上キッチンあり……って感じで、普通に船の上で何泊かするってこともできるんだろ
うなっというか」

同胞にこのクルーザーについての話を振る。

……全長大体十五メートル、重さ大体十七トン、定員数十余名……。スペックだけ見てもなんとなく「凄いのはこれ？」となる、立派な船舶だと言えるだろう。

「これから私達が行こうとしている無人島、大体東京ドーム四個ぶんくらいの大きさだっけ聞いたよね？」

「そうだな。……東京ドーム何個分、とか言われてもパツとわかるもんじゃないけど」

で、次に話すのは今現在向かっている無人島について。

東京ドームが一つで五万平方メートルなので、その四個分という結構大きな無人島だと言えるだろう。……六万坪くらい、と単位を変えてもよくわからないんで、実際に上陸してみないと実感が湧かないだろうけど。

……さて、これはあくまでも事前知識。重要なのはここからである。

「んでね同胞。私なんとなーく気になって、同じくらいの島と船の値段を調べてみたのよ」

「……ほうっそりやまた、どれくらいの値段になるんだ？」

同胞の言葉を聞きながらスマホの画面を操作して、素人判断ながら調べてみた結果を表示。

そのままスマホを裏返して、同胞にだいたいの試算を示したところ。

「……桁がおかしくないか？」

「私としては——建物とか諸々含めると多分差が付くんだろうけど、島も船も同じ値段っぽい……ってことのほうがびっくりしたかな？」

スマホを指差してひー、ふー、みーと桁を数えては「？」と首を捻つてもう一度カウントし始める……という、若干挙動不審になった同胞が生まれてしまった。

……うん、どっちも五桁万円、下手すると六桁行く場合もあるよ？みたいな情報を初見でぶち込まれたら、私だってそうだったと思うのでまあ仕方ないねって感じだけでも……いや寧ろどっちの値段にしてもピンキリすぎるといえるか。

安くていいならうん百万だし、高いのならば七桁届くんじやないのか、って感じだしで、とてもじゃないけども、庶民の金銭感覚じゃついていけない次元の話になっている。

……なんで鈴莉ちゃん、普通の学校に通ってるんだろう？

家柄的にはお嬢様学校一択なお方なのでは？私ら庶民のくせに馴れ馴れしすぎるのでは？その内無礼千万で市中引き回しのうえ打首獄門になるのでは？

「おや？そのあたり、先輩は覚えてない感じですか？」

「うひゃあっ!?!びびびびびっくりした!?!どっから現れてるのさ鈴莉ちゃん!?!」

そんな感じでむむむと唸っていたら、下から鈴莉ちゃんがひよっこりと顔を出してきたので、思わず飛び退る私。……びびびびっくりし

た、場所が場所ならそのまま海に落っこちてたよ私……。そんなこつちのドキドキなぞ露知らずとばかりに、バウハツチ窓から上半身を飛び出させている鈴莉ちゃん。その表情は大満開にっこりにこで、楽しくて楽しくて仕方がないといった感じだ。

「もともと近くの別の女学院に通う予定だったのを、お祖父様に無理を言っただけで貰ったんですよ！」

「な、なるほど。……そ、それは何故に？」

「もちろん、先輩達と同じ学校に行きたかったから、ですよ！」
「……なんですと？」

彼女の口から飛び出した答えに、私は困惑する。

あれ？そんな話私聞いた覚えがないっていうか、それがホントなら彼女の進路変えたの私らなの？マジ不敬なのでは？

バツと隣の同胞に視線を投げれば、「ほら、ボーリング」という言葉が返ってくる。……え、あれ!?あの時の!?『後輩ちゃんキャラ変事件』の発端のあれが原因なの!?

「はい、あのときの一件がきっかけです。……お兄様と仲直りしたのも、あれがきっかけでしたよね？」

「……なるほどな。お前らが原因だったんだな、こいつの豹変は」
「はひいつ?!お義兄様にいさまあつ!」

混乱する私に追い打ちを掛けるように、後ろから鈴莉ちゃんのお兄さんが声を掛けてきた。

あれ!?運転は!?と思っただけで運転席に視線を向ければ、ガラス越しにハンドルに手を掛け、こちらに笑みを返してくる柳瀬さんの姿が見える。……つ、ツツコミどころしかねえけどツツコめねえ……!

誰がお義兄様だ、とこちらを睨んできた彼は——小さく頭を掻いたあと、渋々といった感じにこちらに頭を下げてくる。

……え、なにこれ?どういう状況なのこれ?!

私の困惑は酷くなるばかり、隣の同胞もフリーズしたので役に立たない！詰みかなこれ！

「うちのバカが世話を掛ける。……それと、このバカに向き合ってくれてありがとう。……あーっ！なんで僕が謝んなきゃいけないんだろうねっ!?!」

「うえっ?!情緒不安定過ぎるっ!?!」

「やかましいっ!……はっ、精々仲良くするといいさ。……できれば末永く、な」

「え?え?」

「……全く、お兄様は素直じゃないんですから」

頭を下げられたと思ったら突然怒鳴られて、最終的に鈴莉ちゃんを任された、のかなこれ？

……ええ……?なにが起こったのか全然わかんないんですけど……。

っっていうか同胞も、意識を宇宙猫してなくていいから、どういこうとなのか説明してくれよおっ!?

運転席に戻っていくお兄さんの背を優しく見守る鈴莉ちゃんと、その横で困惑し続ける私と同胞。

……このよくわからない状況は、船首で海を見るのに飽きた結花ちゃんが戻ってくるまで続いたのだった。

百合ゲー世界でサバイバル開始の件について

「じゃ、二日後の同じ時間くらいに迎えにくるから。……怪我とかするなよ、お祖父様に説明するの僕なんだからな」

「はい、承知してしますよお兄様。そちらのほうもお元気で」

「……ふんっ。じゃ、柳瀬。後は宜しく」

「承った。……ついでに、まだ見ぬ財宝も持って帰ってみせるさ」

「はいはい、そっちは期待せずに待ってるよ」

鈴莉ちゃんのお兄さんは、その皮肉めいた物言いを崩さぬままに、クルーザーに乗って戻っていった。

……うーむ、なんかというか猫みたいな人だなあの人。……犬っぽい妹と、猫っぽい兄か。傍から見ている限り相性はいい……のかな？

そんなことを思いつつ、降りた場所から周囲を見渡す。

クルーザーから下ろされた場所は、一応船着き場っぽいところだった。

……手入れとかされていないからわりとぼろぼろの見た目で、正直ここに下ろすのか……って気分になったりもしただけだね。

まあ、木の栈橋とかでもない、普通のコンクリートの波止場だったので、道が崩れたりしていない分マシ……と言えなくもないような？ 必要最低限の荷物だけを持って、そのまま島の陸地部分に上陸。

かつては漁村か・はたまた鉱山で栄えた村だったのか——そんな当時に偲ばせる年季の入った建物が、崩れきらない程度に立ち並ぶ廃墟街。

廃村になったのはもう何十年も前らしく、流石に人の気配は感じられない。

……野生動物の気配も、ここから見える範囲にはなさそうだ。

「つってもイノシシとか鹿とかなら、平気で海を渡ってくるって言っしなあ」

「そういえば、食べ物があればわりと居たりするんだっけ？」

同胞の言葉に、むむつと記憶を思い出そうとする私。

……そういえば、いつだったか陸地から離れた離島に泳いで渡る、イノシシの集団が問題になっている——みたいなニュースを見たことがあるような？

飢え死にするくらいなら、海を泳いで渡るくらいわけない——ということなのか。

人の手を離れた島の中で、野生動物達が密かに楽園を築いている——なんて、そんなセンサーショナルな見出しで撮影された映像が流れていた気がする。

あたりを見回してみる。

……今のところ、鳥の鳴き声くらいしか聞こえてこないけれど。一応、警戒くらいはしておくべきだろうか？

「ふむ——、とりあえず、近くには居ないみたいだ」

なんでそう思うんです
「む、わかるのか？」

そんな風にちよつと緊張しているところに、柳瀬さんが声を掛けてくる。

結花ちゃんがわかるのか？と問いかけると、彼女はちよつとした蘊蓄を語ってくれた。

「この島は片側が人家・もう片側が木々に覆われた山と言う風に綺麗に別れている。——見た限り、こちら側に彼等が食料とするようなものはないだろう。人間がまだ住んでいる、というのなら話は別なのだろうけど、居ない以上は彼等が好む農作物は存在しない。……なら、必然的に彼等が縄張りとするのは山の方。何か逼迫した事態でも起こらない限り、好んでこっちに来ることはないだろうさ」

「はへー、なるほど」

イノシシは雑食性で、かつ美味しいものを好むのだという。

人から害獣扱いされているのは、農作物があればそちらを優先して摂食するから。……自然にあるものよりも、人が育てたモノのほうが美味しいらしい。

そしてそれは、人の手から離れた場所では人の手の入ったものは得られないので、必然的に自然にあるものを食べざるを得ない、ということでもある。

……泳いで他所に行くこともできるのに、わざわざ人の居なくなつた場所に残っているのであれば。——食べ物^の在処について、熟知している個体だろうと予測できる。

飢えを嫌つて移動を断念したのであれば、端から何も無い場所に近寄ることもないだろう。

ゆえに、こちらにイノシシは——仮にこの島に生息していたとしても、近付いてくることは稀だろう。

そういうことを、柳瀬さんは言っているのだった。

「ま、野生動物が何を考えているのかなんて、正確に測り様がないから。……身も蓋もないことに、半分くらい当てずっぽうになるんだけどね」

そもそも調理とかしてたら、匂いにつられて近寄ってくる可能性もあるしね、と彼女は話を結ぶ。

……ふーむ。信憑性云々は置いといて、実にらしい解説劇だった。探偵扱いされているというのもよく分かる話術だと言える。

「……まあ、イノシシ云々は置いておくとして。今日はどこで雨風を凌ぐつもりなのかしら？」

うんうんと頷いていたら、船酔いから復活した朱紅奈さんが、今日のキャンプ地について尋ねてくる。

……日はまだ昇りきっていないので、あれこれと行動する時間はあると思う。ちよつと遊んだりしても、まだまだ余裕があるだろう。

とはいえ、テントを張るなら場所を見付けなければならぬし、廃屋を間借りするにしても痛みの酷くない場所を探さなければならぬ。

……水についてもちよつと問題かな？

一応それなりの量の飲料水を予め用意して貰ったけれど、それとは別に蒸留したりわき水を探したり……みたいなことをする必要もあるだろう。

一応サバイバルという体なので、そこらへんを手を抜くのは有り得ない、とも言える。

つていうか体験できるなら体験しとくべきでしょ、火起こししたり過装置作ったり虫取りしたり！

……最後のほうは違ふ？ははは。——絶対でつかいクワガタ居るだろうからそこは外さんぞ私は（鋼鉄の意志）

「……まあ、初日はテントを張る、という形でいいんじゃないでしょうか？」

「元気がある内にやってみよう、ということかしら？」

「ですすーもし二日目以降ちよつと無理がありそうなら、廃屋をお借りして雨風を凌ぐ、という感じでー！」

そんな感じに私が燃えていると、鈴莉ちゃんが初日はテントにしよ、という提案をする。……特に反対意見も上がらず、そのまま可決。

建物郡から離れた森と街との境あたりに、テントを設営することが決まった。

そしてそのまま、衣食住の『食』についての話に議題は移っていく。

「……まあ寝るところはそれでいいか。で、食べ物は何？釣り道具あるし、とりあえず俺は釣りに行くけど」

「じゃあ……食べられそうな野草とか……果物とか……探して見るわね……」

「その辺りの知識は一通り修めている自信があるし、僕もそつちの手

伝いに入ろうかな」

「あ、私一応お兄様から水源の場所については聞いていますので、案内くらいはできそうです!」

「じゃあ私は、栗花落さんの手伝いをしようかしら」

「……あれ?」

そうしてみんながサクサク自分の仕事を提案していくものだから、結花ちゃんと私が残ってしまった。——つてことは、

「……テント設営、頑張ろっか?」

「よ、宜しくお願ひします承った、全力で行く!」

むう、女性でも組み立てやすいテントっていうけど、大丈夫だろうか?、

なんだか張りきっている結花ちゃんを見ながら、はてさてどうしたものかと思いを巡らせる私なのだった。

☆ ☆ ☆

「三人用のテントを三つ設営、意外と大変だねえ」

額の汗をぬぐって、小さく息を吐く。

テントの設営って溝を掘ったりシートを引いたりペグを打ったり……みたいな感じで、意外と工程が多くて大変だな、とちよつと辟易中。

ソロキャンパー達はこういうの全部テキパキとやるらしいけれど、流石に初心者二人じゃテキパキとは行かないみたいだ。

……いやまあ、結構簡単に組めるテントを選んだので、本来のそれに比べれば随分と楽になっているんだろうけどさ?

「数が意外と辛いのですね群れ為す家屋の威容たるや……」

なんやかんやで三つ作る、というのがシンプルに疲労感を与えてく
るのが辛いというか……。

いやね？私ジツと待つの苦手だから、同胞の代わりに釣りをすると
が無理だし、野草とかキノコとか見分けられる気がしないから、先生
達についていくの無理だし。

……そうなるかとテントか水の確保に動くしかないわけだけれど。

正直水の確保についてはそこまで人数が必要、ってほどでもないか
ら、鈴莉ちゃんと朱紅奈さんが立候補した時点で、それ以上人数を動
員する必要はないし……。って感じで、必然的にテントの設営に回る
しかなかったんだけだよ。

「……いや、二人だけで全部終わらせようとするからでしょう、その疲
労ぶりは」

「あれ？朱紅奈さんお早いお帰りで」

そんな感じで駄弁っていたら、テントの向こうからひよいと顔を覗
かせる朱紅奈さんの姿。

……あれ、早くね？って感じの言葉を返したら、煮沸やる過の手間
を考えて、ポリタンク四つぶんだけ汲んできたのよ、と答えを返され
る。……それならまあ、最大二往復で済むか。大体四十分くらい？

「ってことはもしかして、私らちよつと先走った感じ？」

「寧ろ三つとも終わりかけなのが、初心者としてはちよつと早すぎる
くらいなのでは！」

あとで聞いたところによると、初心者がテントを設営するのに掛か
る時間は、目安として二十分くらいなのだという。……三つだと一時
間？

この時はまだ四十分くらいしか経過していなかったけど、大体フラ
イシートを被せて固定したら終わり、ってところまで終わってたの

で、ちよつと性急過ぎた面が無くもなかったようだった。

「拙速もう少し落ち着けばよかったですね貴ぶれど兵追いつかず……」

「そう……だね……」

あとに残ったなんとも言えない疲労感を噛み締めながら、私と結花ちゃんはがつくりと頭を垂れるのだった――。

☆ ☆ ☆

「へい同胞、釣れてるー?」

「海が綺麗なものだから、直接銚で刺したほうが早いんじゃないかって気がしてるとこ」

「お、おう……、意外な盲点……」

最初に上陸した波止場からちよつと離れた位置の岸壁から、海に向かって釣り糸を垂らす同胞が一人。

近付いて釣果について訪ねてみるけど、結果は思わしくないようだ。

……そのわりに、近くのバケツの中には、三匹ほど魚が突っ込まれていたわけなんだけど。いや、結構釣れてない?

「自分から釣りに行く、って言つといてその程度だと示しが付かねえだろうがよ……」

「お?男のプライドってやつ?私は釣り苦手だからよくわからんけど、その意気やよし!」

ふむ、言い出しつぺ的には不満があると。……ならばここは私が一肌脱ごうじやないの!

「いや、一肌脱ごうじやないの!」

「シューベルトの『ます』って歌、あるじゃない?」
「あーもうわかった、頼むからやりすぎるなよ……」

額を抑える幼馴染みに笑い返しつつ、近くの砂場から砂を掬っていざ構え。

——綺麗な海で針が見えてしまうと言うのなら、わざと濁りを作つてやればいいのさ!なんてったって釣り人は卑怯な盗人、なんだからね!

バサツ、と砂を撒き、強制的に海を濁らせる。まあ、あくまで一時的にしか濁らないわけだけでも。

「ふっはっはっはっ!! ついでに砕いたオキアミ入りじゃい! それ今じゃ同胞!」

「なんなんだそのキャラ付け……」

濁りの中に餌があれば、食い付かざるを得ないよなあ? ふはははこれぞ人間様の知恵というものよ!

真横で高笑いをあげる私に白い目をよこしつつ、同胞が順調に釣果を上げていく。

うんうん、濁らせるのにも限度があるからサクサク釣ってくれ、私も頑張った甲斐があるから。……オキアミって意外と匂いがキツイから、あとで綺麗に手を洗わにやならんのが辛いところよ……。

そんな感じでバケツいっぱいになった釣果を持って、堂々と凱旋する私と幼馴染みなのであった。

百合ゲー世界で昼食・虫取り・探りあいの件について

「釣った魚を豪快に焚き火で焼くのとて、結構サバイバル感あるよね」
「まあ、昼間にあんまり凝ったものを作るのもあれだしな」

食べ終わった後の片付けをみんなで行いつつ、あれこれと話す私達。

お昼のメニューは野草を和えたパスタと、豪快に塩だけで焼いた海魚。

釣った魚は早々に締めておいたので、夕食は夕食でなにかしらの料理に使われることだろう。野草のほうも、結構量を取ってきていたよなので、まだまだ活用されるはずだ。

……基本的にはどっちもフリットかなあ？揚げるのって楽でいいよね、調理的にも衛生的にも。

果物のほうはイチジクが見付かったみたいで、そちらが幾つか。

もう少し時期が早かったら、ビワやアンズなんかも見付かるらしいのだけれど、今回は時期的に外れていたので収穫はなし。

……自然に生えているというよりは、以前住人達が育てていたものが手入れされないまま自然に戻った、と言った感じらしい。

なので時期によつては、さくらんぼだとかアケビだとかも取れるようだ。

その他キノコも幾つか取れたみたいだけど——私には違いがよくわからん。そもそもキノコって秋が旬なのでは？

「夏が旬、というキノコもあるよ——というか、基本的には天然物かつ日本で取れて夏が旬、というのはキクラゲくらいしかないけどね」
「ほへー」

確かに、取ってきたキノコには、なんか茶色くてぷよぷよしたやつしかないような？

キクラゲは、中華料理なんかでよく使われている黒くてコリコリし

た食感のキノコである。……というのは、正確にはちよつと違うらしい。あれ、大体はアラゲキクラゲという近縁種なのだそうだ。

旬のきくらげ（一度も乾燥させていないことから『生きくらげ』なんて風と呼ぶらしい）は、ぷるぷるとしていてコリコリした感じではなく、菌触りも柔らかくてキノコの香りが強めなのだとか。実際に食べ比べると、ほぼ別物だともなるらしい。

「昆虫食に抵抗がないなら、カブトムシ辺りはわりとイケるらしいけどね」

「……アレを食べるのは、ちよつとどころじゃない勇気がいるなあ」

次いで飛び出したのは昆虫食。

毒虫だとかでなければ、大概の昆虫は加熱することで食べられる、らしい。セミとかイナゴとかも人気なのだとか。

……いやまあ、そこまで追い詰められてるわけでもなし、わざわざ好んで食べたいとは思わないけど。……ほら、その、一応女の子ですので私。

「都合のいいときだけ女性面を押し出していくスタイル」

「やかましい、捕まえるのはまだしも食べるのは専門外じゃないっ」

「いやその、捕まえるのもちよつと……」

「右に」

「同じね」

「……むう、カツコいいのにクワガタとか……」

食べるのも無理だけど触るのも無理ですよ、と他の女性陣からの訴え。

柳瀬さんは平気そうなので私達が変、というだけなのかもしれない。……いや私は中身が中身だから、柳瀬さんが殊更変なんだなこれ？

「よし、行きましよう柳瀬先輩！私、クワガタゲットしたい！」

「んんん、なんでそんなにクワガタに拘っているのかはよく分からないけど。……まあ、森の調査も踏まえて、同行させて貰おうかな」

「ん、じゃあ俺もついていくか」

「では私達は留守番を！焚き火用の枯れ枝とか集めて待ってますね！」

よし、ならば虫平気組で森林探検だ！

つてな感じで声を上げると、柳瀬先輩は小さく首を捻りつつも了承の意を示してくれた。……この時点で、引率的な意味で先生の居残りが決定し、それに合わせるように朱紅奈さんと鈴莉ちゃんが不参加を表明。

幼馴染みは唯一の男性としてこっちに参加を決めたため、三人での行動することが決まった——と思ったら。

「わ、私も、もも同行せり！」

「!？」

なんと、結花ちゃんがこっちへの参加を表明。

……おお、結花ちゃんつてば虫とか大丈夫なんだ？

そう問い掛けたら、彼女は目をキラキラと輝かせて、ぶんぶんと首を縦に振っていた。……あらやだ、これ私よりテンション高くなーい？

なんだか意外な面を見たような気分になりつつ、私達は留守番組に別れを告げ、森の中へ悠然と進んでいくのだった。

☆ ☆ ☆

「……見る限りは野生動物の痕跡はない、か」

「とりあえず鳥しか飛んでないですねー。お、カブトムシみつけ……つて高過ぎて届かないや」

山の中をうろちよろししながら、木の下のほうを観察したり、上のほうに視線を向けて、樹液に虫が集まっているのを発見したり。

……ふむ。柳瀬さんの痕跡探しは、野生動物対策もあるけれど。同時に、宝探しのためのものでもある。……ちよつと手伝う、くらいはしたほうがいいのだろうか？

「まあ、あるかも？みたいな感じの——身も蓋もないことを言えば、眉唾レベルの信憑性しかない話だからね、見付かるかどうかは正直五分もいかないと思うよ」

「むう、五分もないと。……それわりと割に合わないのでは？」

「別に報酬を受け取って依頼された、というわけでもないしね。彼がこちらに期待しているのは、引率者としての役割の方だし。そこまで気負うものでもないさ」

そんな感じに手伝いしましょうか？みたいなことを遠回しに聞いたのだけれど、返ってきたのはそもそもそこまで真面目に探しているわけではないよ、との答え。……意外と緩いなこの人。

「先輩 先輩 向こうの方方、クヌギがありますよ
「見よ同盟者！黒銀の至宝、我等を座して待てり」

「お、おう。……すつこい元気だな今日の在原は」

ちよつと離れた位置では、クヌギの木を見付けた結花ちゃんが、同胞の手を引いてそちらへと駆け出す姿が見える。

彼女達はクヌギの木に集まった昆虫達に夢中で、しばらくこちらに意識を向けてくることもなさそうだった。

「おや、お誂え向きに、ということかな？」

「……気付いていたんですか？」

「こちらの言葉に彼女はまあ、なんとなくなくね？と微笑を返してくる。

……話す機会を窺っていた、というのは察せられていたわけか。通りで話が早いと思っていたが……。

「クワガタ云々も、その為の方便だろうか？」

「あ、いえ。そこはわりと本気です。この島オオクワガタ絶対居るんで、絶対見付ける気でいるので」

「……あ、ああ、うん？」

彼女はクワガタ云々をみんなから離れるための方便だと思っていたようだ。……ふふ、そこは見誤りましたね先輩！クワガタ捕獲大作戦に関しては本気だよ！野生のオオクワとか見たいに決まってんでしょ?!

ふふふ、事前に鈴莉ちゃんのお兄さんから、この島にオオクワが居ることは確認済み！

持ち帰る気は流石にないけど、見付けたら手に乗つけて写真くらいは撮るんだ……♪

って、違う違う。そういうことはとりあえず置いといて。

「クワガタはまああとにして。……私がなにを聞きたいのか、わかりますか？探偵さん」

「——そうだね。的確な助言をされた、と君は思っているんだろう」

真面目な空気に戻って、疑問を一つ。

——私は、彼女がなにかしらの超能力でも持っているのではないかと疑っている。

原作にはそういうのは——一部を除いて存在していなかったし、その一部に関して『少し不思議』の範疇に収まるものでしかなかった。けれど、彼女はその原作の外から現れた存在である。——なにか常道から外れたモノを持っていたとしても、おかしくはない。

「アレは確かに助言だったよ。今まで受けたことのある相談の一つ

に、君と同じように不安定な精神状態を抱えた依頼主が居たことがあつてね。——中身と外身が合っていない時にすべきことは、原則似たようなものさ」

そう疑う私に返ってきた答えは、性別不合——大昔には性同一性障害と呼ばれていた、心と体の性が噛み合っていない人間に出会ったことがあつたから、というものだった。

……まあ、確かに。私の中身は男寄りで、その外見は美少女。噛み合っていないと言うのはまあ、間違いではない。

「僕の方を見て、その服装に疑問を抱いているように見えたからね。僕という一人称と、スカートを履いているという事実が、どうにも受け止め切れていないような感じだったから」

「……まあ、そうですね。男性を感じさせる部分、女性を感じさせる部分。その両方を受けて、貴方が中性的な人だと思っていました。……よくよく思い返すと、あの人に対して向けていた仕草とかは、普通に女性的なものでしたけれど」

「あれ、バレてた？……可愛い女の子アピールすると喜ぶんだよね、彼」

そのあとちよつと男の子っぽくすると、もつと喜ぶんだけど。と悪戯っぽく笑う柳瀬先輩。

……んんん、なんかちよつと知つてはいけないことを聞いてしまった気がするけど、ナンパ君の名誉のために聞き流そう。決して「やっぱり同胞のが好みだったんじゃないや？」とか思つてないぞ、うん。

「後はまあ、他の人への呼び方も不可解ではあつたかな。……決して名を呼ばず、記号めいた呼び方をする君と、それに極力合わせるように話を進めていた周囲。——あの時君は、僕の事を名詞で呼ぶことは一切無かつた。それは恐らく、あの時の僕が、君にとっては単なる部外者だったからだろう。意識してか意識せずにかはわからないけれ

ど、やんわりとした拒絶感があったことは薄々感じ取れたさ」

次いで返ってくるのは、ゲーセンでの一連の流れの話。

……心の中では不思議さん呼ばわりしていたけれど、確かにそれを口に出した覚えはない。

それを口にしたのは、問題が解決したあと。

水着を買いに出掛けたあの日の百貨店で、再度顔を見ることになった時が初めてだった。

「少し見誤った部分があるとすれば、君のそれが性別不合では無かったことくらいかな」

「——、どうして、そう思ったので？」

小さく苦笑する彼女に、僅かに肩が強張る。

みんなに説明はしてみたものの、どうにも理解に差があるような気がしていた。

……それを彼女は、わかっているように口を開いた。ゆえに、私は密かに警戒心を上げる。

「そもそも話、外と中がずれているという認識自体が間違っていることに気付いたのさ。……性別不合の場合、原則的にはどちらかに性の認識を寄せるように動くものだ。本人はどちらかの性に対して不快感・ないし不自由感を覚えているものだからね」

彼女は語る。

一般的に、自身の性別に対してなにかしらの違和感を持つもの、それを性別不恰や性別違和と呼ぶ。

……のだが、私に関しては不恰も違和も微妙に噛み合わないだろうと気付いたのだとか。

——男であることにも、女であることにも別に不自由感を感じていないようではない。寧ろ、男性的な思考を保ったまま、女性的な振る舞

いを楽しんでいるようにも思えたのだと。

「それは、どちらかと言えば第三^{Xジェンダー}の性と呼ばれるものだろう。その中でも両性という分類に入るものだ。——男でも女でもある、と言うね」

「なる、ほど?」

……内面的には男性を自認してはいるけれども、美少女としてお洒落したり甘いもの食べたりするのも、私は普通に好きである。

——そうして男女の両方を好きに楽しんでいる私は、確かに両性的であると言えるのかも知れない。

「——どうしてそうなったのかは知らないけれど。ある意味、僕は君の先行きが楽しみでならないのさ」

「それは、どういう——」

「おい、こつちクワガタめつちや居るぞー」

「なんだと同胞! 待ってるすぐ行くぜひゃつはーっ!!」

真意を問い質そうとして、同胞からのクワガタ発見報告が耳に入っ
て全部すっぱ抜ける。

待ってるオオクワ! 私はお前に会うためにここに来たんだー!!

「——その愛は無償にして区別なきもの。人の身では辿り着けぬ筈のもの。真に区別なきそれに一番近いのは——さて?」

「……? 柳瀬先輩、早く行きましようよ! オオクワが! 待ってるんですよーハリーー!」

「はいはい」

何事かを呟いていた柳瀬さんを急かし、同胞達の元へ向かう。

……なんか、変な期待されてないかな? なんて疑問は、一先ず後回しにする私なのだった。……深掘りするのが怖い話になっている気

がしてきたとも言う。

百合ゲー世界でサバイバル一日目の夜を迎える件について

突入したクワガタ軍団の中には、オオクワの姿は見あたらなかった。

……むう、ノコクワとかも悪くはないけど、見たかったなオオクワ……。

「なんなんだよ、お前のそのオオクワへの謎の情熱は……」

「だってさ同胞！森のダイヤだぞ、森のダイヤ！見たいに決まってるじゃんかそんなの！」

「ダイヤはそれは凄いですね金剛石を名乗るか、面白い！」

腑抜けたことを言う同胞に熱く語って聞かせる。

オオクワガタと言えば、世の昆虫愛好家が挙って探す、森の至宝である。

……いや、天然物だと大きさによつてはエグい値段になる、みたいな面があるから、そっちだけ気にしてるようなものもいるかも知れないけれどそれはそれ！……関係ないんだけど、とあるフリマサイトで「オオクワガタの中古／未使用品を探そう」とか書いてあつて思わず吹きました。……定型文だから仕方がないんだろうけどさ、未使用品のオオクワガタってなんだよ（真顔）

まあ、それは置いといて。

『オオ』という冠詞が尽く昆虫というのは、基本的に人気者なのである。具体的にはオオクワガタ・オオカマキリ・オオムラサキなどなど。……凶暴かつ養蜂家に被害が出るので嫌われているオオスズメバチも、フォルムとか強さとか自体は認められているように、大きい虫はやっぱり見ている面白いものなのだ。

……え？ここであげた四種以外は大概微妙なのしかない？知らない。

とにかく、オオクワガタには夢があるのである。

見付けられたらヒヤッホー!と言う気分になること間違いなしなのだから、見付けられそうなら見付けておこうってなるのは仕方ないんだよ!……みたいなのを同胞に熱く言っただけ聞かせる私。

「わからん……ぜんぜんわからんなんも……」

「なんでさ!?!」

まあ、すつごい渋い顔で否定を食らったので、彼に理解させるのは諦めたんだけどね!きりえんしよんぼり。

☆ ☆ ☆

「ただいまー」

「はいお帰りなさい。満足いく結果だった?」

「オオクワには出会えなかったけど、カブトムシとか見れたからわりと楽しかったよ。噂のオオムラサキがオオスズメバチ撃退するところ、とか見れたし!」

「綺麗な薔薇には棘なついでしたねがある、か……」

「な、なるほど。楽しめたのなら良かったわね」

キャンプ地（テントがある的な意味で）に帰ってきた私達。

出迎えてくれた朱紅奈さんに見てきたものを伝えたら、彼女はなんとも言えない表情でそれを聞いていた。

……むう、Gの話とかしない分、わりと手心加えてるつもりなんだけど、意外とウケが悪いような。

やはり女性に虫はダメだ、ということなのだろうか?面白いのになあ、虫。

「そういえば、財宝のほうはなにか見付かったのですか?」

「今のところは空振りだね。……探すのならもつと奥の方になるだろ

うけど、一目で無理して探す必要性もないだろうさ、身も蓋もないことにね」

私達から少し離れた位置では、柳瀬さんが鈴莉ちゃんと宝探しの進捗について会話している。

……虫探ししつつ、宝の痕跡探しもしてたのかあの人。うーむ、よく見てるといっつか侮れないというか……。

「とりあえず……夜の準備をしましょう……?」

「あ、先生。……夜の準備って言うとんー、お風呂沸かす……とか?」
「ドラム缶風呂ですか!? ドラム缶風呂ですね!? ちょっと入って見たかったんですけどきやつほい!」

「わひやつ、びつくりした……え、なんで鈴莉ちゃんそんなハイテンション……ってああ……」

先生から次の作業に付いての提案をされ、少し思案して。

……夕食は材料自体はあるからあとは調理するだけ、寝床はすでにこうして確保済み。

となれば女性としては必須の、お風呂の準備が次に必要性がありそうなものだろうか? と言うことを口に出したら、さつきまで柳瀬さんと話していたはずの鈴莉ちゃんがこっちに飛んできた。

ちよつと困惑しつつ、なんで彼女がこんなに楽しげなのかを考えて
——すぐさま、お嬢様な鈴莉ちゃんは、ドラム缶風呂なんてものは話に聞いたことがあるくらいのもの、なのだろうなということに思い至る。

……そもそも楽しそうなこと大好きだしなあ、この子。

「じゃあ、とりあえず使えそうなドラム缶と、底のほうに敷く木の板。……それと、ドラム缶を置くためのコンクリートとかを、探しに行くとしますかね」

「はいーはいー! 私ドラム缶をコロコロするのやってみたいですー!」

「んん？……あー、横に倒してつてこと？」

「いえ！ちよつと傾けてシャーツとするやつです！」

「いきなりのプロテク希望とな？」

私の言葉に、元気についていきますアピールをしてくる鈴莉ちゃん。
ん。

やりたいことがあるというので聞いてみれば、ドラム缶を少し傾けて、回転を加えながら相手に渡すやつがやりたいとのこと。……うん、あの運びかたは確かにちよつと懂れるけど、初心者には難しいんでないかなー？と思いつつ、連れ立って市街地の方へ。

住宅街をちよつと漁ってみれば、外回りがちよつと錆びてるドラム缶を、幾つか発見することができた。

「んー、中はそこまで汚れてないけど……とりあえず、海に持って行って海水で洗ってみる？」

「そこまで汚れているわけではないみたいですし、このままでも大丈夫なのでは！どっちにしる熱するのですから殺菌はバッチリでしょうし！」

「鈴莉ちゃんつてば時々ワイルドになるよね……」

焼けば同じだよ！みたいなことを言う鈴莉ちゃんにちよつとジト目を向けたのち、海水を汲み入れたドラム缶を熱することでお風呂を沸かすという工程上、結局浜辺に持っていったほうが効率が良いな？
と言うことに気付いた私達は、そのままドラム缶を転がして砂浜へ。

あたり一面に開けた砂浜は、周囲の海を一望できる特等地だった。
……うーむ、綺麗な砂浜だ。明日はここで泳いでみるのも悪くないかもしれない。貸し切りビーチとか、ちよつとワクワクしてくるものがあるぞう。

「ここに設置すると、海を見ながらの露天風呂ということになるわけですね！」

「確かに、わりと贅沢なお風呂だねえ」

鈴莉ちゃんの言葉に小さく頷く。

透明度の高い海を前に、風呂に浸かって夜空を見る。

……字面だけなら最高の贅沢三昧である。まあ、浸かるのがドラム缶風呂なので、相対的にはちよつとマイナスくらいになりそうな気がするけど。

「ま、入れれば同じだ同じ、さつくり準備するよ鈴莉ちゃん」

「了解しました！では、堀ノ内せんぱーい！」

「呼んだか？」

「うわっ、いきなり現れるんじゃないよ同胞、びつくりするじゃんかっ、……というか、なんで鈴莉ちゃんに呼ばれて飛び出てジャンジャジャンしてるの君？」

「……みーっつ」

「イヤだからそのカウントなんなの!?実はごまかしかなんかなの!？」

とりあえずドラム缶を設置しなければ始まらないので、火を入れる場所とそれを囲うもの、さらに上にドラム缶を乗せるための渡しを作ろうと提案し、それを受けて鈴莉ちゃんが手を叩いたら、近くの林から同胞がによきつと飛び出してきた、のでちよつとびつくりした。

いや、君鈴莉ちゃんの従者ってわけでもないだろうに、なんで呼ばれた途端にサツと登場してるんです?的な事を聞いたら、また進んだ謎カウント。

……実は意味のない空のカウントじゃなかろうな?けどそこらへん聞いてもはぐらかされるからなあ……?」

首を捻りつつ、同胞を伴ってドラム缶風呂を準備する私なのだった。

☆ ☆ ☆

「ふはーっ、いい湯だねえ……」

「おじさん臭いわよ、今の貴女」

「中身は実際おっさんだからねえ……」

「ああ、そう言えばそんなこと言ってたわね。……だから虫好きなのかしら？」

ドラム缶から少し離れた位置に、カンテラスタンド代わりに突き刺されている木の枝の影が、夜の闇によって完全に溶け込んでしまうくらいの時刻。

パチパチと火の粉の爆ぜる音と、夜闇の中で静かに鳴いている虫の声を聞きつつ、視線を上に向ける。

遮るもののない空は、星の輝きを思う存分地上に降らせ、人の文明の中から離れた場所に、今自分が居るのだということを実に示している。

……思わずポエムっぽいものを口ずさみそうになるくらい、現実味の薄い光景だった。

こんなはずつと味わってたら、色々帰ってこれなくなるで。……みたいなのを呟きつつ、頭の上に乗せたタオルがずり落ちそうになるのを元に戻す。

「……今さらだけど、私のこと気持ち悪い、とかはないんで？」

「いや、ホントに今さらね、その質問」

しかも風呂に入りながら聞くとかどうなの？……という問いが返ってきて、思わず鼻白む。

……いやまあ、あのときは流されたし、改めて聞いておいたほうがいいかなー、というかね？

そんな私の様子に、彼女は小さくため息を一つ。

「前世がどうあれ、今の貴方は女性でしょう？……そもそも、その姿の貴方が男性らしいことをしてる場面なんて、私見たことないわよ？」

「……んん、そういういえばそうか。……どこに出しても文句の出ない、完璧な美少女目指して頑張ってたからなあ」

私の疑問に返ってきた答えに、思わず確かにと頷く。

……恋愛対象の性別が女性になってるのは、そのまま前世の影響だろうけど。今まで磨いてきたのは、まさしく女子力のほうである。……性自認が男性なのかと問われると、確かに怪しいものがあると言えるだろう。

だって、今まで私がやってきたのって、自分の中の男性面の否定だ、って言われたらわりと否定できないところがあるし。

「それに、今から男性になろう、とか。将来的に男性性を選ぶ、ということもないのでしょうか？……それ、普通に女性扱いでいいじゃない」「むー、そう言われると、確かにとしか言えないなあ」

……確かに。私はこの美少女な私の姿を気に入ってるし、それを変える気もないし、別にいわゆるオス側を望んでるというわけでもない。

身も蓋もないことを言えば、私を好きになってくれて、私が好きになれるのなら、小難しいことを言う気は一切ないのだ。

……だからまあ、同胞が好きだ、みたいなどころに着陸したわけだし。

「まあ、愛というものがややこしい、ということには同意するけど。……誰が誰を愛するのか、大昔からすれば随分と柔軟になったはずだと言うのに、結局人は愛ゆえに悩み・悔やむもの。——なんとも、難しい話よね」

「……柳瀬先輩からの悪影響でも」

「単なる！私の！素直な考えよ！」

「え、あ、はい……」

突然に愛について語り始めるものだから、柳瀬先輩からの悪影響でも受けたのかと思ってしまうが、そういうことは一切ないらしい。
……ホントかなあ？

「それ以上言うのなら沈めるわよ？」

「うわったた、ごめんって！」

ペしペしこちらの頭を叩いてくる朱紅奈さんに全力で謝りつつ、もう一度空を見上げる。

——うむ、極楽極楽、って感じかな。

朱紅奈さんときゃいきゃいと騒ぎながら、私は夜を満喫するのだった。

百合ゲー世界で彼女が水着に着替えたら、の件について

「……うーむ、寝れぬ」

用意したテントは三つ、私達の総人数は七人。

……男子が一人しか居ないから、必然的に同胞が一人でテントを使い、他の六人は適当に三人に別れて入っている、わけなのだが。

「……んー、なんとというか、微妙に目が冴えてるといっつか」

明日も早いので、さっさと寝た方がいいのだが。

こう、なんか、こう。……うん。

仕方がないので、眠っている鈴莉ちゃんと結花ちゃんを起こさないようにテントの外に出て、焚き火の番をしている同胞の元へ。

「……なんだ、どうした桐依？交代にはまだ早いぞ」

「いやね、ちよつと目が冴えちゃってさ。柳瀬さんは？」

「あの人なら、砂浜でちよつと星を見てくるって言ってたぞ」

「……うーん、唯我独尊……」

奔放な柳瀬さんの行動に小さく苦笑し、同胞の隣に腰掛ける。

——パチパチと爆ぜる火の粉を眺め、しばしの無言の時間を過ごす。……別に、不快な静寂ではないけれど。

なにか、話したりはしないのか、と隣の幼馴染みに目配せ。

……なんかすっごい渋い顔された。なしてや、可愛い幼馴染み兼恋人が横に座つとるといっつか、なんでお主はそんな渋い顔なんじやい!?

「いや、別に改まって話すようなこともないだろう？……それとも、今

「ここで口説かれたりしたいのか？」

「夜会話と違う……好感度はまあ、足りてるだろうけどさ」

適当な軽口を投げ合い、どちらからともなく笑い合う。

……ん、最近はずっと距離感測りかねてたところがあつたけど。

……やっぱり、こうやって軽口を叩き合うのも楽しいな。

「……ん、元気になったみたいでなによりだ」

「いや、別に気落ちとかしてなかったよ……ただまあ、ちよつと気になることがあるからそわそわしてるというか」

柳瀬さんが何者なのか、という調査は、うまく進んでいるとは言いがたい。……今のところは、本当にただの一般人説が優勢。

……危ない宗教団体の教団員がその次点につけているあたり、正直なんとも言えない感じだ。

「危ない宗教団体？」

「男と女、両方の感性を持つ私は、いずれ男女を超越した愛に目覚めるかもしれない……みたいなこと言ってるさ、あの人。……ちよつと買い被られ過ぎているというか、空恐ろしいというか……」

「……いや、言われてみれば確かに、そこに結び付くのはわからなくもないな」

「……あれ？」

こちらの説明に、幾らかの納得を交えて頷く幼馴染み。

……えー、まさか同胞もそっち系……？

そんな私の困惑を感じ取ったのか、彼は小さく苦笑を返してくる。

「まあ、小学校の道徳で話されるような内容だから、お前が覚えてないのはある意味当たり前なんだけどな」

「しよう、がく……う、頭が……」

「へいへい」

……なんかすつごい雑じゃない？ 同胞の私への対応。

むう、と唸る私と、苦笑を普通の微笑みに変えながら、焚き火に枝を放り入れる同胞。

「男性・女性、異性・同性。違いによって区別せず、汝己の愛するものを愛せ。——相手と違うということは、どうしても区別や差別を生むから。そういうものに左右されず、自分が愛したいと思った人を愛しなさい——って事を習うんだよ」

「へえー。……で、それが柳瀬さんの発言とどう繋がるの？」

「男と女という区分上では、そのどちらにも属するお前はどちらとも違わないだろう？」

「……なる、ほど？」

「違いを気にしなくていいという分、どっちも持っている人ってのは、他の人よりも愛というものの考え方において、他の人より先の位置にいる——っていう風に見ることもできるわけだ」

……ふむ、あんまり考えたことのない話だな？

そのまま、同胞に話の続きを促す。

「……ここで注意すべきは、この理論においては愛というものの考え方において、一番先に立っているのは『全性愛者』になるってことと、そもそも愛というものには上下が存在しないので、一番前に居るからといって凄いともし言い難い、ってこと」

「……あー、性別の区分なく愛せる『全性愛者』の考え方が理想に近いけど、別に理想に至らずとも愛することは素晴らしい、的なの？」

「そういうことだな。……お前はまあ、『両性愛者』くらいか？」

「……別に同胞以外の男性に興味はないぞ」

……この発言、遠回しに惚気ているような気がしないでもないな？

そんなこっちの心情は露知らず、同胞は「まあ、だからあの人は幾分買ひ被りすぎつてのはあるわな」と苦笑を溢していた。

……話も終わって、また沈黙。

焚き火の火を眺めていると、流石に眠気が襲ってきた。……ん、戻ってちやんと寝ようかな……。

「ん、戻るのか?」

「あれこれ考えてたら、ちよつと眠気が……うん、いい寝物語だったつてやつ」

「……明日になったら忘れてそうだなお前」

「ははは。……んじやま、次の交代までおやすみー」

「はいはいおやすみおやすみ」

同胞に手を振って、自身のテントに戻る。

寝ている二人を起こさないように寢床に戻って、体を横にする。

……愛、愛ねえ……?

「恋愛初心者には、難しいやね」

ぽつりと呟いて、私は目蓋を閉じた。

☆ ☆ ☆

朝起きて!仕掛け確認して!中に居るのがカナブンばつかな事に落胆して!

仕方ないから中身を海にシューっ!寄ってきた魚を釣り上げて蝶、エキサイティング!!

「朝からテンションたけーなお前」

「わざわざ仕掛けまで用意したのに、中にオオクワが居ないのが悪いんじゃないわーん!」

釣り上げた魚達を手早く締めながら、なんで居ないんだよオオクワ
！と慟哭する私。……近くの同胞は呆れ顔である。

そのまままた釣った魚を焚き火で焼いて、みんなで食べた後。

「ふははははっ！我が世の春が来たあーっ!!」

「朝のあれからさらにテンション上がるのか……」

横でなにやらぶつくさ言ってる同胞はスルー！

何せ、遂におまぢかねの！水着回ですよみなさん！

いやー、まさかこんな日が来るなんてねー。泳ぐの得意ではない私
だけでも、みんなの水着姿が見れるというのなら水着に着替えるのも
悪くはない！

「まあ、こうして改めて見ると、男性水着ってバリエーションない
なあ、つてなるわけだけでも」

「……そりゃ、下に履く以外ないからな」

普通のズボンタイプの海パンを履いた同胞が、こちらに胡乱げな視
線を向けてくる。……むう、この男意外と引き締まった体つきをして
いる。意外と筋トレとかしてたりするんだろうか？

「ムキムキは嫌いじゃないけど好きでもないから、同胞には細マツ
チヨを維持して貰いたいですね」

「いや、突然なんなんだよその解説口調」

気分だよ気分！

さらに怪訝な視線を向けてくる同胞をスルー。

そんな私も今は水着姿。オーソドックスな白いビキニを着た私は、
現在胸を張って海を眺めている最中だ。

「……いや、なんでそんな仁王立ちみたいなことに？」

「細いなら反れ、丸いなら丸まれという名言を知らんのか同胞。スレンダーならば自信を持って胸を張るのが一番いいんだぞう？」

全体的な凹凸が少ないからこそ、その数少ない凹凸を目立たせることで一種のフェティシズムを刺激してうんたらかんたら。

……ん？だからか？

「もしかして同胞、悩殺された？悩殺されちゃった？私のナイスバデーに？いやー、そりゃ悪いことをした！」

いやはやなるほどなるほど！同胞だって健全な男子だもんな、そりゃ仕方ない仕方ない！

……的な事を言いながら、同胞の周りをくるくる回る私。

ねえねえどんな気持ち？彼女が自分を悩殺しようとしてくるのってどんな気持ち？

「——悩殺された、って言って欲しいのか？」

「どんな気持ち——なんて？」

右手を捕まれ、動きを止められる。

……あれ、もしかして同胞怒ってらっしやる？

「悩殺された、って言ったら。——桐依は、どうするつもりなんだ？」

「え？あ、いや、本気にされても困るといいうか、なんとですかですね？」

やつべ引き際を見誤った!?

そのまま抱き寄せるように腰に手を回されて、逃げようにも逃げられない状態にされる私。

……そのままニヤニヤ笑いでこっちをからかってくる同胞に、今度私がタジタジになるはめに。

「なあ、答えろよ桐依? どうして欲しかったんだ?」

「ととととりあえず離してください……謝るんで……超謝るんで……」

「……はあ。慣れないな、お前も」

「っ、やっぱりわざとかきさまーっ!! さっさと離せーっ!」

案の定こっちをからかってたよこの極悪幼馴染み!

……どの口がそれを言うんだって言われたので小さく縮こまりつつ、離して貰った私はちよつと同胞と距離を取る。……いや、その、流石にちよつと近くに居るのは心臓に悪いというか……。

「……俺だつて恥ずかしいっての」

「……っ、じ、じゃあやらないじゃないかっ」

「さっきのは、どう考えてもお前が悪いだろ」

「ぬ、ぬぐぐぐ……」

「おや? おやおやおや? イチャイチャしてますね! イチャイチャしちゃってますねお二方!」

「ぎゃあっ!?! だからなんで鈴莉ちゃんは出現の仕方が基本突飛なのさ?!」

「栗花落さんの隠行が凄いというよりは、貴方達がわりと周囲への注意が散漫になりやすいというほうが正しいのだと思うのだけれど」

半ば意地で睨み合うように対峙していた私達のちよつど中心部から、突然鈴莉ちゃんが飛び出して二人してビビる。……同胞は声は出してなかったけど、思いつきりびくってしてたから間違いない。

……つて、なんと?」

「ふふふ、どうですか先輩! あえてのスクール水着、しかも白ですよ!」

「うわあ、うわあ、わりと初めて見たっていうか現存してたんだこれ!」

あと犯罪臭ばねえ!？」

鈴莉ちゃんの水着はまさかの白スク!

「ご丁寧に胸元に『りんり』って書かれたワッペンまでついてるし、凄いとと言う言葉しか出てこねえ……。」

「というか、でけえ。何がとは言わないけど、でけえ。」

「……名前が『りんり』って読めないくらいに広がってるのは、もはや末恐ろしくすらあるよこれ。」

「……まあ、そつちに比べたら私は普通よね」

「ベアトップのハイレグワンピース水着を自然に着こなせる人は日本では普通じゃないです」

「……桐依、顔、顔。真顔過ぎて尻みたいになってるぞ」

おつと余りのゴージャスさに表情筋が死んでたぜ。

隣に並ぶ朱紅奈さんは、そのメリハリのあるボディを生かしたベア^肩ト^出ップのハイレグワンピースを華麗に着こなしていた。……金の髪と赤い水着、そしてワンポイントとして水着を走る黒い線は、彼女のカツコ良さをも引き出しているかのよう。うーん、ナイスバデー……。

「^{部長さん!}揺蕩う魂に導かれ、^{魚とかタコとか色々見たいです}我もまた装いを一新したぞ!」

「……慌てなくても……海は……逃げないわよ……」

「元氣だねえ。僕はあんまり調子が乗らないなあ」

「お、おおう?」

最後に出てきた三人。

薄い水色のフリル付きワンピースに身を包んだ結花ちゃんと、黒いビキニにこれまた黒いパレオを腰に巻いた先生のペアは、なんとなく親子感があつてちよつとん? っとなつたが、それより問題なのはその横、柳瀬先輩だ。

……いや、マジで言ってるんで？

「しゅ、囚人服……」

「いや、彼も居ないのに張り切るのも違うかな、と思ってね」

ちよつと笑いを取りに言ってみたよ、という彼女の姿は、まさかの囚人風の横ストライプ入り水着（手足までしつかり覆うタイプ）だった。

……いや、笑いつていうか逆に笑えねえですよそれ?!

はははと笑う柳瀬先輩に、やっぱりこの人やべー人だという思いを募らせる私達なのだった。

百合ゲー世界で海の綺麗さと謎の情熱の件

「……にしても、綺麗な海だねえ」

「底まで見えるくらい透明度だからな、綺麗すぎてちょっとビビる」
「あー。なんというか、海にいるのか空に浮いてるのかわかんなくなる、ってやつ？」

同胞と大きなボート型の浮き輪に乗って波に揺られながら、周囲に視線を巡らせる。

海の底まではつきりと見えてしまうほどの透明度の海は、ふと自身はどこにいるのか・まさか空に浮いているのではないか——ということとを錯覚させて余りある。

……ぼーっとしてると宙に浮いてるような気分になってくるので、ちよつと怖くもあつたり。

実際こうして空気を普通に吸えるからこそ、今自分がいる場所が海上だとわかるけど、もし仮に空気ボンベを背負って海中に潜ったりした場合、底が見えない場所だったら容易に上下がわからなくなって溺れてしまいそうだと思えるほどに、あまりにも透き通っている海だといえた。

……自然の美しさは恐ろしさと隣り合わせだと言うけど、ここはまさしくそういう類の海だろう。

「……そういうのって、海外の海でしか聞かない話だと思ってたんだけどなあ」

「沖縄あたりでなら結構見付かるだろうけどな」

「先輩方！またお二人でイチャイチャですか！」

「ぎゃあっ!?!」

「……いや毎回驚きすぎじゃねお前、ってあ」

「はぎやああああああっ!?!」

「わわわわっ、せせせ先輩ーっ!?!」

突如上がる大きな水音。

……またもや下から現れた鈴莉ちゃんに驚いてバランスを崩した私が、海に落つこちた音だ。

二人が慌てて、落ちた私のほうに寄ってくる。

「おい大丈夫か桐依……って、泳げてるじゃねえかお前」

「……ちやうねん、顔を海につけられないだけやねん……」

呆れ顔の同胞に視線を合わさないように横に逸らす私。

ははは、立ち泳ぎできなかつたら危ないところだったぜ……。

いやまあ、顔が水中につけられないから、長距離移動とかはできないんだけどさ。……背泳ぎでいいんならまだイケるんだけど。

「海での背泳ぎは……まあ、自殺行為みたいなもんだわな」

「波さえ……波さえどうにかできたなら……っ」

「ああ、顔に波が掛かっちゃいますもんね……、つと、ごめんなさい先輩、驚かせ過ぎちゃいましたね」

浮き輪の上へ同胞の手を借りながら戻りつつ、申し訳無さそうな顔をしている鈴莉ちゃんの頭に手を乗せて、

「ふははははははははははは」

「わきやあああああああっ!!」

思いつきりわしやわしやと髪を掻き乱す!

……はっはっはっはっは。まったく、可愛いんだからこの子ってば。

ぐしゃぐしゃになった髪の毛を触りながらちよつと涙目な鈴莉ちゃんに、小さく笑みを返して。

「本格的に溺れてたらそりや問題だけど、別に鈴莉ちゃんのサプライ

ズがイヤってわけでもないし。別にかまへんかまへん」

「……本当に、大丈夫ですか？」

「まあ、あんまり突飛なのは止めてほしいけどね、今のくらいなら私がひっくり返るくらいで済むから大丈夫よ！」

「……やっぱりちよつとマゾっ気があるなこいつ……」

「……なにか言った同胞？」

「いやなんにも」

平穏な毎日より刺激的な日々を臨むのが私……ってわけでもないけど。

鈴莉ちゃんが楽しいなら私も楽しい、そんな風に思えるくらいには、鈴莉ちゃんが大切だというのも確かな話。

だから、そのあたりを含めて言葉を返したんだけど……。

「……わかりましたー！そこまで言われてなんにも返さぬは栗花落家の名折れ！お礼と言ってはなんですが、先輩のカナツチを、私が直してみせましょう！」

「あれーおかしいなー話が変な方向に行ってないこれ？」

「お前が焚き付けたようなもんなんだからちやんと付き合っつてやれよ」

……なぜか鈴莉ちゃんによる水泳特訓が開催される運びとなってしまうた。……なんでさっ？

☆ ☆ ☆

「……息を止めて潜るだけなら大丈夫なんですネ、先輩」

「目が開けられないのと、息継ぎできないのが全ての元凶なんだよね……」

クロールの時に息継ぎのタイミングがわからずに諦めること多数、

そんな私です。

……平泳ぎはそもそも泳ぎ方がわからんという酷さである。下手するとバタフライ覚えたほうが早いんじゃないかな？

「バタフライって難しいんじゃないのか？」

「基本的に泳ぎ方って、学校卒業したら習う機会がないって話を聞いたことない？」

「……あー、ジムとかに自分から通わないと、習う機会がないのか」

同胞が領いた通り、『泳ぎを習う機会』というのが義務教育中くらいのものである、という人の割合は多いらしい。あえて自分から習いに行かなければ、学校で覚えた泳ぎかたがその人の使える泳ぎかたの全てになるわけだ。

そして、日本では『海で溺れた時に陸まで向かうための泳ぎ』が義務教育中に教えるもの……必然的に平泳ぎと、クロールが優先されているわけだ。

……結果、バタフライに関してはそもそも習う機会がないということになる。そして機会がないので――。

「難しいものだと思いきこんでいる、と？」

そのとおりでございます
「Excellent」

同胞の言葉に深く頷く。

日本人だけ、というわけでもないのかも知れないけど、物事を習う時は『簡単なものから、難しいものへ』という刷り込み？ 固定観念？ みたいながあると思う。

そのため、自分から習う気持ちがなければ、その入口にすら立つことのできないバタフライという泳ぎかたは、不当に難しいというレッテルを貼られているのではないか、ということになるわけだ。

「……いや、でもやっぱりバタフライが簡単ってことはないんじゃないかな

いか？」

「聞いた話だと、早さを求めないバタフライなら、覚えるのも泳ぐのも楽なんだって」

「なん……だと……？」

聞いた話なのであんまり偉そうなことは言えないのだけど、と前置きをして話を続ける。

バタフライはもともと平泳ぎの派生で、20世紀前半に生まれた比較的新しい泳ぎかただ。

人間というのは、左右非対称の動きがそもそもに苦手である。

左右で別のリズムを刻もうとして、いつの間にか同じテンポになつてしまった経験、一度はある人もいるだろう。それと似たようなもので、クロールや背泳ぎより平泳ぎが得意、という人は結構いるのだ。

そう考えてみると、足の動きは平泳ぎよりも単純なドルフィンキックで、腕の動きも単に水を後ろに掻き出しているだけであるバタフライという泳ぎかたは、見た目よりも遥かに簡単なものに見えてこないだろうか？

ついでにいうと、息継ぎのタイミングも明確に顔が水面に出たときにすればいいので、クロールみたいに間違つて水を飲んでしまったら、平泳ぎのように息継ぎするときに沈むということもない。

速度や長時間泳ぐことを考えてしまうとちよつと問題が出てくるものの、単に泳ぎたいというだけならわりとおすすすめな泳ぎかたが、本当のバタフライなのだ。……見た目もカッコいいしね。

「ほほう、そこまで熱く語るということは、先輩はバタフライを覚えたということですね！」

「今日はもう泳ぐのは終わりでもいいかな」

「おい」

いやだなあ、バタフライの不当難度制定問題に反論する気はあるけど、私が覚えたいとは言っていないじゃないですかー。はははは。

.....

「あ逃げた!？」

「追えーっ!全員追えーっ!!」

「ぎゃあっ、なんでみんな追っかけてくるのさ!?ノー!私が泳げなくても問題はなあーいっ!!」

「楽しそうだから追いかけているだけよ?」

「ふざけるんじゃないやねえーっ!？」

必死に逃げる私と、追いかけてくるみんな。

.....その鬼ごっこは、私が疲れ果ててギブアップするまで続いたのだった。

☆ ☆ ☆

「朝早くから泳ぎに来てたから、それでもまだまだ時間があるねえ」

「.....今が大体昼前か。確かに、まだ余裕があるな」

砂浜で砂の中に埋められた私と、その横でなんとも言えない視線を向けてくる幼馴染み。

.....うん、ちよつと横になった途端に結花ちゃんと先生、悪ノリしてた柳瀬先輩に埋められてね.....。

一人じゃ脱出できないので同胞に掘り起こして貰って、立ち上がって砂を払う。

遠目には、さっきの三人が砂を積み上げて城を作っている姿が見えた。.....そういえば、あの三人なんであんな仲良くなってるんだろう? ?

「在原さんはそもそも柳瀬さんに懐いてるみたいだったから、篠浦先生のほうの理由だけが謎な感じがしらね?」

「あら朱紅奈さん、泳ぐのはもういいの?」

「鈴莉との勝負も終わったしね。いい加減、陸に上がって体を休めようかなってところよ」

「ぐううううつ、あそこで、あそこでイルカに気を取られなければ……！朱紅奈さん朱紅奈さん、もう一回、午後からでいいのもう一回やりましょう！」

「午後からは忙しくなる予定でしょう？素直に休みなさいな」

「うーっ！勝ち逃げはズルいですよ！」

「……え、これどこからツツコめと？」

えっと、なんで君等いつの間にか名前呼び合うような仲間になるん？というかここイルカもいるの？

……ホントにここ国内か？実はいつの間にか海外に来てない？……個人所有で乗り回せるクルーザーじゃ基本的に国外には行けない？……じゃあやっぱり沖繩とかのほうなのかな……。

「おーい、そこで辛気臭い顔をしているその君ー」

「誰が辛気臭い顔じゃいつ！……って柳瀬先輩、なんなんですか一体、大きな声で」

むむむと唸っていたら、辛気臭いとか言われて思わず視線をあげると、さつきまで三人で城を作っていた筈の柳瀬先輩が、いつの間にかこちらに近付いてきていた。

……手を振ってこちらを手招きしているのだが、どうにも怪しい。近付いていいやつかな、これ？

隣の幼馴染みに視線を向けてみるが、彼は肩を竦めて首を振り。

それじゃあとと思って鈴莉ちゃんと朱紅奈さんのほうに視線を振ってみるが、こつちもこつちで眉を曲げて困り顔。

……むう、つまり、これは、近付かないことにはわからん、と言うことじゃな？

「……はいはい、なんですか柳瀬先輩。手を振って手招きとか子供み

「たいですけど」

「相変わらず身も蓋もないね君。……いやまあ、それは別にいいんだ。城を建ててる途中に、面白いものを見付けてね」

「面白いもの……？」

ニヤニヤ笑いながら告げる柳瀬さんに、思わず胡乱げな視線を投げてしまう私。……当の本人は全然気にしてなかったけど。

あとから追い付いてきた同僚達と顔を見合わせ、先導する柳瀬先輩を追うように進む。

……む、あれは？

「これみよがしに空いてる横穴。……宝とか冒険とかの匂い、しないかい？」

「……なるほど、これは確かに面白いものですね」

砂浜からぐるりと回った位置にある、大きな横穴。

奥が見えないそれと、その横でこちらを待っている結花ちゃんと先生を見て、宝が本当にあるのかも、とちよつと期待を持ち始める私達なのだった。

百合ゲー世界でも洞窟は寒い件について

「うーむ、綺麗な鍾乳洞だ」

「それとちよつと寒いなここ……洞窟は常に気温が変わらないから、夏場だと寒く感じるんだっけか？」

「そういう風に聞くねえ」

洞窟の中というのは、年中気温が変わらないものらしい。

なので夏場は外よりも気温が低いので涼しく、冬場は外よりも気温が高いので温かく感じる……のだとか。

そんな蘊蓄を語りつつ、洞窟を奥へ奥へと進んでいく私達。

時々天井に穴が空いているため、中は薄暗い程度。

ただこの洞窟、それなりに長いようで、かれこれ五分は歩いているような気がする。

「だからちよつと休憩！流石に足痛いつてばさ！」

「ああ、ビーチサンダルのまんま来ちゃったしねえ」

洞窟内の岩場に腰を掛けて休んでいると、柳瀬さんが苦笑混じりに声を掛けてきた。

……洞窟を見付けて上がったテンションのまま探検に乗り出してきたため、私達はみんなサンダルだとか、そういう長距離を歩くのに向いてない靴を履いている。……余計疲れやすくなっている、というのは勘違いではないだろう。

「まあ、五分も歩いていると、流石に引き返す気にもならないけれど」

「終わり目掛けてまっしぐら、というわけですね！」

「疲労と泣く子には勝てぬがな」

近くでは、鈴莉ちゃん達がわやこやと会話を続けている。

景色そのものは綺麗だから、歩くことに飽きたりはしない……とい

うのは救いかなーと思いつつ、どこまで続いているんだこれ、という部分もそろそろ気になってくる。

この島の大きさは、確か東京ドーム四個分。
面積に直すとおおよそ二十万平方メートルだ。

確か縦？に長い島だったはずなのと、歩く速度が足場の悪さから半分くらいになっていると仮定して……。

ふむ、テントの位置から水源までの距離……の、半分くらい歩いてることになるのかな？

「……ん？あれこれ、方向的に水源近くに向かっている？」

「え、そうなんですか？」

「……そうね。確かに方向と距離的に、あの辺りに向かっている可能性は高いと思うわ。……けど、あの水源は岩の隙間から湧き水が出ている形だったから、この洞窟がどこに繋がっているのかまではわからないわね」

私の言葉に水汲みに行った二人が反応する。

……朱紅奈さんの言葉から察するに、まだ先の長い洞窟だということとがわかる。

とは言え、島の中心に向かっているのであれば、さつきと同じ時間歩けば最悪洞窟の奥にはたどり着けるだろうけど。

「あー、山の中を通ってるからか」

「山の大きさが大体島の半分だから、実際はもう少し手前で行き止まりになるかも知れないけどね」

「山の中だけで……終わるのなら……ということかしら……？」

水源水源源で、地底湖地底湖でもあるあるるんんででししょうしょうかか

「暗渠に湛えるは蒼き静寂と言うことか？」

「ふむ、地底湖、地底湖ねえ……？」

皆がそれぞれ納得したように言葉を発する中で、結花ちゃんが発した言葉に私は注目する。

……んー、今の所この洞窟、海と繋がったままの川？がずっと続いている。……水源が先にあるというのなら、それはどちらかと言うと――、
「地下からの湧き水、つてことになるのかな？別に昨日の水、塩辛いとかなかったし」

海と面している以上、地下に水源があると海水の逆流が起きる可能性がある。

それがないというのなら、水源側が海に流れる力のほうが強いのだろう。……自噴井、というやつだろうか？まあそのあたりはよくわからんので、実際に見てみたほうが早いだろうけど。

ただまあ、終着点に綺麗な景色が待っていいそうだと、というのはモチベーションの維持には使えそうだと。

「なるほど、お詠えむきだね」

「お詠え向き？」

「人の手の入らない無人島、その中にさらに秘された清水湧く地底湖……何かを隠すには打って付けのロケーションというわけだ」

「……なんかホントに某小学生探偵の夏映画みたいなことになってるような……」

柳瀬先輩の言葉に辟易する。

……無断で島に上陸して宝探ししてる謎の集団とかいないだろうな？柳瀬先輩のポジションがまんま探偵だからフラグ立ってるんじゃないのかってちよつと怖いんだよなあ……。

変な不安を抱えつつ、奥に進むために岩場から立ち上がる私なのだった。

☆ ☆ ☆

「めつちや綺麗な地底湖でしたけど、それだけでしたね！」
「ここまで引つ張つといてなんにもなしとか逆にびっくりしたんだけど」

洞窟からの帰り道、鈴莉ちゃんが近くに寄ってきたのでため息と共に声を返す。

……いやさ、あんなだけ意味深だったんだからなにかあると思うじゃん？……なかつたんですよ、なんにも！

いや一応滅茶苦茶綺麗な地底湖あったんだよ？洞窟内の僅かな明かりを反射して、神秘的に輝く地底湖がさ？……けどそれだけ。宝箱とか金とか銀とか、そういうわかりやすいものは、一切！一つも！なかつたんだよ！

……いやなんなんすかそれ、こんなだけ歩かせたんだから、なんかあったっておかしくないじゃないすか。

思わずなんとも言えない表情になったよ、同胞に「顔、顔」って言われるくらい、なんとも言えない感情に支配されてたよ……。

……まあ、柳瀬先輩が一度だけ「ふむ……」って呟いたあと、「ここにはなにもないね、無駄足だったみたいだ」って言ってたことは気になつたけども。

「まあ、午後の予定に影響が出なかっただけマシだと思ひましょう」

「ぬう、街のほうでちよつと探索とかだっけ？」

「寝床うんぬんもあるが、当時の資料とか残ってたらなにか宝関連の話が見付かるかも知れないしな」

「それと、また釣りと野草探しだね。明日で終わりとは言え、今ある分だどちよつと足りないだろうから」

午後からは、昨日みたいに食料探索する組と、街の中でちよつと家探しをする組とに分かれることになる。……テントに関しては、使える家が見付からなかつたらそのまま使うのでとりあえずそのまま。明日になったら、綺麗に片付けることになるだろう。

「それで、組分けについてなんだけど。昨日と同じ野草を取ってくるだけだし、篠浦さん一人でも大丈夫だろう。だから、僕は探索側に付いていくってことで良いかな?」

「……ええ……私は構わないけど……」

「じゃあ、俺は水汲みするわ。もっていける量と距離的に、俺一人でも大丈夫そうだしな」

「なれば、はい! 私釣りにしてみたいです我は海を制覇してみせよう!」

「あ、だったら私は結花ちゃんの手伝いをしますね!」

「……ということは、私・朱紅奈さん・柳瀬先輩で街で探索、って感じかな?」

あれよあれよとメンバー編成が決まっていた。

……なんだか、ちよつと珍しい組み合わせになったね?

「よろしくお願いするわね、柳瀬先輩?」

「……ああ、よろしくね、刻遠野さん」

「いやなんで火花散らしてるんこの二人?」

と思つたら早速メンバー内の空気が悪いのですが。……え、なに? 相性悪かったの二人共?

「いえ、別に悪くはないと思うわよ?」

「そうそう、悪いわけじゃないよ?」

「ふふふふ」

「はははは」

「え、なに怖い……同胞怖いこの二人……」

「頑張れー」

「返事が超無関心!」

ふふはは笑い合うこの二人の間に挟まれるの嫌なんだけど!?! ああ

あああせめて心の準備をさせてー!!

そんな私の懇願は聞き入れられぬまま、二人に引かれて街に繰り出す私達なのであった。……繰り出すとは……?」

☆ ☆ ☆

「ふむ、上陸時もあったけれど——何十年も人の手が入らずにいるというのに、随分と綺麗だ」

「そうね、もう少し荒れていてもおかしくはなさそうだけれど。……そもそも徘徊していてもおかしくないはずの獣達の姿も見当たらないし、雨風に特別晒されるような場所でもないのなら……まあ、無くはない、というくらいに劣化じゃないかしら?」

「……ふむ、木々が日差しを遮るようでもあるし、一理あるか……」

「あの一、めっちゃ真面目に考察されている所悪いのですが、向こうに書庫っぽいものありましたよ?」

「なに!?!」

「でかした!」

「いやだからなんでそんな競争するみたい……って聞いちゃいねえ……」

何件目かの廃屋の中。

比較的崩れもなく、虫が湧いていたりもしないその内部を探索していた私達。

……なんかよくわからない対抗心でもあるのか、二人は何かしらの痕跡が見付からないかと、目を皿のようにして家中を見て回っていた。

なにが彼女達をそこまで駆り立てるのかわからない私としては、どういうテンションで付いていけばいいのか分からず困惑中だ。なのでまあ、普通に家の中を確認中。

「たまーに缶詰とか見付かるけど、流石に賞味期限は切れてるよねっ

ていうか、よく爆発しないなこいつら」

長期保存してる缶詰とか膨らむ危険が結構あるはずんだけど、保管場所が良かったのかはたまたまにか他の理由か、膨らんでいる缶詰には今の所出会っていない。……いやまあ、爆発して無くても流石に何十年ものの缶詰とか怖くて触れないけどさ。

今いるリビングには……古いブラウン管のテレビと、中心にある机、そしてそれを囲うように並ぶちよつと埃っぽいソファークらいしかない。

壁に絵が飾ってあるとか、花瓶がおいてあるとかもない、殺風景なリビングだ。

「うーむ、なにもない、かなあ……う？」

ふむ、探索ゲーとかあんまりしたことないけど、こういう場所をなにもないと素通りするのはどうなんだろう？こう、テレビの後ろになにかあったりしない？

ちよつと期待して後ろを覗くけど、まあなんにもない。……私に探偵役は無理だな！

諦めて、二人が向かった書庫……正確には書斎？のほうへ。

おそらく家の中心部、日光に直接当たらないように気を使ったのだろうと思われるそこは、太陽光発電でも使っているのか、内部の電灯を稼働させられるようになっていた。

天井まで届く高さの本棚には、所狭しと書物が詰め込まれている。……背表紙に書かれているのはどうやら英語みたいなので、どうやらここの家主だった人は洋書を中心にして集めていたようだ。

適当に一つ抜き取って本を開いてみる。

……えつと、これは植物についての本、かな？学名とかはちよつとわからないけど、世界の水辺に生える植物を主に集めて解説している本のようなだった。

そのほか、動植物についての本が八割、それ以外のジャンルが残り

全部、という感じだろうか。背表紙の内容だけで判断したので、もしかしたら違うかも知れないけれど。

……おっと、並んでいる本についてはとりあえずそんなものにして。

先に書齋に入つて本を読み漁っていた二人は、私が近付いたことに気付きその視線を上げた。

「なにか見付かった?」

「……いいえ、基本的には植物研究の本ばかりで、宝とかそういうものに関しては全然」

「こつちも同じ。身も蓋もないことだけれど、ここの蔵書は多分家主の趣味だろうね、欠片だけ残った付箋があちこちにあつたし、論文くらは書いていたのかも知れないよ」

「ふーむ、大学生でも住んでたとか?……よくわかりませんね。とりあえず、外出します?」

私の提案に二人が頷いたので、そのまま外に出る。

……日差しは次第に柔らかくなっていく。そろそろみんなと合流したほうがいいだろう。

合流したら、テントをまた使うかどうかを確認しなければ。

そんなことを思いながら、私は二人を連れて廃屋を後にしたのだつた。

百合ゲー世界で無人島から脱出する件について

「今日もまた美味しくご飯を頂いてしまった……」

「魚ばっかりで飽きるかと思ったけど、意外とそうでもなかったな」

食べ終えた魚の残骸を片付けながら、二人で話す。……魚に飽きなかったのは、君が色々調理法とか味付けとか変えてくれたから、って面が一番大きいと思うけどね。本当に美味しゅうございました。

それと結局、廃屋を借りて寝床にする、という案は白紙になった。雨風を凌げると言っても結局は寝袋を使うことになるので、テントで寝るとさほど変わらないな、と気付いてしまったからだ。

家の中にマットでもあればよかったのだが、あいにく寝具などは残っていなかった。……じゃあまあ、テントでいいやとなるのも道理というか。

「明日でこの生活も終わりですねえ。帰ったら何します？」

「とりあえず、しばらく普通に休んでから考えたいな……」

鈴莉ちゃんの言葉に小さく苦笑を返す。

……なんやかんやで無人島生活は楽しくもあったが、同じくらい疲れるものでもあった。なので……ちよつと……しばらく……ゆっくりと英気を養いたい……。

「おばあちゃんじゃないんだから……」

「中の人的の神年齢的には似たようなものでーす」

朱紅奈さんの言葉に、小さく惚けるように答えを返す。

……実際前世の年齢と合わせると、昔の基準での初老はすでに迎えている私だ。考え方が老成してたって構わないのさー。

「だとすれば、随分とアクティブなおばあちゃんだね？」

我儘お婆ちゃん、というわけですね
「大君が老婆、というわけか」

「というかそんなに余裕があるって言うなら、もうちよつと余裕を持って欲しいんだがな？」

「ええい、やめいやめい！儂を弄ぶのはやめい同胞！恋愛は初心者じやと言うとるやろがい!？」

なんて言ったら柳瀬先輩↓結花ちゃん↓幼馴染みのコンボが飛んできて思わず怯むはめに。

……不意打ちで手を握るのはダメだってば！恋人握りとかマジでどうしていいのかわかんなくなるからやめてホント!？」

どうにか捕まれた手を振りほどこうと、しばらく上下左右に左手を振ってみたけれど、同胞の握る力のほうが強くて無理だった。

……結局。もう好きにしてくれ、って感じに諦めた。……そのニヤニヤ笑い、いつかひっぺがしてやるからなちくしょう……。

「……カメラ持ってくれば良かったですね！」

「私の恥を残そうとするのやめてくれる!？」

最後に鈴莉ちゃんが言った言葉に私以外のみんなが大笑いして、微妙に居心地悪いことになる私なのでした。

☆ ☆ ☆

「ふふふ……しよせん私は弄ばれ役……よわよわぎーこぎーこな恋愛弱者……ふふ、ふふふ……」

「悪かったって、元気出せよ、な？」

「うるせー、しまいにやみんなの前で抱き締めてみやがって、かちんこちんになった私で遊んで同胞は楽しかったんだらうがよー、こっちは心臓破裂するかって思ったんだぞこのやろー」

焚き火を眺め虚ろに笑う私と、その横で苦笑しながらこちらに軽い

謝罪をしてくる同胞。

……いい加減慣れようぜ、とか宣った幼馴染みからの軽い抱擁を受けた私が、生娘の如くカチカチに固まったのはさっきのこと。……いやいや、いきなり抱き付くとか、こう、順番と言うかだな？

「ひやつ、って言って完全に硬直するもんだから、栗花落が滅茶苦茶興奮してたな」

「朱紅奈さんも『可愛らしいわね』みたいな感じに軽い微笑みを向けてくるし、先生はあらうふふって感じになってるし……」

「先輩と在原はよく分からない賛辞を並べてたな。……まあ、俺としてはお前がこんなだと先が思いやられるなーとしか思えないわけだが」

「やめてくれー、今の私にやまだ刺激がつえーよー……」

私が茹で蛸になっても食事にやならないんですよ、そーいうのまだ無理なんすよー……。

ああもう、なんで私がみんなの面白コンテンツみたいなことにならにやならんのか。

おかしくない？確か私、百合ハーレム王になるみたいなこと言っていなかった？こんなん良くてみんなの愛玩動物やんけー……。

「愛され系って言うんだっけか、そういうの」

「また定義の難しいものを……愛されるよりも愛せるようになれてればよかったんだらうけどなー……」

「また古い歌を……いや、中身的には青春の曲とかなのか？」

「……それがわかる君らのほうが私的に謎なだけど？」

謎といえば、私にとつての懐かしい曲とかがこつちの世界にもある、ってことも大概謎なだけど。

……向こうより時代的にはちよつと進んでいるこの世界では、向こうでは起きたけどこつちでは起きてないこと、向こうで起きていて

こっちでも起きていることがあったりするのだ。

……変に前世の記憶が抜けてない私としては、意図して前世を思い出させるようになってるんじゃないかな、とちよつと不安にもなるのだ。

「……まーた変なこと考えてるなお前？」

「わぶつ、ちよ、髪を無茶苦茶に撫で回すのやめい同胞っ」

ここちらの不安を感じ取ったのか、私の頭を乱暴に撫でる同胞。……気を遣ってくれてるんだらうけど、私子供じゃないんでそんなんざれでも「髪直すの大変だなこれ」って風にしかならないんですけど!?

「そんなもんでいいんだよ、また黒歴史量産する気か」

「ぬぐ、それを言われると、その、あれだけど」

「どれだよ……」

ため息を吐いた幼馴染みが、焚き火に枝を投げ入れる。

ぱちぱち爆ぜる火を見詰め、しばしの静寂。……うーん、確かに、ちよつと考えすぎてた、か。

「よしわかった、同胞！夜の昆虫採集行こうぜ！」

「唐突に元気になりおった」

「元気になれて言ったの同胞でしょ、ほれほれはよ立って行くぞ山の中！帰る前にオオクワ見付けっぞ！」

「しまった元気にしすぎた」

遠い目のため息を溢す同胞の腕を引っ張って、夜の山に突撃する。……オオクワが見付かったかどうかは——まあ、秘密ってことで。

☆ ☆ ☆

——朝。無人島生活最後の日。

「お昼前に迎えが来るわけだけど、みんなやり残しとかない？」

「泳ぎましたし山を探索もしましたので、特にないかと！」

「……思えば、海と山と一緒に楽しめる場所だったのね、ここ」

「機会があればまた来たいですね！良き修行の場であつた……」

最後の朝御飯に舌鼓を打ちつつ、仲間との会話を楽しむ。

……料理といえ、体調を崩す人がいなかったのは僥倖だった。

大なり小なり体調を崩す人がやすいのが無人島生活だけど、みんな気を遣って調理やら材料の採取やらをしてくれたからだろう。

「まあ、間違えやすいものも生えてなかったようだし、この島がそもそもサバイバルに適していた……ということだろうね」

「……時期的にも……間違えやすいものが……少ない時期だしね……」

柳瀬先輩と先生がうんうんと頷いている。

……秋は過ぎしやすいけれど、素人が手を出すと痛い目を見るキノコ類が活発になる時期だけど。

今みたいな夏だとキノコはそもそも採れないか、採れたとしてもわかりやすいキクラゲしかないので間違え辛い。

……まあ、代わりに暑さをどうにかする必要があるのだが……、幸いこの島は木々が多く、日陰になっている場所を陣取ればそう問題と
言うこともない。

「テレビなんかの無人島企画は『失敗しない』場所を選んでる——なんて話があるけど、この島はそういう意味で失敗し辛い場所だったのかもな」

「そうだねえ。水とかも最低限は持ってきてたし、調味料もある。……初回のサバイバルとしては、結構甘めの難易度だった、ってこと

だろうね」

いやまあ、次回があるかはわからないけど。

そんなことを言いながら、魚のマリネを一口。

……すっかり同胞に餌付けされてしまったな、なんてことをふと思う私なのだった。

☆ ☆ ☆

「息災か？じゃあ問題ないな、さっさと乗りなよ」

島の船着き場で待つことしばし。

来た時と同じ時刻に着くように、クルーザーを運転してきた鈴莉ちゃんのお兄さんが尊大にそう言っ、私達は荷物を積み込み始めた。

持つて帰るお土産的な物もない（というか立地的に他県になるので基本的に持つて帰れないぞと釘を刺された）ので、行きよりも軽くなったポリタンクなどを詰め込みながら、ふと島のほうに視線を向ける。

「……んん？なにか今、横切ったような……？」

「おおっと東山くん立ちくらみかな？立ちくらみだね？よくないよくないそういうのはよくない。堀ノ内君、彼女の代わりにこれ、お願いしてもいいかな？」

「え、はい。……なんだ、貧血か桐依？」

「え、いやそういうのじゃ……」

「はははは見ええないものを見ようとして荷物を落とすだなんてよくないぞよくない失恋フラグじゃないかちゃんと断ち切らないとははは」

「わぶっ!?え、あ、同胞あと頼んだーっ!」

「お、おう。……なんだったんだ一体」

街の中を横切る黒い何かが見えた気がして、その事をちよつと口に出したら、唐突に横から柳瀬さんが飛び出してきて、あれよあれよと言う間に船内の寢室に連れ込まれてしまった。

え、なんなんですか？お前は見てはいけないものを見てしまったので消す、みたいな展開なんですか？

「……まあ、見ちゃいけないものを見た、というのは間違いじゃないよ。どちらかといえば、存在を確定させるべきではない……が正解だけれど」

「……！まさか、ここから犯人の動機解説が……?!」

「いや、それ探偵と犯人一緒になってるじゃないか。そうじゃなくてだね？」

なんだ違うのか。

折角柳瀬さんがわかりやすいくらい慌ててるからノってあげたのに、そういうのじゃないのか。ちえー。

いよいよスリルとサスペンスが襲ってくるのかと思っていたのだが、どうにも違うらしい。

対面の柳瀬さんは珍しく疲れたような表情で一つため息を吐いたあと、詳しい説明のために口を開いた。

「——守り神さま？」

「超自然的なものと言うよりは、そういう風に奉って生息域を守ろう、みたいな感じだったようだけどね」

地底湖にあったあるものと、街で探索したあの書齋にあった本から、彼女はその存在に行き着いたのだという。

地底湖にあったのは、彼等の巢だと思われる幾つかの横穴。

書齋で見付かったのは、彼等の生態だと思われる幾つかの論文。

「基本的に警戒心が強く人前に出てこないうえに、綺麗な水源がなけ

れば生息できないという生き物、らしくてね。それだけだと何故守り神さまなのかわからないが、彼等が生息する地域では物が壊れにくくなる、という噂があつたらしくてね?」

見付けた論文内には、彼等の分泌物が大気に混ざったものが何かしらの個体に触れると、その表面に薄い保護膜が発生し、それが結果として外気や日光などでの劣化を防ぐ……というような事が起きているのではないか、という推論が述べられていたのだという。

「ただまあ、こうして寂れてしまっている辺り、彼等は守り神さまをあくまでも偶然のものとして扱い、それを何かに利用するという気はなかったようだけどね」

「それは、なんでまた?」

「壊れにくくなっているような気がする程度の効果だったからだよ。取り立てて騒ぐような効果でなく、基本的に人前に出てこないのなら、神として奉ることで生活域を分けるほうが都合が良かったんだろう。……これは推論だけど、彼等の獲物はいわゆるイノシシなんかの害獣だったんだろうしね」

「うえ、強い」

なるほど、なんとなく物が壊れにくくなるような気がして、それでいてイノシシみたいな農作物を狙ってくるモノを食べてくれて、その上で人間には近寄ってこない。

……イノシシを狩れるような生き物である。変に刺激をするよりは、ということだろう。

「ただ、この島そのものが時代の流れで過疎化していく中で、彼等もまたその個体数を減らしていったらしい。論文の最後には、この島が廃村になった時点での個体数は、最早両手で数えられる程だろう、って記されていたよ」

「廃村が何十年前のこととなると……」

「まあ、ほぼ絶滅危惧種だろうね。……とはいえ、その生息の痕跡自体は残っていた。ひっそりと、人の目に触れぬまま生きていくんだろさ、彼等は」

この島の宝、というのも恐らくは彼等のことだろう。

とはいえ、彼等はこの島と共にひっそりと暮らすことを望んでいる。なら、噂は噂で終わらせるのが筋つてもものさ、と彼女は解説を締め括るのだった。

「……これ、もしかして」

「ご明察、刻遠野君も知ってるよ。快く了承を受け取っておいたさ」

「……なるほど。いやまあ、私影を見ただけなんで、ホントにそういう生き物が居るのかわかんないんですけど」

「人は世界の全てを見たわけじゃない。そして、世界の全てを見れるわけでもない。悪魔が隠れ潜んでいても、意外とわからないものさ。……正確には、世界はそうであるべき、つてことになるわけだけど」

……まーた煙に巻こうとしてないこの人？

いやまあ、島の謎についてなんとなく知れたのは良いことだけど。

「謎の全てを明かすのが探偵だ。……僕は探偵のようなもの、だからね。時には、明かさずにしまっておくくらいするのさ、身も蓋もないことにね」

「……なるほど」

んー、詳しく言う気はない、みたいな感じだろうか？

……というか汗が蒸発してコーティング材になる、とか不思議生物じゃないんですそれ？

「人の想像できる全ては人の行うことのできる全て、だなんていうだろう？ 似たようなものだよ、結局ね」

そう言つて視線を外に向ける柳瀬さん。

つられてふい、と窓の外に視線を向ければ、猫のような生き物が、こちらを観察しているのが目に入つて。

あ、という間もなく山に消えていった生物。

思わず視線を横に向ければ、彼女は口元に人差し指を立て、「黙つて
ようね？」とでも言うように微笑むのだった。

百合ゲー世界で水着リターンズな件について

無人島から帰宅してから、その次の日の朝。

島での疲れを癒すために、久方ぶりの柔らかいベッドの上で熟睡していた私だったけど……。

「桐依、お友達来てるわよー」

「……んん、お母さん？友達？……んんん？」

階下から母がこちらを呼ぶ声を聞いて、小さく目を擦りながら上半身だけ起き上がる。……こんな朝早くから、友達？

一体誰だろう、と思いつつ上着を羽織り、自室から玄関までの階段を降りて、そのままサンダルを履いて外に出る。はたして、そこにいたのは――、

「はいはいどちらさま、ま……あ」

「……おはようございます、東山さん。……ええ、私、確かにお伝えしたと思うのですが。……部活で！出掛ける！用事があるのならば！

一声下さいと！私、言いましたわよね！」

「あああああまままだ慌ててて」

「慌て過ぎでは!？」

光の反射で青み掛かって見える黒髪を、いつもとは違いそのままにしている（せいで、ちよつとウェーブ掛かっている）彼女は、紛れもなく生徒会長――、西内さんだ。

そしてその顔を見たと同時に、思い出される彼女の過去の言葉。

――『仮に合宿するなら参加したい』。……やべえ、どう考えても合宿みたいなもんなのに、誘うのすっかり忘れてた!？」

「いえ。確かにこの三日間、私用事に追われていましたので、誘われたとしても参加など夢のまた夢、無下に断る結果になっていただろうこ

「……なんだか、物語の最初のほうでやられる四天王みたいな台詞ね、鈴莉」

「なんですとーっ!?わかりました、わかりましたよ朱紅奈さんっ!!この間の勝負の続き、ここで決着付けようじゃありませんか!」

「いいけど……また負けても知らないわよっ」

「上等ですよ負けさせてみろっつてんですよコノヤロー!!」

「……あの、すいませんほんとすいません、なんか悪影響与えちゃってたみたいでほんとすいません」

「ええい、いちいち謝るな鬱陶しいっ。……別に、昔のアイツよりかは幾らかマシだから、お前も気にしなくていいよ」

送迎用の車の中で、ガヤガヤ騒ぐ後部座席組をバックミラーで見つつ、運転席の鈴莉ちゃんのお兄さんに謝罪しておく。……いやだつて、私（と同胞）に憧れてああなつたつて自己申告されてるんですけど、ちよつと責任感じるじゃないですか……。

まあ謝罪したら謝罪したで、鬱陶しがられた上でまた感謝を返されたわけなのですが。……ツンデレ版鈴莉ちゃん、家族とそんなに上手くいってなかったんです……?」

まあ、そのあたりの話は置いといて。

再び運転手として駆り出された彼と共に、私達は栗花落家の別荘に向かっていたのだった。

……体の良い足代わりにされてないかこの人……?いや、別に嫌がったりはして……してな、い……?」

わかんねえ、多分大丈夫だと思うんだけど……。

そんなことを思いつつ、視線を前に。

車は現在、山間の道を軽快に進んでいる最中だった。……一応、この辺りの山も栗花落家の所有地、らしい。

「つ、栗花落家が名家であることは存じ上げておりましたが、ここ、こうして改めて目前にしてしまうと、どうにも落ち着きませんわね……」
「あら、生徒会長さんでも怖気づくことがあるのね?」

「……人聞きの悪い。私は確かに泰然自若であることを己に科してはいますが、この場は友との友好の為のもの。空気を悪くするような行いは慎むと、私はそう決めたのです」

「驚いた、貴女そういう事気にできる人だったのね」

「だから人聞きが……いえ、貴女からかかっていらつしやるのね?」

「ふふふ、そう聞こえたのなら謝るわね」

「……いいでしょう、買いましたわその挑戦状……!」

「なんで朱紅奈さんは私以外にも喧嘩を買ってるんですか!? こうなったら会長さん、共同戦線です!」

……後ろでの争いが加速してるんですががががが。

おい同胞、そういうの止めるのお前の役目だろ何して……外見て現実逃避してる!?

ゆ、結花ちゃん……あ、ダメだ窓の外に流れる景色を純粹に楽しんでる! あれを邪魔はできねえ……。

……無言で後ろに向けていた視線を前に戻して、しばし。

「いや、ほんとすいません……」

「……………ああ」

今度の謝罪は、普通に受け入れられた。

☆ ☆ ☆

「おお、またでっかいお屋敷……」

なんかもう感覚が麻痺してきたけど、やってきたのは大きなお屋敷。

栗花落家所有の別荘であるこのお屋敷は、夏の間であれば大きなプールで涼を取り、春や秋には付近の山を散策し、冬になったら銀に染まった山嶺を臨み——といった感じに、一年を通してよく使われる

場所なのだそう。

今回はそんなお屋敷の一画、結構な広さの屋外プールをお借りして遊ぶことになったのだった。

……なお、よくここを利用されているという祖父さんは、今回孫に気を使って他の別荘に居るのだとか。

いや、ほんとお手数おかけします……。

「せんぱーい、なにをされてるんですかー!?!」

「あ、はいはい、今行きまーす」

大きな玄関部分でこちらに手を振る鈴莉ちゃんという言葉を聞いて、そびえ立つ屋敷に向けていた視線を下げる。

小走りに彼女達に追いついて、そのまま中に。

……私の貧相な語彙力では解説しきれないような広い廊下を通じて、奥に奥に。

脱衣所に入れば、みんながサツと水着に着替えている姿が。……ふーむ。

「今回は、流石に白スクじやないんだね」

「あれはインパクト重視だったので！今日は普通の水着です！」

そういう彼女の水着は、セパレートタイプのフリルが付いたオレンジ色の可愛らしい水着。

……なんだけど、一部がおっきいので、なんとか凄いことになってる。最初は市内のプールに行くつもりだったけど、これを衆目に晒すのはいわー……。

そんなことを思っていたのがバレたのか、たまたま視線があつた朱紅奈さんは小さく苦笑を浮かべていた。

で、その朱紅奈さんと結花ちゃんは無人島での水着と同じ、赤に黒いラインのベアトップワンピースと、薄い水色のフリル付きワンピース。

うん、やっぱり二人共似合っている。で、前回居なかった、今回のプール騒動の発端になった西内さんだけ……。

「な、なんですかの？じろじろ見るのは宜しくないのではなくって!？」

「いや、ねえ?」

「ええ、これは……」

「ほほう、ほほう……」

「ふむ……!」

私達はお互いに顔を見合わせ、一つの結論に至る。

これは――。

「「「凄い」」」

「は、はあっ?」

いやもう、凄いとしか言いようがなかった。

朱紅奈さんのベアトップハイレグワンピースも大概だけど、西内さんの格が違った。

だって……プランジングですよプランジング。めっちゃエグい切れ込みがあるワンピース。

……これ、日本人に着れる人が居るんだ、ってちよつと感動しちゃったよ私。ファビュラスな感じの人じゃないとダメだと思っただよ。

「みんな、西内さんを胴上げだ!」

「「おー!」」

「え、ちよ、何事ですかのー!?!」

あんまりにも感動したものだから、彼女を囲んでみんなで胴上げ。

凄いで西内、ヤバいで西内、やるな西内。

わけのわからないテンションに、巻き込まれて盛大に混乱する西内

さん。

「…………いや、お前らなにやってんだよ」

この狂奔は、私達がそのノリのままでプールに出て、呆れ顔の同胞にため息を吐かれるまで続いたのでした。

☆ ☆ ☆

「……………」

「ああもう、ゴメンって。西内さんが凄いかちよつと興奮しちやつただけなんだって」

「ふーん、だ」

「ごめんってばもう…………」

あかん、完全に拗ね内さんになってしまった。…………ちよつと調子に乗りすぎたか。

プール内では鈴莉ちゃんと朱紅奈さんが白熱のデッドヒートを繰り広げていて、それをプールの縁に腰掛けた結花ちゃんと同胞が応援している。

私達はそこからちよつと離れた影になる場所に居た。…………西内さんは体育座りで壁のほうを向いていて、完全に拗ねてしまっているわけなんだけど。

…………でもまあ、悪いの私だからなあ。こうして謝り続けるしかないんだよなあ…………。

むう、どうしたものか。と視線を彼女から離して、ちよつと思索していたのだけど。

「その、どうしても、気が咎めるといふのなら。…………一つ、私のお願いを聞いて頂けるのでしたら、許してあげても、構いませんよ?」
「なんと」

彼女がちよつとだけこちらを向いて、こちらに声を掛けてくる。

……うむむ、お願い、お願いかあ……。

西内さんなら無茶なことは言わないだろうけど、お願いするのはちよつと怖くもあるなあ……。

とはいえ、私が悪いうえにそれ以外の方法もなさげだし、まあ聞くだけ聞いてみるかなあ……？

そんなことを考えつつ、彼女に続きを促す。

「その、ですね。……私も、みなさんと同じように、名前で読んで頂きたいのです」

「はへ？えつと、下の名前？」

私の間拔けな返答に、彼女はこくりと頷いてみせる。

……あー、でも確かに。彼女だけ名前呼びなのは確かだ。それが、彼女に疎外感を与えているというのなら、確かに名前呼びも吝かではない。……いやまあ、単に機会を逃してただけというかね？

「えつと、いいの？私、貴女に結構酷いこと言ってたと思うけど」

「酷いなんて……私も、貴女には売り言葉に買い言葉ばかりを返していました。……お相子、だなんていい方は卑怯ですが、それで流して頂けるのであれば……」

「待った、多分これお互いに譲らないやつだな？……なんで、ここではつきりと。私は気にしてない。西内さんも、気にしてない。……それでもいい？」

「もちろん、です」

……こつちにも罪悪感はあるんだけど、向こうにも罪悪感はある。

それを、お互い気にしていないというのなら、話はそこで終わり。

……終わりにして、次の話をしたほうがいい。

「じゃあ……美玲さん、でいい？」

「はい、私も桐依さんと。……随分、遠回りしてしまいましたが。……これでやつと、対等ですわね」

彼女の言葉に、小さく息を呑む。……随分とまあ、昔の話を律儀に守っていたものだ。

思わず苦笑して、彼女もまた苦笑を返してきて。

「じゃ、美玲さん、いい加減泳ごつか」

「はい、競争ですわね！」

「きりかえ が はやい」

途端に元気になった彼女を連れて、もう一度と朱紅奈さんに詰め寄る鈴莉ちゃんのほうに向かっていく。

——競争は、まだ始まったばかりだと言わんばかりに。

私達は、二人を巻き込んでプールに飛び込むのだった。

三章 文化祭は燃えているか 新学期で気分を入れ替える

夏休み中には色々なことがあった。

夏祭りの日には浴衣を着て、同胞と屋台を見て回ったり。

登校日に久しぶりに部室に集まって、みんなで大掃除を敢行してみたり。

夏の課題を片付けるために家に集まって勉強会してみたり。

……本当に、本当にいろいろなことがあった、わけなのだけれど。

「そんな夏はもう過ぎ去って、君もまた学校に通う時間なんだ」

「なんだまた唐突に……」

「いんや、楽しい夏つてすぐに過ぎてしまうものだなー、つていうちよつとした感傷をね……」

「……そうだな。結構いろいろあったけど、その分過ぎてくのも早かったというか」

私の言葉に、しみじみといった感じに頷く幼馴染み……もとい晃。

……んむ、まあなんだ。いろいろあって、いい加減幼馴染み予呼びを卒業しよう、つてなつてだな？

まあ、意識しないとまだたまりに同胞とか幼馴染みとか言っちゃうんだけど。それでも、基本的にはちゃんと名前を呼ぼうつてなつたというか、約束させられたというか……。

「……あー。でさ、晃」

「ん？なんだ桐依？」

「今日、始業式じゃん？終わったらそのまま帰る？それとも、一回部室に寄る？」

「んん……そーいや夏休み終わってそーいしないうちに文化祭の時期か。……結局、メイド喫茶は実際にやるのか？」

「そのあたりも含めて相談するのに集まるのか、ってこと」

私の言葉に晃がふむ、と顎に手を当てながら黙考する。

そう時間も経たないうちに小さく息を吐いて「ま、集まったほうが早いわな」と意見を述べてきたわけだけだ。

……ん、じゃ放課後はみんなで集合、つと……。

スマホでみんなに連絡を入れて、肩掛けの鞆をしつかりと抱え直す。

——時は九月。夏の暑さが未だ残る街を歩きながら、二学期の幕が上がるうとしていた。

☆ ☆ ☆

「お、きりえんおっつー」

「おはよあつきー、休み前と変わらず元気そうだなにより」

久しぶりに見る教室は特に真新しさも無く、そのまま自分の席に向かって椅子に座る。

登校日に席替えがあつたため、今まで隣に居た晃が変わって、別の女生徒が私の隣の席に座っている。

その同級生の彼女はと言えば、こちらの挨拶に微妙な表情を浮かべていた。

「いや、前も思ってたけど『あつきー』は堀ノ内君と被んない？」

「そう？ 晃のことは晃としか呼ばないし、被ることなんかないと思うけど」

「……いや、お熱いねって言えばいいのこれ？ 私どういう反応するのが正解？」

それが呆れたようなものに変わるのを横目で見つつ、お好きにどうぞと返して提出物を鞆から取り出す。

……演劇祭の一件以降、美少女モードを辞めた私にも、普通の友達というものができた。

そのうちの一人が隣の彼女、『秋山 昴』である。

普通の女の子って感じの彼女は、あの演劇祭での流れを経た後に登校日に「おもしろいじゃんキミー！」みたいな感じに話しかけてきた生徒達の一人で、なんとというか波長があつたので仲良くなった結果、その場の流れで連絡先まで交換してしまった唯一の人でもある。……そのせいで後々美玲さんが拗ねたりしたけどそれは割愛。

彼女は私の周囲では唯一に近い『一般人属性』持ちなので、話をするのが楽でとても有り難かったり。

……部活仲間達は悪い人じゃないけど、時々ぶっ飛ぶからね。特に鈴莉ちゃんは。

その点あつきーはなんの憂いもなくただの常識人なので、こっちも安心して無茶振りができるというものなわけだ。

「いや、それだけ信用されてるってことなんだろうけどさ？そこで無茶振りしようとするの違くない？そういうの堀ノ内君にやればよくない？」

「最近の晃はもう私が無茶苦茶やっても驚いてくれないし、下手すると逆にやり返してくるので嫌なのです。その点あつきーは素直に驚いてくれるから私超満足」

「なんだその魔王みたいな無茶苦茶な理由!？」

「おお、懐かしい反応」

「懐かしい!?!魔王扱いが!？」

あつきーの普通なツツコミに思わずほっこり。ああ、こういう反応を私は求めてたんやなって。……はっ!?

「え、なんでいきなり顔面蒼白に……ひいつ!?!なにあの堀ノ内君の顔っ!？」

「あかん、他所様に迷惑かけてんじゃねーよって怒ってらっしやる

……!?ちやうねん同胞、この子いじられキャラだから内心喜んで……
あつあつ待つて待つて言葉の綾つ、言葉の綾だからカウント止めて晃
さん止めてつてあああああああさん付けも意図的違うううっ!」
「……いや、勝手に人のことマゾ扱いすんなよつて言いたかつたけど
——もういいわ、うん」

鬼神降臨!……つて感じで和太鼓とか鳴つてそんな迫力でこちら
を睨めつけてくるどうほ……晃に必死に謝り倒す私。……油断すん
なつてか、私に安住の地はないつてのか、ちきしょーめつ!!

☆ ☆ ☆

「いや、めつちや死んでんじゃん、死にすぎて城建つてんじゃん」

「誰が城の天守閣に追い詰められてそのまま身投げしそうだつて……
?」

「……いや、そこまで言つてねーし」

憤怒の晁をどうにか宥め賺して無事……無事?鎮めたのち、席に
戻つて机に突つ伏していたら、あつきーが可哀想なものを見る目で見
てきたので、のろのろと顔をあげて反論……できるテンションじゃな
かつたので適当な妄言を投げる。……表情が困惑に変わっていたけ
れど、憐れまれるよりはよっぽどマシである。

「いや、流石にわけわかんないし」

「わからぬか、私は同情の雨に晒されるくらいなら死を選ぶと言つた
のだ」

「流石に大げさ過ぎる……」

「うん、適当言つてるからそりや大げさだよ」

「なるほど、ちよつと私には荷が重いやつだねこれ?」

おつとそのあたりも踏まえて面白いと評したのでは?と聞いたら、

ちよつと限度があるんじゃないかなあとのお言葉。

「……?これくらい文芸部では普通ですが?」

「マジで言ってる?実は部員達何人か生贄に捧げてない?」

「わりとマジよ、みんな結構ノリを振り切った物言いするから」

「うっわびつくりした!?!あ、刻遠野さんか………あ、」

「ハイ、うちの部員です」

「ハイ、文芸部部員よ」

「うっわ与太じゃなくなった!?!」

はははテンポよくていいっすねこれ。

こちらがわちやわちや話しているのを察して近寄ってきた朱紅奈に、小さく手をあげて挨拶。

彼女もまた小さく手をあげて挨拶を返してきたあと、私の机の端に腰を掛ける。

「実際面白人間倶楽部なところ、なくもないと思うわよ、私含めて」

「そこで自分含めるの!?!」

「己の狂気と向き合うことで、芸術というものは大成するのだよキミィ」

「なにその謎の金持ちっぽいセリフ!?!」

「実際の金持ちはこういうこと言わないんだよなあ、単に普通の選択肢の中に常にお金での解決が入ってくるだけで」

「なんでそんな実感籠もった感じに………つてあ、一年の栗花落?!?!」

「よく知ってるわね。あと常に二重音声な娘とか、学校内のいろんな行事で暗躍している顧問とかも居るわよ?」

「待って待って、噂じゃなくてホントなのそれ!?!」

「ホントホント。生徒会長さん公認のホント」

「ええええええ!?!」

「………おいお前ら、同級生で遊ぶのも大概にしろ」

「はーん」

「え!?!……あ、からかってたわけね?よかったあ………」
「……………」

「いやちよつと、堀ノ内君?こつち見て堀ノ内君!?!嘘だつて言つてお願いだから!?!」

「…………ウソダトイイナー」

「ちよつとおおおおおつ!!?!」

ヤダこの子いい反応。正式な部員じゃなくていいから加入してほしいくらい。

……いや、加入すると染まるか、それはよくない。

「厳正な審査の結果、貴殿の入部は不成立となりました。貴殿の今後のご健勝をお祈り申し上げます」

「いや今度はなに!?!なんで私突然お断りメールみたいな食らつてるの!?!」

「お祈り申し上げます」

「お祈り申し上げます」

「なんで輪唱するのこの人達つ!?!」

貴女は綺麗なままの貴女で居て、という思いから断腸の思いで入部をお断りする私達。……わかつてくれあつきー、これも君を思うがゆえの、苦渋の選択なんだ………!

「ぜつつつたいたい苦しんでないし渋面でもないじゃんこれえつ!?!」

「あつきーが素直なのが悪いね、仕方がないね」

恨むのなら自分の善良さを恨むんだなあつきー、君の反応が新鮮過ぎるのが悪いのだよ。

彼女を囲んで三人でふふふと笑い合う。哀れな彼女はそのまま私達のおもちやになる……かと思われたのだが。

「——へえ、何が仕方がない、のかしら？」
「……………全員逃げろっ！」
「逃しませんわっ!!前・後・窓ぜんこうまどっ!!」
「二御意っ!!」
「うわあ生徒会役員達だあっ!!?」
「いや待てなんで窓の外から!!」
「くっ、逃げ道を塞がれてしまったわね…………」
「今日という今日こそは逃しませんわよっ!!」

隣のクラスから騒ぎを聞きつけた美玲さん達に囲まれてしまう。

…………ぬう、手際の良さが夏休み初めとぜんぜん違う、腕を上げたな
生徒会役員共め…………!

「だから、なんなのよこの展開はあっ!!!?!」

あつきーの叫び声をバックグラウンドに、生徒会と文芸部のぶつかりあいが始まるのだった——。

☆ ☆ ☆

「はい、というわけで反省会です」

「はい先輩!」

「なにかな鈴莉ちゃん」

「私達後輩組は何がなにやらわかりません!」

「よし、仕方がないからちよつと待機!」

「了解しました!結花ちゃん、しばらくトラップでもしてますか?」

「我神経衰弱とかどう?ポーカーやりたい」

「んんん、どっちもやるということですね!」

文芸部部室にて、先の騒動の反省会をしよう、みたいなノリでそのまま始業式後に集まった私達。

鈴莉ちゃん達後輩組は朝のあれこれには関わってなかったので、主に反省するのは二年生組なわけだけど。

「……ねえ」

「さて、反省文を書く……などでも構わないのですが、別に教師の皆様方の指導が必要なほどの騒動というわけでもなく、さりとて貴方方にとつてちよつとやそつとの反省文では苦にしないことでしょうか。……ですので、彼女への謝罪と暫しの奉仕活動、ということを手を打ちましょう」

「へーい。むう、流石にちよつとはつちやけすぎたか。夏気分抜けてなかったかなあ」

「……ちよつと、ねえ」

「まあ、自分達の行動を見直すいいきっかけになったつてことで。謝罪ついでに菓子でも持つてくか？」

「……だから、ねえ」

「まあ、ちよつと緩んでいたのは確かね」

「初日でよかったとポジティブに行こう、失敗したんなら取り返せばいいんだよ上等だぜ」

「だ・か・ら……。聞けーっ!!!」

そうしてみんなで話していたら、あつきーが大声を上げて私達の反省会を遮って来たのだった。

むう、突然大声を出すなんてよくないんだぞー？

「出すでしょそりゃ!?なんで私も同伴!?つていうか私への謝罪を考える場に私を呼ぶんじゃないわよ!」

「いやー、こういうのはスピード勝負だと思うので。というわけで、ごめんねあつきー。ちよつと調子乗ってた、この通り」

「はへっ!?え、普通に謝るの?……ってわわわ、みんなして頭下げるの止めて!?なんか私が悪いみたいじゃん!」

あつきーがごもつともなことを言ったので、みんなで素直に頭を下げる。

調子に乗って不快にさせてたらあれだし、これから謝罪の場を開くんだし、さくさく進めなければ。

「いや、謝罪の場ってなに!？」

「シェフ晃のランチコースでございます。どうぞお楽しみくださいませ」

「え、えええええ、なにこれどういうアレ!？」

「え? いや、お詫び代わりにうちがどんな感じの部活なのか教えてあげようかと。疑ってたし」

「……ああ、そういえばそんな話だったんだっけこれ……」

頭を抱えてしまったあつきーの前に晃が料理を並べていくのを見ながら、私は少し彼女に同情する。

……悪いなあつきー。実は全部わざとなんだ、なんてたってだね?

(なーんで、2の主人公が居るんだろうなあ……?)

——彼女の出自が、怪しすぎるのが悪いのだから。

木を隠す森を伐採するが如く

その違和感に気付いたのは、登校日のことだった。……いや、正確には見ないふりをしていたことに気付いた、というべきか。

演劇祭のあの日まで、私の目が曇っていたことは事実である。さらに、それが終わってからもしばらく、周囲を気にできる余裕がなかったのも事実。

なので、自分がクラスメイトの顔とかをあんまり見ていなかった、ということに気付いたのは、自身が登校日に教室の扉を潜って、クラスメイト達の顔を改めて認識してからだっただけだ。

——うわマジか私、いくらなんでも薄情過ぎるでしょ……なんて自嘲しつつ席について。

席替えをすると担任が言うのでくじを引いて、決まった席に座り直してこれからどうしたもんかと思案して。

「あ、お隣は東山さんか。よろしくねー」

「ん、よろしく……う？」

隣にやってきた彼女からの挨拶を受け、こちらも挨拶を返そう……として硬直した。「え、いきなりどしたん？」と声を掛けられたので慌ててなんでもないと返し、笑みを返す。

彼女はしばらく首を傾げていたが、こちらが笑みを崩さないのを見てとりあえず保留することにしたのか、もう一度だけよろしくーと言って席に座った。

そんな彼女を横目に、内心でため息。

……いや、見間違いないじゃないか、これは確かに……。

密かにチラチラ彼女を見ながら、その特徴を確認していく。

髪の色は茶色、瞳は黒色。……確か、髪は地毛だっけ？

体型は私と似たようなもの。……スタイルについて指摘されると涙目になっていた気がする。

身長は、私より低め。……あっちでは一番背が低いのだったか。

そして——当たり前前だけど、彼女の着ている制服は私と同じもの。
……一番の違和感。

そこまで確認して、小さくため息を吐いた。

……いや、『2』の主人公じゃねーかこの子。

☆ ☆ ☆

この世界に近似した、とある百合ゲーム。

変な人気があったこれは一部に異様にウケ、それなりの販売数を稼いでいた。

それで変な自信を得てしまったのか、この会社続編を作ってしまうのである。それが『2』。……なのだが。

まあ、そもそも最初のタイトルのヒット自体がちよつと特殊な感じだったのも合わせて、続編は大爆死。

以降、この作品達は一部のファンの間でしか語られない幻の作品と化して行つたのだ。

そんな、あんまりにもあんまりなゲームの主人公が、今日の前に居る彼女、『秋山 昴』なわけである。

なお、そつちでは舞台となつていた学校が違った為、本来彼女が着ていた服も全く別のものだった。

……前作の反省からちゃんとした女学校が舞台にしていたので、彼女の服も丈の長いロングスカートなどが特徴的な、わかりやすいお嬢様な服装だったのだ。

それがどうだ？ 現在隣に居る彼女は、原作ではもうちよつとお淑やかな感じだったのに、今ではわりとテンション高めの一般女子高生である。

いやまあ、楽しそうなのはいいことだと思ふのだが。

……可愛いお嬢様、つて感じだった原作からするとギャップがすごい。

そもそもの話、なんでここに居るのだろうか彼女は？

この世界がゲームではないことはもう知っているが、それにしたつ

てわざわざ続編の主人公に相当するような人物が、これ見よがしに私の前に配置されるとか、何者かの作為を感じざるを得ないぞ……うそんな感じなので、ちよつと彼女について探りを入れてみた、というのが先までのいろいろなアレの理由である。

……まあ、反応のいい一般人、みたいなことしかわからなかったんだけどね？

☆ ☆ ☆

「では、文芸部が来る文化祭にて何を出店するのか、ちよいと足掛かりくらいは話しておきたいわけなのですが……」

晃のお手製ランチをみんなで食べ終え、一息ついて。……あつきーは「いやなんで部室でこんな普通にランチが出てくるわけ……？」つてずっと困惑してたけどそれは置いていて。

片付けも終わり、久方ぶりの部活の時間である。

議題の内容は文化祭について。前回の活動である演劇祭では惜しくも勝利の栄冠を掴むことはできなかつたわけだが。

今回は勝敗とか気にする必要性はないものの、下手な出し物を見せるのは沽券に関わる。

文芸部らしい、文芸部に見合ったモノをお届けしなければ、なんてちよつと張り切っていたり。

「あれ？メイド喫茶をやるのでは？」

「冷静に考えて人数が足りぬ、特に調理要員が晃以外格が落ちるのが宜しくない」

「あー、堀ノ内先輩が休憩されると、その間の味の維持が難しくなるんですね？」

「そういうこと」

「大袈裟な……」

そこで、鈴莉ちゃんからメイド喫茶をやるはずだったのでは？との疑問。

……あの時は思わず名案だ、と思ったけど、そもそもあーいうのって人数が居る、ってことにあとから気付いたため、白紙に戻したのだと告げる。

文化祭って基本朝から夕方までやるので、交代制にしないと自由時間が一切なくなってしまうのだ。

そこを考えると……削りに削って一組だけ受けるって感じにしても、調理できる人が晁しかないという壁にぶつかってしまう。……正確に言うと、晁の調理スキルと同じラインで料理を出せる者が居ない、という問題だ。

悲しいかな、私もこの幼馴染みの料理には太刀打ちできる気がないので、丸一日彼を働かせる羽目になるメイド喫茶は、ちよつと選べないなあとなったわけである。

なお、私以外のみんなに関しては、美玲さん以外の三人はまあ普通に、美玲さんはちよつと苦手、といった感じの料理の腕を持っている。……流石に代わりにはならなさそうだ。

「揚げるだけで最悪形になるチュロスを出す、とかは？」

「それもはやチュロス屋じゃない？メイドである必要性がないというか」

「あー、なるほど？喫茶を名乗る以上はメニューに幅が欲しいけれど、それをクリアしようとするどこかで妥協がいる、と」

「そういうこと。妥協するくらいなら他のことをやるべきかなって」

ついで上がるのは、簡単に調理できるモノを提供するのはどうか、という提案。……確かに、全部出来合いのものを提供するのであれば、必要な人数を減らすことができる。メイド喫茶をやりたい、というだけならこれが一番確実だろう。

……ただまあ、そこまで妥協するなら普通に他のことしたほうがいいんじゃないかなーというか。

そもそもそのメイド喫茶をやりたいつてのが私のワガママなので、それを妥協で満たすくらいならちゃんとお普通の出し物したほうがいいでしょう、という。

「……人員だけでしたら、生徒会からお出しすることもできますが？」
「んー、そこまで行くとちゃんと晁の腕に並ぶ人が欲しいってなるからなあ」

「ワガママすぎる……」

「なんだよー、そもそもメイド喫茶やりたいつてのが私のワガママなんだから、ワガママ満たせなきゃやる意味ないってなるの仕方がないだろー！」

だから違うこと考えようぜ、って提案してるのに、なんでみんなどうにかしてメイド喫茶にしようとしてるのさ？

「いやだって、部長がやりたいつて言ってるんだから考慮はするだろ」
「……え？まさかそんな理由で？」

晁の言葉にみんなを見渡すと、返ってくるのはそうだよ？と言う領き。……あー、マジかー、部長権限だったかー……。

迂闊なことは言うもんじゃないな、と反省。

せいぜいクラスでワガママ言ってる一生徒くらいの立ち位置なつもりだったんだけど、そうかわれてみれば私部長でしたね……。

しばらく瞑目して思案。……ぬぐぐぐぐ。

「わかった！簡単に調理できるチュロスとホットサンドだけ出すメイド喫茶！それで妥協！ごめんなさいだけど美玲さんには人員をお借りします！」

「はい、承りましたわ。……最初からそうしていればややこしくなくて済んだのでは？」

「そこまで配慮されてると思わなかったんだよ……こんなに配慮され

てるならそりややるよ……」

ここまでされるとやらないほうがガママだよ……。

ホント、迂闊なことは言うもんじゃないね、迷惑かけっぱなしじゃんこれ。

「先輩が楽しんで貰えるのが一番なので！」

「基本的には貴方を中心に集まっているのだもの、方針には従うわよ」
文芸部らしいかどうかは謎ですが、楽しいのはいいと思えます

「紡ぐものとしては失格だが、世を笑うもまた一興よ！」

「……みんなが私を甘やかしてくるんだがどうすればいいと思う？」
「素直に甘えてればいいんじゃないか？」

……うーん、いいのかねえ？

とはいえこの子達も大概頑固なので、意見は梃子でも変えないだらうけど。

「……そういえば、服どこかに借りるか何かしないといけないね？」

「あ、うちが貸し出します！全員分！」

「お、おう。流石の屋敷住まい……ん？全員分？」

さて、やることがメイド喫茶に決まったわけだけど。

どこかに借りるなり作るなりしなきゃいけないなあ、と思ってたら鈴莉ちゃんがうちのを貸しますとの言葉。……ナチュラルにメイドさん雇ってる家は言うこと違いますね……なんて思ってたら、謎の「全員分」の言葉。

……ん？何人分用意する気なのこの子？

「はい？文芸部員全員分と、生徒会からの協力者さん達の方ですよね？」

「……それ、私も入ってる？」

「なんで入ってないと思ったんですか？」

「oh……」

あ、ああ。そっか、私もか……。

いや、言われりやそうなんだけど、メイド達を侍らせてる図を最初に思い浮かべてたから、ちよつと考慮の範疇外だったんだわ……。

「その……ところでなんだけどさ？私、いつまでここにいればいい？」
「ん？……つてあ、あつきーごめん、忘れてた!？」

ちよつとへこんでいたら、聞きなれぬ声を掛けられて視線をそちらに向けて。……あつきーがおずおずと手を上げていたのを見て今更ながらに帰っていいよとも言つてなかったことに気付いた。

慌てて謝罪をして、付き合わせてごめんと言ったのだけど、彼女は何かを悩むように下を向いたあと、視線をこちらに向けて、小さく笑った。

「あのさ、私も文芸部、手伝ってもいいかな？」

「へ？あ、いや、構わないけど。……え？メイドやりたかったの？」

突然の提案に驚いて聞き返すと、彼女はたははと笑いながら理由を話してくれた。

「ほら、クラスの出し物展示になったじゃん？暇だから、何かないかなーって思ってたんだよね。文芸部はなんか楽しそうだしさ」

「あーなるほど。……いやでも、いいの？私ら結構暴走するけど、今の会議みたいに」

「そこはまあ必要経費かなって。折角だし、楽しい方が絶対いいしさ。ね、お願い！」

……うーむ？わりとついてけない感じのメンバーだと思っただけど、ここまで晒してもこんな反応、と。

「……ん、じゃありがたいがたく頼らせて貰います。覚悟しとけよー、もつとハチャメチャになるからなあつきー！」

「上等上等ー私が弄られるんじゃないならオツケーオツケーー！」

まあ、働き手は幾ら居ても構わないだろう。

私は打算も含みながら、あっきーの提案を受け入れるのだった。

遊びの中にも見るべきモノは有り

文芸部として出店するものがメイド喫茶に決定したわけだけど。

それが決まったからといっても、別に本格的にメイドとしての修業が始まる……みたいなことになるわけでもないの、基本的には準備&準備こそが今できる唯一のことになる。

……というか、一応開催までに一月あるので、今から慌てる必要もないというか。……演劇祭のときの『一月』とは、重さが違う。

そもそも材料発注くらいしか現状でできることもないし、今のところ文芸部部室は平和そのものだった。

「あつきーが臨時部員になったから、そこだけちよつと慌ただしいけどね」

「えー？きりえんなんか言ったー？」

「放課後勉強会は捗ってるかいって聞いたー」

「捗んなーい!!むりー!!」

まあ、文化祭前にある中間考査のため、軽い勉強会などを部室で行っているから、ちよつとだけ慌ただしいのだけどね？

いや、うちの部員達は基本そつなくこなす人ばかりだから、基本的にはお復習きゅういして終わりなんだけど。

臨時部員あつきーはそこまで勉強が得意、というわけでもないように、結果としてなんかみんな彼女の勉強を見る、みたいなことになってしまっているのだった。

まあ、人に教えるのって自分の復習にもなるから、全然問題ないんだけど。

「ひーっ、みんなよくこんな覚えられるね、私ちよつと頭痛くなってきたって！」

「まあ、知識が多いほど色々書けるようになる、とは言うからな。それなりに真面目に覚えもするさ」

「そーいうもんなのほりっち?」

「ああそ……いや、なんだ?ほりっち?」

「そーそー、ほりっち。堀ノ内だからほりっち」

「そ、そうか……」

なんと、晃があつきーにあだ名を付けられて困惑してる……。

いやまあ、こういうテンションの子は文芸部にはいなかったから、ちよつと面食らうのはわかる。……けども、そんなに驚く必要はないんじゃないかな、いや私もやけに距離感近いなーとは思っけどさ?

「それ貴方が言うの?結構ぐいぐい来るほうだと思っただけれど」

「流石にあつきーのコミュ力と比べられると霞むかなあ」

横から発せられた朱紅奈さんの言葉に苦笑い。

初対面でも隙あらば寄ってくる、といった感じのあつきーと比べられるのは流石にちよつと、と思わなくもない私なのでした。

☆ ☆ ☆

「昨日も思っただけど、毎日こんな感じなのここ?」

「晃の弁当が美味しいのが悪いのじゃ、私で一人占めなんてできるはずもなかったのじゃ……」

「……まあ、材料費も貰ってるし、作ること自体は割りと好きだから別に構わないけどな」

「いや料理もなんだけど、そうじゃなくて」

日付は変わって、別の日のお昼の時間。

最近は何部室に集まってみんなでお弁当をつつくのが、すっかり習慣になってしまったわけなんだけど。

つい先日この輪に加わることになったあつきーが、訝しげな顔で疑問の声を上げたので、皆がつい……と机の中心に鎮座している大きな

弁当箱に視線を向けた。

うちの晃が料理上手なのは周知の事実だけど、そのおこぼれに預かるのは基本私だけだった。

私が彼の幼馴染みだからというのもあるけど、そもそも彼も自分の分の弁当しか作ってきてないので、交換とかするにしても絶対的に量が足りていなかったのである。

なので、部室で昼食を摂るようになってからしばらく、晃の玉子焼きの味は私しか知らなかった……のだけど。

「むう、なんというかこう、ズルいと思います!」

「……いや、流石に栗花落の昼食のが豪華だと思うわけだが」

「それはそれ、これはこれです!お二人であーんとかしてるわけでもないのなら、私達にだって堀ノ内先輩のお弁当を味わう権利はあると思うのですよ!」

「いやちよつと待って、なんか遠回しにあーんしろとか言っていない鈴莉ちゃん?私の気のせい?」

「……してないので!私達にもお恵みプリーズ!」

「スルーするのやめない?!」

ある日、晃の弁当の中から、唐揚げを交換して貰ってもぐもぐと味わっていたら、鈴莉ちゃんから突然の抗議のお言葉が。

見た目は普通でも栄養計算とか、使ってる食材への配慮とかが段違いなお弁当を食している鈴莉ちゃんからすれば、私らが食べているお弁当なんて、全然大したものではないだろうと思ったのだけれど、どうもそうでもないらしい。

……なんか中途半端に本音が見え隠れしている気がしたけど、そこは放置されたまま、彼女は熱く権利を主張する。

「無人島では魚ばかりだったし、他の料理もちよつと食べてみたい、というの私も思わないでもないわね」

「一我も新たな境地を求め願う所存《あ、そうですね。それ以外は飲

み物だけでしたし』」

「そもそも私お茶すらろくに飲んだことありませんわ！不公平ですわ
！」

「賛同者が増えた、だと……?!」

そんな彼女の熱い主張に心を動かされた者達が、次々と声を上げる。
……なんか、思った以上に大事になってるような？

まあ、そんなこんなで。

材料費を負担することを条件に、みんなが一緒に食べられるよう、
おかずを一品多く作ってくるようになった晃がいた……というわけ
である。

代わりに、私は晃からおかずを交換して貰うことはなくなった。

流石に私だけ、とかもう言つてらんない感じだし、そもそも増えた
一品がみんなが食べられる分の量があるから、そこから欲張るのもあ
れだし……というか。

「……なんというか、濃いねきりえん達つてば。……つてだからそう
じゃなくて！」

「えー？そこ以外突つ込むところあるー？」

みたいな話をしたのだけれど、どうにも彼女が指摘したいのはそこ
ではないらしい。

……ふーむ？ここ以外に何か変なところとかあつたかな？なんて
私が思っていると。

「ほりっちだよほりっちー！」

「ん？晃？晃がどうしたつて？」

「どうしたもこうしたもないよ、なんでほりっちメイド服なの!?めつ
ちや自然に着てるから一瞬私の目がおかしくなったのかと思ったよ
?!」

「……なに言ってるのこの子？」

「さあ？」

「私のほうが可哀想な子みたいな扱いだこれ!？」

飛んできたのは、晃が着ている服について。

……ふむ、ロングスカートのメイド服だけど、それがなにか？

晃と顔を見合わせて、首を捻る。

なにを主張するかと思えばメイド服着てる、だって。……そんなの、決まってるじゃんね？

「うちの晃がメイド服が似合う、それ以外の理由がなにか必要だとも？」

「似合うかどうかは正直よくわからんが、まあ着てると喜ぶから特になにか思うところとかはないぞ」

「あ、あれ？これ私がおかしい？おかしいの私かなこれ!？」

「……ほどほどにしときなさい、困ってるわよ彼女」

「いやー、面白いからつい」

「前もやった!この流れ前もやった!ってことはあれだよ、ここで私なんだ、やっぱりメイド服はおかしいんだねって言ったたら、全然?みたいな顔を返されるやつだ!」

「よくわかったな、褒美に飴ちゃんをやろう」

「やっぱりー!!」

ははは。あつきーは元気だなあ、と笑う私達なのでした。

☆ ☆ ☆

「……ふむ」

「〜♪」

「そこは……ううん、……うーん」

——放課後。

文芸部らしく、静かに読書したり、文を書いたりする私達。
そんな私達を見たあつきーはというと。

「……………」

「なにその顔、滅茶苦茶意外そうだけど」

「いや、だつてき？……こんな、いきなり真面目になるとは思わないじゃん……」

「失礼な、私達はやるときややるメンバーだよ？演劇祭のときとかそうだったでしょ？」

「いやうん、言われてみればそうなんだけどさ、なんかこう、ギャップが酷すぎるというか……」

あり得ないモノを見たような目でみんなを見ているものだから、思わず声を掛けてしまった。

うちは騒ぐときは騒ぐけど、真面目にやるときは真面目にやる部なんだぜ、と言えば納得したような、してないような。

そうは言つてもあつきー、君今その変人集団の一員なんだぜ……？

「え、私こんな風に静かに読書とかむりむり」

「そつかり。まあじつとしてられないタイプの人だろうなー、とは思つてたから大丈夫だけどね」

「なにが?!なにが大丈夫なの?!」

「今から部活を投げてトランプ大会にする準備」

「了解しました！トランプはこちらに！」

「ポーカールとブラックジャック、ババ抜きかジジ抜きのどれにする？」
「見えぬ一枚を追い求めようぞ」
はい、ジジ抜きがしたいです

「じゃあ俺抜きつてことで……」

「部長権限です、敵前逃亡は重罪です」

「ちつ、仕方がない……」

「いやなにこの一転攻勢!？」

なんでこんなにノリがいいのかつて？そんなん実は遊びたかつた

以外にあるかい！

そんなわけで唐突なジジ抜き開催である。

因みにうちでは単純に枚数増やすためにジョーカー二枚を含んだ五十四枚から一枚を抜いて始めます。別にジョーカーが揃っても特になにもないですが。

「では何故ジョーカーを含めるのですか？」

「参加人数数えてみなよ、少しでも枚数増やそうって気になるから」「た、確かに……」

七人参加とか一人最大八枚である。

場合によつては、初手で全部揃ってあがる可能性も出てくる枚数だ。そりやまあ、ある程度増やせるなら増やしとこうって気にもなるだろう。……まあ完全に焼け石に水なただけだ。

ほら、その証拠に……、

「あ、残り三枚になりましたよ先輩！」

「私最大枚数なただけど……」

「ご愁傷さま、私は残り六枚ね」

「俺も六枚だな」

「四枚になりました！ふっ。不吉なり」

「私も残り四枚ですわね」

「私七枚！揃わねー！」

ほら露骨に運が出たよ！最大枚数って言っても八枚じゃないのはまだマシだけでも！

こういうのは一番少ない人が、多い人から取るのが基本だいつてことで鈴莉ちゃんからスタート。

ふふふ、私のカードからあがるなんて思うんじゃないだぜふふふ……みたいな感じで、扇状に開いたカードの束から一枚彼女に引かせる。果たしてその結果は……！

「揃いました！これで秋山さんに引いて貰って、私は残り一枚です！」

「いや早くね？っていうかきりえんなにしてんのさ……」

「……私ラックは低いので」

「それ自分から申請するもんか……あ、揃った」

「同胞テメエ!？」

なにしれつと揃えてやがりますかこの幼馴染みはあつ!？

そのままわいわいとカードを引き合い、意外にも一番あがり的美玲さんだったり、それを悔しそうに見ながら二番目に鈴莉ちゃんがあがったり。

そこからしばらく戦況が硬直して、八順くらい誰も揃わずにぐるぐるカードを引くだけになって流石に吹いたりしながら、ちまちまと引いて揃えて上がってを繰り返して――。

「……なんか、最初に予想できてたけど!」

「こつちもそんな気がしてたよ!綺麗に残ったな私ら!」

最後に残ったのは私とあつきー、彼女が一枚、私が二枚で手番は彼女のほう。

流石にどれがジジなのかは明白で、それは二だった。……私の手の中には、スペードの一とハートの二。

みんなが見守るなか、あつきーがこちらのカードに手を伸ばしてくる。――右か、左か。

そんな奇妙な緊張の中、彼女が選び取ったのは――、

「よっしあがったあつ!!」

「ぐあああつ負けたあつ!!」

――残ったハートの二を放り投げて、私は机に倒れ込み、勝ったあつきーが右手を天に突き上げる。……いやー、綺麗に負けたわ、うん。

「ふっ、なかなかやるならあつきー……次はブラツクジャックだ！」

「よっしゃ受けて立つぞー！」

「なんだこいつらの噛み合い方」

晃うるさいぞ！

そんな感じでしたら遊ぶだけ私達なのでした。

ともすれば日は登って新しきを見せ

……あれこれとちよつと構つてみたけれど、特になにか隠しているようでもない、というか。

というかそもそも私が相手を探るのが苦手なんだなこれ？似たようなことを柳瀬先輩の時もやったし。

まあ、そんな感じで部屋に来るようになったあっきーの様子を見ていたりしたのだけれど、正直なーんもわからん。

わかることと言えば彼女がいい子だ、つてことくらいだろう。

話していて気を遣わずに済むというのは、普通に得難い相手だと言える。

「どしたんきりえん、なんかちよつと楽しそうだけど」

「んー？いやね。あっきーが勉強ちよつとずつでもできるようになっていくのを見ると、思わず目頭が熱くなつてきてね……」

「お母さんじゃんっ!?え、私いつの間にきりえんの娘になつたし?!」

「晁お父さん、娘がいい子に育ってくれて嬉しいですね……いや、どした晁、突然吹き出すなんて晁らしくないぞ?」

「おま、おまつ!!」

おおつと、珍しく同胞が照れてる。

……私も言ったあとでちよつと恥ずかしくなつたけど、言ったことは撤回できぬのだ、お前には確かにお父さんになって貰うから覚悟しておけ……（震え声）

「いや私を挟んでイチャイチャすなし、そーいうの子供から見えない位置でやれし」

「なにおう、家族の仲が良いのはいいことだろおっ!」

「……子供の前で過剰にイチャ付くのはよくないんじゃないかしら?」

「突然の朱紅奈さんからの砲撃!」

「朱紅奈お姉ちゃんと言うわけですね！……おや、よく考えたら先輩は早生まれですので、私と歳が同じお母さんということに……？」
「やめろやめろ、突然闇深案件にするのはやめろおっ!？」

確かに私は早生まれだけど！なんか色々あれだぞその発言はあつ!?

その後、それを言ったら私お母さんより年上になるわよ？と朱紅奈さんが言い、同調した美玲さんがふふふ不潔ですわあーっ！となんか知らんけど顔を真っ赤にしていやんいやんと首を振り、ぱはお腹空いたーと久しぶりに通常モードになって喋る結花ちゃんを晃がよーしよしと撫でて……。

みたいに收拾の付かないてんやわんや状態になってから先生がやってきて、なにやってると真顔で言われることになるのでした。

☆ ☆ ☆

「そうこうしている内にもう一週間、時が経つのは早いねえ」

「試験前日なわけだが、流石に今日はみんな真面目だな」

浮かれるのは、試験を終えてからだ！

……なんて言った人が居たかは定かではないけど、中間考査前日の放課後。

運動系の部活は校内には残っていないけど、文化系の部活に所属している生徒は、うちみたいに部室を使つて勉強をしている、みたいな人達も多いようだ。

なので試験前日の放課後にも関わらず、校内には人の気配が結構残っている。流石に先週のうちみたいに騒がしかったりはしないわけだけだ。

そんな校内を部室に向かって歩きつつ、二階から三階に繋がる階段に足を掛けたら、上のほう……多分踊り場から聞こえてくる話し声。
……これは、あつきーと、他の誰かな？

晁を手招きして、階段を上がるのをやめてそつと聞き耳。

「……じゃあ、その通りに」

「うん、別に構わないけど……内緒なんですよ？言わなくてもいいの？」

「気にしないでいいわ、そのあたりは調整しておくから」

「んー、すつべーがいいんなら別にいいけどきりえん怒んない？」

「……さあ、どうかしら。とりあえず、部室に行きましょう。最後の追上げも残っていることだし」

「うえー、文字見るのもういやだなー……」

……話が終わって、二人の足音が遠くに消えていく。

ちよつとそこで待機して、足音が戻ってきたりしないことを確認したのち、階段の下に隠れるのを止めた。

「刻遠野と秋山か。なんの話をして……桐依？」

「ん？どしたし晁」

二人がなにを話していたのかを考察しようとしていた晁が、こちらの顔を見て疑問の声を上げる。……私？私はね……。

「いや、なんだその『やつべー、やらかした』みたいな曖昧な微笑み」

「なんでもないぞー、なんでもないんだぞー、あはははは」

「……いや、言いたくないんならまあ聞かんが、他の奴に聞かれたくないならその顔は止めたほうがいいぞ」

「……はい」

こつ恥ずかしきで顔から火が出そうです……。

いや、なんとというか、うん、そーいやそーうだったというか、うん……。

一つの忘れ事を思い出した私は、しばらく下を向いて過ごすことになったのでした。

☆ ☆ ☆

「うわー！終わったー！」

「はい、お疲れ様。……出来は微妙、って感じ？」

日付は飛んで、四日後のお昼。

精魂尽き果てた、といった感じに机に倒れ込むあつきーに声を掛けつつ、クラスの中を見渡す。

大体の人は試験の終わった解放感から諸手を上げて喜んでる感じで、その中の時折自己採点してる人が居たり、はたまたホームルームも終わったのでさっさと帰ろうとしている人が居たり、と様々だった。

そんな中、晃がこちらに近付いてくる。

「俺らも帰るか？それとも部室に寄るか？」

「それなんだけど、鈴莉ちゃんがメイド服を用意するのに寸法測りたかって言ってたから、この後は部室の予定」

この後の予定に付いて聞かれたので、朝のうちに鈴莉ちゃんから連絡があったことを伝える。

正直晃に関しては自前の奴を使えばいいような気がしてるけど、どうにも喫茶で使うのは普段のクラシカルな奴では無いらしいので、そのあたりの関係で晃の寸法も欲しいのだそう。

「……まさか新しいメイド服が増えることになるとはな」

「私もちよつとびつくりだよ」

なお、そうして用意したメイド服は、晃に関してはそのままプレゼントしてくれるのだそう。

日頃のお礼です、とは言うものの。それでいいのか男の子、みたい

な葛藤もなくもないようで。……最終的に鈴莉ちゃんの熱意に押し
きられてたけど。うちの晃は押しに弱い……。

「あつきーも、寸法測るんだよね？」

「え？あ、そ、そそそそうだね！メイド服とか初めて着るから、楽しみ
だなー！」

「……………」

「なんだこの微妙な空気」

蚊帳の外になっていたあつきーに声を掛けると、あからさまな挙動
不審ぶり。……ヨクワカンナイノデ、ワタシハムゴンデカノジヨヲミ
ツメルヨ！ウン、ワタシハキツイテナイヨー？

……隣の晃に変なものを見る目で見られた。くそう、私が悪いわけ
じゃないのなんだこのなんとも言えない空気……。

そのまま三人連れだって、部屋へ向かう。

扉を開けて中に入ると、人の気配はどこにもない。

「あ、あつれー？りんちゃん達居ないみたいだねえ？」

「そだね。とりあえず晃、お茶でも飲んで待つてる？」

「そうだな、紅茶と緑茶どっちがいい？」

誰も居ないのを確認して、そそくさと席に座るあつきーを横目にし
つつ、晃に飲み物のリクエスト。

紅茶か緑茶かを聞かれたので、今日は緑茶の気分だと伝えたと、
あつきーは驚いたように目を真ん丸にしたあと、遠慮しがちな声で
「わ、私も同じので………」と言っていた。

……………なるほど？

そんな私達の言葉を聞いた晃は、「へーい」と返事をしながら奥の部
屋へ。

そこは元々宿直室だった時に物置として使われていた場所で、現在
は晃が着替えるための部屋になっている。

そこに入った彼が、何事かに驚くように「あ？」と声を発したあと、しばしガサガサと音をさせたのち、扉を開けてこちらに出てくる。

「……おお？大正の給仕風のメイド服とな？可愛いじゃん」

出てきた晁の格好は、いわゆる袴の上にエプロンドレスを着たような風貌の、大正浪漫溢れる和風メイド服であった。……いつものクラシカルなものいいけど、和服系も悪くない。

それを着ている晁はといえば、ちよつと困惑している様子。

「いや、いつもの服が置いてるところにこれが置かれててだな？」

「ふむ？その様子だといつもの服は無かったと？」

（……無いなら着ないでいいのに、あるやつ着ちやうんだ……完全に慣れだよこれ……）

部室内でのユニフォームみたいなものになっていたということか、とりあえず有るものに着替えたらこうなったとの申告。……私的には似合ってるんで問題ないんだけど……さて？

知らないふりをしつつ、内心そろそろかなーと待ち構えること数秒。

部室の扉が開いて、いつものメンバーが室内に雪崩れ込んでくる。そしてその手に持った円錐形のもの——クラッカーの紐をひっぱって。

「お誕生日おめでとうございませぬ堀ノ内先輩！」

「へ？……あ、そっか俺誕生日だったわ」

「自分の誕生日を忘れてたの？……桐依、もしかして貴方」
「最初素で忘れてたけど、途中で思い出したので一応意図した結果です。サプライズの邪魔しなかったんだから無罪だと思いまーす」

「あ、ってことはどっかで見られてたんだ!？」

「気付かせてくれてありがとうございまーす、四日有ったんで私もプ

プレゼント用意できました、ありがとうございませう。でも私が隠し事できないと思つて、サプライズ周りをこつちにもサプライズしてたのは酷いと思ひませう」

「そうですね、こつちしてちゃんと堀ノ内さんを驚かす事ができたのですから、貴方の隠蔽能力を疑うべきではありませんでしたね……」
「ねえ、なんか突然人間きが悪くなつてない？気のせい？」

鳴らされた祝砲に、晃が目をぱちくりとさせている。

……あの日の踊り場での会話は、このことだつたらしい。

話しているのを密かに聞くことで、私も彼の誕生日を忘れていたことに気付けたのは僥倖と言ふかなんというか。

彼氏の誕生日忘れてる酷い彼女やんけ、つてちよつと羞恥で死にたくなつたけど、そのおかげで私も色々準備できたので感謝しないでもない。

……ついでに言うのと隠し事下手すぎるあつきーの疑いも、今回の流れで晴れていたりする。

ともあれ、今日が晃の誕生日だというのは確か。

ポカンとしている晃の手に、次々と部活メンバーから贈り物が乗せられていく。

「……鍋とフライパンのセットに、調味料入れ一式。それと……おまつ、これ結構高いやつ……!?!」

「堀ノ内先輩がさらに美味しいご飯を作つていけるようにという投資です！気が咎めるのなら美味しいご飯をリーズ！です！」

「あんまり高いものは遠慮するでしょうって私も言ったのだけどね。

この子そういうところ頓着しないから」

私からはレシビ本！お役に立てばいいですが
「我は航海を助く羅針盤を贈らう……」

「私からは計量器などを、それと篠浦先生からはバーベキューセットだそうですよ。いつかまた、貴方の焼いた串焼きを食べたい、だとか」
「わ、私は重いのもあれだろうし、近所のスーパーの値引きチケット！」

「……こりやまた、随分といろいろ持つてきてくれたんだな」

おや、珍しく晁が涙ぐんでる。

……まあ、こうして盛大に祝われるのはなんだかんだで初めてだろうし、仕方ないところもあるとは思うけど。

「お前は、なにをくれるんだ？」

「私のは帰ってから。……茶化さないで鈴莉ちゃん。違うから、そういうのじゃないから！……ええい、どうせケーキとかあるんでしよう、さっさと準備しなさい！」

「わー！お母さんが怒ったー♪」

こちらを向いて晁が催促をしてきたので、帰ってからののお楽しみだと返す。……みんなの前で言ったせいで滅茶苦茶囃し立てられたけど、そういうんじゃないから。普通に贈り物用意しただけだから！……って言うと、蜘蛛の子を散らすようにみんな散っていった。……用意しているケーキを取りに行ったのだろう。

小さくため息を吐いて、改めて晁の方に向き直る。

「誕生日おめでと、晁」

「ん、ありがとな。……ったく、とんだ誕生日だな、ほんと」

「ま、こういうのもたまにはいいでしょ？」

「……だな」

朗らかに笑う彼を見ながら、私も小さく笑みを浮かべるのでした。

陥穽はあれど、気付かなければそれに意味はなく

高校の文化祭と言うものは、場所によっては一日だけだったり、はたまた学校関係者のみに参加できる日と一般公開の日で二日間の開催予定を取っていたりと、結構その学校の特色が出る部分だと思う。うちの場合は、生徒達だけで展示物を見て回る一日目と、一般の人を招く二日目の日程になっていた。

……前世の時は確か一日だけ開催の高校に通っていた気がするの
で、二日も文化祭がある、というのはちよつと不思議に思ったものだ
けど……。

「基本的に一日目って、二日目に戦力を回してるから正直地味、だよ
ね」

「おい、思っても言っていないことと悪いことがあるぞ」

校内の廊下を、晁と連れ立って歩く私。

本格的な稼働が明日という出し物がほとんどであるため、人の賑わ
いこそあれどなんとというか盛り上がり切らない感じの校内。

……これ、二日間も必要なのかな？それとも、ここがちよつとやる
気がないだけで、他所の高校だと一日目も活気があつたりするんだろ
うか？

「って言っても、初日に販売系のものをやるか分からんしなあ」

「まあ、基本的にそういうのは一般公開の日に労力を回すよねえ」

文化祭で人気のものと言えば、やはり屋台系のものだろう。

『祭』らしくりんご飴やチョコバナナ、クレープに焼きそばなどが並
んでいれば、それだけで気分は上々というもの。

喫茶系も同じく人気だろう。……単に料理を出すだけだと屋台と
の違いがないので、差別化のためにいろいろ要素が足されたりもする
が。

食事系を除くのなら、お化け屋敷やヨーヨーすくい、輪投げや射的なんかの祭の定番系も強いかな。

うちでは演劇祭があるので選ばれることはないけど、体育館を借りて劇をするなんてこともあるかも知れない。……うちの場合は一部の生徒たちが演奏をするために場所を借りていたりするようだけど。……ただまあ、そういうのって基本一般客が入ってる時にやるものだから、生徒と先生しか見てない今日はどこもやってないんだよね！……じゃあ今日の意味ってなんなんだ……？

「通常の展示はやってるし、そっちメインとか？あとは準備のロスタイム的な」

「展示とかよっぽど面白いこと調べてるとかでもないとまず見られないから、基本的にはロスタイム需要かねえ？」

名目上は展示日だけど、基本みんな明日の準備というか本番前の最後の確認とかをしているあたりなんというかな……。

うちのクラスも展示自体はやっているけれど、本当にただの展示なので案内係さえ常駐していないという放置ぶり。……いやまあ、そのおかげで部活のほうに集中できるわけだから、ありがたいのはありがたいんだけどさ？なんというかな、文化祭ってなんなんだろうなって気分になるというかな……。

「あ、先輩！校内散策ですか？」

「おや鈴莉ちゃん。まあそんなところ？そっちは？」

そんなことを話しながら歩いていたら、廊下でプラカードを持って立っている鈴莉ちゃんの姿。……プラカードには『朗読劇』の文字。……どうやら、教室内で童話なんかを読む朗読劇をやっているようだ。

そっと中を覗くと、教卓前には数人の生徒が居て、その中には結花ちゃんの姿も見えた。今やってるのは……3びきのこぶた、かな？

「どれだけ臨場感を再現できるか、みたいなところを競う対戦朗読劇なんですよー!」

「なるほど対せ……なんて?」

鈴莉ちゃんの口から飛び出した言葉に、思わず聞き返してしまう。対戦、朗読劇……?

聞けば、本格的な始動は明日の一般公開からだけど、現在リハーサルのに流しで朗読を行っているらしく。

今は単に朗読しているだけに見えるが、本公開ではお客さんにも一節朗読して貰い、ある程度上手いという判定を貰うと学園祭で使える割引券が貰えるのだとか。……ある程度いい判定とは?

「そのあたりは対戦相手の生徒側が決める感じですよ!」

「それ、かなり相手側に不利なのは……?」

「貰える割引券の金額によって難易度が変わりますので大丈夫かと!」

「朗読に難易度設定だと……?!」

詳しく話を聞いてみると、対戦相手の生徒を事前に指名して行うものらしく、生徒ごとに難易度と貰える割引券の金額が変わるらしい。下は五十円引きから、上はなんと全額割引券まで!

実に夢のある話だが、難易度って要するに生徒側が納得するかどうかなので、言ってしまうとほぼ八百長みたいなもんなような……?

みたいなことを問えば、そうでもないですよとの鈴莉ちゃんからの返事。

「まあ、先生からも五十円くらいならバンバン出してもいい、とお墨付きを貰ってますので!」

「へえ、じゃあまあいいほうか……」

「代わりに全額割引券は極悪難易度ですが!」

「……参考までに聞きたいんだけどそれって相手誰なの?」

「無論、結花ちゃんですよ？」

「誰にも取らせる気がない……?!？」

通常の喋りが二回行動多重音声で文芸部で一番物語への造詣が深い相手にどう勝てというのか、魔王でももうちょっと優しい条件に思うぞ……。

「でもこの割引券、発行枚数に特に条件設けてないんですよ！なのでこうして調整しないと流石にダメということになります！」

「なる、ほど？……あれ、結花ちゃん明日こっちの手伝いもあるけど、その間はどうすんの？」

「そもそも挑戦できませんよ？」

「ち、ちからわざあ……」

よく考えているのか居ないのか、ちよつとわからなくなるクラスだなどと思う私達なのだった。

☆ ☆ ☆

「あ、美玲さんおつかれー」

「あら、桐依さんと堀ノ内さん。お二人は何を？」

「特にすることもないし、校内を冷やかして回ってるってこ」

「いや、言いかたってもんがあるだろうがよ……」

鈴莉ちゃん達のクラスを離れ、歩くことしばし。

生徒会室の近くに来たところ、美玲さんが立っていたので声を掛ける。

生徒会での出し物は特になく、風紀委員と共に校内の見回りにあたるのが仕事らしい彼女は、現在本部扱いの生徒会室前で委員達からの報告を待っているのだそうだ。

「まあ、全てを見て回るのとは不可能ですので、ほどほどでいいと言いつめては居ますが」

「流石に柔軟な判断だねえ。ところで具体的にはどういう事を見て回ってるの？」

「……守秘義務、と言うほど堅いものでもありませんし、まあいいでしょう。基本的には飲食系の店、特に甘味系のものを取り扱っている場所で密かに生クリームを使っていないかとか、文化祭中に立ち入り禁止区域になっている場所に屯していないかとか、まあそんな感じですかね」

「あー、乳製品とか生モノはダメなんだっけ」

植物性の生クリームならいいけど、普通の動物性生クリームは食中毒の危険があるのでダメなんだそう。似たような理由で生魚とかもダメ、野菜も加熱なしでは許可が出ないことが多いのだとか。

でもこう、生クリーム無しのクレープは味気ないということで、密かに生クリームを使おうとする生徒もたまーに居るそう。一応見ておかないといけないのだそう。……なんというか、お疲れさまです。

「まあ、うちの所属委員達は優秀ですので、私がすべきことなんて全体の統括くらいなのですけどね」

「壁の外から現れたりするのは優秀で済むんですかね……？」

なかば忍者かなにかなんじゃないですかね……？

この間の追っかけっこを思い出してちよつと疑問に思ったけど、まあ美玲さんが気にしてないなら大丈夫なんでしょう、多分。

折角なのでしばらく美玲さんと一緒に生徒会役員達や風紀委員達を待ってみる。

入れ替わり立ち替わり美玲さんに報告をしていく生徒達は皆真面目そうな感じで、きびきびと動いては報告を終え、また見回りに出掛ける。

「とはいえ、これも今日だけのこと。明日に関しては先生方が見回りを受け持つて下さるそうですので、私達は基本文芸部の手伝いに動くことになるとは思いますが」

「なるほど、一般公開当日は外の人も来るから、見回りも大人がしたほうがいいというわけだね」

トラブルになった時に大人が対応したほうがいいと言うことか。

……一応生徒が招待チケットを渡した相手に限るとは言え、問題ない人ばかりが揃うとも限らないわけだし、この対応も宜なるかな、ということか。……まあ、だからこそ人手を賄えたところがあるし、先生方には感謝しかないわけだけど。

「んー、解説ありがと。じゃ、そろそろ私達はお暇するね」

「ええ、また明日」

そんなことを話している内に時間も結構経っていたので、美玲さんに挨拶をして生徒会室を後にする。

そろそろ私達も明日の最終確認をしなきゃいけないな、と思いつつ部室に向かう道すがら、今度は朱紅奈さんに出会った。

「あら、貴方達も今から部室？」

「ん、材料とか服とかの最終確認をしとこうかなってね」

そのまま合流して、部室のある三階へ。

部室の前では、ダンボールを持ったあつきーが右に左にうろうろとしていた。……いや、なにしてるの？

「なにやってるのあつきー……っ？」

「あ、きりえん良かった！部室に飾る花瓶とか持ってきたんだけど、私鍵持つてないの忘れてて！」

「……そっぴいやすつかり馴染んでたけど、一応臨時部員だったか」

おつと、正式な部員じゃないから鍵借りれなかったのか。……だったら荷物置いて待ってればいいのに、と言ったら彼女は「その手があつたか!」みたいな顔をしていた。……ええ……?

「いい感じの花瓶とかあつたから、すぐに持つていこうと思つてたらそのあたり全部忘れちゃつてたんだつてばあー!」

「いやー、それこそ朱紅奈さんでも私でも晃でも、普通にスマホで連絡すればよかつたじゃん」

「……スマホ教室におきつぱだし……」

「なんで?」

「単純に忘れてたんだつてばあー!!」

うーん、この安定のあつきムーブ。……ちよつと前まで疑つてた私がバカみたいだなこれ?

この慌て方が全部演技だったら凄いいけど、そういうの下手くそそうだし、そもそもそこ偽る意味もないしで、ホントに疑り損のくたびれ儲けだなこれ。

「……とりあえず、開けるわよ?」

「お願いすつべー!私もう腕が死にそう!」

「あーもうはいはい、ちよつと待つてなさいな」

朱紅奈さんが鍵を開け、みんなで部室の中へ。

あつきーは持つていたダンボールをテーブルの上に置くと、「もう限界だー!」と言いなながらソファァーにダイブした。……うちにあるのが寝転がれる大ききのソファァーでよかつたねあつきー。でもそれ物置に下げるから降りようね。

「……へえ、確かにいい感じの花瓶ね、それとテーブルクロスも」

「テーブルは横の空き教室から持ってくるとして……四席分あればいいんだっけ？」

「そうそう、机は二つで椅子は四つ。あんまり数は捌けないから、人数は最大で四人までつてことにしたから」

嫌がるあつきーをソファーから除けつつ、晃達の話に返事を投げる。

机を二つ繋げて一つ分にして二席分椅子を置く、というのをかける二セット。

場所を作るために、いつも中心にある机達は一度物置にどかさなければ。

そんな感じに最後の準備を行っていく私達なのでした。

明日は文化祭一般公開日、はたしてどうなることやら？

祭りは始まり、人は集う

「さて、諸君。文化祭一般解放日となったわけだが、準備万端だろうか？」

「準備万端でありますたいちよー！」

「よおーしせいれーつ！お客様はー!?」

「神様でーす！」

「不埒なおお客様はー!?」

「崇り神でーす！」

「神様相手にはー!?」

「全力全開で当たりまーす！」

「よーし万全！行くぞ皆の衆、合戦の始まりじゃあ!!」

「イエー！」

「……えー、なんなのこのテンション……」

「気にするな、うちは大体こんな感じだ」

次の日の朝、部室にて。

……ふむ、材料よし！テーブル席よし！みんなの服装よし！準備万端よし！この確認の仕方多分よくない気がするけどよし！

ふふふふ、まさに完璧。これでお客様を思う存分もてなすことができるというわけだふふふふ……。

そして見よ、我らがメイド集団を！

晃は先日新しく増えたものである、大正浪漫溢れる和風メイド！

鈴莉ちゃんは可愛らしさを活かした、フリル多めのミニスカメイド

！

朱紅奈さんはできる女性感を醸し出す、ヴィクトリアン風メイド！

結花ちゃんはその見た目を活かして、ミリタリー風メイド！

美玲さんは三つ編みと相性バツチリな、チャイナ風メイド！

そして私が、オーソドックスなクラシカルメイドで、メイドパワーは倍々ゲームで貴様を越える千二百万パワーだー！……貴様って誰

やっ。

まあそんな感じで、多数の需要を満たせる最強のメイド集団となっております。なんてこった、わくわくが止まらねえぜ！

……なお、お手伝いの生徒会役員達はみなガタイのいい男子生徒ばかりなので、こちらには流石に執事服を用意して貰いました。……幾ら異性装に忌避感ない世界とは言っても、流石に筋肉でピチピちなメイドはちよつとねえ……？

「執事服着たやつが窓から突然現れてくるのも普通に恐怖なんだが」

「気にするな晃、彼等は忍者みたいなものなんだから」

「なんで忍者が居るんだよ逆に」

なんでだろうね？

晃の言葉を受けて美玲さんに視線を送るも、彼女もよく知らないのか困り顔だった。……なんなんだろうね、この三人。

まあわからないことは置いといて、いよいよ学園祭・一般公開の始まりである。

「よし、じゃあ客引き組ゴーゴー！で、昼から組は着替えて自由行動！解散！」

「……いや、それじゃあ俺ら着替える意味なかったんじゃ……？」

「最初に全員集合でメイド服も大集合、ってしときたかったんだよう！」

晃の言葉に思わず言い返す。

……開始前の今くらいしか全員集合、みたいな機会がなかったんだから仕方がないんだよー！

そんな私の言葉を聞いた晃は、なんとも言えない微妙な表情でこちらを見ているのでした。

☆ ☆ ☆

「昨日とはうって変わって、活気に溢れてるねえ」

「店系がちゃんと稼働してるからな、そりゃ活気も違うだろうよ」

晃と一緒に校内を歩くが、昨日のそれとは全然違って人の往来が凄いことになっている。

招待客だけとはいえ来賓は結構な数になるし、そもそも生徒達も全員が出し物に捕まっているわけでもないの、校内を行き交う人の群れは単純に昨日の倍以上だろう。……そりゃまあ、動きにくくもなるわというか。

行き交う人々は大体楽しそうにしているので、基本的にはこっちも楽しい気分になるんだけどね。

さて、そんな人まみれになっている校内を、私達がどこに向かって歩いているのかと言えば。

昨日鈴莉ちゃん達が言っていた、彼女達のクラスがやっている対戦朗読劇を、ちよつと覗きに向かっているのである。

……いや、どう考えても面白いことになるでしょうあれ。

ちつちやくて可愛い外見に騙され、軽率に結花ちゃんに挑んでそのまま地面に倒れ伏す挑戦者達の哀れな姿が超見えるもの、こんな見逃すわけにいくかいよ！

的なテンションで向かった彼女達のクラス。

……ってあれ？なんか騒がしくない？教室の前で生徒やら来賓の人やらが騒然としているような？

「……くっ、『どうしておばあさんはそんなにも大きな口を開けて、私を見ているの？』！」

『お前をずっと見ていたからだよ、お前が小さい時からずっと、私はお前を見続けていたんだ』

「口と目?! 噛み合って……いや! ずっと見てたから! 観察しながらずっと口を弧のように開き続けていたからこそ、口が大きくなったみたいなことですかこれ?!」

「……くっ、か、完敗北だ……」

「ははは、済まないね君達」

「な、なんかよくわかんないけど栞さんの勝ちっすー!!」

中を覗いてみると、白熱の朗読劇の結果膝をついたのは結花ちゃん
のほうだった。……いやマジで？みたいな思いで対戦相手を見れば、
そこに居たのはよく見知った顔。

「柳瀬先輩?!来てたんですか!?!」

「おや、東山くんか、こんにちは。それと、知ってるだろうけどはい、
うちの連れ添いの『ナンパ君』だ」

「あ、お久しぶりっす彼女さん。俺、『秋山^{あきやま}透^{とおる}』っす、宜しく」

「あ、これはどうもご丁寧に。……ん？秋山？」

結花ちゃんを下したのは、どうやら柳瀬先輩だったらしい。……な
んか赤ずきんのような何かをやったけど、なるほどあんな感じなの
か対戦朗読劇……。

それと、一緒に来ていたナンパ君……もとい、秋山さんがこちらに
挨拶をしてきたのだけれど。……いや、秋山って言ったこの人？

「この高校にはうちの妹が通ってるんすよ、関係者チケツト貰ったん
でちよつと見に来たんっす」

「僕はその付き添い。君達の高校なのは知ってたから、ちよつと冷や
かしの面もなくなないけどね、身も蓋もないことに」

疑念を確信に変えるようなことを言う秋山さんと、なんかちよつと
調子に乗ってる感のある柳瀬さん。

……うーん。これややこしいことになってきたな？

「まあ、今日は宜しくってことでお願いするよ。ところで君達は何を
やってるんだい？」

「……メイド喫茶ですけど、今先生と美玲さんで回してるんで、これか

ら行くつもりなら二人に迷惑をかけないであげてくださいね」

「おつと迷惑をかけること前提とは。……わかった、じゃあ君達の番の時に行くことにしよう」

「しまったやぶ蛇だった!？」

そしてここで明かされる衝撃の事実、密かに巻き込まれている先生がそこに居た!……大人の魅力たっぷりなロングスカートメイドさんですよぐへへへへ。

まあ、いつもの部活メンバー＋美玲さん＋先生＋あつきーで八人にするので、当番を二人組四サイクルにできるようになる、と言うのを理由に頼み込んだところがあるけど。

因みに勤務時間が全体で六時間、かつ休憩が合計で二時間になるように、各グループが順繰りに切り替わるようなシフトになっている。

今は先生と美玲さんが部室で接客中、あつきーと朱紅奈さんが中庭で客引き中だろう。……この分だと中庭には降りてないのだろうかこの二人？

「とりあえず、無料券も手に入れたから一つ高いものでも貰っておきたいねえ」

「ぐ、我が本領すみませんを發揮皆さん、初手がこれだとはできていれば……」

「気にしちゃダメだよ結花ちゃん、あれ通り雨とか通り嵐とかそういうのだからー!」

「……ん? おかしいな、なんで僕こんなにナチュラルにデイスられるんだろ?」

「いやー、大人げなさ過ぎる栞さんもすてつくへっ!？」

「喧しいぞ透、とりあえず東山くん以案内でもして貰おうしようし、身も蓋もないことに僕の傷心は君の部下のせいみたいなものだからねははは」

「……私よりよっぽど傍若無人ではこの人?」

思わず真顔になりながら、二人を迎え入れる。

……はてさて、ここからどこに行ったものやら。

☆ ☆ ☆

「なるほど射的、僕の敵ではないな！狙い撃つ！」

「鮮やか過ぎる早打ちで景品が吹っ飛んでいく!!」

「輪投げもこの通り、余裕さ余裕！」

「鮮やかなスリーポイントショットだと……!!?」

「ふはははは、金魚も浚ってしまおうか！」

「ポイが一切破れないぞこの人?!」

ふはははは、と高笑いしながらあちこちの屋台を荒らし回る柳瀬先輩。

……いや、キャラ違くて言うか、いつぞやかのクレーンゲームの時も思ってたけど、この人放っておくと全部持っていつちやうタイプの祭り荒らしだこれ!?

うおーっ！このままでは学生達の楽しい文化祭が破壊されてしま
うー!!

「柳瀬先輩っ!!りんご飴とか焼きそばとかどつすか！お腹空いたん
じゃないっすか！」

「んん？いやお昼は君達のところで取るから別に……」

「いやいやいや！うち軽食ホットサンドしか置いてないんで！どう考
えても足りないと思うんで!!ほら焼きそばですよりんご飴ですよク
レープですよっ!!」

「お、おうっ!?あ、ありがとう東山くん」

仕方がないので私財を擲ってとにかく食べ物をトストストス！

奴を自由にさせるな、とにかく足止めするんだ!……みたいな感じ
でほしい食料を買い与える。ほれ秋山さんも、手伝って手伝って!

「楽しい文化祭を守る為……くっ！その熱意に感動したっす！こんなれば不肖秋山透、当たって砕けるっす！」

「あ、秋山さーん!？」

「うおーっ！葉さん、あーんっ!!」

「は、はあっ?!いきなり何を言ってるんだ君は!？」

「葉さんが！あーんするまで！自分は！チョコバナナを差し出すのを止めないっ!!!」

「なんでよりによってチョコバナナなんか持ってきてるんだ君はっ!？」

お、おおー！やったぞー！秋山さんの自爆ムーブで柳瀬先輩を押し留めることに成功した！……なんか代わりに秋山さんがヘンタイの汚名を賜ってる気がするけど、そんなの誤差だよ誤差！

頑張れ秋山さん！負けるな秋山さん！貴方の頑張りが、うちの学校を救うんだ!!……みたいな感じで後ろから応援をすると、秋山さんがさらに燃え上がっていた。

「うおーっ！負けられない戦いがあるっすよーっ!!俺、葉さんのビキニ姿が見たーいっ!!」

「ぶふうっ!!? ななななんてことを公衆の面前で口走ってるんだ君は!?! というか東山くんも!!煽るの止めてくれ!ここぞとばかりに君が一転攻勢にでてるのは、身も蓋もなくバレバレなんだぞ?!」

「おっとバレてた。だが私は止めない負けられない曲げられない！オペレーション・フォーリンとりあえず彼氏を編れ作戦ダーリンはまだ始まったばかりなのだからー!」

「……なんだこの状況、地獄か?」

わーぎやー言いながらあちこち転戦する私達。

後ろから冷ややかな晁の視線が刺さってたけど誤差……誤差にできてない気がするけど今は無視だ、全ての責任は後で先生が取る!……なんで?!って聞こえた気がするけど気にしなーい。

そんなこんなで、どうにか文化祭を守りきった私達は、連れだって
部室に向かうのです。

祭りは続き、人々は笑う

「はい、そろそろ交代の時間なので行きましようか柳瀬先輩」

「……ふむ？なるほどなるほど。つまりこれから、東山君が最高のおもてなしを僕達に見せてくれる、と言うわけだね？」

「……そうですけど、なんというかアレな言い方ですね柳瀬先輩」

散々文化祭を荒らし回ろうとした柳瀬さんを、どうにか阻止しきつた私達は、そろそろ交代の時間となっていたので一路、三階の部室へと歩を進めていた。

その道中、二人と会話をしていたのだが……なんというか、遠慮がなくなつた感じだなあ今日の柳瀬先輩、なんて思う私。

そんなこちらの考えに気付いたのか、彼女は薄く笑みを浮かべながら答えを告げる。

「まあ、寝食を共にもしたしね。今更変に遠慮するのもアレだろう、というやつだよ」

「それにしたってちよつとは遠慮して貰いたい気もするんですけど……まあ、柳瀬さんがそれでいいなら、こつちとしても別に構いませんよ」

彼女の言葉に、確かにと小さく頷く。

変に遠慮されるのがアレ、というのは確かについて感じだしねえ。

そんなことを話ながら、到着した我が部室。……見たところ客の入りはそれなり、と言った感じだろうか。

「……ふう。さて次は……つと、桐依さんが居るといふことは、もう交代の時間ですね？」

「そつ、お疲れ様美玲さん。着替えてくるんで、ちよつと待っててねー」

「はい、お待ちしておりますわね。……とところで、そちらの方は？」

「おや、そちらとは初めましてかな？僕は……」

後ろで挨拶を始めた柳瀬さんと美玲さんを置いて、晃と共に物置のほうへ。彼専用で作られた、着替え用の囲いに晃が入るのを見届けて、私もさつさと着替える。

姿見の前で服によれやシワがないかを確認してよしと頷くと、晃もちようど着替えを終えたみたいだったのでこちらも確認したのち、二人で外へ。

「……ん、これはまた中々、二人とも似合ってるじゃないか」

「彼氏さんのほうはなんで毎回俺の好みを突いてくるんすか……」

「……秋山さんやっぱりちよつとアレですね？」

「うえ!?聞かれてたつすか?!」

「すみません、注文は桐依のほうにお願いします」

「露骨に避けられてる!」

「はいはい、和風メイドも素晴らしいってのは確かですが、これうちのなんでお手付き厳禁でお願いしまーす」

「彼女さんまで?!ご、誤解!誤解つすよ!!」

先輩達の前に出ると、中々の高評価。

……秋山さんは高評価を通り越してる言葉が漏れてた気がしたけど。やっぱりこの人ちよつとアレだな？

すすす、と私の後ろに隠れる晃を庇うように更に背中に隠しつつ、営業スマイルを浮かべる私に、秋山さんは悲鳴染みた弁明を行うけど……。

「あー、客引き終わりー。つかれたー……って、栞さんっ!?つてことは兄ちゃん!」

「うえっ!?昴がなんでここに?!つす!」

案の定な関係だったあつきーが客引きから戻ってきたことで、全て

うやむやになるのであった。

☆ ☆ ☆

「ふうん、秋山さんとあの人が兄妹だったなんてね。……言われて見ると、なんとなく雰囲気似てるわね」

「そうだねー」

私としては原作で兄とか居たかなってちよつと考えちゃうんだけど。……なんて言葉は口に出さず、帰ってきていた朱紅奈さんの言葉に頷く私。

私達の視界の先では、休憩時間になったあつきーと秋山さんが、席に座ってあれこれと会話をする姿があった。

「そりやまあ、来てもいいとは言ったけど、そんなピンポイントにここに来るとかある？しかも、兄ちゃんってばきりえん達をナンパしたところあるってことだよな？栞さんとの馴れ初めでそんなこと言ってたし」

「あ、あははははは、も、黙秘権を使わせて欲しいつす……」

「そうそう、彼僕と付き合う前はとかく数を稼いでその分玉碎していたらしいからね。しかも、あの二人に関しては堀ノ内君の方に熱を上げていたらしいというのだから驚きだよな」

「……なんですとー!?!」

「ぎゃあ?!なんでバラすんすか栞さんっ!!?!」

……結局うやむやになってないでやんの。

てんやわんやとあれこれ言われまくっている秋山さんだが、ちよつと今回の一件に関しては、私もフォローのしようがないのでそのまま責められ続けてください。

そもそも好きでしょ、そういうの。……なんか、違うつすよ!つて聞こえた気がするけど気のせいだな、うん。

そのまま店の運営に移行。

ホットサンドとチュロスと後は飲み物を淹れるくらいのシンプルな業務だけど、それでもまあ客商売は客商売なので慎重に。

二人が頼んでたのはそれぞれ一品ずつとミルクティだったので、飲み物を晁に任せてチュロスを揚げつつ、ホットサンドメーカーに食パンとチーズとハムとレタスを投入。蓋を閉めてしばらく放置。

揚げたチュロスの油を切って、皿に盛り付けたのち上からシナモンシュガーとメープルシロップを重ねないようにたつぷりと掛けて、一品完成。

そうこうしている内にホットサンドもいい感じに焼きあがったのでこつちも皿に盛り付け、出来上がったモノを未だにアーだこーだと騒いでいる二人の前のテーブルに持っていく。

「はい、お待たせしましたお客様、ご注文のホットサンドとチュロスでございます。……ホットサンド側、ケチャップで文字でも書きまじょうか?」

「お、何を書くのかちよつと興味があるね、お願いしても?」

「はいはい少々失礼」

メイド喫茶と言えばオムライスなんていうけれど、あれどこが発祥なんだろうね? 萌え萌えきゅーんとか死語でしょ確実に。……え、まだやってる店もあるんです? マジか、凄いなメイド喫茶。なんて感じで文字をかきかき。

「はい、こんな感じでいかがでしょう?」

「……いや、リアル心臓ハートを書かれてもどうすればいいのかわからないんだけど、身も蓋もないことに」

柳瀬さんの反応がちよつと面白い。

私が書いたのは、幾らか簡略化はしたもののリアルのほうのハートである。

……この日のために地味に練習してたので、披露できてとても満足です。流石に親しい人相手じゃないと中々やれないしねー。

「いや、まあ、いいんだけどさ……」

「このチュロスうまいっふね!」

「バカっ!! 食べながら喋らないでよ兄ちゃん!!」

「はべえっ?! い、妹からも扱いが雑に……っ」

「いや、身も蓋もないことを言わせて貰えば前からそんな感じだったろう、君の扱いは」

「そんなバカな!? つす!」

うーんこの。

柳瀬さんも結構アレだけど、秋山さんのなんとも言えなさをもっとアレだな、と頷く。

苦労してそうだなあつきー……なんて思っていたら、なんだかちよつと兄をべしべししてるのが楽しそうなような。

「……あつきー」

「ひゃっ!? な、ななななにきりえん?!」

私は彼女の肩を叩いて、サムズアップと共に一つの言葉を送った。

「禁断の恋なら、すっごい応援するぜ!」

「なんかすごい勘違いされてる!?!」

☆ ☆ ☆

「むう、違ったか。なんとなくラブの気配がしたような気がしたんだけどなあ?」

「お前のそういうセンサーは、あんまりあてにならない気がするんだが」

「にやにおう、少年漫画も少女漫画も共に愛していた私が、ラブの香りを間違えるわけないだろ同胞！」

「自分の経験でもないものが経験値になるかバカ」

「なんだとー！」

柳瀬さん一行が食事を終えて去っていったから、大体三十分くらい。店の入りはまあまあ、と言った感じ。

たまに写真を撮りたがる人が居るからそれを受けたりしているものの、それ以外は特に忙しくもなく、普通に調理して普通に接客して……といった風に、極端に忙しいわけでも暇なわけでもなく、充実したメイドライフを送っている感じはあった。

「あ、ホントに姉ちゃんだ」

「……ん？つて翔^{かける}、来てたんだね？」

「母さんと一緒に来たんだよー」

そんな風にチュロスを揚げたりしていると、入り口から聞いたことのある声。

視線を向ければ、そこに居たのはうちの弟だった。その後ろではお母さんがひらひらと手を振っている。

……お母さんが来るのは知ってたけど、弟も一緒に来るのはちよつと予想外かなー？なんて思いながら二人を席にご案内。

メニユーは決まってるので弟にはホットサンドを、お母さんにはチュロスをおススメしておく。……想定通り、二人がそれらを頼んだのを聞いて準備に取り掛かる。

「それにしても……晁君、その服似合ってるわねー」

「はあ、どうも。自分ではそういうのよくわかんないんで、そう言っただけで貰えると助かります」

「……兄ちゃん似合いますすぎじゃね？」

「そうか？なんかちよつと恥ずかしいな」

「……………」

……ん？

私が調理中なので晃が接客してくれてるんだけど、なんか不穏な空気が漂ってない？ 具体的には、弟の性癖がねじ曲がり始めてない？

私の視線の先では、自身の服装を褒められてちよつと照れたようにターンをしたりして見せてる（正確には自分の姿を確かめるために、ちよつと背中を見ようとして体を捻ってるって感じだろうけど）晃の姿を、放心したように見詰める弟の姿。

……いや母！ 晃褒めるのはいいんだけど！ 弟を見てやって！

ちよつとヤバイ扉を開きそうになってる気がする！ 確かに和風メイドな晃は可愛いけど！ 見惚れるのは止めよう！ そもそもそれ私のだ！

みたいな念を込めて三人を見詰める私。

……気付いた母が晃に手を振ると、彼はそのまま飲み物を淹れる為に後ろに下がっていった。……代わりに、準備の終わった私が皿を持って二人に近付いていく。

「お母さん、子供の情操教育はしつかりしようよ……」

「あら、好きになるのに別に理由とかは制限とか必要なくない？」

「……私を見ながら言うのは止めて、反論できなくなる」

中身とか抜かしても、幼馴染みに女装させて喜んでる奴になってしまうので、なんも言い返せなくなるんだ私は、私を基準にするのは止めるんだ母よ。

みたいなことを言い合いつつ、そつと視線を弟に向ける。……相変わらず放心状態である。大丈夫かこの弟……。

「はい、(´)注文の紅茶ですよ……ってなにしてんだ桐依？」

「弟の中から不埒な感情を払おうとしてるところ」

わしやわしやと頭を撫でることで煩惱を振り払おうとする私と、
やーめーろーよーと流石に嫌がっている弟の熱きバトル。……こん
な下らないバトルなぞしとうなかつたぞ私は……。

祭りは終わり、灰が残る

「さーて弟よ、邪な気分は晴れたかなー？」

「晴れる前に世界がぐわんぐわんだよー」

はてさて、煩惱退散のためにちよつと多めにわしゃわしゃと振り回していたら、やり過ぎたのか目を回している弟の姿がそこに。

……だが私は謝らないぞ、だって弟が晃に見惚れる、とかいうトンでも行動を晒すからこうなったんだし。

「はいはい、大丈夫か翔」

「に、兄ちゃん……！」

「だから甘やかしちゃダメだってば！そうやって甘やかすとまーた見惚れるんだからー！」

「いや、何言ってるんだお前？」

そうして弟を見ていたら、横から手を伸ばして翔の頭を撫でる晃が。……だーかーらー!!そーいうのよくないって今言ってたんですけどー!!?

そう言いながら詰め寄ってみるけど、当の晃は困惑顔。

……ぬう、今の自分がなにをやっているのかわかってない様子。

そういう行動が、いたいけな少年少女達の性癖を歪めちまう……つてのが分からのかこの幼馴染み?!

「とーにーかーくー! 晃は翔に触るの禁止ー!」

「はあ？」

「姉ちゃんおーぼーすぎるよー!」

「だまらっしやい!これはアンタのためでもあるの!」

「あらあらまあまあ」

母が微笑ましげに私達を見ているけれど、今の私には関係ない。と

りあえずこの無自覚男をどうにかせねばならぬのだ私は……！

謎の使命感に燃える私と、わけがわからないと困惑しきりの晃。間に挟まれた翔がくらくらして、横で母がうふふと笑う。

「……………これは、どういう状況なのです？」

そんな意味不明な状況は、交代時間になったので部室に戻ってきた鈴莉ちゃんに、なにやってるんですかと声をかけられるまで続いたのです。

☆ ☆ ☆

「うーむ、お昼を過ぎてるから人通りなんて少なくなるかなと思ってたんだけど、意外と人の波は多いままだねえ」

「そうだな」

鈴莉ちゃんと交代した私達は、今度は中庭に降りて客引きをしているわけなのだけど。……時刻は大体三時くらい、人の入りもそろそろ減ってきてもおおかしくないと思っていたのだけど、これがなかなか。

「流石にピーク時に比べれば減ってるんだろうけどな」

「それでも結構な人だよねえ。……あ、メイド喫茶やってます」

中庭を通る人に看板を見せて、笑顔で案内するだけの簡単なお仕事……のはずなんだけど。

店のほうでもそうだったけど、意外と写真と一緒に撮りたい、って人が多いので、案内だけで済まないというか。

まあ何にも知らない状態で目の前にメイドさんが居たら、私も写真撮らせて下さいって頼んでただろうし、特別文句とかはないんですけど。

「実際笑顔だもんな、お前」

「キリツとしたメイドさんもいいけど、写真撮るならやつぱり笑っておくのがいいと私は思います」

本日何度目かの写真撮影のお願いを受けながら、カメラに向かって微笑む。……うむ、今の笑みは不自然じゃない、いい感じの笑みだったんじゃないかな？

男女のカップルらしい人に手を振って、元の場所に戻る。

……中庭での客引きはわりと厳正に使っていい場所が決められているので、長時間離れていると風紀委員からの指導が入るのだ、なのでちゃんと定位置に撤退撤退。

「はいはい、客引きをナンパか何かと勘違いしてませんか？野球部は一時間客引き禁止です」

「そんな殺生な!? っていうか一時間ってほぼ終わりじゃんか!？」

「恨み言は聞きますせん、ルールを守れないモノには鉄槌あるのみです」

「ぐわあーっ!!？」

「……野球部が死んだな」

「あそこはいつも通りだねえ」

なんて感じに指導の話をしていたら、都合よく例を示すかのように野球部が撃沈していた。……あそこはすーぐ調子に乗るからなあ、自業自得というか。

……ってん？なんでこっちに向かってくるんです風紀委員さん？

「文芸部も、人気なのはわかっていますので、さっさと人波を捌いて下さいねー」

「へ?……あ」

野球部のほうを見ていたから気付かなかったけど、いつの間にか写真希望の人が並んでいた。……いや、別に私らコスプレ撮影のためにここに居るのではないんですけどねえ……？

午前の間もこんな感じだったのだろうかと思いつつ、写真を撮って案内をして、を繰り返す私達。

そうこうしているうちに、人足も次第に減っていき――。

「……お、終了放送」

「ってことはこれで終わりかあ。……なんか最後のほうずっと写真撮ってたような気がするよ私……」

「帰る前に記念に一枚、って感じだったもんな」

校内に響く文化祭終了の放送に、小さく息を吐いて看板を下ろす。……向こうがどうなっているかはわからないけど、大きなトラブルもなく文化祭を終える事ができたのは、とても喜ばしいことだと言えるだろう。

校内に残った僅かなお客さん達も、ぱらぱらと校門から外に出ていっている。

「これから撤収作業して、そのあと後夜祭か」

「おっとそーいやそーうだった。一応まだ終わりじゃないんだっけか」

流石にちよつと疲れたな、なんて思っていたのだけど。

そういえばまだ完全に終わったわけではない、ってことを晁の言で思い出して、改めて気合いを入れ直す。

祭は片付けまで含む、というやつである。さて、もう一踏ん張りといきますか！

☆ ☆ ☆

「へーいお疲れさまー！」

「おお、あつきーもお疲れさま。いや、色々ありがとね」
「いや、楽しかったしいいよいいよ」

部室の片付けをしていると、あつきーがどーん、って感じに室内に飛び込んできた。軽く挨拶を返しながら、机やら椅子やらを通常の配置に戻していく。

……ふむ、これはもう倉庫に置いといたほうがいいか。
それと花瓶類は纏めて借りたところに返しに行くとして……、なんて感じに片付けをしていたんだけど。

「……………」

(……なんか、めっちゃ見られてる)

背中の方になーんか熱い視線を感じるんだよなあ……？
いや、なんでそんな熱線がでそうなくらいにこっちに視線を送ってきてるんですこの子？

とは思うものの、なにかを言い出そうとするでもなく単に見詰められているだけなので、こっちもなにかを言うって感じにできないでいるというか……。

「おーい、これどうするっ…」

「おっと同胞。それはまだ使うだろうから置いといて。……それと、あつきーに何か仕事振り分けてあげて、暇そうだから」
「にやつ!!?」

「猫?……いやまあ、みんなの分のメイド服のクリーニングとかあるから、それを持っていく手伝いとかでもいいか?」

「おおおおつけー!暇そうだもんね私!手伝う手伝う!」
「……あ、いや、そっちじゃなくてこっち」

「ぎゃあつ!!?ごごごめんねほりっちー!」

(……なんだろうこの面白い生き物)

運良く晁が戻ってきたので、彼の手伝い役としてあつきーをトス！
……いきなり声を掛けられたあつきーが盛大にバグってたけど。なんだこの面白い動き。

私が見る前で、あつきーはあつちでどかーん、こつちでぼかーん、と言った感じで盛大に慌てまくっている。……なにかを言おうとしてたけど、それを口に出す前に私が他のこと頼んじやったから処理がバグったのかな？

ならまあ、あとであつきーの為に時間を取ってあげることになしよう。それはそれとして、

「そろそろ時間だし、一回荷物は置いてグラウンド行く？」

「……ん？おっと、フォークダンスの時間か」

「うええもうそんな時間なの?!マジで!」

時刻が七時を回っているので、そろそろ後夜祭の開始時間である。それを伝えたあとの二人の様子はまさに対極、なんというかもうちよつと落ち着きなよあつきー、という感想しかでてこないぞこれ？

「ま、とりあえず降りよう、みんな集まってるだろうし」

二人を促して、部室を出る。周囲には、私達と同じようにグラウンドに向かっているのだろう生徒達の姿が、チラホラとあった。……ふむ、みんな意外と片付けだらだらしてるんだねえ。

「それだけ、ってことも無いんじゃないか？」

「おっと同胞、そういうのはいいっこ無しだぜ？」

「え、なに？なんのこと？」

「ええ、あつきーならすぐに思い至るかと思ってたんだけど」

「え?……あ、ああ!そういうこと!?!もしかしてそういうこと!?!」

「そういうことしてる奴等が驚くから止めてやれ……」

まあ、だらだらというか、もつと別なことしてるのも居るかもしれないけれど。……学校公認で夜の校舎に居座れるんだから、色々やろうとする人もまあ居ないこともないだろうねえ？

……あつきーならそのあたりすぐに気付きそうなものだけど、なんかテンパってるせいとか微妙にぼんこつである。あらやだ可愛い。

なんてことを喋りながら歩いていたら、いつの間にかグラウンドに着いていた。私達に気が付いた鈴莉ちゃん達が、走ってこつちに向かってくる。

「お疲れさまです先輩！その、片付けをお二人でやるのは大変だったりしませんでしたか？」

「……任せてしまつて、ごめんなさい」

「いやいや、別に大丈夫だよ。そつちこそ、クラスの片付けは終わったの？」

「お陰さまで、順調に終わりました！」

「……いえーい」

近付いてきた二人から飛び出した謝罪の言葉に大丈夫だったよと返す。

……こつちはクラスでやっていたのが展示だったから片付けとかは無かったし、手が空いてる人間に任せるのは別に悪いことではない。なので逆に二人のクラスは大丈夫だったのかを聞いたのだけど、特に問題はなかったようだ。

鈴莉ちゃんと結花ちゃんの頭を撫でつつ会話を楽しんでいると、買い出しに行っていた朱紅奈さんと美玲さんが戻ってきた。

「片付けは終わった？」

「もうちよつとかなー。そつちの買い出しは？」

「飲み物も食べ物もしつかりと。……ですが、本当に宜しかったのですか？私達生徒会も打ち上げに参加させて貰えるだなんて」

「いやいや、参加しないほうが嘘でしょ？美玲さん達が手伝ってくれ

てなかったらそもそも始まってすら無かったわけだし」

二人には売り上げの一部を使って打ち上げ用の食事の買い出しを頼んでいたのだけれど、いい感じに買ってきたみたいだ。

後夜祭が終わったら先生も誘って打ち上げである、そつちもまあ、楽しみは楽しみだ。

「……あ、音楽」

「ふむ、フォークダンスって踊りかたよくわかんないんだよねー。晁踊れる?」

「……いや、去年やつ……ああいや、なるほど。ああ、まあお前よりは踊れると思うぞ?」

「ほんとー?じゃアリード任せたー」

「……また下手くそな誘いかたというか」

「いいんですー、うちのなのでー」

音楽が始まったので、晁を誘って生徒達の輪の中へ。

……ふむ、なんというか恥ずかしいなこういうの。なんて思いながら彼を見れば。

「……私より楽しそうじゃない?」

「そうか?そうかもな」

あまりにも楽しそうに笑うものだから、こちらもつられて笑みを浮かべて。

薄暗い校内を篝火が照らす中、下手くそなステップを踏む私達なのだっただった。

四章 決戦はクリスマス 春は遠く、願いを忘れ人は笑う

……どうして。なんで。

疑問か、はたまた悲嘆か。……もしくは、そのどちらもか。
それを溢したのはいつだったか。

自分がそれを思ったのはいつで、それを願い、求めたのはいつだったか。

■殺してほしい。 ■愛してほしい。

どちらも等価で、どちらも必要で、どちらも ■自分達 ■は捨ててしまったもので。

だから、ずっと燻っている。胸の奥で、残り続けている。

なんでもないように、どうでもいいように、ずっと。

ああ—— ■気持ち悪い。

■自分 ■が ■幸せ ■になれ ■る ■わけ ■ない ■のに。

だから、早く。 ■俺 ■を、 ■殺して。 さっさと、 ■無にして下さい。

それだけが、それこそが、 ■俺 ■の願う全てなのだから——。

☆ ☆ ☆

「……むう」

——なんというか、イヤなものを見たような気がする。

飛び起きたりしたわけではないものの、寝汗やら何やらで最悪の気分を味わいながら、ベッドの上から半身を起こす。

聞かないでと溢したものを。——切り捨てるべき、私の最後の心残り。

それを改めて突き付けられたような心持ちに、思わず深くため息を吐いて。ベッドから降り、窓の近くまで歩み寄った。

からからと音を立てながら開いた窓の縁に腰を掛け、真つ暗な空を

眺める。

……月の光が柔らかく夜の帳を照らしている。

真夜中の空気は凜として、ほう、と吐き出す息が白く染まる。

このまま、夜の闇に落ちてしまえたら。

……なんてことを思っていたのは、いつのことだったか。

……いかなな、一人だともうにも考えが片寄って仕方ない。

小さくため息を吐いて、窓の縁から部屋の中へと戻る。

——後ろ髪を引かれたような気がしたけど、振り向くことだけはしなかった。

☆ ☆ ☆

「へい、おはよー晁。いやー、今日も朝からさっむいねえ」

「おう、おはよう。……なんつーか、あつという間に冬って感じだな」

「そうだねえ。もう十一月だし、そろそろこたつとかが恋しくなってくる感じだね。……部室に置けたりしないかな?」

「いや、流石にこたつは無理だろ、場所がねーよ……。素直にストーブにしとけて」

「いや、確か倉庫のほうに畳が何枚かあったはずだから、それを使えば部室の一面に、こたつゾーンを作ることには十分に可能はず……!」

「なんなんだよ、そのこたつへの熱いこだわりは……」

学校への道すがら、隣を歩く晁と他愛ない会話を重ねる。

慌ただしかった文化祭の日から、すでに一ヶ月とちよつと。

秋の過ぎしやすい空気はどうに過ぎ去って、街中はすでにクリスマス気分へと染まりつつあった。

……ちよつと前はハロウィンで大騒ぎしてたくせに、その次の日にはもうクリスマスに向けての準備が始まるとか、なんというか本当に節操のない国だな日本……。

「文化祭からハロウィン・クリスマス・正月・バレンタイン……ってな感じで、年末から年始にかけてはとにかく忙しいもんな」

「師匠が走り回るから師走って言うけど、正直弟子も普通に走り回る忙しさだよね、実際は」

「ああ、弟子は弟子で試験とかあるからな」

「あつきーがまた死にかける、ってのだけは分かる」

「それは確かに。……また勉強会でもするか？」

「そうだねえ、あつきーに泣きつかれるのは、最早確定事項みたいなもんだしな」

年始を迎える前に、学生である私達には期末試験が待っている。

……それを思えば、師走というのは誰しもが忙しく走り回るものなのでは？なんて感想が思い浮かんできて、ちよつと苦笑してしまう。

そうして他愛のない話をしていたら、うっすらと吹いてくる寒い空気。

……身震いを感じて、マフラーを巻き直して耳を隠す。

私は耳が冷たいのが一番イヤなんだけど、そのために耳当てをするのは更にイヤ、と言うワガママ持ちである。

手袋は二重だし、ストッキングが校則でオツケーだから遠慮なく防寒用のやつ履いてるし……って感じで、寒さ対策を怠っているわけでは、決していないのだけど。

耳当てについては昔から——それこそ前世の時から使いたくない、という徹底ぶりである。なんなのだろうね、この謎のこだわり。

まあ、とにかくそんな感じなので。

おっきなマフラーで耳元まで覆い隠すのが、冬場の私のいつものスタイルだったりする。

……口元まで一緒に隠すから、吐いた息が持つ熱で内部も暖かくなる……というのは、わりといい感じなんじゃないかなって毎回思ったり。

「……あ、そだ」

「なんだいきなり……ん？」

そんな中、ふと思いついて右手の手袋を脱ぎ、晃に向けて差し出す。それを見た彼は、初めはその意味がわからない、といった感じに首を捻っていたが。

しばらくしてこちらの意図を理解したのか、小さく頷いて私の手に自分の手を重ねてくれた。

……ん、そうそう。寒いんだから手を繋ぐくらい普通普通、ってね。

ほんとうに

？

「……っ、」

「どうした？」

「……いんや？なんでもないなんでもない」

そうして繋いだ手を、気持ち強く握り直して、学校への道を急ぐ。

……抱いたモノは、表に出す必要性はない。

そのまま沈めて、忘れて、なかったことにしてしまえばいい。

「……おい、桐依」

「んー？どしたの晃？」

「……いや、なんでもない」

晃が訝しげにこちらを見てくるが、私がつこりと笑顔を返すと、彼はなんでもないと言い残して視線を前に向けた。

……ん、それでいい。

それでいいんだよ、■俺のことは、ほつといてくれていいんだ。それが一番、簡単に終わる。

——そのあとは、特に会話をすることもなく、普通に学校にたどり着いたのだった。

☆ ☆ ☆

「——桐依。貴方、堀ノ内君と何かあったの？」

「また不躰というか、どことなくふわつとしてるといいうか……そういう質問だね、朱紅奈さん」

「茶化さないでちょうだい」

休憩時間中に、購買で買ってきたゴーヤオレをちゅうちゅう吸っていたら、朱紅奈さんから突然詰め寄られた。

不機嫌そうな彼女からは、晁となにかあったのか、という質問が飛んできたんだけど。……別ににもなかったよ、としか私には答えられない。

実際、登校中に会話が弾まなかったなー、つてくらいのことしか起きたことはなかったわけだし。

そう伝えると、彼女はこちらを不審げに見詰め、一つ息を吐いた。

「……いえ、何かあったのは貴方のほうね？」

「ありや、鋭いね朱紅奈さん。——まあ、ちよつと夢見が悪かったから、変な対応してたかも知れないね」

「……夢見？」

「そ、変な悪夢に魘されてた、みたいなやつ。——そうは言っても所詮は悪夢だから、別に何がどうってわけでもないんだけどさ」

やけにしつこく聞いてくるので、素直に悪夢を見たことを答える。
まあ、悪夢と言っても大したものじゃないんで、そんなに気にして貰うような必要もないんだけど。

……みたいなことを伝えるも、彼女はなんとも微妙な色を、その綺麗な相貌に浮かべていたのだった。

……むう、これは信用されてないってやつだな？

「内容は？悪夢の」

「んー、起きた時にすっごい不快だったから、多分悪夢だーって思っただけで、正直詳しい内容とかは覚えてないんだよねー」

「……………本当に、大したことないのね?」

「いや、私そんなに無理してるように見えるの私?」

「……………いえ、私の勘違いだったかもしれないわね」

「ええ……………?今度は素直に引きすぎじゃない?どしたの朱紅奈さん?熱でもある?」

なので、ちゃんと詳細を話してみたのだけれど、今度はなんとも不完全燃焼感の溢れる結果になってしまった。

……………彼女、口では納得したみたいと言ってるけど、表情から本当は納得してないのが丸わかりである。

うーむ、ホントになんでもないんだけどなー。

——うん、なんでもないんだ。

「放っておけば消えるものに、意識を割くのは無駄なことだと思わない?」

「……………貴方」

おっと、なんか変なことでも口走っちゃったかな?

目の前の彼女がこちらを見る目が、猜疑心溢れるものになっていく。……………今、私が言った何かのせいだろうか。

「うん、これに関してはわりと真面目にほつといて。時間が解決するのは目に見えてるから」

「……………もしかして……………いえ、でも」

「いいから。気にしなくていいから。いつも通りでお願い」

「……………ノーコメントよ」

「うーん強情。ホントに気にしなくていいのに」

こちらの言葉に、彼女は肯定も否定も示さない。……………別に、彼女に

できることは何も無いと言うのに。

余計な苦勞を背負い込むのは、損する原因でしかないぞー？

……なんてちよっと茶化してみても、彼女の堅い表情は変わることなく。

結局、休み時間の終わりを告げる鐘の音が響くまで、彼女はその場から動くことはなかったのだった。

☆ ☆ ☆

「先輩の様子がおかしい？」

「そ。……うまく言えないけれど、ずれているとでも言うのかしら」

珍しく桐依の居ない部室の中で、刻遠野と栗花落が話をしていた。

……内容は、体調不良で先に家に帰った、我が部の部長である桐依について。

……ずれている、という刻遠野の感覚は正しい。

実際、俺も久しぶりにあの雰囲気を感じたため、どうしたものかと悩んでいたところだったのだ。

「むむむ？懐かしいとは、どういうことなのですか？」

「刻遠野のほうは、覚えがあるんだろ？」

「……ということは、やっぱりそうなのね」

「ええー、お二人だけで納得するのは無しですよー!？」

一人だけ話に付いていけない栗花落が騒いでいるのを、はいはいと宥めながら適当に相手していると、突然部室の扉が大きな音を立てて開かれ、俄に騒然とした部室の中に委員長が入って来た。

凄まじい剣幕を浮かべた彼女は、そのまま俺の前につかつかと歩いてきて、こちらを睨むように声を吐き出してくる。

「あれは、どういうことなの？」

「……桐依のことを言ってる、ってことでいいんだよね？」

「それ以外に何があると言うのですか!!あれでは、あれではまるで……!!」

「小学校の時の再来だ、そう言いたいよね？」

「刻遠野さん……?……いえ、貴方もあの時期の彼女と面識があると仰っていましたわね……」

……なんとも、重苦しい空気になってしまった。

三人ともが、何を話せばいいのかわからずに押し黙る。

話してどうにかなるものなのか、という思いが、口を開くことを躊躇わせる。

「だーかーらー!勝手に納得するなっ、ですよー!」

——だから。

何も知らない栗花落の言葉に、俺達は辛うじて再起動を果たすことができたのだった。

「……そうね。私達だけで納得していても、なんにもならない、か」

「気持ち之急ぎすぎていましたわね。……ありがとうございます。目の覚めるような一喝でした」

「え?は、はい?い、いや、なんのことやら全くなのですがー!」

「まあ、知らない人間だからこそ見えるものもあるだろう、ってだけの話だよ」

困惑する栗花落の頭を、三人で順繰りに撫でる。

……なんなのですかー?!とさらに困惑する彼女の様子に、思わず笑みがこぼれた。

皆が落ち着いた中、語るのはあの日の桐依についてのこと。

——もう出会うことはないと思っていた、死にたがりの彼の話だった。

思いは重く、その背に積もるように

「……なに？」

「いや、そんなやり方してて疲れないのか、お前」

初めて彼女に声を掛けた時の、そのなんとも言えない表情を、俺は今でも覚えている。

そんな生き方で疲れないのか、なんて拙い質問……拙い労りは、^{彼女}彼女にとっては一笑に伏す程度のものでしかなくて。

「疲れたからどうした、苦しいからどうした。どうせ、そんなものに意味なんてないんだ。……^俺私みたいなのに構う暇があるなら、君も自分のことを気に掛けたほうが、遥かに生産的だぞ」

こちらを突き放すような、労うような、そのどちらでもあって、そのどちらでもない無関心を投げつけられた俺は。

……何故だか、彼女から離れてはいけない……という気持ちに、強く包まれたのだった。

☆ ☆ ☆

「小学生時代の先輩、というと……」

「アイツが黒歴史扱いして、意図的に無かったことにしていた時期の話だ。……俺と、生徒会長。それと、一時期の刻遠野も関わったことがある」

部室の椅子に座り直した俺達は、桐依が今どうなっているのかを語るために、必要な前提知識を栗花落に説明しようとしていた。

——彼女が無かったことにした時期の話。今とは違う基準で、アイツが動いていた時代の話。

それは、彼女や俺達が小学生だった時にまで遡る。

「アイツ自身が演劇祭の時に言ってたように、自分を蔑ろにするような行動ばかりしていたんだよな、あの時期の桐依は。……端から見れば手の掛からない良い子だけど、実際は良い結果を出せれば自分への被害は一切考慮しない……みたいな、いわゆる無茶ばかりやる奴だった」

「他人への配慮が欠けていたわけではないというのが、また問題だったのよね」

「成績や普段の行動は模範的でしたから。……子供心に、なぜそんなに焦っているような、急いでいるような生き方をするのかと、不思議に思ってはいましたが」

「なる、ほご？」

昔を思い出ししみじみと語る俺達と、当時は関わりが無かったために、いまいち共感できずに頷くしかない栗花落。

……つてそうじゃなくて。昔話に花を咲かせるために話し始めたわけじゃないんだよ。

二人も懐かしんでなくていいから次々話していくぞ、と声を掛ける。

「そうですわね……男勝り、とはまた違いますわね。……無機質と言うほうが近い——そんな感じの方でしたわね、あの時の彼女は」

生徒会長の言葉と共に、俺達は古い記憶を掘り起こし始めるのだった。

★ ☆ ☆

——前世なんて覚えてないほうがいい。

生まれ変わって数年、私^俺が考え続けた結果たどり着いた真理だ。

巷に溢れている転生ものの物語では、前世の記憶を活かしてやれ無

双だ・やれ頭脳チートだ、みたいなものが多いみたいだけれど。

そんなもの、前世が最悪の——思い出したくもないような黒歴史じゃないからこそ選べるモノで、そうして思い出して活用できるような前世だった時点で、随分恵まれた生活をしてたんだなコイツら、と冷めた目でしか見られなかったものだ。

……まあ、後から『思い出したくもない部分は避けてしまえばいい』つということに気付いてからは、そこまでおかしな話でもないんだな……と思ひ直したんだけど。

まあ、折角前世のイヤなものから逃げ出せたと思つていたのに、こうしてまさかの二回目^{延長戦}を強要されたばかりの私^俺にとつて、そのことに気付くというのは、不可能に近いものでもあったわけで。

……イヤなものから離れられたことについては喜んだけど、同時に転生という自身に起きた不可思議な状況が、イヤなもの^俺の再来を■^暗■^喻しているようでもあつて、ずっとイラついていた——というのはあると思う。

一つの不思議を許容するのならば、あらゆる不思議は許容されるべきである。

……というのは、前世からの私の座右の銘、みたいなものでもあつたのだし。

そのお題目を掲げる以上は、不安の種はずつと小骨のように、喉の奥に刺さったままだった……というわけだ。

まあ、しょーもない自分語りは、一先ず置いておいて。

そんなひねくれものの私^俺が、小学校などという、精神の完熟していない子供達ばかりの環境に、馴染めるはずもなく。

基本的に同年代の子供達からは遠巻きに、先生達からは手が掛からないからと頼りに——みたいな扱いを受けていたわけである。

「……まあ、別にいいけど」

頼りにされていると言っても、実際は体よく雑用を押し付けられているだけのことでしかないし。

遠巻きにされていると言っても、なんだアイツ……みたいな、小さい敵愾心からのものだし。

どっちも結局のところ、マイナスの感情を向けられていることに変わりはないのだから、いちいち気を取られるのもバカらしい話だ。

……気にしていない、なんて風に冷めた目で見ている自分も含めて、全部がバカバカしい。

そんな、小学生の子供らしくない気持ちを裡に秘めたまま、日々を過ごしていた私^俺が、あの日彼女を助けたのは。

なんのことはない、『いじめはダメだ』という当たり前の行動を、ただ当たり前に実践した結果に過ぎなかったのだった。

「な、なんだよひがしやま……」

「聞こえなかった？ じゃあもう一回。——ダサイ、滅茶苦茶ダサイよアンタ達。それが通ると思っっているのなら、もう一度幼稚園からやり直してくればいいんじゃない？」

「な、なんだとおっ!？」

「や、やめとこうって。コイツこえーもん、さわんないほうがいいって」

「んぐ、……く、くそっ！ おぼえてろよー!」

「いやガキかよそのセリフ……いやガキだったわ、そういえば」

捨て台詞を吐きながら走り去って行く男子達に、思わず苦言を溢してしまおうが。

……よく考えてみたら、あーいうのが普通の小学生男子の反応か……と思ひ直して、なんとも言えない気分になってしまふ。

小さくため息を吐いて、後ろに振り返る。

そこに居たのは、腰まで伸びる金の髪と、涙目になった蒼い瞳。可愛らしい白いワンピースを着て、こちらを見つめる少女。

彼女は自身の目元を拭うと、大きく腰を折って、こちらに感謝を伝えてきた。

「あ、ありがとござマシター！このご恩、イツショー忘れマセン！」
「あ、ああ、うん。別に忘れてくれていいんだけど……」

な、なんかまた濃ゆい子だなこの娘。

多分ハーフかなんかなだろうな、とすぐさま理解できる微妙なカタコトの言葉遣いと、ちよつと……いやだいぶ大袈裟な台詞。……両親が祖父母あたりが、日本被れだったりする感じだろうかこれ？

そんなことをこつちが思ってるとは露知らず、彼女は両手に握り拳を作つて、こちらに鼻息荒く詰め寄ってくる。

「そうはイワナの焼きhowmatcch！受けたご恩は返さねバ、私の名が廃るデス！」

「いやいやわけわかんねー!?いいから、私なんか感謝とかしなくていいから！」

変な日本語と謎のテンションのせいで、こつちのペースまで乱されてくる!?こんな手に負えないので、踵を返して脱兎の如く逃げ出すぜ！

「オー!?待つてくだサーイ！せめて名前だけデモー!!」

「名乗るほどの者じゃないんで!!そんじゃ!!」

「ノー!?」

途中で何もないうところですよつ転んだのが見えたので、放置するのをちよつと躊躇しつつ、それでも現場からそそくさと逃げ出す私。

……暫く逃走するも、追ってくる影はなし。

安堵から思わず胸を撫で下ろして、そのまま教室に戻る私俺なのであった。

★ ★ ☆

「それで、ずっと付き纏われてるって？そりや名前を教えてやらないお前が悪いんじゃないか？」

「……うるさい堀ノ内。私俺に感謝とかそういうのいらぬから、全然いらぬから代わりにこの子持つてって」

「私、物じゃないデース!!いいからお名前プリーズデース!!」

「……完全に懐かれてるな」

「うるさーい!いいから連れてけこのクソ幼馴染み!!」

「わひゃあっ!?!」

「おっと。……大丈夫か？」

「だ、大丈夫、デス。……あ、行っちゃいまシタ……」

離れてはいけない、と決心をしてから、そう間を置かず。

いつの間にやら幼馴染みが、転校生に犬みたいに懐かっていた。

……口では邪魔、みたいな事を言い、実際にこうして突き放したりもしているけれど。

その癖、怪我とかはしないように最低限配慮してるあたり、人が良いのかなんなのか。

素直になれないというよりは、必死で壁を作っているだけにも思えて、どう対応したらいいのか、子供心に困っている俺である。

「うー、ナンでアンナニ頑なデスカー!?!」

「なんでだろうな。……詳しいことは聞いたことないから、俺もよくは知らないんだ」

うがーっ、といった感じに吠える転校生に、俺もわからない、と首をひねり返す。……あそこまで頑なに一匹狼を気取る理由があるのか、単なる幼馴染みでしかない俺には想像もつかない。

……なんてことを言ったら、今度は彼女のキラキラした目がこっちに向いていた。……い、いや、なんだ一体？

「オサナナジミ!それは聞いたコトアリマス!男女七歳にして床トコを

同じにしても構わぬ間柄トカ！」

「はあ?!」

思わず声を荒げてしまった。……いや、なんだその間違いまくったことわざ?!

そりやまあ幼馴染みは幼馴染みだが、そういう間柄ではないぞ?!

「エ、違うのデスカ? 私てつきり、日本はソーイウの進んでるとオモテマシタ」

「……いや、どこで覚えた知識か知らないけど、そんなの一部だよ一部」

幼馴染みが許嫁でうんぬんだとか、そんなのは一部のやつらだけの話だ。

誰でも彼でも、幼馴染みなら付き合ってる……とか、そんなことあるわけがない。

こちらの説明に不承不承と言った様子で頷く転校生に、思わず深いため息を吐く。……いや、なんで俺がこんなに慌てなきゃいけないんだこれ?

冷静に考えたらなんかムカついてきた。それもこれもアイツが転校生をこっちに投げてきたからだ。

「……とりあえず、転校生はアイツに名前を聞きたいんだよな?」

「ハイ?……エツト、そうデスネ。私はあの人に名前を聞いて、私の名前も教えテ、ソレデ、ソレデ……?」

「……いや、なんでそこで首をひねる?」

なので、転校生の手伝いをしてやろう!

……と思いついたのだけれど。当の転校生が首をひねって不思議そうにしているので、思わずこちらから尋ねてしまった。

彼女は首をひねったまま、こちらに視線を向けて。

「エエト、私、あの人に名前を教えテ、教えテ貰つテ、ソコからどうしたいンデシヨ―？」

「……………ええ？」

なんのためにそれをしたかかったのかわからない、なんて言われた俺は、思わず唾然とした声を返してしまうのだった。

人は集い、過去に思いを馳せ

「ウーン。お礼がシタイ、だけデハそこで終わりデース。もっと、色々思つてタはずなのデス」

「……つて言われても、それを理解できるのはお前自身でしかないからなあ」

教室で転校生から話を聞いてみる……。のだが、どうにも要領を得ない。

……名前を聞かせて欲しい、お礼がしたい、という部分で止まつていて、そこからどうしたいのかが想像できないのだそう。

そこまで決まつてるなら、友達になりたいとかそういう方向じゃないかと思うのだが。

「ナンか、こウ。うまく言えませンケド、ソコがゴールじゃないような気がするノデス」

「友達より先、ねえ……?」

そこまで来るともう、結婚したいとかそういう方向になるんじゃないかなろうか、そう言うのと転校生は顔を真っ赤にして、両手をぶんぶん振つて否定……。否定?し始めた。

「け、けけけけ結婚?!?そ、ソコまでは求めてナイデス!……たぶん」

「多分つてお前……」

暗に求めてるつて白状しているようなもんじゃねえか。

……いや、これはちよつと俺も先走り過ぎたか。だつてそこまで好意的なら、いちいち俺に相談なんてしないだろこいつ。

となると、やっぱり友達方向なんだろう、できれば単なる友達ではなく、親友とかになりたい……。的な?

「……そうなのでショウカ？よくわかりマセン」
「まあ、俺ら小学生だしなー」

正直色々言ってみただけど、あんまりよく分からんしな。
とりあえず俺はあの幼馴染みがちよつとは違う顔をするなら喜んで手伝うぞ、と転校生に約束するのだった。

★ ☆ ☆

「あの頃のアイツはとにかく刺々しかったからな」

「いや先輩？そこより遥かに衝撃的なものがありましたよね先輩?!」

一度語るのを止めて、乾いた喉を紅茶で潤す。

……のだが、栗花落がなにやら興奮しているのでそちらに視線を向ける。はて、彼女が驚くようなものが何かあっただろうか？

「いやいやいや!?驚きますよ驚かないほうが嘘でしょ!?なんなんですか朱紅奈さんあのキャラ!?!」

「……なんのこたかしらわたしはなにもしらないわ」

「動揺の余り棒読みになっていきますわね……」

「まあ、今の刻遠野からしてみれば黒歴史もいいところだからな」

典型的なカタコト外国人ムーブしてたとか、黒歴史を通り越して封印級ではなからうか。

まあ俺は本人ではないので、どれくらいダメージ受けているのかわからないわけだが。

二人を宥めるのと、間食のための休憩時間を取ることにして、一時解散。

俺がいつも通りに茶と菓子を持って戻ると、さすがに落ち着いたらしい二人がこちらに視線を向けてくる。

「……過去のことをわざわざ掘り起こしている以上、こうなるのはわかってたけど。……なんというか、キツイわね」

「キツさの意味が違うような気がしますけど……」

栗花落からの視線を避けるように、全然違う方向を見ている刻遠野の姿は、なんというかいつもの彼女らしくない雰囲気だが。

……元々はこっちのほうが素に近いというのも確かだったりするのが、なんというか時の流れというものを感じざるをえないというか。

「では、続きと行きましようか？」

「そうだな」

さつきが転校生との出会いだから、次は生徒会長との話……だろうか。

そのあたりは俺が語るより、本人が語るほうがいいだろう。

そう告げると彼女は確かに頷いて、静かに過去を語り始めるのだった。

★ ★ ☆

彼女を初めて見た時から、私はいつも言い様のない苛立ちを感じていました。

今思えば、それは彼女の瞳が誰も写していなかったから、なのでしようけど。

それに気付けるほど聡いわけでもない、ただの小学生でしかなかった私にとって。

彼女は単に、癪に障る相手でしか無かったのです。

「今度こそ……その面歪ませてやりますわ!!」

「へえー、そりや凄いや。でもそういう言葉遣いはよくないんじゃないかね？」

「やかましい！貴方相手に丁寧を心掛けたところでなんになるというのですか！」

「む、そりや確かに」

「……あーもう!!そういうのがムカつくんですわー!!」

表面上は余裕綽々、その実単にこつちを見ていないだけ。

そんな目がとにかく気に食わなくて、いつも何かしら理由を付けて、彼女に挑み掛かっていた当時の私。

今にして思えば、なんと幼稚な関わり方かと厚顔の至りではありませんが。……そんな関わり方しか選べなかったのも、また事実だったのです。

「で？今回はなんの勝負？」

「ふっふっふっ、これですわー!!」

「……ふむ、オセロ？」

前はテストの点数、その一つ前はトランプ、さらにその一つ前はかけっこ……。

そんな感じで重ねてきた彼女との勝負。

……それら全てで負け越して来た私が今回選んだのは、ボードゲームであるオセロ。

その時は確か、家族と対戦をしてある程度腕を磨いてから、彼女に勝負を挑んだはず。

無論、練習をしてきたからといって勝てるわけでもないのは、賢明な皆様方であれば直ぐに察しが付くでしょうが。

あの頃の私に——それも、彼女が関わりと殊更熱くなってぽんこつと化する私に、まともな判断ができるはずもなく。

意気揚々と勝ちを確信して挑んだ私は、それはもうモノの見事な大敗を喫したわけです。

「ま、負けましたわ?か、勝てると思ったのに、ぶ、無様に負けを、重ねましたわ?!」

「……………」

負けの理由が分からずに困惑する私と、対面の席で仏頂面を浮かべている彼女。

負けた私が困惑するのはわかりますが、勝ったはずの彼女が——それも、盤面のほとんどを白に染めた彼女がそんな顔をしていることに、当時の私は「バカにされている」と感じ。

「なんで、なんで貴方がそのような顔をするのですか!!私を笑っているのですか!?!何度も無様に負けている私のことを!」

なんて、今にしてみれば何を言っているんだ、と呆れてしまうようなことを彼女へと涙ながらに問い詰めたのです。

そして、それを受けた彼女は。

「…………いや、今のは惜しかった」

「…………私を、バカにしているのですね!?!」

「いや、そうじゃ…………ああ、うん。それでいいやもう」

小さく、こちらへの言葉を述べる彼女と。

それがこちらへの賛辞のようなモノだったことに、遠回しにこちらを貶めているのだと受け取った私。

彼女は何かを言おうとして、けれど諦めたように言葉を置いて。席を立ち、どこかへと去って行ってしまいました。

…………そして、私は。

ますます頑なに、彼女を打ち負かして見せようと躍起になっていくのですが——それはまた、別の話ですわね。

★ ☆ ☆

「うわあ」

「……なんですよその反応」

語り終えた生徒会長に対して、栗花落がまたなんとも言えない表情を向けている。

まあ、言いたいことは分からなくもない。……うん、過去の生徒会長、大概口というか性格というかがキツイ。

今の彼女は礼儀正しい人物だが、昔の彼女は言葉の荒いお嬢様擬き、みたいな感じだ。

とはいえ。刻遠野と違い、彼女は過去を忘れたりはしていない。……寧ろ、忘れられないままずっと過ごしていた人物である。

「それはそれで、色々と問題があったのも確かですけどね。……演劇祭の終わりを迎えるまで、彼女に挑み続けたというのは確かなのですから」

「ずっとそのあたりの対応をさせられてた俺は、このことに関しては文句を言ってもいいと思う」

「そ、その節に関しては、後に正式に謝罪を申し入れたではありませんか……っ」

演劇祭の時以外も、あれこれと桐依の様子を伝えるはめになっていたので、彼女に対してはわりと借りまみれな俺である。

……いや、借りがあるからってなんだ、と言われればそれまでなのだが。

「……いや、なんというか。……今のところ先輩方の過去の汚点しか見えてこないのですが?」

「そりゃまあ、小学生時代のことを黒歴史扱いしてた筆頭は桐依だけど、他の奴らも大概あの時期はやらかしてるもんだからな。……その

やらかしが小学生らしいものか、って聞かれるとなんとも言えないけども」

「なるほど？つまりある意味、皆さんの過去話に含まれない私は勝ち組めいていると？」

「……いやまあ、そういう風に見ることもできるだろうけど。……それで嬉しいのかお前？」

「嬉しくないです！ずっと聞き手側なの正直つまらないです！」

「だろいな……」

私もなにかこういい感じの過去とか語りたいです！

……なんてことを言い始めた栗花落にケーキを与えて宥めつつ、残り二人に視線を向ける。

うん、なんかすごいいたたまれない空気になっている。……栗花落に黒歴史認定されたのがそんなに堪えたのか……。

「いや、ね？……改めてあの時期の自分を見つめ直してみると、こう、ね？」

「私も、朱紅奈さんとはまたニュアンスが違うのでしようけれど、過去の自分を思うと胸というか喉というかが熱く苦いものに満たされるというか……」

「いや本気で凹んでるじゃねえかお前ら、落ち着いて菓子でも食え、な？」

冗談混じりに聞いたら本気で凹んでいた。

……気分が落ち込んでいる時は甘いものを食べる、という感じに彼女達にも栗花落に与えたものと同じケーキを出しておく。

なんてことをしていたら部室内に居なかつた残り三人、先生と在原、秋山が部室内に入ってくる。

「あれ？きりえん居ないんだ……っていうか、なにこのお通夜ムード、どしたしすつべー、みれれん」

「……今は、その能天気さが癒しですわね」

「そうね、ちよつと気を抜きたい気分だったから、彼女のテンションはありがたいものがあるわね」

「うえ?!これ褒められてるの?!バカにされてるのほりっち!」

「いや、これは褒めて……いや生徒会長、そこで死ぬな、台詞が引つ掛かったのはわかるけども」

「わ、私の骨は、できれば海に撒いて頂ければ……」

「会長さんが死を覚悟したような事をなんだ、戦争でも起きたというのか!」

「……えつと……ごめんなさいね……?ちよつと……タイミング間違えたみたい……」

先生の謝罪に、思わず苦笑する。

アイツが居ないと空気が暗くなるから、こうして空元気でも出せるのならまだいい方だろう。

俺は後から来た三人を椅子に座らせると、新しく彼等の分の飲み物を用意する為に席を立つのだった。

不穩は足並みを揃え、その時を待ち

「なるほど……あの子がまた……」

またって何度かあったんですか
「ふむ？師は何を知り隠す？」

在原の言葉に、先生が遠い目をする。

……俺はあくまでも幼馴染みでしかないので、親戚である彼女のほうが詳しいこともあるのかもしれない。

……まあ、みんなが語ることは最終的に一つの事件に収束するのだろうか。

それ以外の部分に関しては、あの頃はまだ高校生だった彼女のほうが、細かい部分についてはよく知っているのだろう。……親元を離れ、桐依の家に下宿していたと聞くし。

「……そうね……今のあの子になる前の……彼……意地っ張りの彼と……一番よく話していたのは……私かも知れないわ……」

昔を懐かしむように、はたまた惜しむように。

彼女はゆつくりと、自身の知る彼について語り始めたのだった。

★ ★ ★

——自分に自信がない、なんて悩みを抱える人は五万といるだろう。

できることがわからない。やるべきことがわからない。

したいことがわからない。するべきことがわからない。

目標がない、目的がない、理想がない、理念がない。

能力がない、時間がない、お金がない、意味がない。

色んな重りを背負って、色んなしがらみに縛られて。

そうして生きていくのが人生なんだよ、なんて。

そんなおぞましいことを言われているような気分になりながら、ど

うにかしてそこから這い出そうとしていた高校二年の春。

親から急な転勤の話が出たのは、そんな憂鬱な日々をこれからも過ごすのか……なんて、思春期特有の思考から勝手に悩み続けて、寝不足になっていた朝のことだった。

「いや、転勤？私は、どうすれば……？」

「んー、私達と一緒に付いてきてもいいけど……今度行くの、青森のほうだから。だいぶ遠いし、アンタも高校生なんだし、この際下宿とかしてもいいんじゃないかって思うのよね」

「げ、下宿？い、いやだよ？私知らない人達となんか暮らせないよ……？」

こちらの困惑を感じ取った母が、「なーに言ってるのよ」と無責任に笑う。……私が対人恐怖症気味なのを知りながらこの反応、仲が悪かったら縁を切っけていてもおかしくなかったと今でも思う。

けれどまあ、母も無責任に言葉を発した訳ではなくて。

「ほら、お父さんの妹さんの家、ここから近いでしょ？転勤するって話をしたら、もし必要なら都乃葉ちゃんを預かりますよ、って言うてくれてね」

「叔母さんが？」

母が口にしたのは、比較的近い位置に住まう親戚が、自分を下宿先として受け入れてもいいと言っているという話だった。

叔母さんに関しては、何度か正月なんかには祖母の家に帰った時に顔合わせをしている。

おおらかで、細かいことを気にしない、のほほんとした人だった。

「最近はお子さんができたからって忙しそうにしてたけど、その子も小学生になったから余裕ができたし、一人っ子だから遊び相手も欲しいし、みたいな感じらしくてね。アンタが問題ないなら、直ぐにでも

来て欲しいみたいなき感じだったわよっ。」

「え、ええっ？その子、手が掛かる子なの……っ？」

直ぐにでも来て欲しい、だなんて。

それ、その子がとんでもない問題児で面倒をみて欲しい、みたいなことなんじゃ。……そんな心配をしてしまう私に、母は「そうじゃないわよ」と豪快に笑う。

「そう、なの？」

「静かで大人しくて、よく家の手伝いもしてくれるいい子なんだって。

……ただ」

「ただ？」

もったいぶって言葉をためる母と、何を言うつもりなのかと次第に不安になる私。

そうして母は、その子がどういう子なのかを端的に示す、決定的な言葉を口にするのだった。

——その子、手が掛からなさすぎるみたいなんだけどね、と。

★ ★ ★

結局、高校でできた数少ない友達と別れるというのも、住み慣れたこの街から離れるのも許容できなかった私は、親戚の叔母さんの申し入れを受け入れることにした。

お子さんの相手も、手の掛からないいい子だと言うのなら難しくないのではないか、みたいなことを思っ受けた記憶がある。

必要な荷物を父さんに持ってきて貰うことにして、一足先に叔母さんの家へ。

チャイムを鳴らせば、人の良さそうな若い女性が、玄関から現れてこちらに笑顔を見せた。

「あら、都乃葉ちゃん。いらつしやい、ようこそ我が家へー。どうぞどうぞ、上がっちゃって」

「あ、はい。失礼します」

迎えてくれた叔母さんは、若くて綺麗な人だった。

いつもにここに、幸せいっぱいといった感じで、そこに不安や悩みなんて一切見出だせない人だった。

だから、

「あ、桐依。都乃葉お姉ちゃんよ、仲良くしなさいね」

「……こんにちわ、都乃葉お姉ちゃん」

自分の娘を紹介する時に、それが一瞬だけ翳ったことに、なんとも言えない不安を抱き。

次いで紹介された娘さんの瞳が、どうにも脳裏に焼け付いてしまったことに、僅かな違和感を抱いた。

なんのことはない、普通の女の子の笑みのはずなのに。

——何故、なにもかもに疲れきったような雰囲気を感じたのだろうか、と。

「……都乃葉ちゃん？」

「あ、いえ。……こほん。宜しくね、桐依ちゃん」

こちらを見て、小さく首を傾げる叔母さんになんでもないと手を振って、改めて少女——桐依ちゃんと視線をあわせる。

一瞬感じたモノは、今は影もなく。

彼女は年齢相応の笑みを浮かべ、可愛らしく小首を傾げている。

……その姿に、おかしいところはない。

「宜しくね、都乃葉お姉ちゃん」

にぱ、と笑う彼女は、まるで天使のよう。

仲良くなればいいな、という思いと、仲良くなれるのだろうか、という不安をうちに秘めながら、彼女に手を差し出す。

不思議そうな顔をした彼女は、やがてその手の意味を理解して、こちらの手に自身の手を重ねてくる。

そのまま、彼女に手を腕を引っ張られ、奥の部屋に向かう。

「おかーさん、都乃葉ちゃんと遊んでくるー」

「はいはい。あんまり迷惑かけちゃダメよー」

「はーい」

「都乃葉ちゃんも、ほどほどでいいからね」

「あ、はい」

途中で叔母さんに声を掛け、小走りで駆けていき、たどり着いたのは彼女の部屋。

——入った瞬間、僅かな違和感を覚えた。

なにが、と言われても困るのだけれど。……なにかがおかしいと、そう思ってしまうなにかがあるような気がしたのだ。

「都乃葉お姉ちゃん、どうしたの?」

「え、あ、なんでもないよ。……それで、なにして遊ぶ?」

部屋の中を見渡し固まった私に、桐依ちゃんが声を掛けてくる。
……心底不思議そうなその声に、なんとも言えないバツの悪さを感じて、

「いいよ、別に遊ばなくても。楽にしていればいいんじゃない?」

「……………え?」

急に人が変わったようにこちらへ声を掛ける彼女の様子に、思わず

浮かべた笑みが凍りついた。

視線を向ける先で彼女は、部屋の中心にある丸机の上に鞆の中からノートなんかを持ってきて、黙々と書き取りを始めてしまった。

突然のことに思わず思考停止していると、彼女はさっきまで可愛らしい笑みを浮かべていたその顔に、今度は怪訝そうな表情を浮かべて。

「……いや、どうしたのお姉さん？面倒な子供の世話より、手間の掛からない子の近くに、ただ座ってるだけで感謝されるほうが良くない？」

「え？いや、その、え？」

「——ああ、なるほど。こつちを一瞬変な目で見てたから、気付いたのかと思つてたけど、早とちりだった？そりやまた失敬失敬」

声の色は変わらないのに、その内容だけがどこまでも子供らしくない。

ちぐはぐな印象をこちらに投げ付けながら、彼女は宿題らしきものを終わらせていく。

私は——現状をどうにか理解しようとして、その前にこの部屋に抱いた違和感がなんだつたのかに気付いた。

可愛らしいもので飾り付けられた、女の子らしい部屋。

お行儀よく座っている大きなぬいぐるみや、その周囲に置かれている小さなぬいぐるみ達。

——そのどれもが、使われていないような気がするということに。

「女の子だし、可愛いもの並べておいたほうがいいかなって。……たまにはわがまま言わないと、そつちのほうがか心配掛けるみたいだし、つて感じに買って貰ったけど。……まあ、流石にぬいぐるみを抱いて寝るような趣味もなくて。ほこりを被らないようにだけは気にしてるんだけど」

漢字の書き取りを終えた彼女が、うつかり書き間違いをしていないかを確認しながら、こちらに声を掛けてくる。

淡々と、ただ事実を語るその声に、私は違和感の理由を確信する。

「……まあ、ここまで腹を割ってることからわかって貰えるとは思っただけだ。——お姉さん、私の話し相手になって貰える？」

彼女は、小学生だとは思えない手間が掛からなさすぎるのだと。

★ ★ ★

彼女は、全くもって子供らしくない存在だった。

別に愚痴を話したいとか、そういうんじゃないんだけど。……みたいなことを言いながら、話す内容はなんの変哲もない世間話。

こちらが相槌を打つと、少しだけ楽しそうに新しい内容に移っていくけれど。

それでも、彼女から話す頻度はそう多くはなく。

「はい、じゃあお姉さんの不満をお聞きしましょう。最近困ってることとかは？」

「……友達とうまく会話ができないんですよね」

「いや、聞いたの私だけど、それ小学生相手にする相談かい？」

もっぱら、話題提供は私のほうからだった。

友人関係の不安、将来への不安、両親への不満。

今日の夕食についての感想や、最近流行りのモノについての意見交換。

年下相手にするものというよりは、年上相手に話すようなことを、彼女が遊びに誘ってくれたときには、ずっと話しこんでいたものだった。

「友達、友達かー。……私もちよつと、悩んでるんだよね」
「桐依ちゃんか？なんでもできそうなのに」

その日の会話の内容は、友達付き合いについて。
いつもは淀みなく答える彼女が、その日に限って遠い目をするものだから、気になった私は仔細を聞こうとして。

「私、こんなだから子供相手にはウケが悪くてね。……突っ掛かられることはよくあるんだけど、ちよつと言葉選びを間違えちゃって、怒らせちゃったんだよね」

「……いえ、桐依ちゃんと張り合えるってわりと凄いのでは……？」

返ってきた内容に、思わず苦笑してしまう。

彼女みたいな子でも、友達付き合いとか、そんな普通のこと悩んだりするんだな、と。

そう素直に伝えると、彼女は珍しく目線を逸らして、

「私にだって、苦手なことくらいあるさ」

と溢すのだった。

実を結び、すべてが露と消える前に

「仲直り、ねえ」

親戚の都乃葉姉えに話をしてみたところ、極々普通にそう返されてしまつて、私は俺思わず顔を顰めていた。

……悪いのは確かにこちらなのだが、それを認めることが余計に話を拗らせるというか、あの時の言葉が本心で間違いでもなんでもないので、どう言い募ればいいのかやら、糸口が全く見えてこないのが現状かどうか。

……というか、あの子の場合は普通に謝つても受け入れてくれないだろう。絶対余計に拗れるだけだ、断言できる。

「……やっぱり」

——は■■■ない、ということなのだろうか。

改めて事実として突き付けられると、なんとも言えないモノがある。……いやまあ、それが一番なんだろうな、と言うのもわかるのだが。

とはいえ、それが簡単に認められるなら私俺はこうなつてはいない。それらは思考の端にとりあえず投げて、他の対処を考えよう。

なんて思いながら、朝食の食パンに口を付ける。

母が台所に立っているのをボーッと見ていた私は、ふとテレビのニュースに視線を移す。

何日か前に余所の県で強盗事件があったのだが、その犯人の行方が未だ知れずにいる……みたいな事をテレビのアナウンサーが喋っていた。

……なんというか、凄まじく縁起が悪い。

こんなタイミングでそんな話を聞くだなんて、まるでアレが——。

「物騒な話ね、桐依も気を付けるのよ?」

「……うん、見たことない人とか、危ないことか近付かないから大丈夫」

「そう？ならいいんだけど」

そんな風にテレビを見詰めていたら、いつの間にか後ろに来ていた母が、流れているニュースを見て心配そうにこちらを覗き込んでくる。

……それに心配ないと返して、食事を終えた私は皿を流しに置き、部屋に戻って鞆を背負う。

そうだ、心配なんてない。

起こりそう、だなんて。そんなもの、恐ろしくもなんともないのだから。

★ ★ ★

「今日こそ！絶対に！決着を！付けて！見せますわ！」

「……朝から元気だな」

朝礼が終わって次の授業が始まるまでの僅かな休憩時間。

幼馴染みにコテンパンに負け続けている彼女は、何時にもまして気合十分と言うか、気合が有り余りすぎていると言うかな様子で、両拳を握って気炎を上げていた。

……いや、なんとというか。

俺もアイツの顔が変わるところが見たいとは言ったが、こうも突っ掛かられているところを見ると、なんとというかもうちょっとなんとかならないのだろうか、と思わざるを得ない。

いや、敵とかってわけじゃないんだらうけど、それにしたって騒動の種をばら撒きすぎと言うか……。

そう思いながら視線を横に向ければ、転校生も彼女と一緒に握り拳を作っていた。

「よくわかりマセンガ、私も協力シマース！」

「刻遠野さん……！ええ、二人ならきつと、あの子に吠え面をかかせることができますわー！」

「……あー、張り切るのはいいがほどほどにな？」

一応注意しておくが、はたしてこの二人にどれくらい効果があるものか……。

調子に乗っている、というわけではないのだろうが、なんとなくか周りが見えていない感じがひしひしとするので、俺が見ていないといけないような気がして仕方がないんだよなあ。

まあ、学校が終わるまで行動を起こす気は無いようなので、授業中は安心できるのはありがたいが。

ちらりと視線を向ける先にいる幼馴染みは、こちらを見ようともせず、ただ席について前を向いている。

なんとなく、いつもより表情が強張っているように思えるのは、俺の気のせいだろうか。

俺の視線に気付いた彼女はこちらをちらりと一瞥して、何も言わずに前に視線を戻す。

……どう思うを籠めた視線なのか、俺にはわからなかったが。なんとなく、悲しそうだったなと思いつつ、二人の方に視線を戻す。

「どうしたのですか堀ノ内さん！私達は打倒彼女を誓う同士！困り事があるのならば相談して下さいましー！」

「そうネー！私達は同士ダヨー!!」

「落ち着け転校生、流石に今の西内に染まるのはいろいろと不味い」

……完全に変なテンションになっている。

というか西内、お前もそんなキャラじゃなかっただろう？どんだけアイツに負けたの悔しかったんだよ？

落ち着けと二人を宥めて、席に戻るように促す。

一時間目の授業の開始のチャイムがなったのは、ちょうどそんな夕

イミングで。

教室に入ってきた担任の姿を見て、ようやく二人の狂乱が収まるのだった。

★ ★ ★

「……で、学校が終わると同時にあいっすら走って行っちゃったわけだけど……」

最後の授業が終わると同時に、あの二人は異様に張り切ったまま学校を飛び出していった。

……付いていけば良かったかも知れないが、「今回は私達二人でやってみせますので!」「堀ノ内クンは、暫くシタラ彼女にコレを渡してクダサーイ!」などと言われて学校に残るはめになってしまったため、仕方がなく教室に残って幼馴染みの様子を窺っていた。

……ただ、当の幼馴染みの様子は、何時にもましておかしかった。覇気がないというのか、はたまた何かに怯えているというか、とにかく雰囲気いつもと違ったのだ。

なので、遠巻きに見ている俺も、なんだか変に不安を感じてしまっていた。……なんで俺まで、と問われるとなんとも言えないのだが。とはいえ、そうこうしている内に西内達の言っていた予定の時間になっちゃったので、話し掛けに行かないわけにもいかず。

ええい、なるようになれ、という感じに、俺は幼馴染みの元に近付いていったのだった。

「あー、東山?ちよつといいか?」

「……………」

「……東山?」

肩に手を置いて、声を掛ける。

……ビクツ、と体を震わせた彼女は、しかしこちらに振り向く気配

態をどうにかしたければ、俺がどうにかするしか無いんだ、と遅まきに気付いて。

いきなりの異常に困惑しつつ、俺は再び彼女に近付いてその肩を掴み、彼女の意識をこちらに向けるために前後に揺する。

「落ち着け東山！落ち着け！」

「っ!!あ、あああああああああああああああつ!!?」
「んなつ!?!」

だが、彼女はこちらが彼女に呼びかけた途端、大きく目を見開いて、さつきよりも大きな声で叫び始めたのだ。

腕を振り払われた俺は踏鞴を踏んで後ろに下がり、彼女は錯乱したように椅子から立ち上がって、教室の隅まで走って逃げた後、そのままそこに座り込んで頭を抱え、ガタガタと震えだしてしまった。

そんな彼女の口から漏れ出すのは「うそだ」という嘆き。

それだけをずっと吐き出しつづける彼女は、傍目からはおかしくなったようにしか思えず。

「いや、なにがどうな……くっ!?!」

思わず、俺が咳こうとして、言い終わる前に俺の言葉に反応した東山が、さつきよりも大きな声で叫び始めた。……いや、本当にどうなってるんだ一体!?

まるで俺が喋ろうとしたこと自体に反応したかのような彼女の嘆きに、俺は怯むしかなかった。

だって、さつきから彼女の正気を取り戻そうとするたびに、もっとおかしくなっているようにしか思えない。

いきなりの彼女の狂乱、喋るたびにおかしくなる彼女、まるで近寄るなど言うかのように、教室の隅に逃げるその姿。……俺にはなにもしできないのだと、そう告げるかのような現状の全て。

「…………ふぎ、けんなよっ…………!!」

意味がわからない、理解ができない。

彼女の違う顔が見たいと言ったが、こんな姿を見せてほしいとは言っていない。

仮にこれが、誰かが望んだものなのだとすれば。

——こんなものはクソだと突っ返さなければならぬ。

だが、今すべきことは、居るかもわからない誰かに憤ることではなく。

「おいっ、桐依っ!!いい加減、目え覚ませ!!」

大声で、ほっとけないと思った彼女の正気を取り戻すことだ。

そう決心して、声を張り上げたのだが。

「——えっ?」

「え?」

俺が彼女を呼んだ途端、彼女の様子が変わった。

まるで憑き物が落ちたかのように、こちらを呆然と眺める彼女。

その瞳に、先程までの狂乱は影も形も残っておらず。

…………いや、え?

その、俺のさつきまでの気合とかは、どうすれば?

そんな間抜けな俺の姿を見て、彼女はかすれた笑みを浮かべた。

「変え、られる?これ、変えられるんだ?は、はははっ…………」

泣き笑いとしか思えない笑みを浮かべた彼女は、涙を拭って表情を引き締めたあと、こちらに声を掛けてくる。

「えっと、先生?警察?…………とにかく、誰でもいいから大人を呼んでき

て!!」

「は、はあっ?!」

「いいからっ!!呼んだら、私は街外れの廃工場に行っただって伝えて!!
伝えるだけでいいから!!」

「いや、ちよつと待て、なんだ一体まったくわからないんだが!!?」

こちらの困惑する姿に、彼女はさっきとは打って変わった笑みを浮かべて。

「変えられるんだ、これ、変えられるんだっ!!」

わけのわからない言葉を言いながら、彼女は教室から飛び出して行く。

……一瞬途方にくれた俺は、彼女の様子からなにかが起きているのは確かなのだろうとだけとりあえず理解して、手近な大人を呼ぶために教室を飛び出すのだった。

いつか来る■■■の前に、花束を

——変えられるのかも知れない。

これは、最早意味のないモノなのかも知れない。

彼の言葉に、その確信を見て。

思わず表情が緩みそうになるのを抑えながら、ひたすらに走る。

息が切れる？それがどうした。

足がガクガクと震える？それがどうした。

視界が霞み始めた？

「——それが、どうした!!」

諦めの為のものでしかなかったそれを、こんな気持ちで叫べること
自体が奇跡のようなモノなのだ。

奇跡なんて信じたことはなかったけど、今の私俺なら信じられるかも
しれない、それに手を伸ばそうと思えるかもしれない。

だからこそ、体の悲鳴なんて、幾らでも無視できる。——間に合う
かもしれないと、信じることができる。

「ああ、本当につ!!」

なんて心が軽いんだと、叫びだしてしまいそうな気分だった。

★ ★ ★

「はあ、東山さんが？」

「は、はい、そうなんです」

職員室に残っていた男性教師が、こちらの言葉に眉根を寄せて、な
んとも言えない声をあげた。……なんとなく、不機嫌そうに聞こえる
声だ。

「ふーむ？街外れの廃工場と言うと、最近朝礼で危険なので近寄らないように、と申し渡されていたところ……ですよね？」
「えっと、たぶん」

男性教師がこちらに確認を取るように聞いてくる。

……確か、ちよつと前に会社が潰れて夜逃げしたとかいう工場で、色々面倒なことになっているらしく、中に機械や材料が残ったままになっっているという場所だ。

周囲からの視線のない街外れという立地ゆえに、近くの不良なんかがたむろしたりしていることもあるとかで、危ないので近付かないようにと言いつけられている場所でもあった。

……まあ、その不良達は最近補導されたとかで、今のその廃工場は単に危ない場所、という感じの場所になっているらしいのだが。

ともあれ、基本的に優等生である東山が用事のある場所ではない。その事からなのか、彼は俺の発言を疑っているようだった。

……意味もなくそんな場所に行くはずがない以上、俺の虚言にしか聞こえないと、彼はそう暗に告げていたのだ。

「……俺はアイツの幼馴染みです、一々貶めたりとかしません」

「ふむ、なるほど。……とはいえ、それはそれで彼女がそんなところに何をしに行ったのか、という疑問を解消できないわけですが」

「それは……」

いじめやその類似の何かなのではないか、そういう事を考えているらしい彼に、俺は言葉に詰まってしまった。

……実際、アイツが唐突に言い出したことなので、詳しく理由を説明しろと言われても無理がある。

そうになると、先生達からよく褒められているアイツに対しての嫉妬から、適当なことを言っているのではないか？……と考えるほうが筋が通ってしまうのだ。

彼が少し不機嫌だったのも、いじめかなにかだと思っ
ているからだ
というのなら辻褃があう。

つまり、俺は現在、彼を納得させられるだけの理由を持ち合わせて
いない。それゆえ、彼を説得することは不可能だ、ということだ。

——どうしたものか。

彼女は脇目も振らずに出ていった。

つまりそれは余裕がなかったということであるが、同時に説明を俺
に任せたとしたことにより、彼女が居なくても説得はできる……と少
なくとも彼女は思っていたということでもある。

さて、この状況で、彼女の助けを借りず、俺が先生を説得するには。
……一体、なにを言えばいい？

「えっと、堀ノ内君？」

「……あ」

先生に名前を呼ばれ、脳裏に閃くものがあつた。

——そうだ、彼女達はどこに行つた？

「先生。その廃工場なんです、転校生と西内が先に向かっているら
しくて、多分彼女達を連れ戻しに行つたんだと思います」

「……刻遠野さんと西内さんが？……なるほど、確かに彼女達は東山
さんに色々とちよつかいをかけていましたし、当の彼女も色々と相手
をしていましたね」

転校生と西内がどこに行つたのか、それを俺は知らされていたこと
を思い出したのだ。……時間になったら、廃工場に来て欲しいと伝え
てくれ、と言われていたことを。

彼女の異様な様子に今の今まで頭から抜けていたが、彼女達が廃工
場にいるのは確か。……アイツが廃工場に向かう理由なんて、それ以
外にないだろう。

唯一気になることがあるとすれば、俺はそのことを彼女に伝えてい

ないわけだが。……それはまあ、どうでもいいことだろう。

「ふむ、となると……彼女達を連れて帰るのに、車で行った方がいいですね。堀ノ内君も一緒に付いてきますか？」

「あ、はい。俺も心配なので」

「……ふむ。すみませんね、君には変な疑いを向けてしまったようです」

「え？……あ、いえ」

こちらに頭を下げる先生に、思わず面食らう。……大人って、子供に謝るんだ。

そんなことを思ったかは定かではないけど、きよとんとした様子の俺に彼は微笑んで、

「謝ることもありますよ。大人は間違えない人ではないのですから」

なんて言葉を告げるのだった。

★ ★ ★

「く、暗いですわね……？」

「そりやマア、もう五時近いデスシネー」

二人で廃工場の中を進みます。

——今回の対決内容はかくれんぼ。

機械類も残っているこの場所なら、うまく彼女に見付からないように隠れることも可能でしょう。

薄暗く、死角も多いこの場所なら、今度こそ彼女を……。

「西内サン？」

「え？あ、はい。なんででしょうか？」

袖を引かれてハツとしました。

薄暗い工場内では、足元に気を付けないと容易く転んでしまいます。……取らぬ狸の皮算用なんてしている場合ではなかったのです。そのことに気付かせてくれた彼女に礼を言おうとして、彼女の顔が少し青くなっていることに気が付きました。よく見ると、少し震えているような？

「こ、ココ廃工場……つまり誰も居ないハズデスよね？」

「え、ええ。つい最近まで悪い人たちが集まっていたとも聞きました。が、彼等はすでに追い出された後だ」と

こちらの返答に、彼女は一度大きく身震いをして、私の耳元に顔を近付け、こう囁いたのです。

——誰かの話し声がするような気がする、と。
誰も居ない廃工場。

人の居ない無人のはずの場所で、聞こえてくるという微かな話声。

薄暗く、パツと見では部屋の内部を見渡せないような場所。

——いや、まさか。だって、そんな、まだ夜ではないですし。

そんな私の現実逃避は、確かに自分の耳に届いた微かな声によって終わりを告げるのです。

だから、その後の反応も予想通り。

「お、おぼけだーっ!!？」

——そして、そこから後の展開は、全て私の予想の外のモノだったのです。

★ ★ ★

必死で走って、限界を越えて、ようやくたどり着いた廃工場。
それと同時に中から響いてきた叫び声。

——ああダメだ、まだ間に合っていない、まだ足を休めてはいけない。
変えたいのなら、変えるべきだと思うのなら、休むことなんて許され
ない。

周囲を見回す。

声が出たのはどこからだった？どこから入れば最短で彼女達のも
とにたどり着ける？

そこまで考えて、^{視界}思考に走るノイズ。——なにも考えずに走り出
す。

私は、^俺これを呪いだと思っていた。それは今も変わらない。

だけど、変えられるのなら。本当に、ただの気の迷いでしかないの
だとしても、その灯りを見たのなら。

「ああああああああああああああああああああああああああああああ
ああっ!!!」

「なんだあっ!!!」

「東山さんっ!?!」

窓ガラスを突き破って、廃工場の中へ。

二人の成人男性・その前で^{西内さんと転校生}呆然とする二人・男の一人が持ったナイ
フ・刺される■——。

ブレる視界を振り払い、錯乱している男と、西内さんの間に割り込
んで。

……あ、ダメだ。これ、私が受ける以外でどうにもなんないや。
そんな諦観を、けれど笑顔で呑み込んで。

「もうちよつと、考えるべきだったな」

「ひがし、やまさん?」

思わず漏れた言葉にだけ、後悔を残しながら。

私は、男が振り下ろしたナイフをその身で受け止めるのだった。

★ ★ ★

「——え？」

意味がわかりませんでした。

廃工場で、誰かの話し声を聞いて。おばけだと思って震え上がって。

思わず声を上げたら、物陰から知らない大人の人達が現れて。

そのうちの一人が、奇声を上げながらこっちに向かってくるのを、もう一人の大人が制止しようとして。

止められずに走ってきた男の姿を、呆然と見上げることしかできず。

その手に握られているものが刃物であることに気付いて、咄嗟に後ろの刻遠野さんを庇おうとして。

突然割れた窓ガラスと、中に飛び込んできた東山さんに思考が止まり。

彼女の大声に目の前の男の意識も逸れ、その隙を縫うように、彼女は私と男の間に割り込んできて。

目の前で、彼女は、赤く、紅く、朱く、染ま、って。

なに、これ？なに、どうして、なんで？

「もうちょっと、考えるべきだったな」

彼女がぼつりと漏らした言葉を、今更ながらに認識して。

ああ、つまり、これは、私の、私が、

「あ、ああ、あああああああああああああつ

!!!!??????」

頭が割れる。呼吸ができない。視界が朱く染まる。
私が、私が私が私がつ!!この、状況をつ!!!

「……!?これは……っ!!?」

「あ、せ、センセイダメっ!!」

「う、うあああああっ!!」

私が自身の罪に崩れ落ちる間にも、状況は動いていきます。

彼女が突き破ってきた窓から中に入ってきたのは、学校の男性教師の一人。

彼は僅かな明かりの中に立つ人間達と、その足元で血溜まりに沈む彼女を見て一瞬呆けたあと、刻遠野さんの声と、自身に向かってくる狂乱した男の姿を見て表情を引き締め。

「——ぜいっ!!」

「がっ!!」

男が突き出したナイフを冷静に避け、逆にその腕を絡め取って投げ飛ばした彼は、さつきから微動だにしないもう一人の男に視線を向け。

「抵抗するおつもりでしたらどうぞご自由に。——その場合、彼の保障はしかねますが」

「……いや、そのつもりはない。こうなったら素直に捕まるさ」

半ば脅迫めいた言葉を発するも、当の男性にはそもそも抵抗の気配がなく。

先生は暫く彼を警戒するように見ていたものの、そもそも重症の人間が居ることを思い出して「携帯をお持ちでしたら、救急車をお願いします」と声を掛けました。

男はそれに頷いて、懐から携帯を取り出して連絡を始め。

そこまで終わって、ようやくと彼が工場内に入ってきたのです。

「——桐依？」

血溜まりに沈む彼女を、わけがわからないと見詰める幼馴染みが。

そして、彼は至った

「……いやいやいやいやっ!!? なんですかそれは超大事じゃないですか!!?」

再びの休憩時間を迎え、話を聞きながら百面相していた栗花落が、ついに堪えきれなくなるとばかりに爆発した。

まあ、淡々と過去を語る俺達も、ちよつと「なにこれ」という気分になるのだ。

当事者ではない彼女からしてみれば、わけのわからないことだらけだろう。

とはいえ、これは切っ掛けでしかない。

なにせ、死にたがりの彼が生まれた理由の部分、その始まりでしかないのだから。

「あ、そういえば」

「まあ、実はそっちはそんなに語ることもないんだけどな。なにせ、あんな事になったのはあそこの一回きり。……それ以降は、何事もなく平穏な日々が続いたんだから」

そう、少なくとも表面上は。

そう前置きして、俺達は続きを語り始めた――。

★ ★ ★

——目を覚まして一番に思ったことは「目、覚めちゃったか」だった。

あそこで綺麗に終わっていたなら、わりと満足だったのだが。……巡り合わせというのか、まんまと生き延びてしまったらしい。

母親にはまあ、泣きつかれた。

そりやそうだ。一人娘がナイフで刺されたとか、心配しないほうが

ビツクリである。

幸い、流れた血に反して内臓が傷付いたりはしていなかったらしく、傷そのものも痕は残らないだろうとも言われていたので、いつまでも泣きつかれる、ということにはならなかったわけだが。

クラスメイト達は、おっかなびつくり見舞いに来てくれた。

まあ、正直彼等にはよくわからないだろう、だって事件は彼等が帰った後に起きたわけだから。

突然大怪我をしたクラスメイトを見舞いに行きましよう、みたいなことを言われて、素直に千羽鶴とか折ってくれてるあたり、まだ可愛げがあるというか。

西内さんは、見舞いには来なかった。

……うん、そりやそうだ。タイミング悪すぎるし、互いにバツが悪い。

お互いに引け目があるのだから、それはもうどうしようもない。

そのまま疎遠になっていく、なんてことも有り得る話だろう。

転校生と幼馴染みは、打って変わって毎日病室にやって来ていた。

同じように毎日来てくれていた都乃葉姉さんとは、来る時間がずれていたの顔をあわせることはなかったけど。

あと、転校生のほうにはすごい泣きつかれた。

母の次に大泣きだったので、ちよつとばかり罪悪感を抱いたりもした。

——そして、幼馴染みは。

★ ★ ★

「お前、なんで起きて」

「おー、相棒。元気そうだなにより」

「……相棒?」

アイツが病院に緊急搬入?されて少し経ったある日。

あれだけの血を流していたにも関わらず、彼女はピンピンとしてい

た。

白い病室の中で一人だけ真つ黒な彼女は、こちらの姿を見てにかつ、と笑っている。

……あまりに楽しそうに笑うものだから、なにを聞こうとしていたのかも忘れてしまつて。

代わりに、彼女から飛び出した言葉に、思わずオウムのように聞き返して。

「そ、相棒。いや、実際君が先生呼んでくれてなきや死んでたし。――

命の恩人なんだから、呼び方くらい変えるもんでしよう?」

「そういう、ものなのか?」

こちらの疑問にからからと笑いながら、彼女は俺を楽しそうに見詰めてくる。

……なんというか、今までのアイツと雰囲気違って、どう対応したものかわからずに、俺は及び腰になっていた。

そんなこちらの様子にまた笑みを深めて、彼女はこちらを手招きする。……無論、俺は彼女に近付けずにいて。

「……うむ、ちよつとフランク過ぎたか? でもなあ、正直こうなるのも仕方ないからなあ」

「な、なんだよ……」

そんな俺をニヤニヤ見ながら、彼女は危なげなくベッドから飛び降りて、こちらに近寄ってきた。

……いや、医者に動き回るなつて言われてたろお前、と彼女を制止しようとして。

こちらの腕をすり抜けた彼女は、俺の耳元に顔を近付けてきて。

「

……なに言つてんだ、お前」

耳元で告げられたモノに、思わず顔を強ばらせる。
それを告げた彼女は、ずつとニヤニヤと——その表情以外を忘れてしまったかのように笑いながら、こちらを指差してくる。

「相棒だからこそ頼むんだぜ?……おっと、くれぐれも他の奴にバラさないでくれよ?——君と、私^俺だけの秘密だ」

そんなことを宣つて、彼女はベッドに舞い戻る。

こちらが声を上げようとしたタイミングで、医者達が戻ってきて、俺はあれよあれよという間に病室の外に押し出されてしまう。

外ではアイツの母親が、見舞いに来た他の子供達に感謝の言葉を伝えていた。

放り出された俺に気付いた彼女が、こちらに近付いてくる。

「ああ、晃くん。ありがとうね、あの子を見舞いに来てくれて」

「あ、はい。友達なので、大丈夫です」

彼女からの感謝の言葉に、なにが大丈夫なのかわからないままに大丈夫だと返して。

見舞いに来てくれたから、なんて言われてお菓子やらジュースやらを、お土産としてしこたま持たされて。

結局、あの言葉の意味を問うこともできぬまま、俺は家に戻ってきていた。

母親から持っているお菓子や飲み物について聞かれたので、半ば反射でお見舞いのお土産と返せば、母はああ、お隣さんの。……なんて呟きながら、テレビに視線を移す。

流れているのは地域のニュースで、ちょうど隣県から逃走していた強盗犯が自首してきた、ということを送っていた。

強盗犯二名のうち、片方は錯乱状態で市内の病院に収容されており、落ち着き次第余罪について調べを進めていく……みたいなお話を

言っている。

「なんというか……怖い話ねえ」

「……そう、だな」

当事者でない母の言葉は、どこまでも他人事で。

喉元まで出掛かった言葉は、そのまま呑み込まれる。

……たぶん、こんなことを相談しても、世迷い言だと笑われるか、彼女のことを気味悪がってしまうだけだと思ったから。

だから、母には部屋で宿題していると返して、そのまま自室に戻った。戻って、改めてアイツの言ったことを反芻する。

『俺を殺してくれ』だなんて、なに考えてるんだアイツは」

死にかけてた少女が、笑いながら死にたいと溢しているだなんて。

……どう反応するのが正しいのか、俺には全くわからなかった。

★ ★ ★

「あー、都乃葉姉ねえごめんね？私俺がやろうとすると、ちゃんとベッドで寝てろーって怒られちゃうから」

「いいよ別に。手持ち無沙汰だし、花もちちゃんと飾らないと可哀想だから」

何度めかのお見舞いの時。

ベッドで退屈そうに横になっている彼女彼に相槌を返しながら、私はお見舞いの花を花瓶に活け直していた。

……なんとなく、事件の前と後で雰囲気が変わったような気がする彼女彼から、目を離してはいけないような気がしていた私。

だから、ここ最近は学校が終わるとすぐに、彼女の病室に向かっていたのだけだ。

「〜♪」

窓の外を眺めながら、鼻歌まで口ずさみ始めた彼女を見て、これは雰囲気が変わったなんてレベルで、片付けられるような変化なのだろうか？と少し不安にもなっていた。

……事件以前が世間の荒波に疲れ果てたサラリーマンだとすれば、今の彼女は毎日が楽しくて仕方ない夏休み中の小学生みたいに思える。

これが例えば、何か良いことがあったから変化したというのなら、私もここまで気にはしないのだけれど。

彼女が最近遭遇したことと言えば、強盗犯のナイフによって重症を負ったという、どう考えても悪いことである。

……聞いた話によれば、怪我をしたのはクラスメイトを庇った結果らしいので、そこが唯一良かったことになりそうではあるものの。

だからといって、こんな劇的な変化をもたらしたりはしないだろう、と納得できずにいたのだった。

「あー、楽しみなあ！」

「……っ？何が楽しみなの？」

抑えきれなくなった、という感じに彼女が声を上げる。

流しに居たので彼女のほうを見ていなかった私は、その声に振り返って。

——恋する乙女のように、美しい微笑みを浮かべる彼女を見た。そう、その瞳さえ見なければ、恋する乙女以外の何者でもない、彼女の笑みを。

「あ、都乃葉姉居るのに叫んじやった。……まあ、いいか。どうせ都乃葉姉は私のこと知ってるし」

「……えっと、何がそんなに、嬉しいの？」

だから私は血迷って、彼女にその喜悦の理由を聞いてしまった。――聞いて、後悔した。

「そうーやつと見付けたんだ、俺をちゃんと終わらせてくれる人！無駄に次を見てしまった俺を切り捨ててくれる人！」

頬を染め、夢見心地で語る彼女は、端から見ればさぞ可愛らしく、愛らしく写るのだろう。……その口から漏れ出す、呪詛のような言葉さえ聞かなければ。

「ああ、でも俺には返せるモノがないなあ？……ああ、俺が消えればいいんだから、私をあげればいいか。じゃあ準備しないと。……あ、でもその前に終わらせてくれたらどうしよう。私、せっかちだからなあ。機会があつたら試したくなるだろうし」

理解のできない言葉を垂れ流しながら、彼女は明日着ていく服を決める時のような気軽さで、己の終わりを渴望している。

私はただ、機会があればという言葉に、言い様のない不安を覚えて。

「貴方は、死ぬ気なの？」

思わず、口に出していた。

それを聞いた彼女は、一瞬意外そうな顔をして、その後バツが悪そうに頭を掻いた。

「あー、そういうえばそつか。都乃葉姉とはもう長いんだから、変に愛着とか湧かせちゃったか。……ん、これに関しては俺の大失態。ごめんなさい」

「え、は、いや？」

「その上で、貴方の質問にはイエスと返すよ。俺の目標は俺の殺害。」

……あ、『東山桐依の殺害』じゃないから、そこんところは勘違いしないでね？」

返ってきたのは、またしても意味のわからない言葉だった。

いつか朱き華を願ったように

「うーん。そこでなに言ってるの?……みたいな顔をされても、私俺にはこういう風に言うしかないからなあ」

彼女は、困ったように眉根を寄せて、腕を組み唸っている。

私は、彼女が言った言葉を理解できずに、ただそこに立ち尽くしていた。

——死にたいのかと聞かれて、俺を殺したいと答える。でも、自分を殺したいわけではない、らしい。

……意味がわからない。少なくとも、普通の人間である私には、ミリ足りとも理解できなかった。

けれど、彼女彼はそれでいいのだと笑う。

「あの時はちよつとやけっぱちだったから、貴方に俺を見せてしまったけど。……うん、いらぬものでしかない俺が、烏滸がましくも誰かと話そうとか思ったのが間違いだった。いやまあ、こんな機会が来るだなんて想像もしてなかったから、仕方ないところもあるんだけど」

そもそも、当初の予定だとちゃんと老衰するつもりだったからなあ、なんて笑う彼女は、そもそもこちらを見ていなかった。

熱に浮かされたように、彼は見付けた希望に御執心で。

その前にちよつとした気まぐれで声を掛けた相手には、おぎなりな謝罪だけを投げて。

つまり、彼は。

「あ、違うってば。それは違う。必要ないと切り捨てられるのは俺。寧ろ、貴方に俺を捨てさせるだなんて迷惑を掛けなくて済むって、ちよつと安心したりしてるんだよ私俺」

「……それが迷惑だと言うのなら、何故その誰かに、自分を切り捨てさ

せようとしているのですか」

「うっ、また痛いところを……」

——まるで、私をなんとも思っていないかのようで。

思わず口をついて漏れた自身の言葉に驚きつつ、けれど聞くべきこと、聞きたいこととも合致していたので、そのまま問いかける私。

その言葉に彼は、照れたように視線を逸らしながら。

「いや、まあ？こう、最後は、ねえ？……それと、悪戯に希望を投げた見せたんだから、最後まで責任取って欲しいところもある、というか？」

あー、やだやだ気持ち悪い。

そんな言葉を嬉しそうに語る彼の姿に、私はおぞましさと、少しの嫉妬を感じて。

「……させない」

「ん？」

「そんなこと、させません。貴方が勝手に死ぬことも、誰かに殺されることも、私は絶対にさせません」

勢い任せに私が放った言葉に、彼は先ほどから浮かべていた微笑みではなく——面白いと、そう感じているかのような挑発的な笑みを浮かべ直し、こう言ったのでした。

「都乃葉姉も、大概物好きだねえ？」

と。

★ ★ ★

「それからと言うもの……小学校卒業までの間……そんなことにさせないように……ずーっと……裏方よ……」

「まさかの黒幕ムーブの原因!？」

先生の語り口に、栗花落が驚いている。

……いやまあ、確かになにか起きそうだな、みたいなお約束が見える度に、フラグのまま消えていくだなんて事態には結構出会っていたけども。

あのあたり、全部先生の暗躍の結果だと言うのなら。

……働きすぎなのは、この人。

思わず遠い目をしてしまう。

あのバカ、振り回される云々とか言ってたの、ホントはお前が振り回してたのが始まりじゃねえか、と。

「いや、そのさ？途中から聞いている私が聞くのもどうかなーって思うんだけどさ？」

「ん？どうした秋山、なにか疑問でも？」

そんな風に呆れていたら、秋山がこちらに向けておずおずと手を上げて、発言の許可を求めていた。

……聞きたいことか、なにを聞きたいのだろう？

そのまま彼女のほうにみんなが向き直ると、彼女は意を決したように口を開いた。

「そもそも、彼とか彼女とかなんなの？」

「……そうかそこからか」

語りの中で頻出する彼と彼女。

情景を思い浮かべずに聞くと、まるでアイツが二人居るかのよう^に聞こえるそれは、実際二重人格のような、そうでないような、ちよつと説明の難しいものでもある。

まあ、演劇祭での告白を聞いた今でなら、ある程度 of 理解はできそうではあるのだが。

「彼は、前世の彼。で、彼女は……あの時点だとまだ彼が演じてるだけのもの、なのかしら？」

「そのあたり、本人に聞かなきゃ正確にはわからないだろうからな……」

恐らく、(彼女の説明を信じるのなら)二重人格としての明確な分離は、あくまでも小学校を卒業してからの事であり、それまでの俺と私の使い分けは、男性的な面を見せるか女性的な面を見せるか、そのどちらか程度の意味しかないはずだ。

「そもそも人間は複数の人格を最初から持っているってする説があるんだそうで、それに倣って男っぽいことしたり思っている時には俺、女っぽいことしたり思っている時には私って言うんだ、みたいなことをアイツは言ってたんだが……」

「先生の話聞く限り、私を切り離しに行った結果が今の彼女、ということなのかしら？」

どこまで行っても本人じゃないから詳しいことは言えない、と刻遠野が会話を締める。

それを聞いた秋山は、なんとも言えない表情を浮かべていた。

言うべきことを言うか、言うまいか。

なにか、重要な選択に悩むように、彼女はむむむ、としばらく唸つて。

「——実は、聞いて欲しいことがあるんだけど」

いつもと違う調子で、彼女は口を開いた。



死にたがりの俺。

■「さりたいという願いを叶えられぬまま、二度目の人生を与えられて、半ばやけっぱちになつていた存在。」

■「されないことは知っていたから、別に自分の性別に特にこだわりはなくて。」

だからまあ、今世で女性となつて、可愛い服を着せられるということにも、そんなに抵抗はなかったのだった。

「女の子には女の子らしくして欲しいだろう、って思ってピンクとか可愛いものとか率先して選んでたけど……」

なので、ちよつと落ち着いて私をプロデュースしようと思った時、俺は困惑してしまったのである。

……いや、なんだこの世界。

余裕がなかったから全然気付かなかつたけど、男女の区分が曖昧すぎる……っ!?

精神的余裕が生まれて、周囲を見渡せるようになって、初めて気付いたこの世の真実。

なんか、前世での世界よりも遥かに、ジエンダーフリーが進んでる!?!というか進みすぎてちよつとついてけねえ!?

……東山桐依。ここに来てようやく、この世界のおかしさに気付きました。

いや、よくよく考えたら男の子っぽいやつがスカート履いてたり、女の子っぽい子が坊主頭にしてたり、なんかちよくちよく変なやつは居たんだよ。単に私俺が見逃してたっただけで。

その異常に気付くのに、ここまで掛かっただけのがわりと失態だったっただけで。

……なんでそんな失態失態言ってるのかと言われれば。んなもん、あれを見ればわかる。

そんな脳内会議をしながら視線を横に動かせば、転校生と幼馴染みが仲良さそうに話しているのが見えてくる。

「オー、堀ノ内サン、ベリーキュートですネー!!」

「母さんが女子会行くならスカートよね、つて譲らなくてな」

……何故か幼馴染みがゴスロリ着てるんだがな!!

いや待ってホント待ってちよつと整理させて?

俺、君の為に私をビルディングしていくつもりだったんだけどさ?

え、なにこれ。どっち? 君どっちが恋愛対象?

俺は私をどうすればいいの? え? いい感じにやれつて? ふぎけるなテメー!

……思わずキャラが崩れてしまった。

いやでも仕方なくない? 単に転生して、転生したことそのものにキレ散らかしてた俺がさ?

よもやよもや、前世と大差ない平凡な世界だと思ってたのがさ?

実際はごりつと前世と違ったとか、今さらながらに突っ込まれるとかさ?

……いや、単に私ビルディングにかまけていられるか危ういじゃない。

世界のピンチとか唐突なバトル展開とか、そんなもん全然ない仏教的輪廻転生だと思ってたのに!

これ、一旦脇に色々おいといて調べなきやあかん奴じゃん!

んでもって安全だと確認できても、単純に俺切り捨てていいのかわかんねー奴じゃん!

どっちだよ相棒、お前男と女のどっちが好きなんだよお前っ!?

都乃葉姉がとことん邪魔してくるから、遠回しな方針に切り変えたつてのに!

これ、いつまで経っても俺切り捨てられない奴じゃん!

「い、いや。落ち着け東山桐依、お前は強い子、仮に弱くても頑張れる

子。素数だ、素数を数えて落ち着くんだ……」

「いや、なにわちやわちや言ってるんだお前」

「ぎゃあ?! ああああ相棒っ!! いきなり話し掛けるのは止めろ! 心の準備があるんだこっちは!」

「……いや、そもそもお前が誘ってきたのに心の準備も何もないだろうに」

「ぬぐう、そうだった……」

落ち着け落ち着け、と自分に言い聞かせていたら、背後から声を掛けられて思わず小声で叫ぶ。

……小声の理由? んなもん後ろの転校生にまで俺の失態なんか見せられないからだよ!

「どうシタデスカー? ワタシの顔、何かツイてマスカー?」

「ついてないけど? いいから、今日は遊びに来たのだから、私には構わず目一杯遊びなさい」

「オー、楽しみデース!」

こちらを不思議そうに見詰める転校生に、とりあえずキリッ、とした感じのキャラを設定して話し掛ける。

……隣から「なにやってんだコイツ」みたいな視線が飛んできてる気がするが、背に腹は代えられない。

「それにしても、来週転校してしまうだなんて。ホントに急な話ね」
「それを聞いて、思い出作ってやろうみたいなのを言い出すお前も大概急だがな」

親の都合だとかで、彼女は来週アメリカに行ってしまうのだと言う。

そんな彼女に、最後に思い出を作ってもらおう、というのが、今回の遠出の理由だった。

……そういうことにしとけば都乃葉姉が油断するのでは、みたいなところもなくはなかったのだけれど。

うむ、そっちに関してはちよつと保留になったので、純粹に彼女の為に遊ぶのが、今日の俺たちのミッションである。

「そういうわけだから、行くわよ相棒」

「へいへい……」

「アイボー!? やっぱりソーイウ関係だったデスネー!？」

「違う」

「……いや、なにが違うの相棒?」

「違う」

「………?
?????」

……なにが違うので?

相棒のよくわからない態度に首を傾げつつ、俺たちは今日の目的地である遊園地のゲートをくぐるのであった。

白を黒に、黒を白に

「私、遊園地とか初めてデース！」

「……そう。なら今日は楽しみなさい、存分にね」

「言われずトモー!!」

「……かつ飛んで行ったな」

「いや言ってる場合じゃないでしょ、迷子になられても困るからさつさと追い掛けるわよ！」

いや元気すぎるだろあの子!?

こちらら中身は完全なおっさんだぞ、加減してくれマジで。……とは言い出せず、仕方なく彼女のあとを追い掛ける。

……すでに豆粒レベルの大きさになるくらいに離されてるんだけど、あの子なに目指して走ってんの……??

ある意味この世界での女の子としてのサンプル的な意味で観察しようかな、なんて思ってた俺としては、なんというか出鼻を挫かれた感がすごい。

ともすれば横にいる相棒のほうが女の子らし、らし……。

いやなんでだよ!なんでそこらの女の子より走り方可愛らしいんだよおかしいだろうが!

「……今日はやけに睨んでくるなお前」

「俺としては、お前さんがなにを目指してるのかわかんねーんだよ……」

「??」

小首を傾げてこつちを見る相棒が、普通に女の子にしか見えなくて辛い……。

だからよお!オメエはよお!!そんなんわかるわけねえだろうがよお!?

「……よくわからんが、転校生止まったぞ」

「なんですって!?!じゃあとつと追い付かないと!」

そんな風に頭を抱えながら進んでいけば、相棒から転校生が立ち止まったとの報告。

……また置いてかれては堪ったもんじゃないので、しつかり手綱を握るために追い付くことを優先。とりあえず相棒のことは後回しだ後回し。

「オー、皆サン遅いデース!見てくだサーイ、コレ一時間待ちデース!」

「……いや、そもそも乗れないわよ私達」

「ワツツ!?!なにゆえデスカー!!」

追い付いた先の彼女は、とある行列の前に立ち止まって近くの看板を眺めており、こちらの接近に気付くと振り返ってぶんぷんと怒りの声をあげた。

どうにも、猛ダツシユしていたのはこの行列に並ぶためだったらしい。……とはいえ、行列があるうがなかるうが、この乗り物に私達が乗ることはできないわけだが。

「なにゆえもなにも、ジェットコースターには身長制限があるのよ?」

「俺ら誰一人としてクリアしてないな、これ」

「が、ガンデース……」

こちらの指摘に、がつくりと肩を落とす彼女。

……うん、俺達小学一年だからね。身長足りるわけないね。

そもそも年齢制限のほうも引っ掛かるだろうし、どうしようもないね。……と彼女に告げれば、更に肩を落としてしまった。

いや、どんだけ乗れたかったんですかねジェットコースターに。

「風にナリタかったのデース。風をキツテ風を感じレバ、キツト風にナレルと思つたのデース」

「……………?」

なにを言つてるのか全くわからなかつたので、相棒にわかる? つてジエスチャーをしたが、返つてきたのも肩を竦めるジエスチャーだった。……………うん、まあわからんよね。

「とりあえず、ここにはゴーカートもあつたはずだからそつちに行きましようか」

「ホー? カーですか。これは私の華麗なドライビングテクニックを披露するチャンスデスネー!?!」

「なるほどスピード狂……………」

とりあえず園内にあるもので、風を感じられそうなものをあげてみたらとても喜ばれた。

……………相棒うるさいつ、折角いい感じにテンション戻つたみたいなんだから、変に水を差すようなことを言うんじゃない!

みたいな感じに相棒に視線を送りつつ、そのまま三人でゴーカートがある場所へ移動。……………ふむ、こつちは空いているようだ。

説明の看板にも、年齢制限とか身長制限とか引つ掛かりそうなものは書いていない。

なのでそのまま受付に近寄つて、子供三人分の料金を払つてカートを用意してもらおう。

「勝負! 勝負しましょー!」

「構わないけど……………勝負事ならなにか賭けないと。なにを賭ける?」

「無難に次の給食のデザートとかでいいんじゃないか?」

「じゃあソレにしましょー!」

転校生が勝負しようと思ちかけて来たので、勝負だつて言うのなら

なにか賭けないとな、と俺が返し、内容を相棒が決める……という一連の流れののち、準備ができたのでスタートの合図を待つ。

……今！

「スタートダッシュはお手のモノデスヨー！」

「やるじゃない、けどそう簡単には負けないわよ！」

「元気だなー」

「相棒はもうちよつとやる気を……うそ!? インコーナー抜けてった!?」

「意外な伏兵デース!?」

綺麗なスタートダッシュを決め、華麗に走り出した私達。

壮絶なデッドヒートを制したのは、結局相棒だった。

「お嬢ちゃんなかなかやるねえ！そんな格好でハンドル捌きもブレーキやアクセルの踏み込みも抜群とは大したもんだ！」

「あ、はい。どもつす」

「……めっちゃ照れとる」

「ドチラに照れたのデシヨー？」

「お前らうるさいっ」

ゴスロリ着たままコースを攻める相棒の姿は、あつという間に話題になってしまったようで。

しばらくの間、俺達はコースから立ち去りにくいことになってしまったのだった。

★ ★ ☆

まあ、そんな感じに。

時に転校生に振り回されたり、時に相棒の姿に惑わされたり。

転校生との別れの時に思わず涙ぐんでしまったり、久しぶりに勝負

を仕掛けに来てくれた西内さんの姿に、ちよつと元気を貰ったり。都乃葉姉の手練手管が極まり初めて、正直ごまかすのは無理そうだなってなったり。

そんな日々を積み重ね、積み上げて――。
そして、その日が来た。

「小学生も今日でおしまい、か。長かったような、短かったような」
「まあ、小学生が終わっても中学ではどうせ一緒なんだろうけどな」

卒業証書を手にも、相棒と帰路を歩く。

桜の花が散る中を歩く、というのは意外に珍しいことらしい。

早咲きか冬咲きか知らないけど、一般的な桜の花では卒業式の時にはまだつぼみ、ということのほうが多いのだそう。

なので、卒業の日に桜の花を見るというのは、わりと貴重な経験なのだそう。

「それを聞いて、俺はどういう反応をすればいいんだ？」

「めずらしー、すごい。……とかでいいんじゃないか？」

「ええ……」

みたいな話をしてみたら、相棒からの反応は芳しくなかった。

……特別な卒業の日として、思い出に残るんじゃないか、なんて思ったのだが、そのあたりは相棒的にピンと来ない感覚だったようだ。

……むう、仕方ない。

じゃあ否が応でも特別な卒業の日にしてやるとしよう。

並んで歩いていたのを意図的に崩して、ちよつと駆け出して彼の前に進み、反転してその顔を覗き込む。

少したじろいだ彼に笑って、一つ俺からのお知らせを告げる。

「はい、残念なお知らせがあります。……いや、君に取っては嬉しい

「お知らせかな？」

「なんだ唐突に、まさかあれの話か？」

「おっ、なんだ相棒、わかってんじやーん」

察しのよい相棒の姿に思わず笑みが浮かぶ。

……ことあるごとに彼にはこちらの期待を投げ付けて来たからなあ、すっかり覚えてくれて俺としてはとても嬉しい。

……嬉しいと同時に、ちよつと寂しくもある。

彼のそんな姿も、しばらくの間は見れないんだとすれば、……ちよつとくらいは、名残惜しくもある。

いやまあ、そうやって名残惜しいとか言ってるといつまで経っても俺消えられないので、時には心を鬼にして決断しなきゃいけないこともあるわけだけど。

「……鬼もなにも、お前はちよつと自分勝手にやってたじゃねえか」

「いえいえ。結局目標は果たせずじまい、こうして逃げの一手しか打てない情けない奴ですよ俺は」

「逃げの、一手？」

相棒がオウムのように言葉を返してくるので、そうだと深く頷く。

そう、逃げの一手。

直接的にも間接的にも自殺を封じられた俺は、仕方がないので遠回しに自分を削るといふ方向にシフトしていた。

と言っても、不要な自分と切り換える為の私の作成っていう、ちよつとなに言ってるのかわかんないって返されそうな方向に、だけど。

「ちよつとお前が言ってたやつか」

「そうそう。……いや、ホント大変だったんだぞ？」

具体的にはお前の好みとかタイプとか好きなものとか。

……全くわかんなくて、結局なんかこういい感じに、みたいなだいぶあれな感じになったけど！

いや、俺にそういうことさせるんじゃないやねーよとしか言えねえですわ。まあ、これからは私がそのあたりを頑張ってくれるんだけど。

「私？」

「そ、私。……いや、別に俺と完全に別人って訳でもないんだがな？ 知識とか記憶とか、持ってたなら宜しくない部分に関しては、俺と一緒に沈めておくつもりだし」

逆に言えば、前世があるとか生まれてから今までの記憶とか、特に問題ない部分はそのままにしておくつもりだし。

基本的には男女^{陰陽}を入れ換える、以上の意味はないのだ。

『陰中の陽、陽中の陰』と『全は一、一は全』の組み合わせになるのかね？ 全体を占める男性性、その中の女性性を拡大して反転し、元の男性性を『陰中の陽』にする、というか」

「……………？」

「あ、すまん。わからんか流石に。……まあ、今まで通りでほとんど変わらんよ。男と女だと見るところが違うっていうから、俺とはちよつとずれるかもしれないけれど」

まあ、最終的にはそのズレを広げて、俺を消し去ってくれるくらいに強く大きく育って欲しい訳ではあるのだが。

それを目の前の彼に言っても、よくわからないと返されるだけだろう。だから、俺から告げるのは一つだけ。

「さよならだ、相棒。できれば、二度と会わないことを願ってるぜ」

「……………」

「なんだよ、折角別れの挨拶をしてるんだから、せめて笑顔なり悲しむなりしてくれりゃあいいのに。……まあ、いいや。じゃ、私を宜しく

！

瞳^{幕を落とせ}を閉じれば、意識は闇に沈む。

二度と表に上がってこないようにと願いながら、代わりに浮上していく私を見送って。

まあ、悪くはなかったか。

そんなことを思いながら、俺は長い眠りについた。

まあ、誤算があったとすれば。

男と女の視点の違いと言うものを甘く見すぎていたということ。

私になって初めて、この世界がなんなのか、ということの具体的な答えに至ったこと、だろうか。

おかげさまで、こうして目覚める余地ができてしまったというのは、なんとも皮肉な話だと言えないだろう。……ってな。

そうして黒は流される

目を覚ました時、よくわからない喪失感に涙が溢れた。

……何を失ったのかもわからない、本当にそれが悲しいことなのかもわからない。

だけど、涙だけは滔々と流れるものだから、よくわからないまま涙を拭って。

「ほれ、ハンカチ」

「え、あ、はい。ありがとう」

差し出されたハンカチを手にとって、いつの間にかぐしゃぐしゃになっっていた顔を拭う。

ある程度濡れていたのを拭い終わって、貸して貰ったハンカチをどうしたらいいだろう、と顔を上げて。

「……え、天使？」

「はあ？」

視界に入った相手があまりにも可愛すぎて、私は思わず声を溢していたのでした。

☆ ☆ ☆

「すみません、一つ聞いてもいいですか？」

「ん、なんだ？」

秋山からの告白を皆が聞いたあと、再び彼についての話を続けていたのだが。

栗花落が、なんとも言えない表情でこちらを見詰めている。

……ふむ、なにかおかしなところでもあっただろうか？

そんな風に尋ね返すと、彼女は「いやまあ、多分そのままなのでしようけど」とぼやき。

「もしかして堀ノ内先輩、その時女装ですか？」

「ああ、なんかいつの間にか女性用の制服に変えられててな、仕方ないからそのまま」

「先輩、幾らなんでも女装に対して無頓着過ぎでは？」

「まあ、今の世界でも珍しいくらい自然に着るわよね、貴方」

「一切の躊躇が見えないのは、なかなか珍しいですね」

「……え？」

え？なんで俺が変みたいな話になってるんだ？

そんな感じに周囲を見渡せば、話を聞いていたメンバーはみんな、こちらを温かい目で見詰めていた。

……いやいや。そんな馬鹿な。珍獣扱いはアイツの十八番だろ？

「今さらながらに改めて実感しましたが、この二人割れ鍋に綴じ蓋以外の何物でもないですね！」

「そりゃあこれだけ噛み合うはずというか」

「寧ろなんで途中まで付き合っただけ無かったのでしょうか？」

「おい待てお前ら、好き勝手言いすぎだろいくらなんでも」

そんな俺の困惑は、遠回しに堀ノ内晃 東山桐依お前もアイツと同じだよ、と言われることによつて深まっていく。

……いや、なんでさ。

☆ ☆ ☆

主導権が私に渡されてからしばらくは、てんてこ舞いの日々だった。

いやまあ、当時の私は言うなれば、小学校卒業した日の体に突然憑

依させられたようなものだったわけで。

前世の記憶の一部に欠けこそあったものの、その他の基本的な現代の常識とか世界観は思い出せたから、生活に困るとかそういうことはなかったんだけど。

代わりに、交代前の彼が気付いていなかったことに、私は気付いてしまったのだ。

……そう。この世界、前世でやってた百合ゲーじゃね？……と。

それからは「なんでこんなあからさまに主要キャラとか居るのに気付いてないの俺!？」みたいなテンションになったのと、彼から「何をすればいいのか」とかを全然渡されていなかったのも合わさって、とりあえず「百合の王になればいいんだな!？」みたいな感じで突き進むことにした私なのであった。

……まあ、それはそれで「あれ、私主人公ポジの子じゃね？」みたいな気付きも加わって、変に拗れる火種にもなったわけなのですが。意識が切り替わった時に、初めて目にした美少女。

それによつて芋づる式に起きた記憶のフラッシュバックと、今まで目にしてきた主要人物達の姿。

……転生したこの世界が百合の花咲く世界だと確信して、目の前の娘に一目惚れっぽいことして。

彼女に負けないくらい女の子になろう、なんて決心して、自分磨きを開始して。

時々遊びに行った時に彼女が男の子の格好普通をしてても、「あ、ボーイッシュな子なんだな」なんて変な納得してみたり。

……晃つて名前が男女どっちでも大丈夫なやつだから、中学上がったもしまばらく勘違いしてたりして。

それがある日、たまたま晃の家に遊びに行った時に、彼が着替える真っ最中に出くわして、そこで初めて「晃つて、男!？」と気付いて。

……そうして漸く「ゲームの友人ポジ」と彼が結び付いて、さらには可愛い女の子だと思つたのに! っていうショックも混ざって、完全に私が私主人公にひっくり返ったわけなのでした。

……我がことながら、なんだこの言い掛かりみたいな人格分裂。

……つい先日まで晁、晁って読んでた仲の良い女の子が、なんか知らんけど唐突に同胞とか幼馴染み、とかみたいな呼び方に変わった時の、彼の心のダメージがどれほどだったのかはわからない。……つてか、途中でちゃんと名前呼べってキレてたのが原因でしょたぶん。

まあ、私だつて私を俺に棚上げしてしまうくらいにダメージ受けたんですけどね？……その結果として、ずっと底に沈んでいるはずの俺の目覚めにも繋がっちゃったわけですが。

いや俺もまあ、そんな起こされかたをするとは思ってなかったんだろうけど。

……誰が想像できようか、自分の中の女性性に任せて沈んだはずの男性性が、まさか残してきた女性性が勝手に男役と女役に別れてわちやわちやしだすなんてことを。

——同じ色が生まれてしまったせいで、自分が一緒に持っていたはずの記憶まで、引っ張り出されてしまうだなんてことを。

「……まさにパーフェクト桐依に至る為の最終試練……なんて、私からしてみればその程度の話なんだけども」

それを俺が納得するかどうかはまた別の話。

いやまあ？ 久しぶりに起こされて、私がなにをやってきたのかとか、今さらながらに見聞して。

その結果、勝手に他人の口を使つてなにやら喋つてたあたり、どういう心境なのかはなんとなく察しは付くけどさ。

知識は共有できても、互いになに考えてるかまでは共有できないのが、なんとももどかしい。……それですぐに終わる話なのに。

しばらく沈んでたせいで、本当に二重人格じみたことになつてるのは、笑えばいいのかなんなのか。

……まあ、いいや。

考えはわからずとも、なにをしようとしているのかはわかる。どうせ今度こそちゃんと終わらせるとか、そんなあれだろう。

——なので、好きにさせる。
どうせ、放っておいても問題は片付くのだ。
なら、好きにさせてやるのが一番だろう。

「んじやま、頑張つてね俺。次私が起きた時、全部ちゃんと終わらせといてね」

そんなことを呟きながら、目蓋を閉じて。

「——終わらせるとも、今度こそ」

そんなことを呟きながら、目蓋を上げた。

☆ ☆ ☆

次の日。

「えと、気を付けてね?」

「大丈夫だよお母さん、心配症なんだから」

こちらを案ずるように声をあげる母に心配ないと返して、玄関から外に出る。

今日からしばらくこんな感じが続くので、母には早めに慣れて貰いたいものだ。

そんなことを思いながら、いつものように幼馴染みとの待ち合わせの場所まで走って行って。

「やつほー、晁。おまた、せ?」

そこで待っていた人物の姿に、思わず硬直した。

……いや、いやいやいや?なんで?

「おう、遅かったな桐依。恋人を寒空の下で待たせるのはスマートじゃないぞ?」

「いや、なん、ちよつ、待て!とにかく待て相棒!」

「いや、化けの皮剥がれるの早すぎだろお前」

待ち合わせのポストの前。

いつもなら、そこで立って待っているはずの彼は、近くのフェンスに腰を掛け、吐いた息で両手を暖めながらこちらを待っていた。

それだけならまあ、わからないでもない。俺も前世では人を待つ時に近くの石とかに腰を下ろしてたことあったし。

——だから問題は、彼の格好のほう。

「ふ、ふざけんなテメエ!?なんだその『彼氏を待ってた女の子スタイル』はっ!?!」

「お前だつて学ラン着てるじゃねえか?」

「ちげえよ!俺のとお前のじゃ意味がちげえんだよ!?!」

ブレザーミニスカ黒タイツに、髪型も髪留めで可愛くアレンジしている相棒。……最初みたとき人違いかと思つたわ!声で相棒だつてわかつたけど!

こつちの服装は学ランとズボンに、髪は後ろで邪魔にならないように括ることで男性っぽくしているせいで、なんか単に服装交換したみたいになつてるし!?

「ま、話はおいおいつてことで、ん」

「あ?なんだその手は」

「……握つて?」

「は、はあ?!」

相棒が手をこちらに伸ばして、握るように要求してくる。……い

や、彼女かよ。……………彼氏ではあったわ。

いやでも、いや、なんだこれ？

思わず混乱しつつ、相棒の手を取ると、彼はこちらの腕を引っ張りながら立ち上がる。

……………いや、それ普通俺私がやるやつ……………って違う！いいんだよ一応！
なんでこうなってるのかわかんねえけど！

「ん、どした桐依？」

「どうしたはこつちの台詞だよ……………わかっててやってんなテメー」

「なんのことやら。ほら、刻遠野も待ってるんだから行くぞ」

「あ？……………あー、転校生か。なんだよ、二人きりかと思ってたんだが」

相棒に促され、ポストの前から歩き出す。

……………いや、しかしだな？俺、これからどう動けばいい？当初の予定
最初っから瓦解したんだが。

「オー！お久しぶりデース！覚えてマスカー!？」

「は？」

「……………っ」

そうして歩いていった先には、先、には？

いや、いやいや？なんでこいつ、小学生の時と同じ喋り方なんだ？

ますます困惑する俺の前に現れたのは、エセ臭いカタコト日本語を
喋りつつ、こちらに大きく手を振りながら近付いてくる刻遠野転校生。

それと、俺は面識のない後輩の栗花落、だったか。

二人がこちらに合流して、そのまま刻遠野が空いてる相棒の手を
取った。

「堀ノ内サン！手を繋ぎマシヨー！」

「はいはい」

「朝からお二人は仲が良いですね！」

……
????

いやホントになにこれ？俺はなに見せられてるの？

なんか女の子同士みたいに仲良く手を繋いで歩き始めたんだけど、俺の反対側で。

それと栗花落は、俺の周囲をくるくる回りながらへーとかほーとか頷いている。

……なんだよこの状況。マジで意味わからないんだけど。

「あ、おはよう。元気してた？」

「センセーおはよーござマースー！」

「……いや、いやいやいや？ホントにどうなってんだこれ？」

なんて言っていたら、校門で生徒達の服装チェックをしていた都乃葉姉までおかしかった。……いや、私の記憶が正しいなら、アンタもうちよつと暗い感じになってただろ!?

そんな感じに、クラスにたどり着くまで俺の困惑は積み重なって行くのだった。

☆ ☆ ☆

「……計画通り。次の段階に移行する」

流れる先に道はあり

「いや、まったくもって意味がわからん……」
「いつまで言ってるんだよお前」

昼食の時間、頭を抱えて机に突つ伏す幼馴染^彼みの姿を見ながら、俺は密かにガッツポーズをしていた。

まさかのカタコトエセボイスで驚愕させた刻遠野や、胡散臭いムーブを投げ捨てた先生。

そしていろいろかなぐり捨ててイマドキJK(○)を演じる俺による意味不^三連^連突^突撃^撃ブリッツは、うまいこと彼の困惑を引き出すことに成功したようだった。

そのあとは久しぶりに生意気系お嬢様ムーブで彼に突つ掛かった西内による追撃も入っていたので、暫くはまともに思考することもできまい。

まあ、代わりに約二名ほど死にそうなのを必死に堪えているわけなのだが。

無論、その二人というのは……。

(……誰か私を殺してちょうだい……生き恥に恥を上塗りするとか、最早公開処刑以外の何物でもないでしょこれは……)
(私今理解しました、これは私の今までの所業に対する相応の罰だと言うことを。それを理解した上で願います。——無駄に辱めるくらいなら一思いに殺して下さい……)

表情はそれぞれ笑顔とムツとしたものだが、その目が完全に死んでいる。

……あれは内面で酷いことになっているやつだ、俺にはわかる。わかる上で、暫くの間その責め苦の中で生活するしかない彼女達には、同情するほかない。まあ、できるのは同情だけなのだが。

☆ ☆ ☆

「しかし、彼が帰ってきたんだとして……俺達はどうすればいいんだろうな？」

あれこれと長かった過去語りも終わり、部室内には暫しの静寂が訪れていた。

死にたがりの彼、彼女に任せて沈んでいったはずの彼。その再びの来訪を受け、俺達はどうすればいいのか。

皆が対応を考慮する中、手を上げる者が一人。

「私に考えがある」

そう声を上げたのは、先程まで単なる聞き手として静かに座っていた在原だった。

……そういえばお前、栗花落よりも更に空気になってたな……。

なんて風に思っていたのだが、彼女は最初から普通の喋り方をしてた。……どうにも、いつもとは調子が違うらしい。

「……思えば、私はこの時のためにこの部活に所属したのかも知れない」

「結花ちゃん？ 一体何を」

「私の事情は後回し。今は部長について」

「は、はい？」

なにやら決意に満ちた瞳をした彼女は、俺達の視線を受けながら席を立ち、ホワイトボードを引っ張ってきて何事かを記入し始める。

数分後、ホワイトボードに書かれたのは――、

『部長補完計画』……？』

「それ怒られるやつでは？」

「補完の意味的にこうなった、特に何か含みがあるわけではないので勘違いしないで」

「あ、はい」

文字の並びというかなんと言うかがちよつと危ないような？

なんて思ったのだが、足りないところを補う補完為のものなのでこれであっているのだ、と言われてしまおうとこちらも文句を付けるわけにもいかず。……いや、別に文句を付けたいわけでもないけども。

こちらの反応を気にせず、彼女はその題目の下にするべきことをリストアップしていく。

……内容的に、彼を押し留めようとしている感じだろうか？

「彼は恐らく短絡的な思考に陥っていると思われる。更に、この事態の解決に関しては彼女の手は借りられない」

「それは何故なのですか？」

「ある意味、愛。それと、信頼？」

「は、はあ？」

あ、愛？信頼？

……よくわからんが、桐依に協力の意思はない、と？

そう問いかければ、在原は「恐らくは、だけど」と頷いていた。

……なんで彼女がそんなことを知っているのかという疑問はあるが、とりあえず彼女に協力の意思はなさそうと言うのは俺にもわかる。

協力する気があるのなら、端から彼を説き伏せているだろう。それがないということは、恐らくだが……。

「……ああ、確かに信頼とか愛とかになるのか、これ」

「ん、先輩は話が早い。なので、これに関しては私達でどうにかしないとけない」

俺が納得したように頷くと、在原もうんうんと頷いていた。

……まあ、俺達だけで勝手に納得した形になってるので、周囲のみんなはちんぷんかんぷんって感じだが。

特に栗花落がどうして二人だけでわかり合ってるんです!?みたいな目で見てきているし。

とはいえ、これの説明つても難しい。とりあえず置いて、作戦について話を進めることにしよう、と周囲に提案する。

「……いえ、そもそも秋山さんの話についても、ちよつと理解の及んでいないところがあるのですが……」

「彼女の話については前提。……というか、彼女がそれを話したからこそ私も動く気になった」

「え、つてことはゆーちゃん知ってる側なの?!」

「その理解で間違いない。なので、私のしたいことはわかって貰えると思う」

「ひえー、マジで言ってるのそれ?!……いや、でもそうじゃなきゃ意味ないか」

「すみません、勝手に納得するのは止めて下さい!ただでさえ私だけ蚊帳の外なの確実化してきてるんですよ!?これじゃ私ただの可愛い後輩なんですけど!?!」

「え?..」

「え?.....じゃないですよバカーっ!!」

そんな感じに、一人だけ本当に特になにもないことが確定してしまつて、あれこれ喚く栗花落を皆で宥めながら、件の作戦は開始するのであった。

☆ ☆ ☆

——古くはジキル&ハイド氏も似たようなことを行おうとしました。

己の中にあるものの分離、そして排斥。

しかし、人の意思というものは複雑怪奇なもの。

不必要と切り捨てようとするれば、必ず己に牙を剥くモノなのです。

「それをわからぬわけでもないはずなのに、彼はそれを為そうとしている。『陰中の陽、陽中の陰』を例に出す以上、中の陰陽は、決して失われるものではないと知っているはずだと言うのに」

太極図に代表されるその考え方は、白と黒は決して切り離せぬものであることを示すものでもある。

どちらも単なる色のことではなく、白は陽・良きもの・男性性などを表し、黒は陰・悪しきもの・女性性などを表す。

善き行いの中にも悪しきものはあり、悪しき行いの中にも善行と呼べるものがある。

男性であつても女性のような見方をすることはあるし、女性であつても男性のようなモノを好むことはある。

そういった、単なる二元論では語れないものを示す概念。

それを例えに出す以上、彼にも自分を切り捨てることの意味はわかってはいるはず。

——それでもなお、彼がそれを希求するのは、恐らく。

「そうまでして、切り捨てたいものがあるから」

そして、それを覆そうとするのならば。

切り捨てる必要などないのだと、彼に示さなければならぬ。

なれば、答えは単純明快。そして、それを為せる者もまた、単純明快。

「向こうも、今はまだ余裕を持って動くでしょう。——最大にして最悪の時を迎える為に、困惑しながらも、今はまだ焦りを見せることはないはず」

ゆえに、こちらも積み上げる。
彼に反論などさせないように、必要なものを集めていく。
その為に、その為だけに。

「——私は、ここにいます」

そんなことを嘯いて。

彼女は一人、離れた場所から彼女達のやり取りを見守っているのだった。

☆ ☆ ☆

「ほい、あーん」

「いや待て、なんであーんなんだってというか、そもそもなんでお前が飯作ってるんだよ!?!」

「……? 昼飯だつて俺の手製だったろ?」

「いやそうだけど!……いやそれも大概おかしいけどもだ!俺が言いたいのはそういうことじゃなくてだな?!」

食卓に並べられた、栄養バランスまでしっかり考えられた今夜のおかずを前にして、俺が困惑するのは無理もないとわかって貰えると思う。

……いや、なんで相棒、うちに来て飯作ってるんですかね?」

「通い妻? 通い妻だったのお前?! っていうかそういうことしたの俺が出てきてからだよね!?!」

前私の記憶で見た男にナンパされた時のあれ、わりと嬉しそうに見えたのは間違いじゃなかったりするのもしかして?!」

「もう、俺の口から言わせるなよ——バカ」

「ちーがーうーだーろー!!? そーれーはーわーたーしーのーいーうー

「せーりーふー!!!」

「モー、貴方はイツモ話が長いデース! ご飯冷めちやいマスヨー!!」

「いやそもそもなんで居んの刻遠野!? ほら見ろようちの弟の困惑っぷりを!! いつぞやかに出会った素敵なお姉さんが唐突にイロモノになつてビツクリしてるじゃねえか?!」

「いや、これはこれでいいと思うよ?」

「弟ー!? ふぎけ、正気に戻れバカ! 私の時も思ったけど正直お前さんの将来が心配で心配で仕方ないんだけど?!」

「あら、いいお兄ちゃんね」

「ちーがーいーまーすー!! 俺はお姉ちゃんですうー!!」

料理について聞いたら相棒が頬を染めながらそっぽを向くし、かと思えば唐突に刻遠野と都乃葉姉が夕食にお呼ばれしに來てるし!

まさかと思つて母を見れば、招き入れたのどうやらこの人だし!

弟もなんか変なテンションだしで、これ俺のツツコミできる許容量越えかけてるんですけどお!?

「まあまあ。とりあえず、いただきますしましよ?」

「賛成デース! お腹ペコペコなのデ、早速いただきますマシヨー!」

「今日のは自信作だから、味わつて食べてくれよー」

「……ツツコまん、俺はツツコまないから……」

変なテンションでサラダを器に盛り始めた刻遠野を横目に、いただきますの挨拶をして焼き魚に箸を伸ばす。

……焼き鮭か、味噌汁と白米があればわりとこれだけで満足だなあ、なんて思いながら箸を入れて一口。

「……嫁に欲しい」

「嫁だぞ?」

「……独り言に反応すんな。いや、冗談置いといてお前どこ目指してるの一体?」

炊事洗濯掃除と家事全般得意らしいのは知っていたが、それにしたって限度があるような気がする。

そんなこつちの思いを知ってか知らずか、彼はにっこりと笑ってこちらを見ていた。

……いや、なんだよその微笑みは。

「いや別に？ただ……」

「ただ？」

「幸せ、ってこういうこと言うんだろ？な、ってな」

「やめろー！幸せそうな女の子みたいなた台詞はやめろー！」

お前は俺をどうしたいんだよ！

そんな言葉は聞き流され、夕食の時間は過ぎていくのであった。

聖夜を目指し、巡礼者は行進す

戻ってきた彼に対する逆侵攻作戦、『桐依補完計画』は順調に進んでいた。

彼は頑なに男装で居るが、それに合わせて俺もずっと女装である。……母親が大喜びで服を持ってくるんだが、この作戦が終わった後が今から怖くて仕方がない。

刻遠野もいい加減エセ日本語にも慣れたというか、いい加減吹っ切れたというかで、今では元気に彼に突撃する日々だ、

……まあ、クラスメイトからの視線がいい加減辛そうでもあったが。

どうしたの？と聞かれるたびについ普通の言葉を返そうとして、一度不自然に止まって言い直す姿は哀愁すら漂っている。

西内は、俺達とは別のクラスなのでダメージは少ない……ように見えて、そもそも喧嘩腰で彼に挑むこと自体が胃にダメージを与えているので、正直大差ないと思われる。

その他のメンバーは、大体いつも通り。

先生なんかは暗躍を止めたせいとか、いつもより健康そうに見える始末だった。

さて、日付はそんな日々がいい加減慣れ始めた十二月の初旬。

部室にて、クリスマスはどうするかということについての会議になった日のことだった。

☆ ☆ ☆

「えー、というわけで。今年は部室でパーティをすることに決まったわけなんだが」

室内をぐるりと見渡せば、部員たちがこちらに視線を向けているのがわかる。

早いものでそろそろひと月、こいつらとの付き合い方も次第にわ

かっってきたというか、わからされてきたというか……。

そんなことを思いつつ、背後のホワイトボードに視線を変える。

……クリスマス、ねえ？

「基本的にはパーティか。……それとプレゼント交換？」

「ビンゴとかボドゲも予定にありますよ！」

「……つつても、基本的にはそんなもんだけどな。別に聖歌をみんなで歌うとかってわけでもないし」

「日本のクリスマスは単なるパーティデスものネー」

「それでいいのよ、基本的には騒ぐ場があればいい、位のものでしかないんだから」

「先生、あまりにも身も蓋もない話をするのはどうかと」

「あら、ごめんなさいね」

「……柳瀬さんたちも呼ぶかー」

……みんな好き勝手話してやがるが、ちよつと待て相棒。柳瀬って確か、いらんこと言っつて俺の目覚めを誘発したやつだよな？

なるほどなるほど、お礼参りしろつてことだな？いいぜ、乗つてやるよその誘いに……！

「いや誰もそんなこと言っつてな……聞いてねーなあれ。……栗花落もお兄さん呼ぶか？」

「いいんですか？うちの兄がお邪魔しても」

「パーティなんだし、参加者が多いほうが楽しいだろ？料理なら俺が準備するし、安心して誘つてくれ」

「わかりました！堀ノ内先輩のご厚意に甘えさせていただきます！」

なんか後輩と相棒がなにやら話しているが関係なし。

待つてろよ柳瀬菜、クリスマスが貴様の命日になるんだぜっへっ

へっ……!!

☆ ☆ ☆

変なテンションになってんなこいつ、なんて思いながら他のメンバーと一緒にパーティの仔細について纏めていく。

さつき刻遠野も言っていたが、日本のクリスマスというのはほぼ単なるパーティ……即ち食事会である。

一応ビンゴ大会とかプレゼント交換みたいなものもあるけれど、その本質は仲間内で集まってご飯を食べることに尽きる。

ターキーを準備するのは手間なのでチキンを焼くとして、ケーキやらその他の食事やら、基本的には調理役の負担が大きいイベントだと言えるだろう。

まあ、俺は料理をするのはわりと好きなので、そこらへんを苦に思うことはないわけだが、それでも時間というものは有限である。

「と、いうことで、ケーキは流石に頼もうと思ってるわけなんだが……」

「あ、はい！うちの知り合いにいいお店があるので、そこに頼むのはどうでしょう？」

「ちなみにお値段は？」

「お得意様価格になるので普通のケーキ屋のケーキと変わりませんよ？」

「採用、やっぱり持つべきものは人脈だよな」

「わーい、褒められました！」

「……これは褒めているのかしら……？」

ケーキを手作りするのは流石に骨が折れるな、と思った俺が口に出すと、すかさず栗花落が手を上げて提案をしてくる。

……いや、ホントに栗花落の人脈は凄いや言わざるを得ない。

一応こいつ自身は和菓子の方が好きはずなのだが、洋菓子出であつてもいい店を幾つも知っているあたり、流石名家のお嬢様と言いか。

普段はそういうこと一切感じさせないが、こういう時は本当に頼りになるなあと思う。

「ふっふっふっ！もつと褒めてくださってもいいんですよ堀ノ内先輩！」

「ああ、凄いぞ栗花落！お前はやればできる子だ！すごい子！強い子！」

「……いや、相棒？強い子は違くないか？」

「？どうした桐依、リベンジというかアヴェンジというかの予定は纏まったのか？」

「いやまだだけど……なんつーか、その格好になってからお前、いつもより部活メンバーとのスキンシップ増えてないか？」

「……そうか？」

「どうでしょうね？あ、でも私からよく抱きつくようにはなったかも知れませんが……その姿の先輩、いい香りがするので！」

「ああ、コロンとか付けてるしな。今日のは柑橘系だったか」

「爽やかな感じがシマスネー。よくお似合いデスヨー」

「おう、ありがとな」

なんて感じにきやいきやい話していたら、桐依がこつちに近寄ってきていた。

俺と栗花落が仲良さそう、みたいなことを言ってくるので、軽くとぼけておく。

そのまま、俺の付けているコロンの話に話題が移った。

こういう格好をしていると匂いにも気を使うように、と母親からレクチャーを受けた俺は、基本的に毎日付ける香りを変えているのだった。

それを伝えると、周囲がまたきやいきやいと寄ってくる。……微妙に蚊帳の外になった彼は、どうしたものかと思案しているようだった。

「あー、そのだな？俺にもそのコロンの売ってる店、教えてもらっても？」

「……お前、コロン付けるのか？」

「いや、俺が付けるんじゃないよ……ああもう、後学のためだよ後学のためっ!!」

「ふーん？じゃ、今度の休みにでも見に行くか？」

「は？……あ、いや、頼む」

なので、彼のお願ひにあつさり頷いてやると、彼は一瞬とても間の抜けた表情を浮かべたのち、微妙に納得できてないような空気を滲ませながらこちらの言葉に了承を返してくる。

……まあ、大方こつちの行動に振り回されているふりなんだろうが、そのあたりを指摘するような愚行はしない。

………そもそも。

こうなるのもまた、作戦のうちなのだから。

☆ ☆ ☆

「彼の最終目標は自身の喪失。但し、それに付随して『桐依を巻き添えにはしたくない』というものも含まれている」

「……えっと、つまり彼という人格が消え去れば彼の勝ち、ということですよ？..」

「より正確に言えば、彼の持っている前世の記憶が失われれば勝ち、だったりする」

在原が語るところによれば、彼が自身を殺そうとしているのは、本質的には彼の前世の記憶のせい、なのだという。

そしてそれは、記憶であるが同時にパンドラの箱のようなものでもあると。

「中身が外に出ていることが好ましくない。だから、とりあえず彼は

その記憶箱ごと底に沈むことを選んだ。だから今は、彼にとっては箱が空いている状態。——箱を投げ捨てるか、箱ごと居なくなるのが彼の望むものだけど、同時にその箱の蓋は彼でもある」

「だから、箱をどうにかしようとする限り、彼は必ず居なくなることを選ばなければならぬ、と」

「んー、秋山の話聞いて箱の中身がどういうモノかを知れたのはいいけど、同時に俺達には箱の中身をどうにかできたりはしないってことも明確になっちゃまったのがなあ……」

箱をなくす必要性がなければ、あんまり悩む必要もなかったのだが。

こうなってくるとなかなか、どうしたものかと思考が詰まってしまう。

……なんてことを考えていたら、在原がくすくすと笑っていた。いや、笑うところあったか？なんて俺達が顔を見合わせていると、彼女は笑顔のまま俺を指差して。

「方向性は間違っていない。箱の中身をどうにかする、というのは、即ち箱そのものが残っていられるようにすることと同じ」

「……ということとは」

彼女はこちらの言葉に頷いて、ホワイトボードにまた何事かを書き記していく。

そこに書かれたのは、『重要なのは中身ではなく外見』という言葉。「箱があっても問題ない。それが、彼女も望んでいる答え」

そうして、俺達の作戦は開始したのだった。

☆ ☆ ☆

「まあ、そのあたりの話はまた今度の休みにするとして」
「おやつタイムですよー！」

相棒が手を叩くと、どこからともなく三人ほどの人影が室内に入ってくる。

……ええと、確か生徒会役員の生徒たちだけ？なんか忍者みたいな機動力を持つてるって聞いたけど。

そんな彼等は、各々が一つ、白い紙箱を持っていた。中身は見えない、完全なブラインド状態の箱だ。……まあ、多分ケーキの入っている箱だとは思うが。

「今回はロシアンケーキだ」

「別にからしとかわさびとかは入っていませんが、中身は種類が違うので好きな生徒会役員さんの前に並んでくださいーい！」

「一応当たり枠とハズレ枠がありますわ。さあ、桐依さん、勝負ですわ！ルールは簡単、当たりを引いたものの勝ち！先行は譲りますわ、存分にお悩みくださいませ！」

「ま、また藪から棒に……い！」

ここで西内からの勝負が飛んでくるとは思わなかった。

……いや、辛いとかでもないのに当たりとかハズレとかなんなんだよ感半端ないわけだが。

とはいえ、手を抜くと怒るので俺も真剣に……いや、ランダム系で手を抜くものもないだろ実際……。

なんてことを思いつつ、とりあえず右端の役員の前へ。

他のみんなも適当？真剣？に悩んでそれぞれの役員の前に並んだように。

それを確認した役員たちが、箱の蓋を開ける。

……右端から苺のショートケーキ・チーズケーキ・モンブランが中に入っていた。

そして彼等が掲げるプラカード。……ああ、なるほど。

「右端の苺のショートケーキが一番高い品でしたか……今回は私の負けのようですわね」

「あー、そのことなんだが。……俺チーズケーキの方が好きなんで変えてもらっても？」

「……なら、引き分けですわね」

勝負内容は、一番高いケーキを引き当てたものの勝ち、という非常にシンプルなものだった。

……ただまあ、どれだけ高かろうと、好きなものに勝てる道理もなく。

その旨を西内に伝えると、彼女は苦笑した後はこちらのショートケーキと、自身の選んだチーズケーキを交換して。

「ほれ、紅茶」

「あいよ、どうも相棒」

相棒から熱い紅茶を受け取って、ティータイムを楽しむ俺達。

……さて、こういうのどうなんだろうな、なんて苦笑する俺を見て、不思議そうに首を傾げる相棒がちよつと面白かった、ということだけは伝えておこう。

聖なる一時に、灯は巡る

さて、日付はさらに飛んでクリスマス前日。

実は刻遠野の誕生日なので、それを先に祝うため現在あれこれと準備中である。

明日の料理の仕込みと同時進行になるので、ちよつと控えめなお祝いになってしまうということは予め謝っておいたが。

「なんというか、大体クリスマスと纏めて祝って貰うことがほとんどだったから、ちよつと新鮮な気分ね」

「まあ、日付が近いと纏められがちだよな。……それと桐依がいないから、久しぶりに普通の口調だな」

「……ホントにね。最近はずつとあの喋り方だったから、正直こつちを忘れそうになっていたわ」

机に座った刻遠野がふう、とため息を吐く。

桐依がいる場合はあのキャラで居なければならぬというのは、なかなか疲れるものようだ。

まあ、俺は基本女装してればいいだけなので、彼女の言葉には相槌くらいしか打てないわけなのだが。

「寧ろ貴方が気にしなすぎなのよ、それに関しては」

「……いや、何度か聞いてるけど、ホントにそうなのか?」

「そうよ。……小学生の時ならいざしらず、高校生になったのなら基本的に自身の性別はどちらかに決めるもの。……貴方みたいにどちらも自分、みたいな人はそうは居ないわよ」

「あ、そつちか。てつきり女装することがおかしいのかと」

「そこがおかしいなんてことになるわけ無いでしょう……」

この間からお前はおかしいと言われ続け、なにがおかしいのかと考えていたのだが。

どうにも現時点で性別をちゃんと決めていないように見えるのが、おかしさの原因だったらしい。

「じゃあ、結局桐依のせいじゃねーか」

「はい？……え、もしかしてそういうことなの？」

「それ以外になにがあるっていうんだよ……」

料理の味を確かめつつ、呆れたように刻遠野に声を掛ける。

最初から、俺がそういうことを気にしない理由は、変わっていない。

……ということは今更ながらに気付いたらしい。いやまあ、確かに俺も口に出して明言した覚えはないから仕方ないところもあるのかも知れないが。

そんな感じにふと視線を彼女に向けると、刻遠野は額に手を当ててなんとも沈痛な面持ちをしていた。

「……その、こういうこと言うのはどうかと思うのだけど。……実は消化試合なのねこれ？」

「……否定はしない」

勝利条件の設定の仕方をミスしたのは向こうなので俺は知らん。……という感じに目線を逸らす俺。

まあ、彼女の痛ましげな表情も宜なるかな。最初から決まってる勝負とか、正直失笑しか買わないだろう。

……え、意味が違う？いや合ってるぞ、向こう的には笑って欲しくない場面なのに、こっち的には笑うしかないんだから。

「……前々から思ってたのだけど、貴方って意外とサドっ気強いわよね？」

「さて、なんのことやら」

基本的にはアイツが悪い、で済むので。……なんて感じに俺は返す

のであった。

☆ ☆ ☆

「へっくしょいっ!!」

「わっ、大丈夫きりえん?」

「ああ、大丈夫……誰か噂でもしてたか……?」

突然鼻がむずむずし始めたので思わずくしゃみをしてしまった。

一緒に買い出しに出掛けていた秋山に心配されたので、別に風邪とかをひいたわけではないと返す。

……いやまあ、寒いからちよつとくしゃみが出たって可能性も無くはないが。

商店街を歩きながら探すのは、刻遠野に送る誕生日プレゼントと、明日のクリスマスの交換用のプレゼントの二つ。

……刻遠野相手には化粧品でも送ればいいのかと思ったのだが、よく考えたら他人に化粧品とかある意味テロみたいなものだったか、と思い出して踏みとどまった。

「まあ、体質的に合わないこともあるからねー。今はそういうの、例の化粧台でどうにかなったりするけど」

「それも理由だったな、今の時代バラ売りの化粧品は基本嗜好品みたいなもんだって」

「先輩はご自分の部屋を見れば一発だったのでは?」

「見たんだよ気付いたんだよ悪いかこのっ、このっ!」

「ちよ、先輩髪をぐしゃぐしゃにしないでくださいよ!」

「ええいやかましい、ポニテになんぞしやがって、あてつけかありがとぅ(づ)ございますー!」

「何故かありがたがられました!?!」

「なるほど、きりえんポニテ好きかー」

「大好きだよ悪いか!」

ポニテをわしゃわしゃするとか禁断の楽しみですねわかります。
……ってそうじゃなくて。

いかな、この後輩話してるとペースが乱される、気を付けなくては……。

彼女の髪を弄っていた手を離し、いい加減前を向く。

商店街はクリスマスの前日……場合によっては今日が当日になるんだっけ？まあとにかく、どこもかしこもクリスマス一色で飾りやツリーでどこもかしこもキラキラしている。

行き交う人々も、寒さに白い息を履きながらも、楽しげに街を目的地に向かって歩いている。……まあ、なんというか、平和そのものといった感じの光景だった。

「いいねえ、楽しげなのはいいことだ」

「おや意外。きりえん、そっちだと楽しそうな空気とか嫌いそうだと
思ってたんだけど」

「……いや、俺が楽しいのはあれだが、周囲が楽しそうなのは別にいい
んだよ。……そもそも、周囲の幸せを願ったのが俺なわけだし」

「そうなんですか？」

……あー、余計なことを口に出しちゃったな今。

頭を搔いて、二人に先に進むように促す。

二人共こちらの話を聞いたそうにしていたが、生憎とこのあたりの
ことを話す気はない。

「だから、そういう顔すんの止める。……ほれ、あそこかプレゼント
探すのにいいんじゃないか？」

「むう、先輩はそうやって煙に巻くの好きですよね」

「まあ、ここは大人しく煙に巻かれてあげようよりんちゃん」

……なんか、子供扱いされてないか俺。

いやまあ、話をするよりかは全然マシなんだが、どうにも腑に落ちない感が残るといふか……。

ま、まあいいや。気を取り直して、目の前の店——百貨店に歩を進める。

記憶によれば、ここは夏に水着を買いに来た場所らしい。

品揃えが豊富なので、意外と利用している記憶が残っている。

「で、結局なにを買いますか？」

「……んー、いまいちなにが喜ばれるのかわからん……髪留めとかの小物系も人によっては地雷だろ？」

「地雷とか気にしすぎるとなんにも買えなくなるよ？だって人によって地雷って違うし」

「……まあ、そりやそうなんだが……」

とはいえ、どうせ買うのなら出来得る限り喜んでほしいと思うのが人情というやつだろう。

……食べ物買ってきて怒られることは結構あるけど、アレルギーでもなければ誰でも食えることはするわけだから、そういう意味で食べ物って強いよな、なんて思いつつ、菓子コーナーを見る俺。

「……まさかお菓子で済ませようとか思ってますんよね先輩？」

「思ってますんっ。……いやまあ、お高めのお菓子ならプレゼントにできなくもないかなーとは思っけども」

「お高めのお菓子？……んー、万するようなのとか？」

「それ逆に重くないか……？まあ、その場合は買っても五千円くらいだと思っが」

「……？それくらい普通のお菓子では？」

「いやお前の感覚で話さないでくれお願いだから」

そういえばこいついいトコのお嬢様だった、なんて感じに後輩を横目にしつつ、とりあえず菓子コーナーから離れる。

……いやまあ、クリスマスの交換用なら別にいいとは思いますが、流石に誕生日にお菓子はなあ、というか。

そうして向かったのは、小物類を売っている雑貨屋だった。

「髪留めとかシユシユとか、そのあたりにしとこうかなというか」

「なるほど、地雷云々は気にしないことにしたんですね？」

「秋山も言ってた通り、そこ気にするとホントに選べるものなくなるからな……」

並んでいる小物を見比べつつ、後輩に声を返す俺。

……世の男性達は、こういう時どういうモノ選んでるんだろうな？
とりあえず金にモノを言わせたりしてるんだらうか？

だが、その選択は横の後輩見てる限り、意味があるようには思えないんだよなあ。

「？なんです先輩？」

「お金で解決できるものって意外と少ないんだなって思ってたところ」

「……………???'」

正直高いもの選ぶにしても、横の後輩がもつと質とか値段とかいいものを選んできかねないので、送るのなら値段は気にしない方がいいと思うっていうか。

まあ、それを彼女に言っても仕方ないので、俺は俺で（正しい意味で）適当に選ぶとしよう。

二人と相談しつつ、選ぶこと数十分。

納得のできるモノを選んだ俺達は、充実した気分百貨店をあとにするのだった。

☆ ☆ ☆

「誕生日おめっとさん」

「オー、アリガトデース」

部室にてささやかな誕生日パーティーが開かれる中、桐依が刻遠野にプレゼントを渡しているのが見える。

……どうやら、いろいろ考えた結果置物にしたようだ。クリスタルの天使の彫像？のようなものを渡しているのが見えた。

「シユシユとか腕輪とかにするつもりだったみたいですけど、途中であの彫像を見付けて」

「それで半ば衝動的にあれにした、と？」

「なんだか思い入れというか、ちよつと目につく理由があったみたいだよ？その理由部分は教えてくれなかったけど」

「ふむ……」

天使の彫像、ね。

……ふむ、ちよつと思いつかない感じか。アイツがそういうものに言及したのって、神様は嫌いだ、くらいなものだしなあ。

そこから考えると、人の贈り物に天使を選ぶというのは、少々アイツらしくない選択のような気もするが……。

「まあ、気にしても仕方がないか。ほれ、チキン焼けたから持ってけ」

「わあ、流石先輩美味しそうなチキンですねっ」

「明日の練習も兼ねてるんだがな」

家から持ってきた簡易グリルの使い心地を確かめる面もあるので、ざくざく数をこなさなければならぬのだ。……いや、あんまり焼きすぎても消費しきれないだろうから、ある程度自重もしているわけだが。

現在テーブルに並べられているのは、原則的に明日の予行練習の結果であるチキンやらフライやらである。……明日はこれにケーキやらが加わるわけだが、そっちに関しては俺が作るわけではないので、

気にする必要はない。

なのでまあ、俺がするべきことは明日のために料理の完成度をあげることなわけで。

仲睦まじく話をしている桐依と刻遠野を遠目にしながら、俺は次の料理に取り掛かるのだった。

星を落とす狩人のごとく

「いよいよクリスマスも明日、か」

「そうだな。……どうする気なのか知らんけど、明日で終わりだな」

「……ああ、明日で終わりだ。泣いても笑っても、明日で決着が付く」

暗い夜道を、二人で肩を並べて歩く。

彼は——堅い顔で、暗い道の向こうを見詰めている。

その奥にあるものか、はたまた自身の記憶の中のどこかなのか。

……傍目にはわからないどこかを、彼は見詰め続けている。

きつと、それこそが彼のなくしたいものであり、譲れないものなのだろう。

それをどうにかするためだけに、彼はずっと自分を蔑ろにし続けていた。それこそが、そこにたどり着くための答えだと信じて。

ゆえに、その答えはもうすぐ出る。

彼が望むモノを得られるか、はたまた得られずに膝を折るのか。

——そのどちらであったとしても、俺の選ぶものは変わらないだろうが。

「相棒は動じないねえ。……いやまあ、それでこそ俺の見込んだ男なわけだが」

「そういうお前も変わらないな。選ぶものも、選ぼうとする場所も」

そうだな、なんて声を返して。

——そうして、日は開けた。

☆ ☆ ☆

クリスマスの日に終わらせようと思ったのは、まあ最初の予定をそのまま繰り上げたから、だったりする。

……男性部分である俺を否定させる為にあれこれ仕込む予定だっ

たのだが、これがまあなんと上手いかず。

結局、筋書きを大幅に変える必要に迫られたわけだが。

それでもまあ、終わりは聖夜がらしいと思っただころがなくもな
く。

「普通にクリスマスパーティーしたあとに全部投げる、というのは果たしていいんだか悪いんだか」

「急に屋上に来い、だなんて言うから、なにかと思えば……」

屋上のフェンスの一画、密かに破れていたそれを潜って外に出ている俺。

夜の空気は澄んでいて、吐く息は白く染まり、星空は静かにそれを照らしている。

——こんな夜に終われるのなら、まあ悪くはない。

そんなことを思いながら振り返れば、相棒は屋上の入り口の前に立っていた。……なにをしても、間に合わない位置に。

「それが、お前の選択か？」

「……そうだな。俺としてはもうちょっと穏便に終わらせなかったんだけど、どうにも上手くいかないし。……まあ、強硬手段に行くしかないよな、というか」

本当はこの体に傷とか残したくなかったんだが。

……もう俺に取れる選択肢も多くはない。じゃあまあ、こうするしかないわけで。

使いたくもないモノをわざわざ引つ張り出してまで、これが一番だと導き出したのだ。——相棒には、見届けて貰わねば困る。

「そういうわけだから、ちょっとショッキングなことになるかもただとあとはよろしく。……いやホント、大勝おめでどう相棒。——できれば、俺の勝ちで収めたかったがね」

言うだけ言って、屋上の縁から身を躍らせる。

これで上手いこと地面にぶつかれば、半身不随の代わりに俺は永久消滅。

納得のいく結末かと言われれば違うけど、まあ、俺の末路なんてこんなものだろう。

そんな思いと共に、静かに目蓋を閉じようとして。

——こちらに手を伸ばしながら突っ込んでくる、彼の姿を見た。

「……はっ?」

「勝ち負けを勝手に決めるのは、お前の悪い癖だぞ」

「いやちよつと待てお前どうやって、つバカ止めるなに考えてやがるっ!」

俺の腕を掴んで、強引に位置を変えて、彼は俺の代わりに夜空に身を躍らせた。

半ば放り投げられるように屋上に戻された俺は、一連の流れが信じられずにしばし啞然として。

また、彼が覆したのだと知った。この、土壇場だ。

「いや、……いやふざけんな!なんでこんな、こんなタイミングでんなことになるっ!!」

俺が落ちれば、それで終わりのはずの場所に、なんで彼が割り込む必要がある?

俺が死ねば、それで終わりで、それで解決で、それで丸く収まって……。

「……………っ!」

そこまで考えて、急に思考が冷えた。

いや、いやだ、また、まただ、あの時と同じ、これ、知ってる……。震える体を掻き抱く。寒くて、寒くて仕方がない。気付いてしまったから、震えが止まらない。

あの時よりも、より鮮明に。見ようとして見たものじゃない。それを、今更ながらに突きつけられて、吐き気が喉元にまでこみ上げてくる。

嘘だと言つて欲しい。誰かに間違いだと言つて欲しい。

けど、それを言つてくれる相手は、今、俺の代わりに宙に飛び出して。

——つまり、そうか、これは、全部。

「は、はははっ」

乗り越えたと思つていたのは気の所為だった。

過去のものにできたと思つていたのは勘違いだった。

ほら、俺はまだ、それから逃げられてなんかいなかったんだ。……ずっと、これに苛まれ続けるしかないんだ。

……神様が居るなんて、信じたことはないけれど。

もし仮に存在するのなら、なんて残酷なんだろう。

克服できたと思つている人間に、これ以上ないタイミングで現実を突きつけるなんて、なかなかできることじゃない。

しかも、一度希望を見せて、それを奪うように演出するだなんて。

「……………」

……死のう。もはや、ここにいる意味なんてない。

死んだ先でまた同じことを見せ付けられるかも知れないけれど、もう、なにも考えたくない。

俺の人生に、意味なんて無かった。価値なんて無かった。——端から、終わっておけばよかった。

そうすれば、せめて彼は巻き込まなかったかも知れなかったのに。

ふらりと立ち上がったって、彼が落ちた場所へと向かう。

……彼を犠牲にしたのは俺だ。だから、最期にその罪をこの網膜に刻みつけるのは、俺に課せられた罰だろう。

そんな思いから、鉛のような足を引き摺って。

——いやはや、最期まで負けっぱなしだねえ、俺？

「……………」

自己の裡から響く、私の声を聞いた。

「…………今さら、なんだ。俺を、笑いに来たのか？」

——そうそう、笑いに来たんだよね。バカな俺を笑いに、ね？

おどけたような声をあげる彼女に、声を返すような元気もない。

……実際、彼女の言う通り俺は大馬鹿者だった。たった一度の希望を追いかけ、そのために彼を■に追いやった、大馬鹿者だ。

そんなもの、まやかしだったというのに。

彼は失われた、俺が失わせた。

大切だったのに、必要だったのに、俺は、取り返しの付かない選択をした。……その選択が定められていたことまで含めて、ここまで滑稽な道化もそうは居ないだろう。

だから、彼女が俺を笑うのは既定事項。いちいち反論する余地もないくらい、当たり前のことだった。

——ああいや、そこじゃなくて。

「…………う・なにを、言っている？」

けれど彼女は、そこは笑いどころじゃない、なんて風に口をだして。……じゃあ、どこがお笑い草なんだよ、って少しムキになって。

——『気持ち悪い』って、俺の気持ちでしょ？

なんて言葉を、俺私に投げかけるのだった。

☆ ☆ ☆

「気持ち、わるい」

——そ、晁とイチヤついてるとたまーに脳裏に閃いたこの言葉。
……これ、アンタのでしょ？

彼女からの問いは、とある感覚についての疑問。

……確かに、たまに気持ち悪いという思いを抱いていたような記憶がある。けど、それがなんだというのか？

気持ち悪い、なんて。俺が彼と付き合うのはおかしい、みたいな。そんな、大した事のない感傷で——。

「んなわけあるかっての。……じれったいからはつきり言うけど。幸せなことが気持ち悪いって、はつきり言ってたじゃない」
「……あ」

彼女の言葉に衝撃を受ける。

……男性同士だから気持ち悪いんじゃないやなくて。

幸せになれるはずなんかないのに幸せな気分でしたから、気持ち悪いと。

俺私は、そう思っていたのか……？

「私からすればなんで気付かないんだろって感じだったけど。……まあ、アンタつてば視界がかなり狭まってたから、仕方ないところもあつたんでしょね」

「い、いや、だからって、それがなんだって言うんだよ」

彼女の言葉に動揺が隠せない。

いや、だって。気持ち悪いっていうのが、俺の感想だっていうなら、

そんなの。

「よく思い出してみなさいな。……なんでアンタ、晁とかがゲームのキャラだって気付かなかったの？……単純でしょ、アンタはそれしか見てなかったから。でも私は気付いた。……同じ前世から派生したもののなのにも関わらず」

その差はなに？

そう聞かれて、ようやくと俺は答えにたどり着く。

そうか、俺は。■■■を捨てたいと思っていた癖に、どこまでも■■■に縋っていたのか。

だから、彼女は気付けたのに俺は気付けなかった。だから、俺は彼をあんなふうにしてしまった、と。

だが、今さらこれに気付いてどうしろと言うのか。

サイは投げられた、振り直すことは不可能だ。……この後悔を抱いたまま、俺にどうしろと言うのか。

「あーもう、我が事ながら世話の焼ける……そもそも前世の私達、■■■それに絶望してた？してないでしょ？……転生なんてして、ちよつとした気の迷いだっただけで」

「先走って、迷走して、大ゴケしたのは認める。……でも、もう取り返しようがないじゃないか」

「そうだ、例えば前世が■■■これに絶望していなかったのだとしても、晁彼が犠牲になったことは覆らない。それが、バカな俺の選択の結果だということも、全て。

けれど、彼女はもう一度大きく嘆息して。

「好きになったタイミングなんて、お互い同じなのに。なーんで気付かないんだか」

「はー。」

「……恋人なんだから、最期まで信じて上げなさいよ。そもそも二度目でしょ、まだ」

「……。いや？嘘だ、んなことあるもんか」

彼女の言葉に、心臓が跳ねる。

……嘘だ、絶対嘘だ。俺を騙そうとしている。

だって、だってだ。二度あることは三度ある、なんて、そんな都合のいい話があるわけなくて。

恐る恐る、屋上の縁から身を乗り出して、下の方を覗き見る。

ほら、そこには彼の見るも無残な亡骸が転がってるはずで――。

「……やっとか。いい加減、血が頭に上るところだったよ」「え？」

視線の先、地面に赤い花は咲いていなくて。

「ぐっ、クソ！おいもういいんだな！？僕にこんなことさせて、あとでお前ら酷いからなっ！？」

「へい頑張ってくださいっす慎一君、頑張れ頑張れおまえならやれる、っす！」

「やかましい秋則！！もっと力入れろバカ！！」

「俺の名前は透っすよ！？」

「やかましいっ！お前の名前なんか秋則で十分なんだよ！！」

「意味わからないんっすけどー！？」

代わりに、彼の足を、下の階の窓から身を乗り出した男性二人が必死の形相で捕まえていて。

……いや、なんで、そんな。

本当に、全部覆したってのか……？

思わず、気が抜けて笑ってしまって。……涙が、止まらなくなっ

「まあ、やっとここへまで来たんだからあえて言うぞ。……これで完全勝利だ、まいったか」

彼の言葉に、今度こそ白旗を上げるしかない俺私なのだった。

百合ゲー世界に転生したらなんかちよつと思つたのと違つた件について

——シミュレーター・リアリティ。

アイツも言つていた通り、俺が罹患した最悪の病。今、ここにある全てが作り物に見えるというそれ。

……前世の俺はまあ、平凡な男だつた。

たつた一つ、『正夢』を見ることがあるという、ちよつとした異常を持つていふこと以外は。

俺の見る正夢はいわゆるお告げ型ではなく、実際に自分が体験するモノを見る……というものだつた。

既視感を併発するものだと思つて貰うのが、一番正しいだろう。

そして、未来に既視感を覚えると言うのが、この正夢の一番質の悪いところだつた。

俺は、夢の中で『夢で見た』という風に夢を見ることがあつた。……そういう夢の時は、決まつて起きると夢の内容を忘れてしまうのだが。

しばらくして、『夢で見た』と、突然に既視感に襲われることがあつた。——そこで初めて、俺は夢で未来を見ているのだと知つた。

そこからだ。俺にとつての地獄が——真綿で首を締め付けられ続けるような日々が始まつたのは。

初めての既視感は、小学生の時。

祖父母達や両親、兄弟と一緒に遊園地に遊びに行く夢。

自身が生まれたことを、この時知つた。

ついで、父と見知らぬ女性が、一緒に話している夢。

両親が別れることを、この時知つた。

誰かの葬式で、涙を流せずにいる夢。

祖母が■ぬことを、この時知つた。

知つていたことに、後から気付く日々。

けれど、一番恐ろしかったのは知つていたことではなく。

——夢の中で、そうだったのかと気付く自分の心が。

現実で、夢であったと知る度に同じ心を抱く自身の行動が。

どこまでもどこまでも、定められたものでしかないのでは、そう気付いたことであつた。

だからだろうか。

現実を見るよりも、物語を見ることに夢中になつていったのは。

☆ ☆ ☆

「その時ハマつたのがその百合ゲーだったわけだけど、まあなんと言うか、こつちに転生したての時はその辺り全然覚えてなくてさ。……思い出せてれば、こんなに周囲へ迷惑かけることも無かつたんだろうけど」

あその後、部活メンバーとOB組に部屋の中に引つ張り上げて貰つた俺は、幾分スッキリした表情の桐依と共に、部室へと舞い戻つていた。そこで彼女が語り始めたのは、本当の意味での種明かし。

彼がなぜ、ああまでして自分を消し去ろうとしていたのかの解説だつた。

「忘れているからこそ起こりうる未来を見る、みたいな感じだったからさ。まあ、最悪と言うわりには前世の俺はあんまり気にしてなかつた……つてより、気にしないように努めてたわけなんだけど。それが転生したことで、気にしないって部分が欠けて、結果として今世の俺は異常なまでに気にするようになってしまった、っていうか」

「ふむ。前世においては、ある意味単なる夢だと抑えきれていたが、こつちに生まれ変わつてその籬が外れてしまった、と」

柳瀬さんの言葉に「はい、その通りです」と苦笑いする桐依。

未来視ではあるものの、忘れるからこそ未来視足りえる面も持つていた為に、気にするのを止めることである種の対処にしていたのが。

転生した時にその記憶が欠けて、忘れればいいという対処も抜け落ちた結果、異様に未来視に拘るようになってしまった、というのが彼だったと。

「まあ、それでも最初の方は、夢で未来なんか見なかったし。前世で自分が覚えたモノも忘れていたからなんともなかったんだけどさ」

「前世で自分が覚えたモノ？」

「……練習したのよ、未来を見れないかなって。最初から答えに触れていたから、意外とすぐに覚えられてね。そのあたり、あつきーから聞いたんでしょ？」

桐依の言葉に秋山が頭を掻きながらへにや、と笑った。

そう、あの時彼女から話されたのは、彼女も転生者であり、前世の世界で一人、有名な未来視能力者が居た、というものだった。

……そして恐らく、桐依の前世が彼だろうということも、その時に聞かされていたのだった。

「いやねー、最初は『わっ、これあのゲームの主人公じゃん！』みたいな感じで近付いたんだけどさ。話してるうちに『あれ、この人どっかで』みたいな感じになって。ゆうちゃんにお墨付き貰って『やっぱり！』ってなったというか」

「私は私で、元の世界を知ってる人だったから。二週目、というべき？」

そして驚いたことに、在原も在原で特殊な出自の人物だった。

なんでも彼女は『桐依が自殺した世界からやってきた』のだけという。

……最終回に衝撃の事実を連打する人々みたいになっているが、大丈夫なのかこれ？

「伏線は最初から張っていた、問題ない」

「それはそれでメタいというか……」

「そのせいで私一人だけ本当に無関係になっちゃったんですがあ!？」
「おおよしよし。鈴莉ちゃんも可愛いが仕事だから大丈夫だよー」
「むむむむ、納得していいのか悪いのか、正直判断に迷います……」

また栗花落が頭を撫でられている。……それでごまかされるから蚊帳の外なんだと思うぞ。

まあ、とりあえずそれは置いて。

「そうして忘れていたものを、あの日たまたま見たニユースをきつかけに思い出して。……ちよつとした不安から、見ちゃったのよね、未来」

「それは、もしかして……」

「そ、美玲と朱紅奈が刺されちゃう場面。……私が美玲にあんなことを言ったから、この未来に繋がったんだって、子供心に確信して。……そつから先はまあ、しばらく未来視暴走モードよね。ずつと未来を見たまんまで、意識が定まってなくて、手を肩に置かれたことすら見えてて」

……俺が肩に手を置くことすら見えていたらしい。

つまりはまあ、そのあと落ち着けと声を掛けることすら見えていたということぞ。

完全にパニックになった彼は、教室の隅まで逃げて、ガタガタと震えて。

「意を決して名前を呼んだ貴方の言葉に、意識を取り戻した。……未来視では苗字を呼んでいたはずの貴方が、自分の名前を呼んだのを聞いて」

——見ていたモノを覆されて、希望を得た。

それがどれほどの衝撃だったのか、俺にはわからない。ここにいる他のみんなにだってわからないだろう。

ただ、彼に取つてのそれは、砂漠の中のオアシスだとか、嵐の中で見えた北極星だとか、そういうものに匹敵するくらいの希望の灯りだった、ということだけは確かだ。

「言つてしまうと、そこが一目惚れのタイミングだよ。——作り物だと思つてた世界で、作り物を壊して見せた貴方に見惚れた、見惚れてしまった」

そしてそれゆえに、彼の暴走が始まった。
変えられる、覆せるという希望は、彼にとっては麻薬のようなもので。

己を犠牲にしても、何一つとして惜しくないと思つた彼は、結果として自身の人格を消して、新しく別の人格を作ることの思い付いた。

「前世の彼のもう一つの置き土産が、その時になつて効いてきた感じというか。……うん、前世で軽度のシミュレート・リアリティに陥つていた彼は、自分は人を愛せないし愛して貰えないという結論を持ち合わせていた」

「それが遠因となつて、自分ではない誰かを願つた、と？」

刻遠野の言葉にその通り、と頷いて彼女は語る。

前世からの置き土産の二つ、片方は未来視で、もう片方は愛への忌避感。

……前世の両親の離婚が、少なからず自分のせいであつたことから派生した、愛されるわけがないし愛していいわけがないという呪い。

それについて、彼は当時明確に意識できていたわけではなかつたらしいが、それでも「自分に愛を語る権利はない」という思いだけは強く残つていたようで。

「意図せずして、自分も好きな癖して身を引くやつのもう一つになつて

たわけで。……私に言われるまでそのあたりに全然気付いてなかったってんだから、なんというか筋金入りというか」
「なにが問題って……結局相手の堀ノ内君が……先に貴方を好きになっっていたことよね……」

ここで問題だったのが、そもそも先に気にし始めていたのが俺の方だったこと。……端的に言うとな先に惚れてたのは俺だったので、こっちが彼に合わせ始めていたということだった。

性別は確かに女性だったけど、彼がどちらを恋愛対象にしていたかわからなかったのも、俺はどちらを選ばれても対応できるように、先にいろいろ準備し始めていたのだ。

その結果が、俺の女装への忌避感のなさである。
そして、それを見た彼の方も次第にバグり始めた。

……そりゃそうだ、彼は前世の記憶を頼りにあれこれと考えていたから、そもそも男でも女でも関係ないみたいな恋愛観は、考慮の対処外だったのだ。

「いやはや、なんというか僕も見ろ目が無いというか。……彼女よりよっぽど真実に近いのが君のほうだったとはね」

「つまり、俺が見惚れていたのもある意味仕方なかったということっすね?!」

「んなわけあるか、お前はもうちっと考えて喋れこの秋秋ってついてるノリ則だけのバカっ」

「いてえ!?!っす!」

「は、ははは……」

やっぱりこの人やべー奴なんじゃ?なんて思いつつ密かに距離をとる俺。

……気を取り直して、桐依の話に耳を傾ける。

「最初はサクッと女性人格を作って終わり、って予定だったんだけど。

晁が女装とか普通にしてくるものだから、男性的な人格を置いておく方がいいのか、はたまた女性人格を作れることを推し進めるべきなのか、完全に行き詰まっちゃってね？で、最終的に投げたのよ。とりあえず自分が起きてると余計な未来とか見ちゃいそうだから、能力ごと自分を沈めるって形で」

「なんでそう変な方向で思い切りがいいんだお前」

「思い切りが良くなきや自殺計画なんて立てないでしょぶっ」

「……確かに」

「そこを納得するのはよくないと思いますわよ……？」

西内にツツコミを入れられるが、まあ仕方ない。

実際、自分の死をほいほい計画にぶち込める時点で、大概おかしいのは確かなのだから。

「あとはまあ、皆さんご存知の通り。私の起動と共に、わりとまたややこしいことに直面して行つて——」

「文化祭が終わって、また俺が目覚めた、と」

俺の言葉に桐依は鷹揚に頷いた。

きっかけがあつたのか、はたまた単になにかが緩んだだけなのか。そのあたりはわからないが、結果として冬の時期に彼が目覚めたのは事実。

目覚めて、なんで起きてしまったのかとあれこれ記憶を精査して。

「えっと、その。……付き合つて結構経つ癖に、キスもしてねーやコイツらつてなつて、まだ計画成功してないやんけ！……みたいになつたというかね？」

「……は？え、先輩達まだやってなかったんです!？」

「うろううるさいっ、心の準備とかいろいろできてなかったんだいっ」「……いえ、それで巻き込まれた方からしてみれば、堪ったものではないのだけれど」

「ぬぐっ」

結果として、あんまりにもプラトニツクなお付き合いをしてるものだから、計画が失敗したと勘違いした彼は、とりあえず自分の抹消くらは完遂しとこうか、みたいなことになったのだという。……だから、なんでそう思い切りがいいのか。

まあ、なので。

最初からキスの一つでもしてれば、それで終わっていた話でもあったのだった。

「まあ、その時は代わりに俺が即刻消えてただろうから、それはそれで問題になってたと思うけど」

「精神のバランス的な意味で、というわけだね」

「柳瀬先輩の言う通り。まあ、その場合でもしばらくしたら治ったかもだけど、同時に精神の均衡を欠いて、その内飛び降りてたかも知れない……というか多分飛び降りてたから、わりと結果オーライなところがあるというか」

「なんでまたそんなことに……」

俺が呆れたように声をあげれば、彼女はすつと視線を逸らして、理由らしきモノをポツポツとこぼし始めた。

『『自分は幸せにはなれない』ってのは、俺由来のものじゃないから。……解消の為のきっかけを失って、耐えられなくなつて諦めてただろうな、というか』

「前世からの念、だったか。……しかしまあ、意外だな。そういうものを抱く場合、他者に対して攻撃的になるものだと思っていたのだが」

柳瀬さんが溢した疑問に、彼女は小さく苦笑して、答えを返した。

——曰く、幸福な他人を見るのは、わりと好きだったのだと。

自分が得られないものを得ている誰かを見るのが、わりと救いのよ

うに感じていたのだと。

「絶対に得られないって思ってたから。嫉妬とか、そういうのはなかったかな」

そんな風に、彼女は苦笑いを浮かべ続けていたのだった。

☆ ☆ ☆

「あー、全く。とんだクリスマスだったねえ」

「そうだな」

しばらくして解散になったパーティーからの帰り道。

二人で並んで歩いて帰るのは、なんだか久しぶりのような気がして。

なんとというか、ちよつとドギマギするというか。

そんなことを思っているのは自分だけなのだろうか、なんて風に彼女を見て、ちよつと声の上擦っているのに気が付いた。

「……なによ」

「いや、俺の方はどうしたんだろうな、って思って」

気付いたことをごまかすように、彼の所在について問い掛ければ、彼女は一瞬キョトンとしたあと、マジかこいつ、みたいな視線をこちらに向けてきた。……いや、そんな目で見られてもどうすりやいいのかわからんのだが？

「あー、もう。……わざわざわかる必要なくなったから、今の私は俺でもある、って言えばわかる？」

「……なる、ほどっ？」

確かに、そう言われるとちよつと雰囲気が変わったような？
そんなことを呟けば、彼女は深くため息を吐いた。

「……晁に取ってはそんなもん、ってことなんでしようけど。ちよつと、ほんのちよつとだけ受け入れられるかどうか悩んでた俺の懊悩を返して欲しい気分になったんだけど……？」

「ふむ、じゃあこれでお返しってことで」
「へ、ちよ」

思えば、最早隠す必要もないのだし。

そんな思いと共に彼女の唇に軽く口付けをすれば、彼女は顔を真っ赤にして、しばらく何かを言おうとして止めるのを繰り返して。

「……あーもう。そう言う時まで全部ぶっ壊してくの反則でしょ……」

なんて言葉と共に片手で顔を覆ってしまった。

……その言葉的に、また見ていたのだろうか。

「別に、遠慮する必要もなくなったし。……今ので、ほとんど使い物にならなくなってるのはわかったし、もう良いかなって」

「ほう？……もしかして、今のは大分不意打ちだったか？」

「不意打ちも不意打ち、してやられたとしか言えないってのこんちくしょー……」

もー、なんて呻き声を上げる彼女が面白くて、もうちよつとからかってみたかったのだが。……そこは流石に見切られていたので断念した。

しばらくして落ち着いた彼女と共に、家への帰路をゆっくりと歩いていく。

「ところでさ」

「あん？」

「晁は、私のどこを見て好きになつてくれたの？」

その中で、彼女がふと呟いた疑問。

……どこが好き、か。

多分、最初は好きではなくて、義務感に近かったように思う。

なにも見ていない、誰も見ていない。ずっとずっと遠くの、ここではないどこかを見詰め続けていた彼女を、放つて置けなかった、という義務感。

それが好きに変わったのは、恐らく――。

『「私^俺みたいなのに構う暇があるなら、君も自分のことを気に掛けたほう^うが、遥かに生産的だぞ」

「……ん？それ、確か晁に昔言った台詞？」

「これを聞いた時、最初は無関心からの言葉だと思っていたけれど。……どこまでも、他人を気遣った台詞だったことに気付いて、ほつとけないってのが強くなつたんだよ」

何を抱えているのかはわからないけれど。

——その抱えているものが、良くないものだから。

嫌われてもいいから、誰も近付けたくない、自分のせいで、傷付けたくないという思いから来るものだと思いついた時。

子供ながらに、この子を一人にしてはいけないと、強く思った。……まあ、それだけの話なのだ。

「そもそも、一目惚れなんてちゃんとした理由が付けられる方が珍しいだろ、んなもんだよ」

「……一目惚れって成就しないって聞いてたけどなあ」

桐依は苦笑して、ふと空を見上げた。

つられて空を見上げると、空から白いもの——雪が舞い降りて来るのが見えた。

「ホワイトクリスマス、ねえ。聖夜に雪が降ると嬉しいって、誰が言い出したんだろうねえ」

「さてな。ほれ」

「ん？——ああ、はい」

冷えてきたから、彼女の手を取って、指を絡めあって、肩を寄せあつて。

「……ふふつ。あー、気持ち悪いっ」

「気持ち悪い？」

「——幸せ過ぎて、気持ち悪い！」

笑顔でそう叫ぶ彼女を見ながら、俺もまた笑みを浮かべる。

——ああ、明日もまた、いい日になるのだろうか、と思いつながら。

外伝

百合ゲー世界の後輩。ポジは気難しい件について

期待に応え続ける、というのは。

とても、息苦しいものだ、なんて。

意外と、指摘されるまでわからないものだ。

☆ ☆ ☆

男女の性差や性別による偏見・それらを起因とする各種犯罪への厳罰化や。

女性だけのものであった、子を宿し胎内で育てるという行為が、男性であっても行えるようになる、など。

様々な政策や、科学技術の発展により『ジェンダーからの脱却の時代』とも呼ばれる黄金時代を迎え。

そして、それを越えて生まれた、ジェンダーレスが当然となった時代の子供達。

性別の軛くみから完全に解き放たれ、自由に生きられるようになったはずの彼らは。

……ある意味、前の世代よりも遥かに強く、『性』と言うものに縛られながら生まれてきたとも言えた。

性別が男だとしても、可愛い服を好んでも良い。

性別が女だとしても、戦隊モノやカードゲームに興じてても良い。

——言葉の上では、平等だと思えるそれらは。

『選んだことへの責任』という枷を、知らぬ間に孕んだものだったのだ。

そして、とある裕福な家庭に生まれた彼女は。

女性であることを選んだがゆえに、知らず識らずの内に、その枷に絡め取られていたのだった。

☆ ☆ ☆

女の子だから、可愛いものを。

男の子だから、カッコいいものを。

——それは差別だ、決め付けずに好きなものを選ばせればいい、なんて。

幼子に、そこまで難しいことはわからないだろう。

たまたま、その時興味があつたものを選んだとして。

それを好きなものと括られるのは、些か乱暴な論調なのではないだろうか。

……そこまで考えていたかどうかまではわからないが、彼女が小さな不満を燻ぶらせていたというのは間違いなかった。

習い事の為に乗り込んだ車の後部座席で、頬杖をつけて外を眺める少女。

天気は生憎の雨で、窓ガラスに当たった雨粒は、そのまま下に落ちていく。

その動きをなんとなく目で追いながら、彼女は小さく息を吐いた。

——溜め息は、運転手には届かない。

その事に安堵するべきか、はたまた落胆するべきなのかも決めきれないまま、車は道路を駆けていく。

そうして何事もなく、ピアノ教室を開いている講師の家の前に車は止まって。

「お父様。レッスンは終わったら、また連絡しますね」

「うん、いってらっしゃい」

父に向けた笑みが作り物であることに、気付いて貰えないだろうか……なんて淡い期待を砕かれながら。

少女の姿は、講師の家の中に呑み込まれていくのだった。

☆ ☆ ☆

——選んだのは、可愛い人形だった。

一緒に置かれたものがあまり好きじゃなかったから。……それくらい動機でしか無かったけれど。

女の子らしいものを選んだ時、家族が殊更喜んでいたような気がした、ということだけははつきりと覚えている。

特に、おじいちゃんの喜び方は凄かった。

可愛い孫娘だ、自慢の孫娘だ、うちの息子はよくやった、なんて。年甲斐もなく喜ぶその姿に、なんだかこつちも嬉しくなったものだ。

——次の年、同じようにクリスマスの日に送られたプレゼントの中に、カッコいいものは存在しなかった。

小学校に入学する前、ランドセルの色を選びに店に向かった時の事。

私の横で、青いランドセルを選ぶ女の子が居て。

それを見たお母さんが「青とか黒とか、選んでも良いんだからね？」と微笑んでいた。

——一番好き緑な色が無かったから、次に好き赤な色を選んだ。

お母さんは「そっか」と笑って、赤いランドセルを手を取った。

——何かの色を選ぶ時に、赤系統以外の色が選択肢に上がらなくなった。

少しずつ、少しずつ。

選ばなかったから失われていく選択肢。自分で選んだから消えてしまった選択肢。

……多分、少し声を上げれば戻るのだろうけど。

家族の笑みを翳らせてしまうのではないか、そんな思いが頭の片隅を過ぎって。

ずっと、言い出せないままになっているのだった。

「んー、もしかして何か気になることでもあったりするのかな？」

「……どうしましたか、先生。私は至って普通ですよ」

「あー、うん。そう言われるとなんにも言い返せないんだけどね……」
冴えない容貌をした講師の男性が、頭を掻きながら困ったように笑っている。

……音楽家には、他人の演奏を聞くだけで当人の体調を察することが
ができる人も居ると聞く。

目の前の彼がどれくらい凄いのかはわからないが。もしかしたら、
と違ってしまうのも確かだ。

だから少女は何故か、なんでも無いように声を返して。講師からの
詮索を、知らず識らずの内に避けてしまうのだった。

「……おい……んな、……つて、走んなバカ！」

「ふははは同胞う!!捕まえてみるがいいふはははは！」

「ねーちゃんはえー！」

「あたぼうよー！」

「……騒がしいですね」

「あー、ごめん。ちよつと待っててくれる？」

気まずい空気が流れる中、外から聞こえてくる、ドタバタと走り回
る騒がしい音。

……仮にもピアノ教室がある場所で、何を騒いでいるのか？

そんな不満から思わず眉を顰める少女は、にこやかに——それでい
て静かな怒気を滲ませた講師に、思わず目蓋を瞬^{しばた}かせて。

「——クウオラアツ!!誰がガキと一緒にってはしやげつつたあ
!!?」

「お、ちーつす先生、授業終わったん?それと子供の相手すんのに部屋
の中で大人しくー、とか無理だよって私は無罪を主張しまーす」

「やかましい、説教は後でするから上に戻つとけい!!」

「はーい。……もう、同胞も援護とかしてくれてもいいんじゃない？」

「いや、俺は止めたし」

「……追いかける時走ってたよね？」

「知らん、知らんったら知らん」

「えー？」

「なかないいなー」

ピアノ室から顔だけ出して怒鳴った講師に、思わず小さく椅子から跳ねた少女は。

外から聞こえる声に、女性のものが含まれている事に気が付いて、こっそりと講師の肩越しに、件の人物を窺う。

生憎と、階段を登って上に消えていく後ろ姿しか見えなかったけれど。

——颯爽と、綺麗な黒髪のポニーテールを柵引かせて遠ざかっていくその姿は。

彼女の脳裏に、妙に残るものとなっていた。

☆ ☆ ☆

「あー、ごめんねなんだか……」

「いえ。……二階で何かやっていらっしやるんですか？」

「うちの旦那が託児所をね。……きっきの子達は、そっちの手伝い」

女の子の方は昔ピアノを習ってたんだけど、やめた後は何故か旦那の手伝いさ、と講師は笑う。

……既婚者だとは知っていたが、同性愛者だったのかこの人。

そう思ってたのが顔に出ていたのか、彼は頬を搔きながら小さく笑って。

「旦那とは言うけど女性だよ、うちのは。生憎と僕の稼ぎは多くないからね。だから彼女が旦那で、僕は家内」

旦那様、つて呼んであげると喜ぶんだよね、とはにかむ講師。

……旦那という言葉が男性を指す言葉だ、と教わった彼女にとつて、その話は軽いシヨックを引き起こすものだった。

そんな彼女の様子に気付いた講師が、恐る恐る口を開く。

「えっと、確か今だと旦那つて呼び方はあんまり良くない、つて教わるんだっけ？」

「……はい、男性性を強調するものなので、公共の場では相応しくないと」

学校では、そう教わる。

公共の場で使うのならば夫と妻がよく、それ以外は人によつては気分を害する可能性があるから、と。

だから、こうして普通に——旦那と家内と言う言葉を、それも男女逆で使っているというのは。

……あの家で暮らしている自分からしてみれば、とても不思議に思えたのだ。

そう言う講師は眉根を寄せて、小さく唸った。

「いや、あんまり他所の家の事情に首突つ込むのもどうかとは思うけど。……今どき珍しい、旧風を大事にしてる所なんだね、君のお家は」

「……と、言いますと？」

少女の疑問に、講師が答え始める。

そもそも、『旦那』という言葉は古代インドの言語のダーナ……『与える』という意味の単語を語源としている。

『雇い主』であれば男女問わず『旦那』と呼ぶ時期もあったらしいので、言葉そのものには本来性別を断定する様な要素は無い。

……あくまでも、言葉の使われ方が変わっていく中で、俗に言う父長を示す言葉として『旦那』という言葉が用いられる様になっただけなのだ。

そもそも、今の人は逆に『旦那』や『家内』という言葉を使わなくなって久しいので、学校で教わったとしても実感が湧かず。

それぞれに男性性・女性性を見出さずに、言葉の意味だけで使うことも多くなっている、らしい。

ゆえに、この辺りの表現を使うことで気分を害するのは、ジェンダー闘争の只中にいた特定の年齢層くらいのものだ——と、彼は話を結ぶのだった。

「その年齢にあたる人が居ない場所なら割と使ってる、っていう若い人は多いよ。流石にSNSとかでは使わないけどね、そこら辺うるさい人が居るし」

実際稼ぎを得ているのは彼女で、僕は家に居ることが多いし、と講師は笑う。

男は外に出て仕事をし、女は家で家族を守る。

その思い込み常識が解かれて、言葉の意味だけで使うようになった。……そういう、ことらしい。

「……顔色が悪いね。今日はここまでにしておくかい？」

「……………はい、そうさせて、下さい」

少し、考える時間が欲しかった。……一日の間に、価値観を揺るがされすぎた。

『旦那』という言葉を女性に対して使う人が居ると言うことも。

後ろ姿だけでも綺麗なのだろうとわかる人が、子供達と走り回っていた事も。

彼女の常識の中では、有り得ない異物だった。……だって、それは。

「……………本日は、有難うございました」

「ああ、うん。……………気を付けて」

こちらを気遣う講師の言葉から逃げるように、表面だけの感謝を言い置いて、少女は家の外に歩み出る。

……空は未だ晴れず。

雨は涙のように、ざあざあと地上に降り注いでいた。

☆ ☆ ☆

「今日は早かったね、具合でも悪かったのかい？」

「……少し、目眩がしたので。無理を言って切り上げて頂きました」

「そっか。無理はしないようにね」

バックミラー越しにこちらを窺う父の表情は、どこまでもこちらを気遣う優しいもので。

……その顔を見ると、私は何も言えなくなってしまう。

——無理は、していないと思う。

ピアノに触るのは嫌いじゃないし、他の習い事も、別に苦にはしていない。

淑女として、相応しく。

選んだのは私で、習うのも私だ。

……だから、そこに不満はあつてはいけないきつとない。

家に帰れば、おじいちゃんに一日のお話をして。

勉強と予習を済ませて、家族で団欒を過ごして。

お風呂に入って気分をリフレッシュさせて。

あとは、ベッドの上で眠りにつくだけ。

幸せな家庭だと思う、自分は恵まれていると思う。

選んで、選んだ道を進めている。

選んだ道を、応援してくれる家族が居る。

……不満なんて、言えるわけがないあるわけない。

——選べなかった、緑のランドセルを夢に見ながら。

私は幸せなのだ言いつ聞かせていると、実感するのだ——

百合ゲー世界の後輩ポジは気難しいらしい件について

——次の日も、生憎の雨だった。

自身の部屋の中から、窓越しに空を見上げる。

雨雲は厚く、その向こうの青空を見ることは叶わない。

「……………嫌な天気」

ぽつりとそう呟いて。

予習のために開いた教科書を閉じ、おぎなりに机の上に放って傍らのベッドにダイブする。

部屋の中を見渡せば、目を引くのは可愛らしい大きなクマのぬいぐるみや、概ねピンクで統一された調度品達だろう。

…………年頃の少女らしい、可愛らしさに重きを置いた部屋だと言えた。

少女は枕元に置かれたうさぎのぬいぐるみを胸元に抱き寄せ、ベッドの上で仰向きになる。

見つめる先の証明は、今は明かりが消えていて。

曇天の空から、それでも降ってくる太陽の明かりだけが、部屋の中を照らしている。

…………部屋の薄暗さは、自分の心の有様と同じなのだろうか。

そんな疑問を胸に閉じ込めながら、少女は静かに目蓋を閉じるのだった。

☆ ☆ ☆

「おじいさま、おはようございます」

「おお、おはよう。調子は戻ったかね？」

朝食の為に食堂に集まるのは、彼女の家では常識である。

長いテーブルの、上座に当たる位置に座っているのは、この家の祖父に当たる人物だ。

こちらに微笑みを向けてくる祖父に、同じ様に笑みを返しながら、彼女は自身の席に腰を下ろす。

「……昨日は目眩がしたとかで、ピアノを休んだそうじゃないか。寝てたほうが良いんじゃないの？」

その対面に座るのは、自身の兄である男。

三つ年上の彼は、彼女の対面の席に頬杖をつきながら、気怠げにこちらに視線を向けていた。

「ご心配には及びませんよお兄さま。一晩しつかりと休みましたので、体調はすっかり戻りましたから」

「……なら良いんだけどね」

彼女が微笑みながら返せば、兄は興味を失ったように視線を反らした。

……彼が彼女をどう思っているのか、直接聞いたことはないが。なんとなく、嫌われているのだろうな、と彼女は思っている。

祖父からの期待というか、愛情というか。

そういうものに、露骨な差を感じることがあるからだ。

とはいえ、それをどうすれば良いのかもわからず、彼女はただ笑みを貼り付けているのだが。

「兄妹仲睦まじい事は喜ばしきことよな。……皆揃ったようだし、早速頂くとしよう」

いつの間にか埋まっていた席に着いた者たちが、一様に食前の挨拶をしていく。

彼女もそれに倣い、食前の挨拶を済ませ、食事に手を伸ばす。

……特に、代わり映えのない朝の一時。

明日も変わることのないだろうそれを、どこか他人事のように俯瞰しながら、彼女は朝食を食べ進めるのだった。

☆ ☆ ☆

高校入学前の最後の春休み。

推薦入試も卒なくこなし、合格通知も疾うに受け取っている彼女にとって、必然的に家に居ることを強要されるそれは、あまり嬉しいものとは言えなかった。

かといって、時期的にはまだ内定通知を受け取っていない者も多い。……友と連れだって遊びに行く、というのも現実的ではない。

……理由もなく、一人で外に出掛けたのは。

自身の内心を語っているようで、どうにも気分が上がりきららない。好きなことをしているのに、そんな気分になるということ事態が、親しい人への■ ■ ■なのではないか。

そんなノイズを脳内に響かせたまま、彼女は自身の前に置かれた甘味に、虚ろな視線を向けているのだった。

「今日は、元気がないみたいだねえ」

「……すみませんおばさま。折角遊びに来たのに、お店の雰囲気が悪くしちやってるみたいで」

少女が申し訳無さそうにおずおずと声を上げれば、店の主人である老婆は小さく首を振って否定を返す。

「甘味っていうのは、客を幸せにするもんさ。……お嬢ちゃんが笑えていないんなら、私の腕が悪かったってだけのことさね」

「……っ、違います、これはっ、私が……」

悪いのは、私。……美味しいものを食べて、素直に笑えない自分が悪いだけなのだ。

それでも、老婆は首を振る。……そういう気分を吹き飛ばすのが食の力だ。だから、その鬱屈を払えないのは、自身の甘味が力不足だということなのだ。

「とはいえ、これは適材適所を誤っているというだけの話でもある。……お嬢ちゃんに今必要なのは、うちの甘味じゃなかったってことさ。ほら、今日は別の気分転換を試すんだね」

「あ……はい」

ニコリと笑った老婆が、器に残ったままのあんみつを店の奥に下げていく。

その背に手を伸ばしてみるが、何を言えいいのかわからず、彼女は小さく肯定だけを返す。

お代はいいよ、若いんだからもっと色々見て回るんだね——。

そんな言葉と共に、半ば放り出されるように店の外に出た少女。店の外では休みの日らしい人の波が、右に左に流れ続けていた。

何をすれば、良いんだろう——。

少女の行動範囲は、あまり広くない。

先の店が珍しいと言えるほどに、彼女が自発的に向かう場所というのは、家から近隣のモノに限られていた。

だから、駅一つ分家から離れたこの場所で、あの店から追い出されてしまったのなら。……彼女が歩みを向ける場所というのは、最早無いものに等しい。

——色々見て回れ、と言われたけれど。一体、何を見て回れば良いんだろう？

目の前の人波に飛び込む様な勇氣はないし、かといってこのまま家に戻る、というのも選択肢には上がらない。

そうして逡巡しているところに、

「失礼、その貴方。さつきから辺りを見回しているけれど、何か探しものかしら?」

「……………えっ?」

背後から、声を掛けられた。

振り向いた先には、こちらに視線を合わせるように腰を折る、長い黒髪が目を引く少女と。

その後ろで、先の少女をなんとも言えない微妙な表情で眺めている、一人の少年の姿があつたのだつた。

☆ ☆ ☆

「あら、うちの新生生だつたのね。親しみを込めて後輩ちゃん、とても呼びましょうか」

「……………いきなり馴れ馴れし過ぎだろ。……………そっちも、嫌だつたら言えばいいからな?」

「あ、いえ」

——初対面の男女に囲まれ、何処かへと歩いている今の状況は、一体何なのだろう?

内心を困惑でいっぱいにながら、それでも少女は歩みを合わせている。……………初対面のはずなのに、奇妙な既視感が自身の裡から抜け切らなかつたからだ。

左側を歩く彼女は、少女よりも頭一つ分程度背の高い女性で、樂しげに笑みを溢すその姿からは、適度な余裕が窺える。……………見ていると、自分がどうにも惨めに思えてきて、あまり好きな人だとは思えなかつた。

右側の少年は、先の少女より少しだけ背が低い。……………少女にも彼女にも気を配って、色々と先回りをしているのが伺えて、どうにも申し訳ない気分になる。

どちらも、普段の彼女ならば、何かと理由を付けて離れようとする

タイプの人間だった。……こうして連れ立って歩いているのは、既視感の正体は何なのか、彼女が気にしているからに過ぎない。

そもそも、男女で出掛けているのならそういう仲なのだろう。

……わざわざ自分を間に入れる意味が分からなかったというのも、彼女が二人に付いていく理由になっている、というのは間違いではないだろう。

「さて、遊びに出たというのなら、ゲーセンは外せないわよね」

「今日の目的はそっちじゃなくて、併設されてるスポーツ施設のほうだろうに」

たまにはボウリングでもって言ったのお前だろうに、と少年が咎めるように問えば、それもそうだったわねと飄々と返す少女。

(——あれ?)

そのやり取りが、少女の既視感を刺激して。

それを思い出すよりも先に、彼女は少女に手を引かれて施設の中に歩み入る。

そのまま、あれよあれよと言う間に準備が(主に少年の主導で)進められ。

「……すみません、やり方とかわからないのですが」

「バンパー出したから、とりあえず投げれば大丈夫だよ」

数分後、適度な重さの玉を選び取る事になった彼女は、何故か一番最初にボールを投げる羽目になっていた。

表面上は無愛想にしているが、内心は困惑でいっぱい少女である。

このボールは何なのか、靴を履き替えたということはどこは土足厳禁なのか、投げるとは何に対して?

横を見れば他の客らしき人々が、ボールを滑らせるように投げ、施設の奥にある白いピンにぶつけている。

つまり、これはボールを投げてピンに当て、倒した数を競う遊び、なのだろうか？……そういつたことを、困惑しながら分析していく。

「ふふふ、どうせなら競争でもする？」

「初心者相手に何考えてるんだお前」

近くに備えられたソファでは、先の二人がこちらの方に視線を向けながら、何事かを話している。

……順番待ち、なのだろうか？すなわち、自分が投げないことには進まない、と。

（ええい、成るように成れ、ですっ）

半ば祈るように、他の人の真似をして送り出された重い玉。

思いの外真つすぐ進んだその玉は、吸い込まれる様にピンに向かっ
ていき。

「おお、ストライク」

「っ、び、ビギナーズラックというやつね」

「えと、凄いんですか？」

「おう、凄い凄い」

すべてのピンが倒れたことを示すリボンのストライクマークが、頭上のモニターに記された、自身の名前がある表に記載される。

……よくはわからないが、凄いことらしい。

正直実感が湧かないので喜び辛いのだが、他の客達もこちらを感じた様に見ていたので、少年の言葉は本当なのだろう。

まあ、当の少年も軽々とストライクポを取っていたので、その感覚もちよつと怪しく感じてしまったのだが。

「ふ、流石は我が幼馴染みね。——でもダメ、全然ダメね。所詮は、私の引き立て役よ」

「引き立て役って、そもそもまだ一投目だぞ？」

少年が投げたので、次は彼女の番である。

……なんだかよくわからないが凄い自信だった。横の少年のもつともな指摘が霞むくらいに堂々としていた。

そのまま彼女はレーンの前に優雅に進み出て、皆が惚れ惚れするよなフォームで投球をして見せ。

「……バンパー、出したままのほうが良かったか？」

「……………」

最初に少女が投げた後、引つ込めたバンパーによって隠されていた溝へと、ボールは綺麗に吸い込まれていった。

……いつそ芸術的でしたらあった、最早笑いすら上がらなかった。

そんな、気まずい沈黙の中で彼女は。

「……………」

「うっ？」

「うがあああああああつ!!」

「!!?」

先までの優雅さは何処へやら。

謎の雄叫びを上げた後、ボールが戻ってくる場所で素直に待って、出てきた自身のボールをむんずと掴み、再びレーンの前に立って。

「————チエエストオオオオオツ!!!」

気合一閃、威勢良く放たれたボールは、寸分変わらずピンに向かい、そ

の全てを打倒してみせた。

次いで、彼女の名前の横に刻まれる三角^{スベア}形のマーク。

戻ってきた彼女は、先までの澄まし顔を何処かにやった、勝ち気な笑みを浮かべていて。

「どうだい同胞っ!!バンパーなんぎ、いらんのじゃいつ!!」

「はいはい。後輩がビビってるから程々になー」

「はい?.....ほわっ!?(ぐぐぐ)ゴメン後輩ちゃんっ!?!」

何を謝っているのだろうか?そう思いながら下に視線を向ける。

そこでようやく、少女は自分が持っていた飲み物を、地面に落としてしまっていたことに気付くのだった。

百合ゲー世界の後輩。ポジは気難しかった件について

「あー、スカートに飛び散らなかつたのは不幸中の幸いかなあ……」

施設内の化粧室パウダールームに連れ込まれた少女は、黒髪の少女があれこれとこちらの服を確認しているのを、ブーツと眺めていた。

溢した飲み物は冷たいものだったので、やけどもなく。

溢した位置も、自身からは少し離れた位置だったので、服にはほとんど振り掛かっていなかった。

……借りた靴とその下のソックスには、思いつきり掛かってしまっていたが。

店員からは、驚いた結果なので仕方ないと言われ、シューズは交換して貰えることになった。

……驚かせた側の少女は確り怒られていたが。嚴重注意で済んでいるので、そこまで店員も怒っていた訳ではないかもしれない。

とはいえ、ソックスに関してはどうしようもない。

なので、連れの少年が建物の一階にあるディスカウントストアで、当座とうざ凌ぎの代替品を買ってくるのを待っている……というのが現状である。

「あー、ごめんねホントに。楽しんで貰うつもりが、こっちがヒートアップしちゃったというか……」

「……いえ、私もちよつと気を抜きすぎていました」

黒髪少女の謝罪に、彼女は首を横に振る。

……物を溢す、なんて。普段の自分からしてみればあり得ない失態である。

ともすれば祖父からのお叱りが飛んでくるところだっただろう。祖父の目の届く場所で失態を晒さなかつた分、まだ救いがあるとも言えた。

「……………ふむ」

「……………えと、何か？」

そうして悩む……………というよりは分析していた彼女に、黒髪少女が一つ息を吐く。それは——何事かを気にしてのもののように。

「……………これは多分余計なお節介だから聞き流して欲しいんだけど——」

——貴女、楽しめてる？

黒髪少女が発した問いに、口を噤む少女。……………何を、とは聞けなかった。

顔を青くして黙り込む少女に、黒髪少女は何事かを言いかけて——頭を掻いてそれを引っ込める。

——気まずい沈黙を破ったのは、化粧室の扉を叩く軽いノック音だった。

「おーい、ソックス買ってきたぞ」

「はいはい、んじゃそれ貸して。同胞は外で待っててー」

「へいへい。……………怖がらせんなよ」

「……………」

「おいなんだその謎の沈黙は」

「はははは。……………もう遅い」

「おいこら」

軽快に話す二人を見ながら、少女は密かに息を吐く。

追及は、されなかつただろう。それでも、話を逸らす事ができるのなら、その方がありがたいのも確かだった。

二人が話している隙に、少年が持ってきたビニール袋の中からソックスを引っ張り出す。……………無地の、黒いソックス。

「……えと」

「ん？あ、同胞つてば黒とか何考えてんのかなあ。……えつと、大丈夫？あんまり可愛くないけど」

「いえ、その。……これが、いいです」

「ふむ？……そっか。じゃあ、履き替えよっか」

基本的に自分が履くことの無い色のそれを見て、柄にもなく気分が高揚していることを自覚しながら、少女は包装の中からソックスを取り出す。

そのまま、するりと足に付けてみて。——なんとなく、自由になったような気分になった。

別に、服装が——それも足元の一部が変わったところで、何かが劇的に変わるわけでもない。

それでも——可愛いものしか選べなくなっていた彼女にとって、可愛くないその色の靴下は、どこか心が洗われるような、そんな気持ちを呼び起こすものだったのだ。

そんな彼女の様子を見て、黒髪少女は少し不思議そうな顔をして。

「……ふむ、ちよつといい？後輩ちゃん」

「はい？」

何事かに気付いて、彼女にとある提案をしたのだった。

☆ ☆ ☆

「えとそのあのいやホントにお気遣い頂かなくても構わないと言いますか」

「若い子が遠慮しないの！お詫びなんだから、好きなの選んでね。……いやまあ、あんまり高いのはダメだけど。申し訳ないけど単なる学生ですの私」

後輩少女を引き摺って、黒髪少女が向かったのは近くの百貨店。
その内の一画、小物売場に連れて来られた彼女は、あわあわと慌て
続けていた。

「お詫び代わりにハンカチでも、なんてお前くらいしか言わなさそう
だな」

「おい同胞、それ喧嘩売ってるんだな？買うぞ？言い値で買うぞ？」

「落ち着け、非売品だ」

「じゃあぶら下げんのやめーや！」

二人が言い合っているが、少女には届かない。

……いや、周囲を気にするような余裕がない。何故なら、彼女に
とって、今の状況とは。

「あ、そ、その」

「ん？なに後輩ちゃん、何か心配事？」

「ホントに、好きに選んでも構わないのででしょうか？」

「——ん、いいよ、好きに選んでね」

本当に大丈夫なのかと何度も念をおす彼女を見て、流石に少年の方
も異常を察知したが、彼が何かを言おうとするのを、黒髪少女の方が
口元に人差し指を立てて制する。

……任せる、ということなのだど理解して、少年は少女に問い掛け
る事を止めた。

代わりに、黒髪少女が彼女にもう一度、『大丈夫だ』と答えを返した。

返答は、表情の変化をもって行われた。

明確に笑顔になったわけではない。

けれど、彼女の纏う空気が明らかに切り替わったのは確かだった。

まるで、初めてモノを好きに選ぶ機会に恵まれたかのような少女の
様子に、少年の眉が寄る。

黒髪少女の方は、そんな相方の様子を意図的にスルーしながら、少

女がハンカチを選ぶのを笑顔で見守っている。
数分後、彼女が持ってきたのは、綺麗な緑色の布地に刺繍の入った、わりとしっかりとした作りのハンカチだった。

「ふむ、これでいいんだね？」

「あ、は、はい。それがいいです。——これが、いいんです」

「そっか。じゃ、会計行ってくるから、同胞この子よろしくー」

「あ、おいこらふざけっ、……ったく」

少女が選んできたハンカチを持って、レジの方へと歩いていく黒髪少女。

取り残された少年は小さく頭を掻いたあと、少女の方に向き直った。

とはいえ、特に話すことがあるわけでもなく。

微妙に気まずい沈黙が、二人の間を流れていく。

しばらくして、少年が「あー」とか「うー」とか唸り始め。

——少女の前髪が彼女の瞳に掛かってしまっているのを見て、自身の鞆から髪留めを取り出した。

その髪留めは、花があしらわれた可愛らしいもので。

少女が小さく緊張するのに気付かぬまま、彼は少女の前髪を邪魔にならないように髪留めで止めて。

「ん、いきなり髪触って悪かったな。でも、あんまり目に入るようなのはよくないぞ」

「あ、はい。ありがとう、ごぎ……いっ…」

「ん？どうした？」

そのまま、別の可愛らしい髪留めを取り出して自身彼の前髪を止めるのを見て、少女は動きを止めた。

見詰められている少年は、小さく困惑しながらその視線を受け止める。

……暫くして、その視線が何を意味するのかを理解して。

「変か？」

「——い、いえー！似合っていると、思います……」

逆に問い掛けて、少女は思わず似合っていると返してしまった。

……そうだ、似合っている。少なくとも、少女はそう思った。

男性なのに、可愛い髪留めをしている彼は。——輝いていると、そう思ってしまった。

「へitedaidaima……って、なにになにどしたの？……お、同胞それこの前上げた奴じゃん、似合ってんね」

「そりやどうも。買い物は終わったのか？」

「滞りなくー。……って後輩ちゃんも前髪上げたんだね。ふーむ」

「え、ちよっ」

戻ってきた黒髪少女が、二人の髪型の変化を目敏く見付けて、ふむと一つ頷いたのち。

自分の鞆の中から黒いシユシユを一つ取り出して、少女の背後に回った。

困惑する少女の髪を弄ることしばし。

出来に納得したのか、少女が少年の隣に戻ってくる。

「うむうむ。普通のストレートもいいけど、ポニテにすると活動的な感じでいいねー」

「そうだな。お嬢様っぽいのも良いが、こっちも悪くない」

「え、あ、うう……」

ささっと少女の髪を持ち上げてポニーテールにした黒髪少女は、その出来映えを見てうんうんと頷いている。

隣の少年も、少女の容姿を素直に褒めていた。

対し、当事者の後輩少女は絶賛困惑中である。

そもそもストリート以外の髪型をほとんどしたことがないので、自分の髪型が現在どうなっているのか正確には理解できていない。

それを褒められているものだから、困惑は強くなる一方だった。

——その上で■■■と言う気持ちも、その心のうちに浮かび上がっていることに気付いて。

「や、やっぱりこれ、受け取れません！」

「え、ちよつと!?!」

己の心に去来したモノに、思わず恐怖して。

渡されたハンカチを突き返して、店の外に向けて走り出した。

黒髪少女の困惑する声が聞こえるが、少女は立ち止まらない。——
止まってしまったら、とても恐ろしい事になる気がして。

「ほい、捕まえた」

「え、なんっ」

前を見ずに走っていたせいで、いつの間にか手前に回っていた少年に気付かずに、その胸に飛び込んでしまった。

でかした同胞！なんて事を言いながら近寄ってくる黒髪少女と、少年の胸の中でもがく少女。

……少年は、また頭を搔いて。

「今から凄まじく無責任な事を言うぞ。聞き流してくれていいからな」

「な、なにを……」

「自分に嘘は付くな。思ったことは、素直に口に出せ。……自分自身を雁字搦めにしてちや、見えるものも見えないぞ」

「……………」

思ったことを、思ったままに口に出す。

別に、何かを変えられると期待してのものではない。——ただ、なんとなく誰かを思い出してしまっただけ。

少年は柄にもなく、お節介を焼いてしまったのだった。

そしてそのお節介は……目の前の彼女には、殊更に効いたよう。

「……ダメ、なんです」

「何が？」

「お祖父ちゃんを……家族を、裏切りたくない」

思わず溢れた本音。

……望まれる子でなければ、家族を引き裂いてしまうのではないか？……という、ある種の呪い。

自分で選んだのに、他を選ぶことは罪だろうという思い。

——自縄自縛の呪い。

選択の自由というものの、ある種の負の面。

選択することばかりを尊んで、そこに付随する人の意思をある意味で蔑ろにしたもの。

——選んだモノが間違いだったなんて、言い出せなくなるような空気が。

「なるほど」

少女の悩みに触れて、少年は小さく瞑目して。

——その上で、敢えて同じ事を言う。

伝えなければ、先には進めない。

「間違っただと思うのなら。……変えられる内に言っておくべきだ。間に合わなくなってからじゃ、遅いんだしな」

「……貴方は、間に合わなかったんですか？」

不思議と、実感の籠った言葉に聞こえて。
少女は思わず彼に問い返して。……彼は、小さく苦笑いを浮かべる。

「おっと同胞！後輩ちゃんを口説いてるのかい！そうは私が卸さねー
ぜー!!」

「いや口説いてねーし。ほれ」

「あ、はい」

逃げないように捕まえていたのを、ぱつと解放する。

少女はもう、逃げ出すような気分でもなく。そのまま、黒髪少女からハンカチの入った紙袋を受け取り直す。

「同胞が何言ってたかは知らないけど、私から言えるのはただ一つ。

——その髪型とか、すっごい似合ってるよ、ってことかな」

「……その、今日はありがとうございました」

黒髪少女の言葉に礼を返して、少女は改めて外に駆け出して行く。
今度は、二人もそれを止める事もなく。

「……で、同胞ってば何を口説いてたんだーい？」

「口説いてねーっての。……ほら、ゲーセン行くんだろ」

「おお?!背中を押すのはやめれ、こけるでしよっ!?!」

少女が向かった方向とは違う方へ、二人で歩き始める。

——今はまだ、たまたま重なっただけの道。

けれど、その道は。確かに、少女の為の道しるべとなって、彼女を送り出すのだった。

☆ ☆ ☆

「……とまあ、これが私達の出会いだったのです！」

「へえ……」

ある日のこと。

部室に入ると、鈴莉ちゃんが朱紅奈さんと何やら話していた。

……ふむ、これはあれじゃな？噂の鈴莉ちゃんエボリキューション列伝……!!

「その後もまあ、ちよつといろいろあったのですが。……まあ、あの出会いが私の道を変えてくれたというのは確かなのです」

「なるほどねえ。……私としては、キャラが違いすぎる事の方がびつくりしたけれど」

そんな朱紅奈さんの言葉に、鈴莉ちゃんはにっこり笑って。

——今の私が、一番なのです！と述べるのだった。